

『宇治拾遺物語』昔話関連話群の研究

文学研究科博士課程後期課程国文学専攻

二〇一二年 四二一二三六〇二

金 恩 愛

## 目次

序章 『宇治拾遺物語』 昔話関連話群の出典と研究方法	一
一、出典からみる『宇治拾遺物語』の話群	一
二、日韓研究の論点	四
三、昔話関連話群研究の方法	六
第一章 『宇治拾遺物語』 第四八話「雀報恩事」考	八
― 韓国昔話との比較をめぐって ―	
はじめに	八
第一節 『宇治拾遺物語』 「雀報恩事」の独自の構成	一一
一、先行研究	一一
二、『宇治拾遺物語』構成と表現の特徴	一三
第二節 韓国昔話「フンブ伝」話型	一八
一、昔話「フンブ伝」類話	一八
二、韓国昔話「フンブ伝」の構成	二一
第三節 『宇治拾遺物語』及び日本昔話「腰折雀」類話と韓国昔話との比較	二三
おわりに	三三
第二章 『宇治拾遺物語』 第三話と昔話「瘤取爺」類話	五二
― 韓国昔話「瘤取爺」を対照させて読む ―	
はじめに	五二
第一節 『宇治拾遺物語』 第三話及び日本昔話「瘤取爺」類型の構成と特徴	五二

第三章	『宇治拾遺物語』第九六話「長谷寺參籠の男、利生に預かる事」考	七八
	はじめに	七八
第一節	『宇治拾遺物語』及び説話の中の「藁しべ長者」話型	七九
	一、『宇治拾遺物語』の諸注釈	七九
	二、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』との比較	八二
第二節	日本昔話「藁しべ長者」話型	八五
	一、「観音祈願型」	八六
	二、「三年味噌型」	八八
第三節	韓国昔話の二つの亜型	八九
	一、韓国昔話の採録事例一覧	九〇
	二、『宇治拾遺物語』第九六話と韓国昔話との比較考察	九二
第五節	日韓比較の論点	七〇
第四節	「瘤取爺」類型話の日韓比較	六一
	一、隣人との対立関係	六一
	二、異界の存在との出会い	六二
	三、歌は瘤から出るといふ発想と主人公の嘘	六四
	四、質と「瘤を売る」こと	六七
第三節	昔話「瘤取爺」に関する日韓の研究史	五六
第二節	韓国昔話「瘤取爺」の特質	五八
第一節	「瘤取爺」類型話の分類	五三
	一、日本昔話における「瘤取爺」類型の分類	五三
	二、「隣の爺型」としての「瘤取爺」	五四

第四節	その他、諸外国における「藁しべ長者」類話	九三
	一、研究史から知られる並行伝承	九三
	二、諸外国昔話との比較考察	九六
第五節	日韓昔話の比較考察	九八
おわりに		一〇一

#### 第四章 『宇治拾遺物語』第九二話「五色鹿事」考

—日韓比較文学の視点から—

はじめに		一一〇
第一節	『宇治拾遺物語』「五色鹿事」の話型と構成	一一一
第二節	日本昔話「五色鹿」の展開と話型	一一四
第三節	韓国昔話の類話	一一七
	一、崔仁鶴氏による韓国類話の話型	一一八
	二、『韓国口碑文学大系』における「五色鹿」類型	一一八
	三、その他、韓国の昔話集	一一九
第四節	日本昔話「五色鹿事」類型と韓国昔話との比較	一二〇

#### 第五章 『宇治拾遺物語』「留志長者事」考

—韓国古典『壅固執伝』との比較をめぐって—

はじめに		一三一
第一節	日本説話『宇治拾遺物語』の話型と構成	一三二
	一、『宇治拾遺物語』特徴の展開	一三二
	二、中国説話『法苑珠林』の話型と構成	一三六

第二節	韓国の古典「壅固執伝」の話型と構成	一四二
一、	『壅固執伝』の研究史	一四四
二、	『韓国口碑文学大系』における「壅固執伝類型の話」	一四七
第三節	『宇治拾遺物語』と『壅固執伝』との比較	一四七
おわりに		一五一

結章

一六一

参考文献

一六七

補注

補論 1

韓国昔話「フンブ伝」の伝承と異本

補論 2

韓国昔話・説話の中のトケビ（異界の存在）

資料

第二章の【表1】〔日本昔話「瘤取爺」類話一覧〕

【表1】の採録事例

初出一覧

## 序章 『宇治拾遺物語』話群の出典と研究方法

### 一、出典からみる『宇治拾遺物語』の話群

日本の鎌倉時代初期に、編者は未詳であるが、京都という都市において成立したと考えられる『宇治拾遺物語』（以下『宇治拾遺』）を学的に読もうとするときに、どのような目的と方法とが必要であろうか。まずこの問題から明らかにしておきたい。

従来、日本における説話研究は、同一説話や類似説話との比較を基本的な方法としてきた。そのとき、対象として用いるテキストは、いつも決まって中国の古典文芸や仏典を日本の文芸がどのように受容したのかという視点のもとで行われることが多かった。

しかしながら、最近ようやく注釈書が周知の文献だけでなく、口承文芸を参考資料として視野に入れるようになった。とはいえ、それではどのように比較するのかという方法的検討は、残念ながらほとんど行われてこなかったといえる。そこで私は、日・中間の比較だけでなく、韓国の口承文芸を対照させることによつて、日・中・韓という広い視野のもとで説話研究を展開する可能性を探りたいと考えるものである。

『宇治拾遺』に関する従来の研究は、主に出典研究と注釈研究が整備されてきたといえる。例えば、出典についていえば、『宇治拾遺』の説話について指摘されてきた典拠は実に多様であり、多くの説話の源泉は、個別の文献だけに求められるわけでない。<sup>(1)</sup>すなわち、原理的に考えるとそれぞれの説話は、

- 1 ジャータカを遙かな淵源とし、中国文献を遠く出典とする話群。
- 2 文献には同一説話を認めないが、口承文芸としての昔話と話型を共有する話群。
- 3 平安時代から鎌倉時代の世間話、都市伝説などに基づく話群。
- 4 同一説話や類話の存在が指摘されておらず、創作された可能性のある話群。

などが混在していると想定される。

1 について言えば、そもそも出典といったところで、これが淵源の決定的なテキストだと一つに確定することは實際上できないに違いない。しかも、伝播経路や影響関係を明らかにすることは、最初から不可能だと考えられる。伝播論の最大の欠点は、出典が固定的で決定的なものとして絶対化されることにある。そこで、私は、これまで論じられてきたような、インドから中国・韓国から日本へという、いわゆる伝播論については留保して、『宇治拾遺』の個々の説話について、すでに出典と指摘されてきたテキストと比較を試み、何を共有するのかということも明確にするとところから考察を始めたいと考える。

2 については、現存するテキストの知られるかぎりで「孤立話」とされてきた数十話の中に、いわゆる昔話と話を共有する話群の存在するものである。とはいっても、同一説話とされるテキストや、類似するテキストの存在が「現在には残っていない」もしくは「知られていない」だけであり、『宇治拾遺』成立の前提として、昔話（もしくは昔話に相当する伝承）が存在したことは論証できないが、可能性はある。逆に、江戸時代において、『宇治拾遺』が板本として普及したために、『宇治拾遺』の説話から昔話が発生した可能性もありうる。

3と4については、出典が既知の文献のうちには認められず、同時に、口承文芸に同じ話型の事例が認められる場合には、従来の文献的理解だけでは、比較を論じることができない。そこで、仮説として「都市伝説」や「世間話」などの存在を説話の母胎として想定することができる。

ただ、1から4までのすべてを一括して論じることが不可能である。

そこでまず私は、この中で、特に2の話群を「昔話関連話群」と呼んで、これらを対象として据えることから始めたい。そのとき、私の考察の独自性は、韓国の国家的事業の成果である『韓国口碑文学大系』（以下、『韓国口碑』<sup>2</sup>）を活用して、比較研究の視点から『宇治拾遺』昔話関連話群の説話を分析したいと考えることにある。

『宇治拾遺』総数一九七話の中、韓国昔話と共有する話型をもつ説話を取り出すと次のようである。

『宇治拾遺』と韓国昔話・説話比較一覧表 (★は、崔仁鶴氏による分類番号を、☆は、『韓国口碑文学大系』分類番号を表わす)

話	『宇治拾遺』	『日本昔話大成』	韓国昔話・説話・小説	中国	ジャータカ
3	『鬼に瘤こらるる事』	一九四 『瘤取爺』	★ 四七八 『瘤取り爺』 ☆ 8346 『瘤取りに行つて、瘤付けられた人』	『産語』上『阜風第六』	
8	『易の占して金取り出す事』 『唐に卒都婆に血付く事』		☆ 7595 『三人の息子に残した父の遺産』 ★ 48 『村の陥没』 ☆ 5412 『広浦伝説』 『三国遺事』卷二『惠慈王条』	『搜神記』三 『搜神記』一三 『述異記』上 『太平広記』一六三(独異記)	
30		一九八 A 『宝手拭』	★ 四五七 『ホンブとノルブ』 ☆ 7271 『ホンブとノルブ』・古典『興夫伝』	『搜神記』二〇	
48	『雀報恩の事』	一九二 『腰折雀』	★ 128 『追い出された家主・鼠家主型』 ☆ 8311 『雍固執伝類型』 古典『羅國執伝』	『法苑珠林』七七・二〇嬰篇八四 『盧舎長者因縁経』	ジャータカ 五三五話
85	『留吉長者の事』		★ 一一八 『老人に救われた鹿と蛇と男の子』 ☆ 5411 『恩知らず人間、恩替えず動物』	『法苑珠林』五〇背恩篇五一 『六度集経』六、『経律異相』三	ジャータカ 四八話
92	『五色の鹿の事』	一三四 A 『人間無情』 『報恩動物・恩知らずの人』 一三四 B 『人心恩』	★ 一一三 『藁縄一本で長者になる』 ★ 一一三三 『粟一粒で』 ☆ 7146 『藁二本』	『搜神記』三	ジャータカ 四話
96	『長谷寺参籠の男 利生に預かる事』	一五五 『藁しへ長者』	☆ 8221 『突き立てた杖』 『旧表忠寺にある杖からできた木』		
103	『東大寺花厳会の事』			『大唐西域記』六『得眼林』 九『杖林』	
113	『博打の子算入の事』	一二五 『博徒算入』 一二六 『鳩提灯』	★ 二〇二 『ひきがえる息子』 ★ 一一三五・二 『乞食たちを助けた報い』 『初夜に週女である妻を、まかした新郎』		



192	179	165	119
『伊良縁野世恒、毘沙門の御下し文を給は事』	『新編』の后、金の楊の事	『夢買ふ人の事』	『吾婦人生を止むる事』
一二五『阿保神の手紙』		一五八『夢買長者』	一五六『猿神遺俗』
★ 六六八『両班と召使』	『三國遺事』卷一『高麗書』一『射琴匣』	★ 一四五『魂鼠』 ☆ 711-5『金廣信の話』	★ 一七『蟬松と蛙の闘い』 ★ 一四三『熊と猪』 ★ 一八五『九頭怪盜』 ☆ 129『生贖を求む獸遺俗』 ☆ 134-1『大むかで退治』
			『搜神記』一九

## 二、日韓研究の論点

とはいうものの、ここにいう比較は簡単なものではない。なぜなら、次のような論点が予想されるからである。

1 『宇治拾遺』を中世京都のテキストとして捉える上で、広く東アジアの世界の中で捉え直すこと。

従来の和漢比較文学研究は、文献相互の比較研究に限定されてきた。ところが、すでに指摘されてきたように、『六度集経』や『譬喻経』などは、インドのシャータカの影響のもとに口承文芸を母胎として、成立した經典である。つまり、文献上の比較をいくら試みても、それは点と点との関係にすぎない。したがって比較資料の範囲を地域上で広げることによって、日本のテキストの個別性、独自性はより際立つに違いない。2 テキストの比較を行なう上で、文献相互の書承における比較だけでなく、日・韓の地域間において口承文芸を視野に入れて比較すること。

そのとき、日本昔話は、すでに蓄積されてきた採録資料に基づいて考察できるが、比較をより豊かなものとするために、『韓国口碑』を活用したい。公刊されていない部分については、新たに翻訳して比較のための資料としたい。

3 日本説話を、日本昔話だけではなく、特に、韓国昔話を比較資料として用いること。

そのためには、ジャンルの異なるテキスト間の比較を行なう必要がある。いうまでもなく、文献相互間の比較は、表現の次元における比較が可能であるが、異なるジャンル間の比較を行なうには、もう少し抽象度を高めた次元で比較を行なう必要がある。

私は、これらの問題を検討する上で、『宇治拾遺』と韓国昔話・説話比較一覧表を参照した上、『宇治拾遺』中、『日本昔話集成』<sup>(4)</sup>（以下、『集成』）や『日本昔話大成』<sup>(5)</sup>（以下、『大成』）、『日本昔話通観』<sup>(6)</sup>（以下、『通観』）などにより、類型として分類されている昔話群、つまり、

- ① 第三話 「鬼に瘤被取事」『大成』一九四 「瘤取爺」
- ② 第四八話 「雀報恩事」『大成』一九一 「舌切爺」、一九二 「腰折雀」
- ③ 第九二話 「五色鹿事」『大成』二三四 「報恩動物・恩知らずの人」
- ④ 第九六話 「長谷寺参籠男利生に預かる事」『大成』二一一 「藁しべ長者」、一二七 「蜂の援助」
- ⑤ 第一一三話 「博打子婿入事」『大成』一二五 「博従婿入」、一二六 「鳩提灯」
- ⑥ 第一一九話 「吾孀人生贅を止むる事」『大成』二五六 「猿神退治」
- ⑦ 第一六五話 「夢買ふ人の事」『大成』一五八 「夢買長者」
- ⑧ 第一六六話 「大井光遠妹強力事」『大成』補遺九 「女の大力」
- ⑨ 第一八〇話 「珠の価無量事」『大成』補遺二八 「魚石」

など九話の中から、典型的事例として五話を取り上げたい。さらに、『ジャータカ』や『法苑珠林』（以下、『法苑』）などの出典とある一話と、総五話を取り上げ、

昔話 「瘤取爺」と同じ話型の説話

昔話 「腰折雀」と同じ話型の説話

昔話「藁しべ長者」と同じ話型の説話

昔話「人間無情」(「五色鹿事」)と同じ話型の説話

昔話「留志長者」と同じ話型の説話

と対象を限定して考察を加えたい。

### 三、昔話関連話群研究の方法

このような比較研究を行なう上で、問題となるのは、

日・中・韓など、異なる地域・国家間の比較はどのように可能か。

説話と小説、昔話など、異なるジャンル相互の比較はどのように可能か。

中世都市京都において『宇治拾遺』の説話を捉えること。

を学問的、方法的に行うことである。そこで、なお私は、説話の構成については、「主語＋述語」という単位で抽出できる事項という概念を用いて分析することとしたい。また、説話の表現については、国文学研究の伝統的な方法である注釈によって分析することとしたい。

注

(1) 『法苑珠林』を出典とするもの

- ① 第七話「竜門聖鹿に欲替事」『法苑珠林』一〇出家篇一
- ② 第八五話「留志長者の事」『法苑珠林』七七・十悪篇八四
- ③ 第九一話「僧伽多、羅刹の国に行く事」『法苑珠林』三一・妖怪篇二四
- ④ 第九二話「五色鹿事」『法苑珠林』五〇・背恩篇五二

- ⑤ 第一三七話 「達磨見天竺僧行事」 『法苑珠林』 三四・撰念篇二八
- ⑥ 第一五二話 「八歳童子問答事」 『法苑珠林』 四・日月篇三
- ⑦ 第一六一話 「上緒主得金事」 『法苑珠林』 五六・貧賤篇六四
- ⑧ 第一六四話 「龜を買って放事」 『法苑珠林』 一八・敬法篇
- ⑨ 第一六七話 「或唐人、女の羊に生たる知らずして殺す事」 『法苑珠林』 七四・一〇悪篇八四
- ⑩ 第一七一話 「渡天僧入穴事」 『法苑珠林』 五六・道篇四
- ⑪ 第一七二話 「寂昭上人飛鉢事」 『法苑珠林』 四二・愛請篇三九
- ⑫ 第一九五話 「秦始皇自天天竺来僧禁獄の事」 『法苑珠林』 一二・千仏篇五
- 『ジャータカ』を出典とするもの
- ① 第八五話 「留志長者の事」 『ジャータカ』 五三五』
- ② 第九一話 「僧伽多、羅刹の国に行く事」 『ジャータカ』 一九六』
- ③ 第九二話 「五色鹿事」 『ジャータカ』 四八二』
- ④ 第九六話 「長谷寺参籠男利生に預かる事」 『ジャータカ』 四』
- (2) 韓国精神文化研究院 『韓国口碑文学大系』 全八二冊、一九七〇、全国から採録した説話や民謡など、総計一万五千百七話が収録されている。
- (3) 崔仁鶴 『韓日昔話の比較研究』 三弥井書店、一九七八年。
- (4) 関敬吾 『日本昔話集成』 全六巻、角川書店、一九五三年。
- (5) 関敬吾 『日本昔話大成』 全一二巻、角川書店、一九七八年。
- (6) 稲田浩二・小澤俊夫 『日本昔話通観』 全三一巻、同朋舎出版、一九七七年
- (7) 廣田收 『宇治拾遺物語』 の中の昔話』 新典社新書 39、新典社、二〇〇九年。

## 第一章 『宇治拾遺物語』 第四八話 「雀報恩事」考

— 韓国昔話との比較をめぐって —

### はじめに

一三世紀初め、鎌倉初期に成立した『宇治拾遺』は、これよりも約百年前に成立した『今昔物語集』（以下、『今昔』）とともに、中世を代表する説話集である。『今昔』は、天竺・震旦・本朝という世界像のもとに、釈尊の説いた仏教の靈驗譚を語って、世界が因果という法則によって成り立つことを明らかにしようとするという性格をもつ。これに対して、『宇治拾遺』は、序文によると、貴い話、面白い話や恐ろしい話など、当時に実際に語られたとされる話や作り加えたと考えられる話などが収録されている世俗説話集である。

例えば『説話文学辞典』は、『宇治拾遺』の日本における説話の文学的位置について、次のように評価する。『今昔物語』と並び説話文学の最高峰を行くもので、鎌倉期説話文学の中、最も秀でた説話集である。他の説話集が談義的発想をとるのにくらべ、感興が中心をなしている。地方的・庶民的発想の中に事件の興味をとらえ、笑話や滑稽談・失敗軽妙な筆に托して描きつつ、王朝趣味や擬古的な行文で文芸性を高めた事は、説話が文学としての意識に支えられていた事を物語っている<sup>(1)</sup>。

これは的確な指摘と言えるだろう。また、『日本古典文学大系』（以下、『大系』）は、「書承性の濃い説話集」と捉えた上で、『宇治拾遺』編者については、「一方においては直接に口誦の説話を採録するとともに、他面書承によってさらに多くの説話を集録し、王朝のかな物語に近い独特の文体で統一しつつ、しかもその多分に口誦の味わいをはじめ出させるような文学の方法を身につけていた一人の「説話文学作家」<sup>(2)</sup>だと、指摘する。

さらに中島悦次氏は、「一は学者的態度で、<sup>(3)</sup>他は文学者の態度で編術」したと論じたうえで、『宇治拾遺』の文学的価値については、次のように述べる。

話題の選択、人間の描写に本書の特性が見出される。それは人間を愛して、自分の行為をも広量に眺めて、そこに人間性の愛しさを探り、おおらかな筆使いで、これを描き出して、読者をして人の生のあわれさを感じみと感ぜさせるものがある。これが「宇治拾遺」説話文学の名に価する最もすぐれた点<sup>(4)</sup>が認められるという。これも指摘された通りである。

それでは、昔話関連話群については具体的にどのように評価されているのであろうか。『大系』による『宇治拾遺』の文学的特質を、私に整理すると、次のようである<sup>(5)</sup>。

① 「口誦性の豊かなことであり、王朝物語文体に近く、時に稚拙でありながら一面においてははるかに迫力に富むこと、本来の口誦の折の口吻を物語的な行文の中に鮮やかに生かした発想法」が認められる。

② 「鬼のこぶ取り（第三話）・腰折れ雀（第四八話）・博打むこ入り（第一一三話）のような民話を収載していることにも端的にあらわれているように伝承関係の分かっている五〇余話の大半は、民衆の口がたりに裏づけられた民話や世間話であり、文学の新しい芽につらなるものである」。

③ 「雑然たる説話の配列それ自体がもたらす、擬制的な構成のおもしろさである。素材的・連想的な同質類似の関係に導かれながら、たくみな転換を重ねて、一つ一つの説話が、それぞれの個性と独立性とをもって、書承から口がたりから抜け出してきて、「宇治拾遺」の中で新しく生き返っている」。

④ 「多くの出典の中から説話を選択・採録し、口がたりを聞きとめて編成・叙述したその全体構造の中に、おのずからにじみ出ている編者の人間理解の独自性に見出すことができる。「宇治拾遺」の編者はさまざまに人間に深い興味をよせ、いわば寛容に人間を理解する。編者の人間理解を基盤とする発想は「宇治拾遺」の大多数の説話に共通に表れている」。

問題は、言われるような「口誦性」「民話や世間話」「口がたり」などと、『宇治拾遺』の説話との関係は明らかにされていないことにある。そこで私は『宇治拾遺』の中で昔話と同じ話型をもつ説話を「昔話関連話群」

と呼び、口承と書承との関係において考察を加えたい。

さて、『宇治拾遺』総計一九七話の中では、第三話「鬼に瘤取らるゝ事」、第四八話「雀報恩事」、第九二話「五色鹿事」、第九六話「長谷寺参籠男利生に預かる事」、第一一三話「博打子婿入事」、第一六五話「夢買ふ人の事」など、昔話と関連のある説話が少なくない。その中で、第三話「鬼に瘤取らるゝ事」と第四八「雀報恩事」とは、『宇治拾遺』において、典型的な「隣の爺」型の説話である。特に第四八話「雀報恩事」のような「腰折雀」話型は、あまり古い文献には見当たらないものであり、日本文学においては『宇治拾遺』が初出であるとされる。<sup>(7)</sup>『宇治拾遺』の成立時期を治承元年(一一七七)から仁治三年(一二四二)までの間とすれば、この話型をもつ伝承は鎌倉初期となる一三世紀初め頃には、すでに伝承されていたと考えられるが、この話は、いずれも「明確な出典関係の認められないもので、昔話として口頭により巷間に流布した可能性の強いもの」と<sup>(9)</sup>推測される。他に、先行研究によると、その変型にあたる「舌切雀」は江戸時代の赤本などによって、かなり広い範囲に知られていたと、考えられる。<sup>(10)</sup>

昔話についてみると、『宇治拾遺』第四八話「雀報恩事」と同じ話型をもつ「腰折雀」の採録事例は、東北地方から九州地方に及ぶ日本各地に伝承されている。<sup>(11)</sup>そして、この話型を持つ昔話は日本だけではなく、中国やモンゴル、韓国など、アジア諸国に広く類話が存在する。<sup>(12)</sup>韓国の場合は、口承により伝承されたことから、一七世紀から一八世紀にかけて行われた民衆思想運動が口承説話の文献化を推し進める一方、小説化も盛んに行われた。<sup>(13)</sup>特に、韓国「フンブ伝」<sup>(14)</sup>類型は、日本各地に分布している「腰折雀」の話型のひとつと内容・構成上からみても類似していることは、すでに指摘されている。本論文においては、その類話の内容や構成はどのように変化しているかなど、各話の相互関連性、相違点などを調べ、両話の重なりと異なりを明らかにし、社会的な背景をさぐるとともに、各話の特徴を明らかにしたい。

## 第一節 『宇治拾遺物語』 「雀報恩事」の独自の構成

### 一、先行研究

『新日本古典文学大系』（以下、『新大系』）によると、『宇治拾遺』 「雀報恩事」の同話・類話について、同話（1）に、『御伽草子』 「雀の夕顔」、『燕石雑志』 四を、類話・関連話（記事）に、『搜神記』 二〇、『続齊諾記』 『蒙求和歌』 三、『蒙求註』 二六一、『金信類聚抄』 二二、昔話として『大成』 分類番号一九一 「舌切雀」、一九二 「腰折雀」などが指摘されている。<sup>(15)</sup> 昔話研究から言えば、「腰折雀」の話型は、『日本昔話名彙』（以下、『名彙』）では、完形昔話 「動物の援助」の 「腰折れ雀」<sup>(16)</sup> に対応するとされる。また、『集成』では、本格昔話 「隣の爺」の分類番号一九二 「腰折雀」<sup>(17)</sup> に、『大成』では、本格昔話の一九二 「腰折雀」<sup>(18)</sup> に、分類し、『通観』では、「隣の爺型」として「腰折れ雀」 「足折れ雀」 「羽折れ雀」に分類されている。

さらに、比較という観点からみると、日本において初めに「雀報恩事」について論じたのは、一八一一年に刊行された『燕石雑志』である。馬琴は『燕石雑志』 卷四第六 「舌切雀」において、「宇治亞相は楊寶が故事をよくしりて、雀の物がたりを作り給へるなるべし」<sup>(19)</sup> と、「雀報恩事」話を中国晋時代に干宝により書かれた『搜神記』から影響を受けていると論じている。

なお田中梅吉氏は、「馬琴が興夫伝の存在を知ってゐたならば、宇治の雀報恩の話に対してよりも興夫伝に寧ろより類似した点を見出したに相違なかるう」と、『搜神記』 「黄雀報恩」と「フンブ伝」との関連性を指摘するとともに、「雀報恩事」と「フンブ伝」は「何れも同一原話から発生したか、或は二者の何れか一つが原話」とし、「大陸から日本へ伝来したもので、朝鮮はその中継者の役」<sup>(20)</sup> だと推測している。

一方、神話学の立場から松村武雄氏は滝沢馬琴などによって指摘された、『搜神記』を『宇治拾遺』 「雀報恩事」の原型とする論点には賛成しがたいと反論している。<sup>(21)</sup>



確かに、『搜神記』や「黄雀報恩」及び「フンプ伝」といった三つの作品を分析考察すると、『搜神記』「黄雀報恩」の場合、鳥の恩返しを主題とするという点では「雀報恩事」や「フンプ伝」と似ているが、「雀報恩事」と「フンプ伝」のような、善悪という隣人や兄弟との対立関係は認められない。また、この話型の主な構成とされる恩返しの方法として、鳥からもらった種から実がなり、その実から米や宝物が出てくるという構成も見られない。

さらに、柳田国男氏は日本民俗学の立場から「舌切雀と腰折れ雀」において、「宇治拾遺」に出て居る「瓢の米」の話が、朝鮮を通過して入って来たといふことは、今ではもう確かだ」と述べている。また、関敬吾氏も「腰折れ雀」はおそらく大陸から移入されたもの」と指摘する。八束周吉氏は「興夫伝」の解説において「舌切雀・花咲爺などと同じ系統の話」とし、「源流は蒙古地方で広く話されている「瓢箪を割る乙女」が最も有力」と主張する。

ほか、大島建彦氏は日本各地に分布している「腰折れ雀」話型を四五話集め、それらの特徴について「奥羽から九州まで、ほぼ全国にわたって、『宇治拾遺』の例と同じように、一定の型によって伝えられており、著しい相違は認められない」と論じている。稲田浩二氏も同じように、「各類話は、伝承地によりヒョウタンの中から出てくるものに違いがあるようだが大筋は変わらない」と述べた。さらに、少し立場は異なるが、童話研究の高木敏雄氏は「フンプ伝」について、「『宇治拾遺』の話とまったく同一」とし、「この話が朝鮮童話の翻案である」と述べている。ほかに、稲田和子氏は「日本各地の伝承はほぼ一致しており、『宇治拾遺』にある「雀恩を報ゆる事」とほとんど変わらないので、「舌切り雀」のようにわが国独自の発展ではなく、朝鮮から伝来したと見られている」とみる。志村有弘氏は「中国・朝鮮に伝わる報恩のつばめの話の翻案で「腰折れ雀」として全国に分布し、「雀報恩事」もほぼ同じ内容になっている」と述べている<sup>(30)</sup>と述べるほか、鳥居君子氏も「瓢箪を割る乙女」話を「腰折れ雀」と題して、「一九〇六年モンゴルから直接収集したが『宇治拾遺』と「まったく同じもの」と指

摘し、中国にも同じ話があると論じている。

従来の学説では「腰折れ雀」の類話は朝鮮から伝えられたか、または、大陸との架け橋として朝鮮半島を渡って伝来されたと推測されることが多かったと言える。崔仁鶴氏は、地理的に隣接していることもあって、日本と韓国には数多くの類似した説話・昔話が存在するのは、「①農耕文化の経路、②漢字の伝播、③仏教の伝来」など「同一文化圏に生きており、風俗や文化の背景が類似している」<sup>32</sup>ことから生じたと分析している。

以上のことから、古くから日韓をめぐる様々な交流によって文化や風習などが類似するに至り、伝承も類似したものが生じたと考えることは可能である。とはいっても、複雑な影響関係について一々論証することはできない。そこで、日本と韓国の昔話の中で内容や構成の類似した説話が多いことについて、伝承の経路や影響はひとたびおくことにして、『宇治拾遺』や日本の説話・昔話などの類似した説話について、それぞれの独自性の追究を課題としたい。

## 二、『宇治拾遺物語』構成と表現の特徴

同じ話型を共有する昔話だけでなく、説話を分析する際にも、先にも述べたように、方法として「事項」という概念を用いる。「雀報恩事」の具体的な表現に即して、忠実に事項を抽出して、分析を行い（「雀報恩事」の分析表）<sup>（補注1-1）</sup>、これから考察に参照したい。

### （1）老女の子や孫との対立関係による感情の表現

『宇治拾遺』「雀報恩事」の話型をもつ第四八話の中で、構成上最も印象深い特徴として挙げられるのは、老女と隣の老女との対立関係のほか、老女と孫との対立という、家族間の対立・葛藤関係が存在するということがある。韓国昔話「フンプ伝」の類話の場合、兄弟の対立関係という家族内の対立関係が存在する。

一方、日本昔話「腰折れ雀」類話の場合は、ほとんどの事例で、隣の人との対立関係であるが、対立関係の成立

しない話も存在する。これに対し、『宇治拾遺』の場合、隣の人との対立関係とともに、老婆と孫との対立関係も併存するところに特徴がある。すでに小峯和明氏は、「雀報恩事」話は「老婆と子、孫との関係性であり、それを軸に事件が展開していくことは注目すべきだ」とし、構成の特徴として、隣人との対立関係のほか、家族間の対立・葛藤関係が存在すると述べている。

このような老婆と孫との葛藤といった家族内の対立関係は、主人公の老婆だけではなく、隣の老婆の場合も同じ展開が見られ、その家族内の葛藤を中心に話が展開され、家族内の葛藤や感情の変化などが詳しく描かれている。そういった点が、『宇治拾遺』「雀報恩事」特徴の一つであり、日本昔話「腰折雀」類話とは異なる「口承の昔話との決定的な相違」<sup>(34)</sup>であると言えよう。

例えば、子供が投げた石に当たって腰を折られた雀を、老婆は、「いそぎとりて、息しかけなどして、物食はす。小桶に入れて、夜はおさむ。明れば米食はせ、銅、薬にこそげて食はせ」と介抱する。その様子を見た子供たちは、「あはれ、女などじは、老て雀かはるゝ」「あはれ、なむでう、雀かはるゝ」て、皮肉を込めて笑うほか、老婆が雀からもらった種を植えている様子を見ても、皮肉を込めて笑う場面がある。家庭内における老婆の位置について、三木紀人氏は次のように述べている。

六〇歳を定命とする中世に通念に従うなら、彼女はすでに余命のほとんどない身だが、しらみが取れる程度なのだから、視力も、従って体力一段もかなり健在のようである。しかし、子や孫はあまり老女を尊重していないらしく、傷ついた雀を彼女が養育するさまを見て、「にくみ笑う」（この子・孫の嘲笑は、再三反復されて、老婆の立場を背後からよく浮きぼりにしている）老女は家の中で尊重されておらず、孤立ぎみなのである。<sup>(35)</sup>

三木氏の指摘の通り、老女に対して子供が笑うという表現が繰り返し反復されている。この繰り返しの表現によつて、子供に笑われている老婆の立場が強調されるとともに、老婆に対する子供の態度や家庭内における老婆

の位置が予想されるのである。同じ事を繰り返して表現するということには、改めて強調したいという意図が含まれていると考えられる。

『宇治拾遺』「雀報恩事」構成において、繰り返しの表現が用いられることは『宇治拾遺』の一つの特徴となっている。例えば昔話でも、『奄美大島昔話集』「雀の恩返し」<sup>(36)</sup>の場合、子供が老婆さんを憎み笑うという事が繰り返して表現されているところは「雀報恩事」とよく似ているが、この話には悪人の役割となる欲深い隣人が登場しないため、隣人との対立関係は成立しない。

腰を折られた雀を介抱する老婆の行動や、雀が落とした種を手に入れて大事にしている老婆の行動が、子供に笑われているにもかかわらず、「さはれ、いとおしければ」「さはれ、植て見ん」と言いながら自分の信念を貫き、雀が飛べるようになるまで介抱して、雀から種をもらうことになるのである。三木氏は「この「笑ひ」と「さはれ」の組み合わせの反復は、子・孫と老婆との関係を端的に示すのになかなか効果的である。老女は放任・譲歩の気持ちを示すこの「さはれ」を口ぐせにして周囲との摩擦を回避するならわしとしているかのようである<sup>(37)</sup>」と述べている。介抱した雀が腰を治って飛び帰ると、老女は退屈で寂しくなり、また帰って来るのではないかと待つ。この行動から「雀に対する老女の過剰な思い入れと、はかない期待<sup>(38)</sup>」が詠み取れる。その様子もまた、人や子供に笑われ、一緒に住んでいるのにもかかわらず、家族とのあたたかい繋がりのない孤独な老女なのだということが十分に読み取れる。この「や」と「よ」という詠嘆の言葉を繰り返すことによって、雀と離れる老女の淋しさが強調される。雀が戻った時、老女の嬉しさは「あはれに、忘れず、来たるこそあはれなれ」と、文頭と文末に「あはれ」を繰り返すことによって、嬉しくて興奮した感情として強調されているのである。

世話をした雀が飛び帰ってから、老女は退屈となり、また寂しかった生活に戻ってしまう。

老女は「傷ついた雀を、喪失した家族の代わりのようにして、夜も昼も面倒をみたのである。雀が治って飛んで行ったのは喜ばしいことだったが、それは新たな家族との別れを意味<sup>(39)</sup>」するのかもしれない。種から成った実

を老女は喜んで、子供だけではなく隣の人々にも食べさせる。その行動は疎外された現実から脱出しようとする老女の努力と意図が含まれていると考えられる。経済力がなく家族内で疎外された老女にとって、雀は新たな家族のような存在となり、自分の世話を必要とする雀の報恩の行動によって、老女は失った家族内への地位を回復するのである。

## (2) 雀の感情を表す表現と結末

昔話と比べ、『宇治拾遺』「雀報恩事」の最も大きな特徴は、雀が感情を持っていることだろう。「フンブ伝」及び日本の昔話では、「雀報恩事」のような明確な感情の表現は認められない。

「燕は江南の国に帰れる時は、必ず其の国王に見参して、北の国にてありし色の事共を報告する掟とすれば」(高橋亨「興夫伝」『朝鮮の物語集』)

この本文によると、燕は燕の国に戻ると、今までの出来事を国王に報告する。その報告を聞いた国王は「其はいと殊勝なる人間かな」「己れ無情の人間奴いて復讐せよべき」と怒鳴っている。ここから燕の持つフンブとノルブに対する感情が読み取れるとともに、その報告によって結末の話が展開されるのである。

しかし、『朝鮮昔話百選』「ホンブとノルブ」では、ホンブの家に戻ってきた燕が「うれしい声を出しながらやって来た」という表現だけで、対照される感情の表現は表されていない。

これに対し、『宇治拾遺』「雀報恩事」の場合は、

「雀の心にも、かくやしなひいけたるを、いみじくうれしくと思けり」

「雀は腰うち折られて、かく月比籠め置きたるを、よにねたしと思ひけり」

と、二人の老女に対する雀の感情がよく表されている。「危ないところを助けられ、手厚く介抱されてうれしいと思うのは、ごく自然な心の動きであって、注意したいのはそういった心情そのものではない。ここで、雀の心情がことさらに語られている点である<sup>(40)</sup>。この「うれしい」「ねたし」という、老女と隣の人に対する雀の持つ

感情によって、「恩返し」「復讐」といった結末が展開される。

つまり、「幸を受けられる媼と、死に至る隣の媼という対照的な結末が、昔話に見られるような禁忌に対する違反の有無によってではなしに、媼と隣の媼との心の有無によって分けられるところに、『宇治拾遺』の表現の特質は認められる<sup>(41)</sup>」のである。

### (3) 二人の老婆の家庭内における地位

隣の老女の行動は、「穀潰しのくせに、ただ家にごろごろしていないで、隣のお婆さんをすこしは見習ったらどうなんですかと、家族から尻をたたかれるような気持ち<sup>(42)</sup>」から始まった。ここで注意することは「隣の女の行動は自分の意志ではない<sup>(43)</sup>」ということである。隣の女の真似の動機は、豊かになりたいという気持ちではなく、「あの隣の女にはまさりて、子どもにほめられんと思つて<sup>(44)</sup>」のように、子共たちにほめてもらいたいということから始まったのである。

すなわち、「老婆は本人に悪意がなく、懸命に子供たちに気に入られようとするけなげさがかえって哀れを誘う。そこには最初の老婆と同様、家庭での地位のあやうさ、よけいものとして疎外された老人の宿命が映し出されている<sup>(44)</sup>」のである。前述した善人の役となる老女の疎外された現実から脱出しようとする努力に通じるものがある。しかし、隣の老女は、最初の老女以上に子供にほめてもらいたい、負けたくない、「雀どもあつまりて、食に來たれば、又、うちくしければ、三打折ぬ」のように、わざと三羽の雀の腰を折る。このような設定によって隣の老女の欲深い性格が強調される。この三という数字は、「物語を動的に展開させる力があるため、説話・物語によく出る数字<sup>(45)</sup>」である。「自分を隣の老女に比べてあしざまに言う我が子たちの鼻をあかしてやろう、それには隣の老女よりも多くの雀に恩返しをさせる事だと、子らに厄介者視されている負い目からきた、歪んだ自己顕示欲に基づく、罪深い殺生<sup>(46)</sup>」であるだろう。

隣の女の（真似の）行動は、動機に悪意はなく子供に褒めてもらいたい、家族内で失われた自分の位置を求め

たいという気持ちから始まったものだが、手段と方法を問わずそれだけが目的となったため、欲深い悪人の役割となり、最悪の結末となったのである。子供たちは、腰を折られた雀を介抱し、雀が落とした種を手に入れて大事にしている老婆の行動に対して皮肉を込めて笑うが、種から「ひさご」が成り余ると、媪を嗤っていた子や孫たちは喜んで食べている。『宇治拾遺』には、このような自分勝手な言動のありがたが問われている。このよ  
うな人間関係は、昔話にはない。それは恐ろしくこの物語が都市のものであることに基づいていよう<sup>(47)</sup>と指摘される<sup>(48)</sup>ところである。

## 第二節 韓国昔話「フンプ伝」の話型

### 一、昔話「フンプ伝」の類話

日本の説話研究において、韓国側の研究に対する評価は低い。その意味でも日韓の比較文学研究は重要である。韓国研究者においてこれまで「フンプ伝」の原典として指摘される説話を整理すると、次のような説話<sup>(48)</sup>が取り上げられる。

- ① 「旁缶説話」 『西陽雜俎續集』 ↓ 新羅説話<sup>(49)</sup>
- ② 「ひさごを割る乙女」 (若しくは「瓢箪を割る乙女」) ↓ モンゴル説話
- ③ 「黄雀報恩」 『搜神記』 ↓ 中国説話<sup>(補注 1, 2)</sup>
- ④ 「雀報恩事」 『宇治拾遺』 ↓ 日本説話
- ⑤ 「舌切雀」 ↓ 日本説話
- ⑥ 「花咲爺」 ↓ 日本説話
- ⑦ 「海幸山幸説話」 ↓ 日本説話

⑧ 「瓢説話」 『賢愚経』 卷五 散檀寧品』 ↓ インド仏典説話

「旁缶説話」は、「フンブ伝」の以外、『宇治拾遺』第三話「鬼に瘤取らゝる事」や韓国昔話「瘤取り爺」類型の話の原典としても指摘されている<sup>(5.1)</sup>。

確かに、「旁缶説話」の内容からみると、「フンブ伝」と「雀報恩事」と同様、鳥の登場や善人と悪人という隣人との対立関係は似ているが、瓢などのつる性植物は登場しない。その他、恩返しの方法についても共通性が見当たらないため、「旁缶説話」を「フンブ伝」の原典と断定するには無理があると思われる。鬼との関係といった設定や登場場面、他に福をもらう、罰を受けるという結末から考えると、前半部分は「フンブ伝」に、後半部分は「鬼に瘤取らゝる事」に近いとも考えられる（それらについては、第二章にて、考察する）。

次の②「ひさごを割る乙女」は、先ほど『宇治拾遺』「雀報恩事」の先行研究」において述べたように、日本では鳥居君子氏により「瓢箪を割る乙女」として紹介されたモンゴルで確認された説話である。

このような評価に対して、特に韓国においては、「フンブ伝」類話の原典として初めに注目された説話「ひさごを割る乙女」が、一九二二年崔南善氏により、雑誌『東明』に「外国から帰化した朝鮮古談―蒙古のフンブ・ノルブ」の題で紹介された。崔南善氏は、この話を紹介したうえ、「フンブ伝」と類似している点に注目し、「朝鮮と蒙古は高麗時代から深く関係があり、その時この話が伝わったか、または、その反対であるかが「疑問」<sup>(5.1)</sup>であると述べている。また金台俊氏は「わが郷土に固有のものではなく、大陸から朝鮮、日本までの広い範囲に渡ってひろまってきた」と指摘する<sup>(5.2)</sup>。加えて、孫晋泰氏は、モンゴルの「ひさごを割る乙女」を「フンブ伝」の原典と指摘し、「元々、モンゴルに帰化した高麗の女性によって伝播された話」<sup>(5.3)</sup>であると主張する。このような研究の経緯については、邊田氏<sup>(5.4)</sup>は、採録地や語り手・出典などが示されていないので論考の根拠が弱いと指摘している。印権煥氏は「ひさごを割る乙女」説話の現地調査者は鳥居きみ子氏であると指摘した<sup>(5.5)</sup>。

すなわち、「ひさごを割る乙女」は、前述した鳥居君子氏の「脚折れ燕」と同じ事例であると言えよう。確か



に、一人の娘と欲が深くて性根のねじれた隣近所の女という対立関係や、燕の登場、瓢の種という恩返しの方法などは似ている。ただ、鳥居きみ子氏の「脚折れ燕」の場合、瓢から出るものは、お米である。さらに本論文に引用した日本語訳では「脚」とあるが、崔南善氏の「蒙古のフンブ・ノルブ」についてハングル原文を確認したところ、原文では「脚」ではなく「翼」とある。そのため原文どおりとすれば、鳥居きみ子氏「脚折れ燕」の「脚」とは異なるのである。<sup>(56)</sup>その他、張徳順氏は、「瓢のモチーフは、仏典『賢愚経』からの始まりであり、因果応報という内容などが仏教的であることからインドの「瓢説話」が原典である」と指摘している。

改めて、『韓国口碑』を調べたところ、「フンブ伝」の類話は現在のところ見あたらない。「ノルブとヒョンボの話」<sup>(58)</sup>「フンブとノルブとトケビの棒」<sup>(59)</sup>という題名の話はみられるが、主人公の名前は似ているものの、内容は「フンブ伝」とは全く違っていることが確認できた。「フンブ伝」の類話がパンソリ系小説として書かれた作品とすれば、原典となる説話の指摘とともに、その説話と小説との影響関係や、構成の変化などについては、これからの研究課題であろう。

以上のように『宇治拾遺』成立時期を鎌倉時代、治承元年（一一七七）から仁治三年（一二四二）までの間とすれば、現在伝えられている「フンブ伝」の最も古い伝本（一八六〇から一八七〇年の間に刊行されたと推定）と『宇治拾遺』の間には、五世紀ほどの隔りがあるということになる。

パンソリとは、庶民たちによって演じられ、庶民の間に流行していた庶民たちの芸能の一つである。

「パンソリ演唱者が賤民として蔑視され文筆力に乏しく、その伝承を専ら口伝心授に依存した事」<sup>(60)</sup>から、パンソリに関する文献が伝わっていない。つまり、パンソリは記録物ではなく口伝によって伝わった。そのため、現在のところ、パンソリの発生や伝承などについては明らかにされていないので、これ以上考察を深めてゆくことができない。

## 二、韓国昔話「フンブ伝」の構成

「フンブ伝」は、韓国においては数多くの異本が伝わっている、あまりにも有名な伝承であり、昔話の形態を強く残す事例から小説化された事例に至るまで、幅広い事例が存在する。そこで、比較的昔話に近い事例と、「雀報恩事」の事例とを、事項群の配列において比較を試み、「雀報恩事」と韓国の「フンブ伝」の特質について考察したい。「雀報恩事」との比較において、「フンブ伝」については、異本の調査や韓国の資料を用いる必要があるが、詳細な検討は他日を期したい。また、本論においては、小説形式の「フンブ伝」は考察の対象としない。本論では構成の考察上、日本語で翻訳された『朝鮮昔話百選』「ホンブとノルブ」<sup>(6)</sup>を用いる。

『朝鮮昔話百選』「ホンブとノルブ」の事項分析を示すと、次のようである。

蛇が燕の巣を襲う。

燕が脚を折る。

ホンブが燕を治療する。

燕が完全に回復する。

燕が九月九日に飛び去る。

燕が三月三日に江南から戻る。

ホンブが喜ぶ。

燕が瓢の種を持ってくる。

ホンブが不審に思う。

ホンブが種を植える。

五個の実が成る。

ホンブが一つ目の瓢を切り、お米が出る。

ホンブが二つ目の瓢を切り、お金が出る。  
ホンブが三目の瓢を切り、仙女が現われる。  
仙女が大きな屋敷を立ててくれる。  
ホンブは金持ちになる。  
ノルブが噂を聞く。  
ノルブが金持ちになったわけを聞く。  
ノルブが家に巣を作り、燕を待つ。  
燕が巣に飛んで来て子を産む。  
ノルブが無理に燕の脚を折る。  
ノルブが燕を治療する。  
ノルブが燕から種をもらう。  
ノルブが種を植える。  
ノルブが一つ目の瓢を割ると、化け者が出る。  
化け者がノルブを叩く。  
ノルブが二つ目の瓢を割ると、借金取りたちが出る。  
借金取りたちが金を取って帰る。  
ノルブが三つ目の瓢を割ると、臭い汚れた水が出る。  
ノルブがホンブの家に逃げ、助けを求める。  
ホンブは半分の財産をノルブにあげる。  
ノルブは反省する。

兄弟は幸せになる。

これをさらに整理すると、次のような単純な事項群にまとめることができる。

蛇が燕の巣を襲う。

燕が脚を折る。

ホンブが燕を治療する。

燕が完全に回復する。

燕が飛び去る。

燕が瓢の種を持つてくる。

これらが基本的な事項群であり「フンブ伝」の話型を示すものと言える。事項の次元でみると、『朝鮮昔話百選』「ホンブとノルブ」は日本の昔話の構成と似ていることが分かる。また、田中梅吉訳「興夫伝」<sup>(62)</sup>、八束周吉訳「興夫伝」<sup>(63)</sup>と比べると、導入部分における主人公の性格の特徴を表す表現など、大きく省略されていることが分かる。<sup>(64)</sup>

さらに、本文のような「一匹の蛇が現れ」、「ただ一匹の雛燕だけは、危うところを辛うじて逃れることが出来た」などのように、蛇の数や命の助かった燕の数などは昔話の特徴上、語り手によって、一匹とも二匹、または強調するため数多くの蛇にも変化する可能性が高いと推測できる。

### 第三節 『宇治拾遺物語』及び日本昔話「腰折雀」類話と韓国昔話との比較

この章では、『宇治拾遺』「雀報恩事」及び日本昔話「腰折れ雀」類話と韓国昔話「フンブ伝」との比較を試

みたい。(【表1】参照。韓国昔話は、崔仁鶴『韓国昔話百選』「ホンブとノルブ」を比較対象とする)

【表1】『宇治拾遺』及び韓国昔話「腰折雀」類話対照表

末 結		開 展						端 発					
悪役	善役	出てきた物	悪役への贈り物	悪役の行動	出てきた物	贈り物	戻った時期	飛び去った時期	怪我	珍珍動物	対立関係	『宇治拾遺』 「雀報恩事」	韓国昔話「フンプとノルブ」
刺し殺される    不幸な結末	裕福になる    幸せな結末	蛇、蜂、ムカデ、トカゲ、蛇	三羽から三粒の種と七・八つほどの瓢の実	自ら石を投げ、腰を折る雀を介抱(三羽)	米	瓢の種一粒↓ たくさんの実	二十日後	幾月後	子供が投げた石↓ 腰が折れる	雀	六〇才の老婆と隣のお婆	兄 対 弟	蛇の襲いで巢から落ちる↓ 脚が折れる
弟から助かれる (悪行を反省)    幸せな結末	裕福になる    幸せな結末	トケビ、借金取り、汚れた水(家が汚水に沈んでしまう)	一つの種、幾つの実	無理に脚を折って介抱(二羽)	①米、お金、仙女 ②青い瓶(建築材料) ③赤い瓶(大工)	瓢の種一粒と五個の実	翌年春(二月三日)	九月九日		燕			

日本の『宇治拾遺』「雀報恩事」及び日本昔話「腰折雀」類話と韓国の昔話「フンプ伝」を比較すると、私は最も重要な相違点として、次の五つの点を取り上げることができると考える。

① 隣人と兄弟、② 雀と燕、③ 腰と足、④ 贈り物としてもらった種、⑤ 贈り物から出た物  
さらに、両国の「雀報恩事」類話の大きな共通点としては、① 家族や兄弟といった人間関係内の葛藤、② 動物

の恩返し、③善人には福を、悪人には罰が当たるといふ、勸善懲悪・教訓的な話であることが取り挙げられる。

### (1) 隣人と兄弟対立関係

韓国昔話「フンブ伝」類話の場合、兄弟の対立関係や燕の登場するということには変わりがない。それに対し日本の場合には、善人である主人公対欲張り隣の婆（悪役）を中心として話が展開される事例が多く、私が確認した五十五話の中では、

- ・ 対立関係のない話…一〇話（【表2】前半・後半なしの話参照すること）
  - ・ 兄弟対立関係 …一話（水沢謙一『おばばの昔ばなし』<sup>(65)</sup>）
- の話を除くと、ほとんどが隣人との対立関係の話である。

関敬吾氏は、隣の爺型と兄弟間葛藤型の特徴について次のように論じる。

兄弟譚、隣の爺は社会的モチーフが主である。人間の社会生活における相互関係、相互の社会的葛藤がその基本的要素となっている。（中略）隣の爺型は相隣りする二つの家、あるいは爺と婆との闘争である。善良なるものが勝利を制する物語であり、倫理的教訓的要素を多分にもつ。我が国ではこの型の昔話が特に発達しているやうに思へる。<sup>(66)</sup>

また、崔仁鶴氏は、「隣の爺」型が『集成』に一四型が認められるが、韓国には「隣人」型が九型、兄弟間葛藤は一八型も及ぶということを取り上げ、日本には「隣の爺」型が発達し、韓国には「兄弟間葛藤」型が発達したのは、「両民族の間に家族制度と財産の分配などをめぐる社会的構造の相違いからもたされた」<sup>(67)</sup>ものだと言っている。

なお、小澤俊夫氏は、「日本人にとって、隣への関心がいかに強く、重要であったかを知ることができる。それは、日本人が社会で生きていくうえで隣に関心をはらうことが必要で、重要であったからであろう」と、日本人の隣への関心、社会的対人関係などが日本において「隣の爺」型が発達した原因の一つであると述べている。

つまり、両者の相違は両国の社会制度の影響を受けていると言えるだろう。

また、稲田浩二氏は「兄弟譚と隣の爺譚一考」において、「兄弟譚形式の分布地域と隣の爺譚形式のそれぞれが重なっている」<sup>(69)</sup>ことを根拠とし、「隣の爺譚は兄弟譚を母体として生まれて構成され他の話型に拡大された」<sup>(70)</sup>ものだと指摘する。その上、稲田氏は朝鮮半島では兄弟間、日本では隣の爺との葛藤が存在するが、中国大陸には見当たらないということについて、日本では「兄弟譚から隣の爺譚への転成もなお東アジア伝承圏の中で大陸との交渉を保ちながら行われ、沖縄県ではひきつづき兄弟譚形式を根強く保ち、西日本各地ではモチーフにそのあとがいちじるしい。これに対し、東日本の隣の爺譚構成は大陸との交渉の絶えたところで自由な展開をみせているようである」<sup>(71)</sup>と述べ、隣の爺型と兄弟間葛藤型は地域上、伝播過程に生じたものであると論じている。

さらに小峯和明氏は、「この話で注目すべきは、老婆と子、孫との関係性であり、それを軸に事件が展開していくことである」<sup>(72)</sup>とし、隣人との対立関係のほか、家族間の対立・葛藤関係が存在していることを指摘する。

なお、川森博司氏は「日本では一般的に「隣人对立型」が好まれること、韓国では「兄弟対立型」に対する好みが日本に比べかなり強くあらわれる」と述べたうえで、「昔話の伝承の多様性から考えて、直接・単純に社会組織と昔話を結びつけることはつつしむべきであろう」と、としつつも「ただ、昔話の存在が背景になる社会に支えられたものである以上、実際に実際社会とのあり方相互関係を考えていくのは重要な課題である」<sup>(73)</sup>として、昔話と社会制度との関連性について語る。川森氏は、昔話とは「伝えてきた人々の生活感情の深い部分を、如実に反映するもの」<sup>(74)</sup>だという。昔話の内容には、語り手の生活する社会・文化生活や伝承の目的などが反映されているとみられ、韓国では兄弟対立型が、日本では隣人との対立型が発達したと推測することも可能である。

## (2) 雀と燕

韓国昔話の中では、登場する動物においては、燕と決まっていることに対し、日本は雀の登場する事例が多くみられるが、燕の事例も見られる。例えば、『宇治拾遺』「雀報恩事」の類話の中で、京都府与謝郡伊根町新井

に伝わる「燕とかぼちや種」の話や、広島県世羅郡甲山町（『芸備昔話集』）、甲奴郡総領町（『備後昔話』）に伝わっている事例には、燕が登場する。高木敏雄氏は、雀と燕といった登場動物の違いについて、「宇治大納言がこの話を翻訳する時分に、燕を雀に直して瓢の内容を簡単にしたのでと思われる」と指摘している。

雀は日本や韓国では、人里に多く見られるもつとも一般的な鳥である。特に、日本では昔から「白いスズメは来福の兆し」とされるほか、「スズメをとると火事になる、夜盲症になるとする俗信は多く、スズメを保護しようとする思想」があったとされている。他にも「ツバメを殺すと盲目になったり火難にあったりする」「ツバメの営巣を家運も勃興する兆しと見、反対ツバメの渡来の途絶をその家が没落する兆し」と、考えられたようだ。このように日本では地域によって、雀とともに燕が登場する場合もみられるのに対し、韓国昔話「フンブ伝」の類話の中では日本のような雀の登場する話は見当たらない。

### (3) 腰と足

韓国昔話「フンブ伝」の場合、燕の怪我とは脚が折れることを意味しているのに対し、日本の場合は各地域によって折れるところが「腰」「脚」「羽」「骨」などと異同があり、ただ「怪我」だけとする事例も見られる。

その他、美方郡村岡町長坂の伝承には、腰折れた雀と足折れた雀が同時に登場する事例もある。

怪我の原因について、「フンブ伝」の類話は、蛇や大蛇など、何らかのものに襲われる中、巢から落ちて怪我をするという話がほとんどであるが、『宇治拾遺』『雀報恩事』の場合は、「童部石を取りて打ちたれば、当たりて腰をうち折られにけり」とある。このように、子供にいたずらされて怪我をするという類話は、埼玉県所沢市採録の『武庫川越昔話集』や、『大分昔話集』『奄美大島昔話』にも、伝わる。その他、静岡県浜松市には、「屋根から落ちてきた足の折れた雀」という話が伝わっており、勝田郡勝田町の「腰折雀」、苫田郡上斎原村本の「腰折雀」、福岡県甘木市の「足折れ雀」には、怪我の原因はなく怪我した雀を拾ってから介抱するという類話も伝わる。



#### (4) 動物からの贈りもの

日本・韓国とも、何らかの贈り物をもたらすことは共通している。韓国の場合、【表3】で示した a、p のうち、1・小澤俊夫編訳「つばめの足」、m・金素雲「カボチャの種」のほか、全ての贈り物が瓢箪である。一方日本の場合は、地域によって瓢箪やふくべの以外、世名羅郡甲山町『芸備昔話集』、与謝郡伊根町『丹後伊根の昔話』、美方郡村岡町長坂の伝承では、かぼちやの種とあり、『出雲の昔話』では、すいかの種、『若狭の昔話』、『阿仁昔話集』では箱と、様々な種類が出てくる。

すでに、大島建彦氏は、全国に分布する「腰折れ雀」類話を集め（論文「『宇治拾遺』と昔話」に三五話、『新潮日本古典集成』には、四五話の事例を挙げている）、地域別に資料を紹介するとともに、登場動物や贈り物としてももらった種の種類などについて考察する。

さらに、廣田收氏は「昔話「腰折れ雀」分析表」において、「腰折れ雀」類話三三話について、

- ・「爺・隣爺」「雀」「米」型
- ・「兄弟」「燕」「大工」型

と分類した上で、発端、展開、結末と分け、対立人物、登場動物、贈り物から出て来た物について、詳しい分析を行なっている。

これらの先行研究を踏まえて、本論文では主に、登場動物から贈り物としてももらった種から出て来たものを中心に、日韓比較考察を試みたい。先に、日本昔話「腰折れ雀」類話において、瓢の実から出て来たものが何かとということについて改めて調べ、一覧表を作成し【表2】とする（三〇頁参照）。

【表2】によると、比較対象となる総計五五話の中、贈りものから出てきたものの中で、お米が出るという話は四〇の話（①〜④⑩番）が認められ、お米とともにお金や金銀など宝物が出て来るといふ話は六話、金銀や宝物のみが出るといふ話は八が認められる。そのほか、大工登場の話（⑩話）や、実際、大工は登場しないが、出て

きたお米を売って家を建て直すという設定の話（㉕話）も見られる。

このほか、㉔番事例のような、叩きながら欲しいものを言うとか何でも出て来るというモチーフは、韓国昔話「トケビの棒」の類型と融合したものと理解できよう。ほかには、着るものが出る（㉓話）とか、病気を治してくれる（㉑話）とか、お米などの代わりに瓢箪やかぼちゃそのものを食べるという話（㉒・㉑と番事例）も見られる。

しかし、㉒話と㉑話の場合は、悪役が瓢箪の実を周りの人に食べさせたところ、腹痛にみまわれて恨みをかうという設定は、『宇治拾遺』と同様である。ほか、㉑と㉒話のように前半にあたる、恵まれるようなものの登場は見られないが、悪役に罰が当たるといいう、後半のみの話も見られる。

先行研究により、㉑話は、兄弟対立や燕の登場する点、㉒話の場合は、大工家建てのモチーフから、韓国昔話と類似することが指摘されてきた。<sup>(9)</sup>『出雲の昔話』の場合、足を折られた燕の登場や、日本昔話「腰折れ雀」類話には珍しく、贈り物である瓢箪の実から大工が出て来て家を建てるといいう点から考えると、確かに韓国昔話となり類似するようだが、この話には兄弟や隣の人との対立といった後半に当たる部分がない。

【表2】によると、㉑話・㉒話では悪役の贈り物から、蛇や虫などが出て来る他の話は違い、大入道や乞食、お坊さんなどが出て来る。㉑話の場合は、大入道が出てきて「これからも悪い事をすれば、絞め殺すぞ」と脅迫する場面があり、㉒話の場合は、乞食やお坊さんが出てきては、「ぜんをくれ、ぜんをくれ」と、お金を取ろうとする。実際、取られたという結果にあたる場面までは描いていないが、この話のように悪役を脅かすか、㉑話・㉒話のように、ネズミなどが出てきて家や財物を壊してしまうか、もしくは虫を退治しようと火を付けたが、間違っって自分の家を燃やしてしまうという、結果としては、悪役の持つ家や財産を失くすという設定である。これらは、韓国昔話「フンブ伝」類話では、よく見当たる場面である。ほか、韓国昔話の場合、兄弟対立関係の中には、貧乏（前半）対金持ち（後半）といった、二重の対立関係が成立する。

【表2】日本昔話「腰折雀」の類話事例一覧表(100)

(前半(善役)と後半(悪役)に、贈りものとしてもらった種の種類が同じである場合、後半は、空欄にした)

話種	前半(善役)	後半(悪役)	
①	瓢箪	米、お酒	蛇
②	瓢箪	米	虫ケラ
③	瓢箪	米	蛇、ムカデ、ケジケジ、トカゲ
④	瓢箪	米、金	うじ、虫
⑤	瓢箪	米	はち、とげ、糞
⑥	瓢箪	米	酒(腹を下す)
⑦	瓢箪	米、乳、金銀	蜂、乳(手すり)、泥、大入道
⑧	瓢箪	米、壺(毒)、着る物	蜂、ケ食、坊さま、アブ
⑨	瓢箪	米	蛇、ナメロ
⑩	瓢箪	米	蛇、とかげ、ムカデ
⑪	瓢箪	白米	蛇
⑫	瓢箪	白米	蛇、蛙
⑬	瓢箪	白米	後半なし
⑭	瓢箪	米	蛇
⑮	瓢箪	米	後半なし
⑯	瓢箪	米	蜂、瓢箪を食べると下痢
⑰	瓢箪	米、お金	だん、蜂、ムカデ
⑱	瓢箪	米	後半なし

⑲	瓢箪	白米	蛇、蜂、ムカデ
⑳	瓢箪	白米	蛇、蜂、百足、とかげ
㉑	瓢箪	米	蛇、ミミズ
㉒	宝箱	米	盲人
㉓	瓢箪	上白米	蛇、ムカデ
㉔	瓢箪	米	蛇、まむし
㉕	瓢箪	米	小さなはち、鼠
㉖	瓢箪	白米	蛇、蜂、ムカデ
㉗	瓢箪	米、宝	蛇、蜂、アブ
㉘	瓢箪	白米	後半なし
㉙	瓢箪	米、金銀	蛇、毒蛇、ムカデ
㉚	瓢箪	米	後半なし
㉛	瓢箪	米	蜂、鼠
㉜	瓢箪	米	蛇、食へると腹通
㉝	瓢箪	米	蛇
㉞	瓢箪	米、瓢箪を食べる	まむし、百足、蟻
㉟	瓢箪	白米	蛇、蜂、百足、とかげ
㊱	瓢箪	白米	人虫
㊲	瓢箪	米、お金、宝物	瓦、麩、虫
㊳	瓢箪	米	蛇、蜂、百足

㊴	瓢箪	米、小箱、食べ物	後半なし
㊵	西瓜	米、大工、木挽さん	後半なし
㊶	味噌、醤油	後半なし	
㊷	瓢箪	お金	蛇、蛙、まむし
㊸	瓢箪	お金	鉢、ムカデ
㊹	瓢箪	毎日小半一枚ずつ	後半なし
㊺	瓢箪	金	家が燃える
㊻	瓢箪	金	蛇
㊼	瓢箪	黄金	餓鬼
㊽	瓢箪	宝	蛇、蜂
㊾	瓢箪	宝	蛇、蜂、百足
㊿	瓢箪	欲しがる物は何でも出て来る、眼鏡	盲人
50	蜜柑	病気が治る	失敗
51	豆粒	たぐさんの豆	豆粒を植えた所からくちなわ、ミミズ
52	南瓜	南瓜を食べる	ミミズ、トカゲ、百足、蛙
53	瓢箪	着る物	蛇、蛙、おたまじやくし、ミミズ
54		前半なし	蛇
55		前半なし	蛇

そのため、貧乏（前半）には、恩返しとして財物を与えられるもの、金持ちである悪人（後半）には、罰の一つの方法として、元々持っていた財産さえ取ってしまうという設定になったのではないか。特に、⑧話（小沢謙一『おばばの昔ばなし』）に掲載されている事例の場合、兄弟間の対立関係をなすものや、脚を折られた燕の登場、そして、贈り物ものから、どんな病気でも治してくれる薬の入った壺（韓国の場合は、瓶）が出て来る点、そして、乞食・お坊さんが出てきて、お金を取ろうとする点からみると、韓国昔話「フンブ伝」の類話とかなり類似する。

次は、韓国昔話「フンブ伝」類話について、贈りものから出て来たものについて考察する。すでに、邊恩田氏は「フンブ伝」の伝本の比較考察において、各伝本による贈りものから出て来たものの違いについて論じている<sup>(101)</sup>。

本論文における、『宇治拾遺』『雀報恩事』及び日本昔話「腰折れ雀」との比較においては、韓国のパンソリ唱本や、小説といった「フンブ伝」の形式の中で、同じ形式上、主に説話や昔話を中心に、日韓比較考察を試みたい。それによって、総計一六話（a & p）の韓国昔話「フンブ伝」の類話を比較対象とし、贈りものから出て来たものについて一覧表を作り、【表3】<sup>(102)</sup>と、する。【表3】には、韓国昔話「フンブ伝」類話の場合、伝本の系統に瓢の数の数が根拠になる<sup>(103)</sup>、ということもあり、実の数を示した。

【表3】によると、比較対象となる一六話の中、大工が登場する話は、一四話、大工と米（もしくは穀物）が出て来る話は一二話であり、大工の登場は見当たらず米のみが出て来るという話は一話である。ほか、大工も米の登場も見当たらない話が一話ある。

韓国昔話は、日本昔話と比べ、大工とともにお米（もしくは、穀物）が出てくる話が多い。そのほか、魔法の瓶のようなものから、大工が出たり、何の病気でも治してくれる薬が出てきたりする。悪役の贈りものからは、盲人やお坊さんなど様々な人なるものが出てきて、お金を取って帰ったり、汚れた水などが出て家を沈ませたりするなど、財産を失くすような場面が多い。韓国昔話は、瓢からお米のほか、何の病気も治してくれる薬、大工、

トケビ（化け物）など、様々な存在が登場する。特に、大工が出て家を建てるというモチーフは、比較対象となる一六話の中、一四話とある。

このような「大工家建て」モチーフについて、「雀報恩事」や室町時代の御伽草子「雀の夕顔」などの古い時代のものには見られず、さらに昔話においても、他の採録例にまったく見あたらない、きわめて特異で異質なおもむきを感じさせるもの<sup>(104)</sup>であると、指摘される。

それに対し、「雀報恩事」は、「白米の入りたるなり。思ひかけずあさましと思ひて、大なる物に皆を移したるに、同じやうに入れてあれば」と、いくら移しても減ることのない白米が出てきて裕福になるという設定である。一方、隣の人の瓢からは、「虻、蜂、むかで、とかげ、蛇」などがたくさん出てきて老婆や子共を刺し殺してしまうという結末である。人が出て来る事例は見当たらない。

ちなみに、邊田氏は「大工の家建てのモチーフが韓国の昔話と類似するという指摘はきわめて重要<sup>(105)</sup>」であると述べる。ほか、『日本昔話事典』では、「大工の家建てのモチーフ」の伝承地として、島根県・広島県を取り上げ、登場動物が雀ではなく韓国のように燕になっている類話の伝承地として新潟県・長野県・岐阜県・宮城県などを取り上げ、「古代より朝鮮半島と地理的に近く、歴史・文化的に関わりが緊密であった」ことから、「山陰地方から東アジア大陸との昔話の交渉の根の探さが確認されただけではなく、山陰地方から東北地方への伝播も想定される<sup>(106)</sup>」と論じる。

さらに、鄭忠権氏は瓢から宝物が出てくるモチーフについて次のように説く。

「フンブ伝」は兄弟間の友愛と朝鮮後期一般庶民の富に関する問題を扱っている。この作品で注目すべきところは、朝鮮後期農民達を苦しめた貧窮の問題であろう。朝鮮後期社会変動の最中、土地を失くした農民の数が急増することとなり、それらのほとんどは生存を襲われるほど貧しい限りであった。瓢を割ると宝物が出るという非現実的な発想は、このような当時の現実的状况と関連つけてみると理解できるもので、この

ような非現実的要素は農民達が直面する絶対貧窮と、不可能な富への念願に対する逆説的表現で、むしろ強い現実性を表したとも言える。<sup>(107)</sup>

鄭忠権氏の指摘されるように、「フンブ伝」に描かれている内容とモチーフなどから、当時の社会的変化が作品の中に現れたものだと考えられる。

ほかに【表3】において、『伝来童話集』『金徳順昔話集』『朝鮮伝来童話集』には、主人公が瓢箪を切りながら、歌を歌う場面がある。その歌は、三回・四回と繰り返し歌われていて、日本昔話には見当たらない。

### おわりに

恩返しについて、比較の論点をまとめてみよう。

(1) 日本昔話及び『宇治拾遺』第四八話「腰折雀」の場合

① 種と、種なし(箱)型

② お米・金銀・宝物、蛇・虫などが出てきて、善役には福を、悪役を脅かすという設定

③ 前半…財物が与えられる。

後半…蛇や虫などに刺されるか、刺殺される (身体↓ 一次懲罰)

(2) 韓国昔話「フンブ伝」の場合

① 種型

② 大工が出てきて家を建て、穀物・金銀な宝物が出て善役には福を与え、悪役には、人なるものが出てきてお金などで財物を取って帰る。

③ 前半…財物が与えられる。

後半…異界のものから叩かれて、脅かされる (身体↓ 一次懲罰)

お金を取られ、家や財産がなくなる (財産没収↓ 二次懲罰)

以上、『宇治拾遺』「雀報恩事」と韓国昔話「フンプ伝」の類話を調べ、両国の話の構成や特徴などの比較を通じて共通点と相違点について分析し、各話の特徴と関連性について考察してきた。同じ出典から伝わったとされる昔話にあっても、「言語の違い、信仰の違い、習慣の違いなどが昔話の変化をもたらす原因<sup>(108)</sup>」となり、また伝播経路や社会的環境や目的、語り手などによって、話の内容や構成が少しずつ変化していくと考えられる。

さらに、『宇治拾遺』「雀報恩事」及び日本・韓国の類話昔話「腰折れ雀」のような、勸善懲悪、教訓的な話について、小林智昭氏は「善因善果の信仰が、庶民の心に明るく受けとめられている」のであり、「典型的な悪因悪果の応報譚<sup>(109)</sup>」であると述べる。『新編全集』は、「一对主人公の幸不幸を語るが、二人の人物には善悪といった対象らしきものはなく(中略)勸善懲悪譚的色彩は希薄である。むしろ、一見さりげなく素朴なよそおいの中、二人の老女の孤独と心情のゆれ、幸不幸というものの条理と不条理などを独特な人生批評にもとづいて描くものかと思われ<sup>(110)</sup>」という。

私はむしろ、本説話が鎌倉初期の京都における家族を描くことによって、働かず役に立たない老女が、ひさごによって財を成す存在になるや、手のひらを返したように大切に扱おうとする家族の打算的な態度を風刺したものとみる。内容の点から、両話の構成や表現上の特徴について比較考察すると、共通点として挙げられるのは、まず、善人とそれを真似する悪人、二つは動物の報恩、三つは勸善懲悪、教訓的な話である。一方、相異点は、まず隣の人との葛藤と兄弟間の葛藤、二つ目は雀と燕という登場動物の違い、三つ目は、瓢から出たものの違い、四つ目は、死という不幸対幸せな結末などが挙げられる。

また「雀報恩事」の季節は全体的に春を中心とするが、韓国は「三月三日」「九月九日」とあり、おそらく年中行事との関わりを示す時期が設定されたと考えられる。

さらに、この昔話の注目すべき大きな相違点は瓢から出た物の違いであろう。瓢から物が出て来て、善人には

福を悪人には罰が当たるといふ結果は変わらないが、日本・韓国の各話の伝承地、または語り手によって瓢から出たものには、大きな変化があるということが分かる。

韓国昔話の場合、ほとんどの事例では、瓢の種とあるが、日本昔話の場合は前述したように、各伝承地によって、ひょうたん、すいか、カボチャなどの異同が見られる。結末については、「雀報恩事」の場合は反省する機会も与えられず、悪人は刺し殺されるが、「フンブ伝」の類話の場合は、悪人であるノルブは悪行を反省し、弟とともに幸せになるといふハッピーエンドである。

『宇治拾遺』『雀報恩事』が文献化された一三世紀頃、日本と韓国はともに農耕生活を中心とする社会であったとされる。特に日本には平安中期以降の荘園制が始まり、米を租税として払う年貢制度があり、その制度は江戸時代まで続く。権力の中心である領主（武士）たちにとって、米は経済的基礎であった。つまり、米は食料だけでなく、金銭の代わりとされ、その米の大事さが話の内容にも表れたと考えられる。登場人物の対立関係において、日本は、特に隣の人との対立関係に関する話、つまり「隣の爺」型が活性力をもったことが想像できる。それは当時の京都における日本人の隣への高い関心と、人間関係の中で、隣との関係が重要であったこの時代の社会的特徴とつながりがあると考えられる。

一方、韓国は昔から財産を長子に継続する長子相続制度があり、長子は先祖への祭祀などを行った。つまり先祖を崇拝する儒教思想との関わりがあると考えられるが、そこから財産をめぐる兄弟間の争いが推測され、兄弟対立系の話が発達した原因の一つになったのではないだろうか。

さらに、廣田收氏は「『宇治拾遺』における儒教的なもの」と離反は、古代律令を支える基本的な思想である儒教が、判断や行動の拠りどころとして重視されなくなっていたことを意味する<sup>(11)</sup>と、『宇治拾遺』の編者の思想が儒教とは離れていたことを指摘する。

一方、韓国の場合「フンブ伝」が文献化された一八世紀頃の朝鮮社会は、儒教を基本思想とし、民間信仰の扱



いであつたとされる。当時、両班と平民という厳しい身分社会制度であつた平民において、膳をすれば福が訪れるというといった、瓢から宝物が出てくるというモチーフは現実から抜け出そうとする願いが表れたものでもあ  
るだろう。

このように、両国の家族制度や財産の分配などをめぐる社会制度と構造の相違いから、日本では隣との対立型が、韓国では兄弟対立型の話型が発達されたと考えられる。つまり、昔話の変化に社会制度・生活様式などが大きな影響を与えていることであろう。

#### 注

(1) 長野嘗一『説話文学辞典』東京堂出版、一九六九年。

(2) 渡邊網也・西尾光一「宇治拾遺物語解説」『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九七二年、一九頁。

(3) 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』有精堂出版、一九七〇年、三二頁。

(4) 注(3)に同じ。

(5) 注(2)に同じ、三〇三頁。

(6) 大島建彦「『宇治拾遺物語』と昔話」説話文学会編『説話文学研究』第一二号、一九八〇年、五四頁。

(7) 稲田浩二「兄弟譚と隣の爺譚一考」京都女子大学国文学会編『女子大国文』第八三号、京都女子大学国文学会、一九七八年、一七頁。「兄弟譚と隣の爺譚」稲田浩二『昔話の時代』筑摩書房、一九八五年。

(8) 注(2)に同じ、一九〇二四頁。確かな『宇治拾遺物語』成立時期については、様々な議論があるというところから、本論においては『日本古典文学大系』の論を根拠とする。

(9) 佐々木孝二「中世説話における爺媪の語り―物羨みの教訓をめぐって―」日本文学協会『日本文学』第三

九卷第二号、一九九〇年。

(10) 注(6)に同じ／野村純一『日本昔話研究集成5 昔話と文学』名著出版、一九八四年。

さらに、『日本文学鑑賞辞典』には、「今日幼童といえども心得ている有名な民話の原型で、しかも文献に見える最初のものである。このジャンルは後世の「お伽草子」によっていちじるしく発展したものが、時と所とをえらばず、人の口から口へとあまねく全国を遊行したものである」と、ある。

(11) 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年。

(12) 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、二〇〇三年。

(13) 崔仁鶴「韓国のイェンナル・イヤギ(昔話)」君島久子『日本基層文化の探求 日本民間伝承源流』小学館、一九八九年、一八二頁。

(14) 「フンブとノルブ」の類話の場合、形式や異本系統により、「興夫伝」「興甫歌」「フンブ伝」「ノルブ伝」など、様々な呼び方があるため、本論における韓国昔話類話の総称として、漢字は使わずに、説話や民譚形式によくみられる名であることを根拠とし、「フンブ伝」と称する(ただし、作品題名は除く)。

(15) 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。

(16) 柳田国男『日本昔話名彙』日本放送出版協会、一九七一年、一三五頁。

(17) 関敬吾『日本昔話集成 第四卷 本格昔話第二部の2』角川書店、一九五八年、七二九頁。

(18) 関敬吾『日本昔話大成 本格昔話三』第四卷、角川書店、一九七八年、二四九頁。

(19) 滝沢馬琴「燕石雑誌」『日本随筆大成』第二期一九卷、吉川弘文館、一九七五年。

(20) 田中梅吉「興夫伝について」『朝鮮説話文学 興夫伝』大阪屋号書店、一九二九年、一三頁。

(21) 松村武雄『世界童話大系 日本童話集』世界童話大系刊行会、一九二四年。

(22) 柳田国男『桃太郎の誕生』三省堂、一九四〇年、二〇七頁。

- (23) 関敬吾『日本昔話集成 第四卷 本格昔話三』角川書店、一九七八年、二四八頁。
- (24) 八束周吉『韓国古典文学全集』東京大陸書房、一九七一年、五五三～五五四頁。
- (25) 注(11)に同じ、五七七～五七八頁。
- (26) 稲田浩二『〔縮製版〕日本昔話事典』弘文堂、一九九四年、三三五頁。
- (27) 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東亜之光』七卷一一号、一九一二年（『増訂日本神話伝説の研究 2』平凡社、一九七四年、二五一～二五二頁）。
- (28) 注(27)に同じ、二五～五二頁。
- (29) 大島建彦・稲田浩二『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年、三三五頁。
- (30) 志村有弘『日本説話伝説大事典』勉誠出版、二〇〇〇年、五〇四頁。
- (31) 鳥居きみ子「腰折れ燕」『アジア学叢書225 土俗上より観たる蒙古2』六文館、一九二七年、一〇九五頁（再び、『旅と伝説』「蒙古の童話に就いて―「脚折れ雀」―」一〇〇〇号、三元社、一九三六年四月）。
- (32) 崔仁鶴『韓日昔話の比較研究』三弥井書店、初版一九七八年、二五三～二五四頁。
- (33) 小峯和明『宇治拾遺物語の表現時空』まんぼう社、一九九九年、二一七頁。
- (34) 小峯和明「宇治拾遺物語と昔話―隣の爺型を読む―」『中世文学研究叢書10 宇治拾遺物語の表現時空』若草書房、一九九九年。
- (35) 三木紀人「無名人への眼―「女二人」の物語―」『国文学 解釈と教材の研究』巻二九第九号、学燈社 一九八四年、九一頁。
- (36) 田畑英勝「雀の恩返し」『全国昔話資料集成15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七六年。
- (37) 注(35)に同じ、九一頁。

- (38) 注(15)に同じ。
- (39) 石井正己「『宇治拾遺物語』に見る昔話の倫理」『絵と語りから物語を読む』大修館書店、一九九七年、七〇頁。
- (40) 氏家千恵「『宇治拾遺物語』隣の婆の話」東北大学国文学研究室編『日本文芸の潮流』一九九四年。
- (41) 廣田收「『雀報恩事』考」『『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年。
- (42) 注(12)に同じ。
- (43) 注(15)に同じ。
- (44) 小峯和明「宇治拾遺物語と昔話―隣の爺型を読む―」『説話と思想・社会』桜楓社、一九八七年。
- (45) 注(15)に同じ。
- (46) 小林保治「雀、報恩の事」『月刊国語教育』第一一巻一〇号、東京法令出版、一九九一年一月。
- (47) 注(41)に同じ。
- (48) 印権煥「興夫伝の説話的考察―根源説話の探索と小説化過程を中心に―」高麗大学国語国文学研究会編『語文論集』一六巻、一九七五年。
- (49) 『西陽雜俎 続集卷一』「支諾臯上 鬼神妖怪の記録拾遺 上」に新羅の話として載せられるほか、『太平御覽 卷四一』、『東史綱目附卷』「怪説辯證 旁証條」に収録されている。
- (50) 今村与志雄『東洋文庫401 西陽雜俎卷四』平凡社、一九八一年、三四頁。
- (51) 崔南善「蒙古のフンプ・ノルブ」『東明』三号、一九二二年。
- (52) 金台俊『朝鮮小説史』安宇植訳注、平凡社、一九七五年、一六四頁。
- (53) 孫晋泰『朝鮮民族説話の研究』朝鮮文化叢書第一集、乙酉文化社、一九四七年。
- (54) 邊恩田「東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮―巫歌「成造プリ」の縁起説話をめぐって」

『同志社国文学』第六一号、二〇〇四年一月。

(55) 注(46)に同じ。

(56) 鳥居きみ子「腰折れ燕」『アジア学叢書225 土俗上より観たる蒙古2』六文館、一九二七年、一〇九五頁。

邊恩田氏は論文「東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮—巫歌「成造プリ」の縁起説話をめぐって」において、「腰折れ燕」から「脚折れ雀」と、「腰」が「脚」に改まっていることを指摘し、「周知の如く本話の場合、「腰」（日本に多いケース）か「脚」（朝鮮に多いケース）かの差は大きいので、この点が不明瞭である。翻訳が「脚」に訂正されたものとするならば、鳥居氏採録のモンゴルの話は朝鮮半島の話にさらに近似することになる」と述べている（『同志社国文学』第六一号、二〇〇四年一二月）。

(57) 張徳順「興夫伝研究」『国語国文学』第一三巻、国語国文学会、一九五五年。

(58) 韓国精神文化研究院『韓国口碑文学大系7-1 慶尚北道慶州市・月城篇(1)』一九八〇年。

(59) 韓国精神文化研究院『韓国口碑文学大系2-1 江原道江陵市・溟州郡篇』一九八〇年。

(60) 千二斗「韓国のパンソリと日本の語りもの」『同志社国文学』第五二号、二〇〇〇年三月。

(61) 崔仁鶴「ホンブとノルブ」（「語り手・林鳳順(五〇歳)慶尚北道金泉市、一九六〇年、編者採集」）『朝鮮昔話百撰』日本放送出版協会、一九七四年、一九三頁。

(62) 注(20)に同じ。

(63) 八束周吉・洪相圭訳『韓国古典文学全集』東京大陸書房、一九七一年。

(64) 崔仁鶴「ホンブとノルブ」『朝鮮昔話百撰』日本放送出版協会、一九七四年、一九三頁。

韓国版は、「フンブとノルブ」崔仁鶴共編『韓国伝来童話全集3 木こりと仙女』（全五冊、章原社、一九七〇年）とある。調べたところ、韓国版原文では、日本語訳「ホンブとノルブ」とは違い、「フンブ

とノルブ」と、弟の名が「フンブ」となっていた。日本語版「ホンブとノルブ」本文の中、ホンブに当てられた漢字「興夫」の場合、実際韓国語で読むと「ホンブ」よりは「フンブ」のほうが近い。内容に関して、日本語版「ホンブとノルブ」では、主人公の性格表現や日常生活に関する内容が短い。例えば、日本語版では、「むかし」とあるが、韓国版では「むかし、慶尚道のある村に」と、具体的な地名が示されているほか、兄である、ノルブの欲深い性格や、苦しい弟の生活が詳しく表現されるなど、日本語版は内容が大きく省略されていることが確認できた。

(65) 「一四七 こしおりツバメ」水沢謙一『おばばの昔ばなし―池田チセの語る百五十四話―』野島出版、一九七三年、二九二頁。

(66) 関敬吾『日本昔話集 第二部の2』角川書店、一九七三年、四八七頁。

(67) 崔仁鶴「韓日昔話の比較―狗耕田譚と花咲翁を中心に―」『東アジア民族説話の比較研究』桜楓社、一九七八年、九一頁。

(68) 小澤俊夫「昔話にみられる隣モテイ―フ―日本」川田順造・徳丸吉彦『口頭伝承の比較研究1』弘文堂、一九八四年、二四九―二五〇頁。

(69) 稲田浩二「兄弟譚と隣の爺譚一考」京都女子大学国文学会編『女子大國文』第八三号、京都女子大学国文学会、一九七八年、一七頁／「兄弟譚と隣の爺譚」稲田浩二『昔話の時代』筑摩書房、一九八五年、二三一頁。

(70) 注(69)に同じ、二頁。

(71) 注(69)に同じ、二一頁。

(72) 注(33)に同じ、二一七頁。

(73) 川森博司『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会、二〇〇〇年、一三四―一三五頁。

- (74) 注(73)に同じ、二五〇頁。
- (75) 「141 燕とかぼちや種」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第九卷 茨城・埼玉・千葉・東京・神川』同朋舎出版、一九八八年、二五七頁。
- (76) 村岡浅夫「四〇 腰おれ雀」『全国昔話資料集成 14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七一年一〇二頁。
- (77) 注(11)に同じ、五七七〜五七八頁。
- (78) 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東亜之光』第七卷一一号、一九一二年（『増補 日本神話伝説の研究 2』平凡社、一九七四年、二五一頁）。
- (79) 下中直也『世界大百科事典一五』平凡社、一九八八年。
- (80) 注(79)に同じ。
- (81) ①「雀のふくべん」『佐藤家の昔話』、②「腰折れ雀」類話1、稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第7卷 福島』、③「燕のくれた瓢箪」『日本の昔話 18 備後の昔話』
- (82) 「92 腰折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第16卷 兵庫』同朋舎出版、一九七八年、一九一頁。
- (83) 「二五 腰折れ雀」鈴木棠三『全国昔話資料集成 20 武庫川越昔話集』岩崎美術社、一九七五年。
- (84) 阿部通良・後藤貞夫・鈴木清美「一二 米のなる瓢」『全国昔話資料集成 17 大分昔話集』岩崎美術社、一九七五年、二九頁。
- (85) 「六八 雀の恩返し」田畑英勝『全国昔話資料集成 15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三七頁。
- (86) 「181 羽折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第13卷 岐阜・静岡』同朋舎出版、一九八〇年、三一八頁。

- (87) 「105 腰折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第14巻 京都』同朋舎出版、一九七七年、二六〇頁。
- (88) 「106 腰折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第14巻 京都』同朋舎出版、一九七九年、二六二頁。
- (89) 「118 足折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第23巻 福岡・佐賀・大分』同朋舎出版、一九八〇年、二二三頁。
- (90) 1. 「つばめの足」小澤俊夫編訳『世界の民話9 アジア1』ぎょうせい、一九七六年／m. 「カボチヤの種」金素雲『ネギをうえた人』岩波少年文庫、一九五三年。
- (91) 村岡浅夫「四〇 腰おれ雀」『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七六年、一〇二頁。
- (92) 京都府総合資料館「燕と種」『丹後伊根の昔話』白川書院、一九七三年、稲田浩二・小澤俊夫「燕とかぼちやの種」『日本昔話通観 第9巻 茨城・埼玉・千葉・東京』同朋舎出版、一九八八年、二六〇頁。
- (93) 稲田浩二・小澤俊夫「腰折れ雀」『日本昔話通観 卷16 兵庫』同朋舎出版、一九一頁。
- (94) 立石憲利・山根英佐恵「つばめの報恩」『日本の昔話14 出雲の昔話』日本放送出版協会、一九七六年、五〇頁。
- (95) 稲田浩二・小澤俊夫「腰折れ雀」『日本の昔話1 若狭の昔話』日本放送出版協会、一九七二年、四九頁。注によると、「腰折れ雀」と「舌切り雀」が融合していると、ある。
- (96) 野添憲治「二三 腰のみやげ」『全国昔話資料集成28 阿仁昔話集』岩崎美術社、一九七八年、七三頁。
- (97) 注(6)に同じ、五五〜五六頁。
- (98) 注(41)に同じ、二八八〜二九一頁。
- (99) 注(6)に同じ。



- (100) ① 「233 宝瓢箪」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第4巻 宮城』同朋舎出版、一九八二年、三六四頁。
- ② 「187 雀の恩返し」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第6巻 山形』同朋舎出版、一九八六年、三三七頁。
- ③ 「131 雀のふくべん」武田正『佐藤家の昔話』桜楓社、一九八二年、二二四頁。
- ④ 「すずめのひょうたん」武田正『日本の昔話 4 羽前の昔話』日本放送出版協会、一九七三年、四九頁  
／「29 雀のヒョウタン」武田正『牛方と山姥―海老名ちやう昔話集―』海老名正二出版、一九七〇年、二二〇頁／「舌切り雀（類話1）」武田正『昔話研究資料叢書 10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二七頁。
- ⑤ 「六三 腰折れ雀」佐藤義則『全国昔話資料集成 1 羽前小国昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一三二頁。
- ⑥ 「208 腰折れ雀（類話1）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋舎出版、一九八五年、四二九頁。
- ⑦ 「三一 腰折れ雀」鈴木棠三『日本民俗誌大系 第8巻 川越地方昔話集』角川書店、一九七五年、二五六頁／「二五 腰折れ雀」鈴木棠三『全国昔話資料集成 20 武蔵川越昔話集』岩崎美術社、一九七五年、九九頁。
- ⑧ 「一四七・こしおりツバメ」水沢謙一『おばばの昔ばなし―池田チセ（75才）の語る百五十四話―』野島出版、一九七三年、二九二頁。
- ⑨ 「六〇・スズメのひょうたん」同右、一四七頁。
- ⑩ 「188 足折れ雀（類話1）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第10巻 新潟』同朋舎出版、一九八四

年、三九〇頁。

- ⑪ 「スズメのくれた瓢箪」水沢謙一『雪国のおばばの昔』講談社、一九七四年、二二〇頁。
- ⑫ 「雀の恩送り」水沢謙一『日本の昔話 8 越後の昔話』日本放送出版協会、一九七四年、二六八頁。
- ⑬ 「一九一・スズメのくれたヒョウタン」水沢謙一『雪国の夜語り―越後の昔ばなし―』野島出版、一九六八年、六一八頁。
- ⑭ 「雀の恩返し」小澤俊夫・福原登美子共編『日本の民話 5 甲信越』ぎょうせい、一九七九年、一七八頁。
- ⑮ 「雀のひょうたん」笠井典子『日本の昔話 6 近江の昔話』日本放送出版協会、一九七三年、一〇五頁。
- ⑯ 「雀のひょうたん」笠井典子『日本の昔話 17 浪渌の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、二一五頁。
- ⑰ 「足折れ雀」柴田浩二・山口実・山内靖子『日本の昔話 12 東瀬戸内の昔話』日本放送出版協会、一九七五年、五一頁。
- ⑱ 「腰折れ雀」民間伝承の会「邑智郡昔話」『昔話研究』第二卷一二、一九三七年、三四頁。
- ⑲ 「六五 腰折れ雀」小島瑩禮『全国昔話資料集成 35 武相昔話集』岩崎美術社、一九七五年、九九頁。
- ⑳ 「腰おり雀」関敬吾『桃太郎・舌切り雀・花咲き爺』岩波書店、一九五六年、一七五頁。
- ㉑ 「雀のひょうたん」柳田浩二『日本の民話 10 四国』ぎょうせい、一九七九年、一三四頁。
- ㉒ 「五一 羽無し雀」磯貝勇『全国昔話資料集成 5 安芸国昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一一〇頁。
- ㉓ 「腰折れ雀」前田東雄・立石憲利『日本昔話 9 美作の昔話』日本放送出版協会、一九七四年、二六〇頁。
- ㉔ 「腰折れ雀」岡節三・細見正三郎『日本の昔話 21 丹後の昔話』日本放送出版協会、一九七八年、四四頁。
- ㉕ 「燕のくれた瓢箪」稲田和子・高田雅之・新宅全美『日本の昔話 18 備後の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、一五七頁。
- ⑳ 「腰折れ雀」稲田浩二・稲田和子『日本昔話百選』三省堂、一九七一年、三九五頁。

- ②⑦ 「65 腰折れ雀（類話1）」立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』三弥井書店、一九七三年、二五頁。
- ②⑧ 「六八 雀の恩返し」田畑秀勝『全国昔話資料集成15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三七頁。
- ②⑨ 「65 腰折れ雀」稲田源浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』三弥井書店、一九七三年、二五六頁。
- ③⑩ 「106 腰折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第19巻 岡山』同朋舎出版、一九七九年、二六二頁。
- ③⑪ 「128 足折れ雀（類話1）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第20巻 広島・山口』同朋舎出版、一九七九年、三三八頁。
- ③⑫ 「けが雀（原題・腰折れ雀）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第22巻 愛媛』同朋舎出版、一九七九年、三〇一頁。
- ③⑬ 「足折れ雀」金沢敦子・中島忠雄・山中耕作『日本の民話11 九州（一）』ぎょうせい、一九七九年、一五九頁。
- ③⑭ 「四八 米の生る瓢」鈴木清美「速見郡昔話」『旅と伝説』通巻八四号、一九三四年一二月、三元社／「一二米のなる瓢」阿部通良・後藤貞夫・鈴木清美『全国昔話資料集成17 大分昔話集』岩崎美術社、一九七五年、二九頁。
- ③⑮ 「一二六・慾張り婆さんと雀の話1」『全国昔話資料集成11 福岡昔話集（原題―福岡県童話）』岩崎美術社、一九七五年、一四一頁。
- ③⑯ 「一二七・慾張り婆さんと雀の話2」同右、一四三頁。
- ③⑰ 「へうたんの種」野口隆「佐賀昔話」『昔話研究』第二巻七号、一九三七年、三四頁。

- ③⑧ 「雀報恩」丸山学「鹿本郡昔話」民間伝承の会『昔話研究』第二卷八号、四五頁。
- ③⑨ 「腰折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本の昔話1 若狭の昔話』日本放送出版協会、一九七二年、四九頁。
- ④⑩ 「つばめの報恩」立石憲利・山根英佐恵『日本の昔話14 出雲の昔話』日本放送出版協会、一九七六年、五〇頁。
- ④⑪ 「18」羽折れ雀」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第13巻 岐阜・静岡』同朋舎出版、一九八〇年、三一八頁／「雀の恩返し」静岡県女子師範学校郷土研究会『静岡県伝説昔話集』長倉書院、一九七五年、四五三頁。
- ④⑫ 「128 足折れ雀（類話2）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第20巻 広島・山口』同朋舎出版、一九七九年、三三九頁。
- ④⑬ 「雀の恩返し」昔話研究懇話会『昔話―研究と資料―』第四号、三弥井書店、一九七七年、一九五頁。
- ④⑭ 「燕の恩返し」岩瀬博・太田東雄・箱山貴太郎『日本の昔話29 信濃の昔話』日本放送出版協会、一九八〇年、一二〇頁。
- ④⑮ 「尾ば切り雀（類話資料）」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、三〇二頁。
- ④⑯ 「118 足折れ雀（類話2）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第23巻 福岡・佐賀・大分』同朋舎出版、一九八〇年、二二六頁。
- ④⑰ 「208 腰折れ雀（原題・腰折り雀）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第7巻 福島』同朋舎出版、一九八五年、四二九頁。
- ④⑱ 「105 腰折れ雀（類話4）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第19巻 岡山』同朋舎出版、一九七九年、二六二頁。
- ④⑲ 「150 雀と瓢箪」磯貝勇『全国昔話資料集成5 安芸国昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一〇九頁。

⑤〇 「281 傷つき雀」 足折れ雀 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第26巻 沖縄』同朋舎出版、一九八三年、五九五頁。

⑤1 「腰折れ雀」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第16巻 兵庫』同朋舎出版、一九七八年、一九一頁。

⑤2 「舌折り雀（類話1）」 稲田源浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書 8 奥備中の昔話』三弥井書店、一九七三年、二五六頁。

⑤3 「二三 腰のみやげ」 野添憲治『全国昔話資料集成 28 阿仁昔話集』岩崎美術社、一九七八年、七三頁。

⑤4 「四〇 腰おれ雀」 村岡浅夫『全国昔話資料集成 14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七六年、一〇二頁。

⑤5 「66 燕と種」 京都府総合資料館『丹後伊根の昔話』白川書院、一九七二年、一五七頁。

⑤6 「101 邊恩田」「フンプ伝」の伝本系統と日本語訳本について『同志社国文学』第六二号、二〇〇五年三月。

（102）【表3】韓国昔話「フンプ伝」類話事例一覧表

（瓢の実の数のほかに、贈り物から出てきたものに付けた数字は、一つ目・二つ目と、瓢の実の順番を表す）

話	
前半（善役の瓢から出てきたもの）	後半（悪役の瓢から出てきたもの）
<p>a</p> <p>個 4</p> <p>1. 5つの瓶</p> <p>2. 木材や石材 他を建てるときに必要な物</p> <p>3. 大工</p> <p>4. 穀物・金銀</p>	<p>個 11</p> <p>1. 加那婆引く奴</p> <p>2. 僧</p> <p>3. 悪徳を働いた者</p> <p>4. 巫女</p> <p>5. 毒物類なる毒く鏡を持った者</p> <p>6. 大男</p> <p>7. 10. 悪徳</p> <p>11. 葉の川</p>

話	
前半（善役の瓢から出てきたもの）	後半（悪役の瓢から出てきたもの）
<p>b</p> <p>個 4</p> <p>1. 5つの瓶</p> <p>2. 木材や石材 他を建てるときに必要な物</p> <p>3. 大工</p> <p>4. 穀物・金銀</p>	<p>c</p> <p>数 4</p> <p>1. 青衣を穿たぬ童子（色々の仙悪）</p> <p>2. 家財道具</p> <p>3. 穀物（五種類）、衣服</p> <p>4. 大工</p>
<p>d</p> <p>個 4</p> <p>1. 仙童（5つの瓶）</p> <p>2. 木材や石材</p> <p>3. 大工 穀物 金 絹布綾羅</p> <p>4. 美人</p>	<p>個 10</p> <p>1. 琴を引く者</p> <p>2. 老僧</p> <p>3. 喪人</p> <p>4. 毒物類を持った者</p> <p>5. 不浪者</p> <p>6. なし</p> <p>7. 盲人</p> <p>8. 9. お金を取った者</p> <p>10. 大便 小便</p>

i	h	g	F	e
個 5 1. 白果 2. 金銀 3. 仙女 4. 魔法の赤い瓶(木工) 5. 魔法の青い瓶(木材)	個 5 1. 白果 2. お金 3. 仙女 4. 赤い瓶(木工) 5. 青い瓶(木材)	個 7 1. 上品材木 2. 大工 3. 家財道具 4. 男女の下人(儀) 5. 色々な布 6. 金銀宝物 7. 穀物(五種類)	個 4 1. 青衣の童子(仙菜・死人を生かす回し、若帰りができ、百言、睡魔が治る妙薬) 2. 家の中で使う全ての物 3. 穀物・宝 4. 大工、手伝いする男・女	個 4 1. 青衣袋の童子(5つの瓶) 2. 穀物 3. 大工、綾絹、宝石、木と石
個 10 1. 悪魔 2. 10. お水、土砂、風	個 1 1. 糞 2. 魔鬼	個 10 1. 教百人の役者 2. 飯面をかぶった道化役者 3. 乞人・体不自由な者 4. 財宝を盗む物 最後、強盗たち	個 11 1. 伽耶琴引く者 2. 老僧 3. 喪人 4. 巫女 5. 障子籠を持った二万以上に人 6. 道化役者(チヨラ)一千人 7. 阿班一千名乗り 8. 怪法師一万人 9. 悪戯者一万人 10. 百鬼一万人 11. 振飛將軍 12. 豆そうな汁 13. 臭い限りの汁	個 11 1. 琴を引く女 2. 坊主 3. 裏腹を暴た男 4. 巫女 5. 瑤池姫を持った者 6. 大男 11. 糞と小便

p	o	n	m	l	k	j	i
個 3 1. 小判 2. 黄金の延べ棒 3. 珠玉	個 4 1. 黄金 2. 眞珠 3. お金 4. 米	個 3 1. 大工、材木 2. 下人・くわ(鋸・すき・鋸)・かま(鎌)を持った農民、下女 3. 金銀宝貨	個 3 1. 大工、材木 2. すき・くわ・かま・針を持った石使い 3. 金銀	個 5 1. 米 2. お金 3. 妖精 4. 魔法の赤い瓶(織人・家を作る) 5. 魔法の青い瓶(木材と色)	個 5 1. 金銀 2. 米 3. うす絹やねり絹など織物 4. 大工(五人) 5. 美人	個 5 1. 米 2. お金 3. 仙女 4. 魔法の赤い瓶(木工) 5. 魔法の青い瓶(木材)	個 5 1. 白果 2. 金銀 3. 仙女 4. 魔法の赤い瓶(木工) 5. 魔法の青い瓶(木材)
個 3 1. 人糞 2. 鬼 3. 火の粉	個 数 1. 大ムカデ 2. 糞 3. スズメ鉢 4. 毒蛇	個 3 1. 鬼 2. 借金取り 3. 泥	個 3 1. 大勢の鬼 2. 借金取り 3. 泥	個 10 1. 10. 妖怪	個 5 1. 5・6人の大男 2. 坊主 3. 葬式の行列 4. ウジ虫 5. 糞	個 3 1. トケビ 2. 借金取り 3. 臭くて汚れた水	個 10 1. 悪魔 2. 10. お水、土砂、風

(太字で表した題名は日本語訳本を表し、日本語に翻訳紹介されていない韓国の事例は、私に日本語で題名を付した)。

- a. 「興夫伝」高橋亨『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年、五六〜六三頁。
- b. 「燕の御礼」榎本秋村『世界童話集―東洋の巻―朝鮮童話』実業之日本社、一九一八年、二九〜三八頁。
- c. 「足折燕」三輪環『伝説の朝鮮』博文館、一九一九年、二八三〜二八八頁。
- d. 「燕の恩返し 変った兄弟」山崎日城『朝鮮の奇談と伝説』ウツボヤ書房、一九二〇年、一七三〜一七六頁。
- e. 「一八 足折燕」松村武雄『世界童話大系 朝鮮童話集』第四卷、世界童話大系刊行、一九二三年、七六八〜七七二頁。
- f. 「二五 怒夫と興夫」朝鮮総督府『朝鮮民俗資料第二編 朝鮮童話集』朝鮮総督府刊行、一九二四年、一六五〜一八〇頁。
- g. 「三〇・怒夫(ノルブ)と興夫」沈宜麟『朝鮮童話大集』漢城図書、一九二六年、一四二〜一四六頁。
- h. 「フンブとノルブ」李元寿『伝来童話集』現代社、一九六三年、四二五〜四四六頁。
- i. 「フンブとノルブ」崔仁鶴共編『韓国伝来童話全集Ⅲ』章原社、一九七〇年、一四三〜一五八頁。
- j. 「ホンブとノルブ」崔仁鶴『朝鮮昔話百撰』(慶尚北道金泉市、一九六〇年採集)日本放送出版協会、一九七四年、一九三〜一九七頁。
- k. 「ホンブとノルブ」依田千百子・中西正樹『金徳順昔話集―中国朝鮮族民間故事集―』三弥井書店、一九九四年、一〇〇〜一二七頁。
- l. 「つばめの足」小澤俊夫編訳『世界の民話9 アジア1』ぎょうせい、一九七六年。
- m. 「カボチャの種」金素雲『ネギをうえた人』岩波少年文庫71、岩波書店、一九五三年、一三二頁。

- n. 「燕と瓢の種」李相魯『韓国伝来童話読本』乙酉文化社、一九六二年、二四七〜二五三頁。
- o. 「怒夫と興夫」朴英晩『朝鮮伝来童話集』学芸社、一九四〇年、一〇七〜一一五頁。
- p. 「ホンブとノルブ」朴榮濬『韓国の民話と伝説1 古代編』韓国文化図書出版社、一九七五年、三一六〜三二〇頁。
- (103) 注(20)に同じ。
- (104) 邊恩田「昔話「腰折れ雀」とパンソリ「興甫歌—大工の家建てをめぐって—」説話・伝承学会編『説話・伝承学』一九九九年四月。
- (105) 注(104)に同じ、三二二頁。
- (106) 注(29)に同じ、三二二頁。
- (107) 鄭忠権『興夫伝研究』図書出版ウォリン、二〇〇三年、二九七頁。
- (108) 白田甚五郎・崔仁鶴「韓日昔話の比較—狗耕田譚と花咲爺を中心に—」『東アジア民族説話の比較研究』桜楓社、一九七八年、九〇頁。
- (109) 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七五年、一六一頁。
- (100) 注(15)に同じ、一〇一〜一〇二頁。
- (101) 廣田收「『宇治拾遺物語』の思想—末尾話冒頭話をめぐって—」『同志社国文学』第五三号、二〇〇〇年一二月。



## 第二章 『宇治拾遺物語』 第三話と昔話「瘤取爺」類話

— 韓国昔話「瘤取爺」を対照させて読む —

### はじめに

『宇治拾遺』は、鎌倉初期に成立した世俗説話集である。総数一九七の説話の中に、いわゆる「隣爺型」の説話は、第三話「鬼に瘤取らるゝ事」、第四八話「雀報恩事」と、二つが載せられている。後者についての考察に続き、本論は第三話について検討したい。

『大成』によると、「瘤取爺」類型の話の「モチーフはギリシャ時代にまで遡る」ことができると、「年次はかならずしも明確ではないにしても、アイルランド・イタリーでは十七世紀の記録に見える。十四世紀初期にカIROのアラビア人の記録がある」と説明している。その他、「グリムの「小人の贈り物」(一八二)や、トルコ・インド・中国・朝鮮などに分布すると報告している。

さらに、日本の文献としては、古くから『五常内義抄』第一四話に載せられて、江戸時代初期には、安楽庵策伝『醒睡笑』の巻一と巻六、『嬉遊笑覧』「或問附録」、ほか、狂言「宝瘤取」などにも類話がみられる。

中国文献では、『産語』『笑林評』に類似する話が載せられているなど、昔話「瘤取爺」の話型は汎世界的な広がりを持っている。(補注211)

本稿は、『宇治拾遺』第三話を考察するにあたって、日本昔話「瘤取爺」のみならず、新たに韓国昔話を対照させることによって、両国の類話の相違点と表現の特徴について考察を試みたい。

### 第一節 『宇治拾遺物語』 第三話及び日本昔話「瘤取爺」類型の構成と特徴

## 一、日本昔話における「瘤取爺」類型の分類

『宇治拾遺』の研究史からみると、例えば『新大系』「類話一覧」が示しているように、第三話には、表現や構成において一致する同話(1)はなく、同話(2)として鎌倉時代の『五常内義抄』だけが指摘されている。つまり第三話は従来、比較に適した類似の事例の少ない説話とされてきた。ほか、昔話の存在については『大成』一九四「瘤取爺他」が指摘するのみである。<sup>(2)</sup>つまり、昔話との比較研究は、説話文学研究の領域では未開拓の分野であるといえる。

中島悦次氏は、研究史上、初めて中国『産語』を取り上げ、『宇治拾遺』第三話と同じような話があることを指摘した。中島氏は、神谷正明の論文を取り上げ、『産語』とは「戦国末から秦代にかけての著作」だとされる古書であることから、「瘤取」説話の最も古い採録であると述べている。<sup>(4)</sup>その他、比較考察としては、松村武雄(日韓比較考察<sup>(5)</sup>)、竹原威滋(中国やヨーロッパの話、グリム童話・中東・南アジアの類話との比較<sup>(6)</sup>)などの先行研究が行われている。<sup>(補注2・1・2)</sup>

それでは、昔話「瘤取爺」から『宇治拾遺』第三話にどのように迫ることができるのであろうか。

大島建彦氏は、日本各地に分布する「瘤取爺」一六〇余の事例を集めて考察した上で、「ほぼ一定の型がひろく伝えられており、『宇治拾遺』などの記録とも、かなり一致を示している」とまとめている。<sup>(7)</sup>とはいえ、昔話と『宇治拾遺』との関係は、そう簡単ではない。

すでに『名彙』では、完成昔話の「動物の援助」<sup>(8)</sup>に、『集成』<sup>(9)</sup>と『大成』<sup>(10)</sup>では、本格昔話三「隣の爺」に「一九四 瘤取爺」と、分類されている。さらに『通観』<sup>(11)</sup>では、「隣の爺」型のうちに、「鬼の楽土型」・「鼠の楽土型」・「地藏浄土型」・「異郷訪問型」という亜型が示されている。

そこで、私に「瘤取爺」の採録事例を集積したものが【表1】(日本昔話「瘤取爺」類話一覧表)<sup>(添付資料)</sup>である。日本昔話「瘤取爺」類話の多くが「隣の爺」の話型に属する。この話型では、山に柴刈りに行く亜型と、

瘤がなくなるよう神靈に祈願する巫型（【表1】の、1、5、12、19、23、24、27、30、42、47、56、75、110番事例など）がみられる。祈る対象としては（山の）神（明）様、薬師様、（清水の）観音様、お不動、裏山の地藏、山王様、山の者などが確認できる。

『宇治拾遺』第三話と昔話との関係については、かつて中島悦次氏が「この話は多分当時民間に語られていた話を記録したもの<sup>12</sup>と述べている。だが、第三話を、単純に昔話をそのまま記録したものだと認めることは難しい。なぜならば『宇治拾遺』の説話において、昔話に何が書き加えられたのか、何が書き換えられたのかを明らかにする必要がある。また、大島建彦氏は第三話の注釈において、「瘤取爺」の昔話に当たるものである」と慎重に述べて、昔話と説話とが「型」において同じであると言っている<sup>13</sup>。ただ、その後『宇治拾遺』の注釈においては、昔話と説話との同一性ばかりが強調され、両者の相違はほとんど問われなかった。

そのような中で、周知のこの日本昔話を対照させることよって、『宇治拾遺』第三話は「横座」を中心に構成される平安貴族の饗宴や、時代に流行した「一庭を走まはり舞ふ」猿楽が描き加えられていることがすでに明らかにされている<sup>14</sup>。そこで、私は、最近まであまり紹介されなかった韓国昔話を対照させることよって、『宇治拾遺』のもつ特質を新たに明らかにしたい。

## 二、「隣の爺型」としての「瘤取爺」

『宇治拾遺』総数一九七話の中、「隣の爺型」に属する説話として、第三話「鬼に瘤取らるゝ事」と第四八話「雀報恩事」の話が取り上げられる。両話は、同じく「物羨みは、すまじき事なりとぞ」といった話末評語で終わる。

第四八話「雀報恩事」の場合、「脚の折れた雀を介抱する」前者のお婆さんと、「わざと、雀の脚を折ってから介抱する」真似したお婆さんとの、二人の行動からは、はっきりした善悪が読み取られる。ところが、第三話の場合は、主人公について、「右の顔に大なるこぶある翁」または、「隣にある翁、左の顔に大なるこぶありける」

と説明されるのみで、善人か悪人かといった倫理的な評価は認められない。そういった二つの話に、同じ話末評語で終わることについて疑問が残る。

このことは概に先行研究によって、「こぶとり爺話は本来、勸善懲悪的な要素は薄<sup>(15)</sup>い」と指摘されてきた。昔話「瘤取爺」において、主人公の性格として、善人と隣の浴深い隣人との対立関係が明らかなのは、【表1】の総数一四七の事例の中、五二の事例が確認できる。ほか、主人公について、もともと踊り（または、歌・酒）が得意か下手かしか説明されない事例も二〇の事例がみられる。実際、踊り（または、歌・酒）の上手・下手により、瘤を取られた、もしくは付けられたとある事例は、一二四話に及ぶ。

つまり、昔話「瘤取爺」では、善悪の対立関係の関与しない事例が多い。『宇治拾遺』第三話の場合も、踊りの上手・下手という対立関係がみられる。

『宇治拾遺』第三話では踊りの後、横座の鬼は、「今より此翁、かやうの御遊にかならず参れ」と、遊びに来るよう命じ、その約束の質として瘤を預かる。ところが、隣人の爺には、「こたびは、わろく舞たり。返く、わろし。そのとりたりし質のこぶ、返したべ」と言い、鬼は前者から質として預かった瘤を付けてしまう。鬼の言葉は、「敬語の表現のうちに尊大の気持ちを示して<sup>(16)</sup>」いるものであり、後者の「翁の踊りが期待はずれであったことへの憤懣から、このような下手な舞は遊宴の興をそぐもの、もはや招くには及ばない<sup>(17)</sup>」と思つた鬼が、その場から爺を早く帰らせたいという気持ちを持つと考えられる。まさに、瘤が付けられたのは、下手な踊りに対する横座の鬼からの仕打ちのようにもみえる。神谷吉行氏は、約束を守らなかった前者より、後者の方が正直で被害者だという。後の爺が「正直で悪者の烙印は気の毒だ。善悪を説くというのであれば、右瘤を預けた最初の爺の立ち居振り舞の方がはるかに巧妙だ」と評する。

すなわち「隣の爺」型の構成は、正直・親切・勤勉という美德を備えて好々爺に福分が授かる話で、その点でも「瘤取爺」の主人公の功利的な言動とは重ならない<sup>(18)</sup>と、論断されるとおりである。考えてみればもともと善悪

の結末を対照的に語ることに、この昔話の目的があるのではない。むしろ「隣爺型」は、異界の存在に触れうる資格の有無が問われている。

## 第二節 昔話「瘤取爺」に関する日韓の研究史

さて、韓国における「瘤取爺」については、古くから朝鮮中期詩文集『睡隱集』卷三「瘤戒」(補注 2-13)に類似する事例が知られている。(19)しかし、その採録は、舜首座という日本の僧侶から聞いたと、説明が付けられているため韓国固有の伝承とは言えない。

その後、韓国昔話「瘤取爺」類型の出典として、『酉陽雜俎』「旁缶説話」(もしくは、「金錐の話」「金錐説話」ともいう)(補注 2-14)が指摘されてきた。「旁缶説話」は、『酉陽雜俎 続集卷一』「支諾臯上 鬼神妖怪の記録拾遺 上」(20)、『太平御覽 卷四一』、『東史綱目附卷』「怪説弁證旁缶條」(22)などに掲載されている。

すでに、高木敏雄氏は、『酉陽雜俎』「旁缶説話」説話の発端「新羅国有第一貴族金哥」。其遠祖云々の句が、この話の本源池を暗示するとして、『宇治拾遺』第三話と「同一の起源を有している」と述べ、「朝鮮半島方面」から一方は中国大陸へと伝わり、一方は海を渡って日本へ伝わったと推測した上、『宇治拾遺』「瘤取爺」と比較して、その共通点として次のようなことを取り上げている。

1. 山中で鬼に遇うということ
2. 鬼が集まって宴を開くということ
3. 両人が同一視せられるということ
4. その人が顔面に罰を受けるということ

それに、『朝鮮の物語集附俚諺』(21)(以下、『朝鮮の物語』)に収録されている「瘤取」を取り上げ、「鬼の酒宴

のことと老翁の舞踏」のことを外すと、『宇治拾遺』「瘤取爺」と一致すると指摘している。

加えて、今村与志雄氏<sup>(25)</sup>は『酉陽雜俎 卷四』の注釈において、「鬼に瘤取らるる事」の根本らしいと古来、説かれている」とし、島津久基氏<sup>(26)</sup>も、「舞ふ代わりに美声で歌うだけの違いで、『宇治拾遺』説話に一層近い」として、『酉陽雜俎』を「同始源」もしくは「種類の説話からの変形に「打出の小槌」の形式を採る如意宝」のモチーフが含まれて来たもの」と述べている。さらに野村八良氏<sup>(27)</sup>は、「瘤取爺」話型の話の出典について、仏説『譬喻経』からの影響について述べた後、『朝鮮の物語集』「瘤取」を取り上げ、「我が国と殆んど同一の話」とし、「偶然の類似と見るよりは、同一源泉の物かも知れない」と述べたうえで、日本伝承との相違点について「瘤を似て美声の溜め所としている事や、それを鬼が老爺から買取るとしている点だ」とする。中島悦次氏は、「種々の宝物と交換したという商売気を感じさせる老爺の話に展開するが、これは支那の話も日本の話とも大分着想違っている」と述べている。さらに志田義秀氏は、『宇治拾遺』の「瘤取」と全く異曲同工のものである。彼我多少の相異はないではないが、その骨子に於いては全然同型である」と指摘している<sup>(28)</sup>。

このように概観してくると、伝播論はひとまず措くとして、諸氏が口々に指摘されている日韓昔話の同質性は、つまるところ、

・ 主人公は異界の存在によって瘤を取られる。

・ 隣人は、異界の存在から瘤を付けられる。

という枠組みに求めることができる。その上で、なぜ、どういう仕掛けによって災厄の除去（呪福の獲得）が可能になるか、という展開の契機の説明のしかたは、伝承の地域性や歴史性によって異なると捉えることができる。

さて、昔話「瘤取爺」としては、高橋亨『朝鮮の物語集』に収録された「瘤取」が初めである。そのため、韓国側の学者の中では、「瘤取爺」類話の出典について、「殖民地時期に日本から輸入された話」だとする説<sup>(30)</sup>、または「旁奄説話」など韓国固有の伝承とみる説がある<sup>(31)</sup>。

その他、主な韓国の先行研究としては、金宗大、金容儀、張貞姫などによる「瘤取爺」の類型の構造的特徴や、高橋亨『朝鮮の物語集』以来、「瘤取爺」伝承の形成に関する研究、日韓比較研究などが取り上げられる<sup>(32)</sup>。

### 第三節 韓国昔話「瘤取爺」の特質

崔仁鶴氏は、韓国昔話「瘤取爺」を分類番号「四七六 瘤取爺型」<sup>(33)</sup>に分類している。さらに、『韓国口碑』には、類系分類63419「トケビのおかげで得をした人、真似して失敗する」に、総数六話（⑮～⑳番事例）が収録されている。昔話集及び『韓国口碑』に収録される総数二〇の採録の報告事例を取り上げると、次のようである。

（太字は、日本語で刊行されたものを表す）

- ① 高橋亨「瘤取」『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年、一～五頁。
- ② 榎本秋村「瘤爺」『世界童話集東洋の巻一（第二部 朝鮮童話）』実業之日本社、一九一八年、四八～五一頁。
- ③ 山崎源太郎「瘤取物語」『朝鮮の奇談伝説』ウツボヤ書房、一九二〇年、二一〇～二一三頁。
- ④ 朝鮮総督府「三・瘤とられ・瘤もらひ」『朝鮮童話集』朝鮮総督府刊行、一九二四年、一三～一八頁。
- ⑤ 沈宜麟「43・瘤のある老翁」『朝鮮童話大集』漢城図書、一九二六年、二〇四～二〇七頁。
- ⑥ 中村亮平「瘤取爺さん」『朝鮮童話集』富山房、一九二六年、九九～一〇六頁。
- ⑦ 朴英晩「18・瘤取られ、瘤もらい」『朝鮮伝来童話集』ソウル、一九四〇年、九九～一〇三頁。
- ⑧ 朝鮮総督府「第八・瘤を取った話」『朝鮮語読本 卷四』朝鮮総督府刊行、一九三三年、一九～三〇頁。
- ⑨ 李相魯「瘤取りに行つて」『韓国伝来童話読本』乙酉文化社、一九六二年、一七八～一八三頁。
- ⑩ 李元寿「歌の袋」『伝来童話集』現代社、一九六三年、二六六～二七七頁。
- ⑪ 崔仁鶴共編「瘤取に行つて、瘤付けられた者」『韓国伝来童話全集1』章原社、一九七〇年、六五～七〇頁。

⑫ 任哲宰『昔話選集』教学社、一九七二年、(採録時期は、一九二〇年〜三〇年代頃)一七七〜一八〇頁。  
 ⑬ 崔仁鶴「こぶとり爺」『朝鮮昔話百撰』(語り手・林鳳順、慶尚北道金泉市、一九六八年採録)日本放送出版協会、一九七四年、一九八〜二〇〇頁。

⑭ 朴榮濬「ふたつのこぶ爺さん」『韓国の民話と伝説 古代編』韓国文化図書出版社、一九七五年、七三〜七六頁。

⑮ 「瘤取りに行つて瘤付けられた人」『韓国口碑1-2』京畿道驪州郡北内面採録

⑯ 「瘤付けられた話」『韓国口碑3-1』忠清北道忠州市周德面採録

⑰ 「瘤取りに行つて瘤付けられた話」『韓国口碑3-2』忠清北道清州市塔洞採録

⑱ 「瘤取りに行つて瘤付けられた話」『韓国口碑4-1』忠清南道唐津郡松山面採録

⑲ 「瘤取りに行つて瘤付けられた話」『韓国口碑5-3』全羅北道扶安郡扶安邑採録

⑳ 「トケビと瘤爺さん」『韓国口碑7-16』慶尚北道龜尾市長川面採録

以上、先に取り上げた昔話集の事例及び、『韓国口碑』に収録されている「瘤取爺」総数二〇話の事例のすべてまとめ、【表2】「韓国昔話「瘤取爺」の事例比較表」を作成した。

【表2】「韓国昔話「瘤取爺」類型の事例一覧表」

話	発端		展開			結果
	主人公	異界の存在	動機	宴	歌詞	
①	瘤を頬に下げたる老爺 ・町内の老爺(類)(下)	異種異形の妖怪	偶然(主人公)歌を聞く		○ 売る(種々の宝と交換)	嘘・嘘がばれる
②	正直なお爺さん(類)・不正直で意地悪いお爺さん(類)	赤鬼・夢鬼や様々な鬼	偶然歌を聞く		○ 報償(宝物の箱・数々返す)	嘘・嘘がばれる



○番号は、昔話集及び『韓国口碑』「癩取翁」類型の話を採録報告事例番号を表す。展開のところ、主人公の嘘の場面において、音図のない嘘の場合は、▲を付けた。

③	正直な翁(右類)・欲の深き翁	妖怪	偶然歌を聞く			○	報償(多くの宝)	嘘・嘘がばれる
④	一人の男(類)・隣の欲深い男	長丞	夢の中で、長丞を助ける			○	夢から覚めると、癩がなくなっている	恩返し
⑤	真面目な老翁(あこの下)・欲深い隣の翁	トケビ	偶然聴き、楽しく踊る			○	売る(宝貨、大金持ちになる)	嘘・嘘がばれる
⑥	片一方に癩もつ翁・	鬼	偶然歌を聞く			○	宝物と交換	嘘・嘘がばれる
⑦	老人(首に長い癩)・後半無し	トケビ	偶然歌を聞く		○	▲	報償(金銀宝貨)	トケビの勘違い
⑧	老人(首に大きい癩)・後半無し	トケビ	偶然歌を聞く		○	▲	報償(立派な金銀宝貨)	トケビの勘違い
⑨	翁(類)・同じ村に住む翁	トケビ	偶然歌を聞く			○	宝物と交換	嘘・嘘がばれる
⑩	翁(首)・隣の村に住む翁(首)	頭に角のあるトケビ	偶然歌を聞く		○	○	売る(宝物が入った袋)	嘘・嘘がばれる
⑪	翁(片類)・隣の村に住む翁	トケビ	偶然歌を聞く			○	宝物と交換	嘘・嘘がばれる
⑫	翁(右類)・隣の翁(左類)	トケビ	楽しく遊ぶトケビ群れに入つて歌って踊る		○	質	(歌が)上手・下手	(歌が)上手・下手
⑬	お爺さん(片方のほった)・隣の村に住む翁	トケビ	偶然歌を聞く			○	報償(宝物)	嘘・嘘がばれる
⑭	翁(右下の類)・同じ村に住む翁(左下の類)	鬼	鬼の宴を見て我儘です、仲間に入つて踊る		○	質	(歌と踊りが)上手・下手	(歌と踊りが)上手・下手
⑮	ある人(類)・ある者	トケビ	偶然歌を聞く			○	勝手に取って帰る	嘘・嘘がばれる
⑯	貧しい金氏(歌が上手)・金持ち翁氏	トケビ	歌にほれたトケビたちが集まって、楽しく踊る			○	報償(金銀宝貨)	嘘・嘘がばれる
⑰	田舎の農夫・隣の人	トケビ	主人公の歌に感動			○	トケビの棒をもらう	(歌が)上手・下手
⑱	優しい人(歌が上手)・隣の意地悪い人	トケビ	歌を聴いて楽しく踊る			○	報酬を要求(トケビの棒をもらう)	嘘・嘘がばれる
⑳	ある人・隣の人	トケビ	偶然歌を聞く			○	報償(お金)	嘘・嘘がばれる
	翁・隣の翁	トケビ	仲間に入り、歌い踊る		遊び	○	癩を取られる	嘘・嘘がばれる

#### 第四節 「瘤取爺」類型話の日韓比較

日韓の伝承の比較によって、次のような点が指摘できる。(【表1】【表2】を参照すること)

##### 一、隣人との対立関係

日韓両国の事例とも、瘤のある爺が山に行き、出会った異界の存在により瘤は取り除かれるが、真似をした隣人の爺は失敗し、もう一つの瘤が付けられてしまうという構成が共有されている。また、日韓ともに、主人公と隣人との関係が必ず善悪の対立を伴うわけではないことも同様である。【表1】と【表2】によると、この類話は「隣爺型」の一つとはいえ、「宇治拾遺」を含め、主人公の善悪といった性格を帯びていない場合が多い。韓国昔話の場合、同じトケビの登場する「トケビの棒」のように親孝行を強調する事例が多くみられるが、「瘤取爺」の類型には見当たらない。

韓国の場合、⑤『朝鮮童話大集』、⑫『昔話選集』、『韓国口碑』1-2 (⑮番事例)、3-2 (⑰番事例)、4-1 (⑱番事例)、5-3 (⑲番事例)、7-16 (⑳番事例)と、総七話にみえる話末評語の内容を見ると、

「その時から、「瘤取りに行つて、瘤付けられた」という話がありました」 (『朝鮮童話大集』)

「それで、その後から、「瘤取りに行つて、瘤付けられた」という話がありました」という話ができたとしたことさ」 (『昔話選集』)

「そう、瘤取ろうとして付けられたという話はそこからきたよ」 (『韓国口碑』1-2)

など、「瘤取りに行つて瘤付けられた」と、言葉の由来を説くもののみで、『宇治拾遺』の話末評語や、日本昔話のような、人を羨んではいけないといった教訓とは全く異なる。

それに、【表1】によると、日本昔話「瘤取爺」の場合は、『宇治拾遺』第三話と同様に、主人公の踊りが上手か下手かによって結果が異なる、という事例がはるかに多い。踊りの上手・下手によって幸運か不幸に分けられ

るということに教訓は読み取れない。<sup>(35)</sup>つまり、日韓双方とも主人公と隣人との関係が必ず善悪の対立を伴うわけでもないとも同様である。

ほか、【表1】の5、66、82番話、【表2】からは韓国昔話⑦、⑧番の事例のように後半がない、つまり対立関係の成立しない事例も確認できる。

## 二、異界の存在との出会い

まず、瘤取爺が異界の存在と会うためには、発端において何らかの働きかけがなければならぬ。韓国の場合④番の事例を除くと、他の全ての事例で、山の中に木を刈りに行き、日が暮れて空き家に泊まるという設定を持つ。日本昔話の場合、ほとんどの事例が韓国と同じ設定を共有するが、日本昔話「瘤取爺」話型の亜型となる、「鬼の浄土」・「鼠の浄土」・「異界訪問型」のように、落として転んだ物を追いかけて、洞窟や木の穴などから、異界の世界に入るという事例もみられる。

韓国の場合は、主人公が夜中に山中で一人になった時、その怖さを収めるため歌を歌う。すると、偶然その歌（または、歌と踊り）を聞いて感動した異界の存在は、上手に歌える理由に好奇心を持つという設定である。それに対し、日本昔話は、主人公の方から積極的に異界の存在の開く宴に参加するという設定が多くみられる。日本の場合、もともと歌や踊りが好きであり、上手であったという設定が多くみられる。このように異界の存在を楽しませる方法として、『宇治拾遺』や日本昔話「瘤取爺」は歌や踊りが中心とある。【表1】の18、24、25、26、41、59、63番がその事例である。

そして、【表2】において④番の事例の場合は、『宇治拾遺』及び他の韓国昔話の「瘤取爺」の事例とは違い、異界の存在や歌や踊りなどは登場せず、困っている長丞を助けると、恩返しとして主人公の悩みであった瘤を取ってくれるという、他とは異なった設定であることも興味深い。

さらに、【表2】の発端のところ、瘤を取られ・付けられる動機となった場面の場合、韓国昔話は、主人公の美しい歌声が中心であるが、『宇治拾遺』や日本昔話「瘤取爺」類型は歌や踊りが中心となっている。

『宇治拾遺』第三話と日本昔話「瘤取爺」の類型では、鬼など異界のものとの横座に象徴される宴があり、楽しく遊ぶ異界の存在の様子をみて、興に乗った主人公がその場に入り込んで一緒に遊ぶ。【表1】を見ると、日本の場合は多くの類話に宴の場面が登場していることが確認できる。韓国の場合【表2】を見ると⑫、⑳番と二つの話のみに宴の場面が登場する。特に、⑫番の事例『昔話選集』(補注5)の場合、宴の場面や瘤を売るのはなく質として預ける設定は『宇治拾遺』第三話と非常に近いが、この場合も、歌声は瘤から出ることとは、他の韓国昔話「瘤取爺」と変わりはない。

なお、『宇治拾遺』では、鬼たちの宴を見た主人公が、

しかるべく神仏の思はせ給けるにや、「あはれ、走出て舞はばや」と思ふを、一度は思かへしつ。それに、何となく、鬼どもがうちあげたる拍子のよげに聞こえければ、「さもあれ、たゞはしりいでて、舞てん。死なばさてありなん」と思とりて

と、一度は気持ちを抑えたものの、結局は鬼たちの仲間に入って踊るといふ、鬼たちの宴に入り込むまでの主人公の心理的曲折を描いている。そこには、様々な人間に深い興味を持っていた編者の「おのずからにじみ出ている人間理解の独自性」が読み取れ、『宇治拾遺』の特徴の一つとされる「人間の描写の特性が見出される」と、理解できる。中島氏の言う「人間の描写」について、小峯和明氏は、口承文芸から文献文芸へと、「書記化されなければありえない描写」だとし、「書くことによって翁の心中が掘り下げられている」と評価している。確かに、心理を描くことは文献文芸である説話の得意とすることであるといえる。

ほかに、日本昔話「瘤取爺」は採録事例も多くあることから、様々な亜型が存在し、登場する異界の存在も、鬼・天狗・鼠・妖怪など多様であることが分かる。

### 三、歌は瘤から出るといふ発想と主人公の嘘

韓国昔話では、上手な歌声はどこから出て来るのかという、異界からの存在（トケビ）による質問があり、主人公がどう対応したかが基本となる。（○番号は、【表2】の採録事例番号を表す）

① 「老爺はもはや氣丈夫なれば、さればとよ大王の見らる、通り、我は此の処に大きやかなる瘤を持てり、これこそ我が声溜め所よと答へたれば。妖怪さらばいかでその瘤我に売り玉へとて、種々の宝共を持ち出で交換してけり」  
（『朝鮮の物語集』）

② 「老爺さんは鬼共を見て吃驚したが、ふと何やら思ひ付いたと見えて笑ひながら、その鬼の頭に向ひ、「私のよい声は此顔の瘤から出るのだ」といひました」  
（『東洋の巻（第二部 朝鮮童話）』）

③ 「爺は出鱈目に「私の顔にある大きな瘤から此の美しい声が出るのである」と答へた」（『朝鮮の奇談と伝説』）  
④ 「あごの下に付けられている瘤から出ます。この瘤さえあれば上手に歌えることができます」と言った」  
（『朝鮮童話大集』）

⑦ 「老人は笑いながら「首（喉）から出るに決まったでしょう」と言いながら、からからと笑った。すると、頭のトケビは「老爺さん、嘘言わないで、老爺さんの美しい声はきつとその大きな瘤から出るに違いない」と言った」  
（『朝鮮伝来童話集』）

⑧ 「喉から出るんだ」と老人が答えたところ、「老爺さん、嘘言わないでください、普通の声なら喉から出るんですけど、そんな美しい声は決して声から出るわけない、爺のその大きな瘤から出るじゃないですか」  
（『朝鮮語読本』）

⑨ お爺さんは誇らしげに「これを見て、ここにある大きな瘤を見てみて、ここから美しい歌が出るんだ」と、平気で言った」  
（『韓国伝来童話読本』）

⑩ 「お爺さんは、トケビはこの瘤って、何だか分からないはずだから、歌が入った袋だと言ったら面白がるかも

：と思った。「友よ、私の歌が出て来るところを教えてあげるよ、私の歌は、この歌の袋（瘤）から出てくるんだ」  
（『伝来童話集』）

⑪ 「お爺さんは威張りながら「これを見て、ここにぶら下げている瘤を、ここから（歌が）出るのよ」と、瘤を指した」  
（『韓国伝来童話全集』）

⑫ 「お爺さんは威張りながら、指先でほったのこぶをこすった。「私がよく歌えるのは、このこぶのせいです。これさえあれば、どんな歌でも上手に歌えますよ」  
（『朝鮮昔話百撰』）

⑬ 「私は他の人よりこの瘤というものが付いているのよ（中略）他の人より歌が上手いのは、この瘤からその歌声が出るからだよ」実際トケビたちが見てみると、他の人には付いていない瘤があつて歌も上手だから、瘤から歌が出て来ると言う彼の話は確かだと思つた」  
（『韓国口碑 3-1』）

⑭ 「その左の頬、そちらの頬を指しながら「私の歌声はこの瘤から出て来ます」と言つたところ、「その瘤、私にくれないのか」と言つてきた。あげることはできるけど、でも「この二つとも取つて帰るなら、代わりに何かくれないかい」と聞いた」  
（『韓国口碑 4-1』）

⑮ 「どこから歌声が出るかと聞かれて、瘤からだと言うと）瘤を取れと言いながら、押し寄せては取つてくれた。爺はあまりにも嬉しすぎて、踊りながら家に戻つた。」  
（『韓国口碑 7-16』）

以上、取り上げた韓国昔話のほとんどの事例に、歌声はどこから出て来ると尋ねるトケビに対して主人公は、平気で歌声は瘤から出るのだと嘘をついている。それに、トケビは嘘をそのまま信じ、宝物をもって瘤を買い求めている。異界の存在に怖がらず、平気で嘘をつき、自分の利益を得ようとする行動から、主人公のもつトケビに対する印象が読み取れる。

韓国トケビの特徴について、李元寿氏は「歌の袋」（表2）⑩番事例）の解説において、「外国の化け物よりも

人間的で、無邪気な面がある。それほど、トケビは恐ろしいものとしてよりも、面白くて親しいもの<sup>(40)</sup>とし、山崎源太郎氏は『朝鮮の奇談と伝説』において、「悪い事する代わりに懇意になれば、金を持って来て呉れるので、欲の深い者は密かに此の鬼を祭る、されど一朝仲が悪くなったら最後其の儲けさせた金を、みんな攫って行く<sup>(41)</sup>」と述べている。

トケビは一般に、「いたずらを好み、人を惑わして嫌がらせもするものの、うまく付き合おうと、その靈験な力で財宝をもたらすなど奇跡的な助けを与える<sup>(42)</sup>」存在であることが知られている。ちなみに、金鍾大氏はトケビの用語の初めに登場する文献『釋譜詳節』や『月印釋譜』<sup>(43)</sup>の「トケビに多くの財物ができることを祈ったり、長寿を祈願するという語句を根拠に、「トケビの本質は、富の生産あるいは、富の創造にある<sup>(44)</sup>」と主張した。

さらに、任哲宰氏は、韓国昔話や説話の中に登場するトケビの特徴について、

宝物を限りなく持って、願うものなら何でも出て来る（魔法棒を持っている。また、食べはお酒を飲んで楽しく遊ぶのが好きで、人間とは親しい関係だが、人によく騙される間抜けな面もある存在となっている。そして、裏切られたらお返しはするものの、その報復の手段や方法は、精巧・巧みでもなく、直截的でお愚かなにきわまらない。そのためか、トケビは超自然的な靈験の力を持って、人の願いを叶えてくれるものの、人はそれを崇め尊ぶのではなく、馬鹿にしてたまそうとする<sup>(45)</sup>、

と述べている。つまり、韓国のトケビとは、日本のお化けや鬼に比べ、恐ろしい存在ではなく、財宝をもらえる対象というイメージで描かれている。それに対し、日本昔話や『宇治拾遺』第三話における鬼は、人に呪福をもたらす神格に近い。

⑦番事例の場合は<sup>(補注2-6)</sup>、喉と首のことを同じく「号<sup>モウ</sup>」という韓国語に対する、トケビの勘違いから生じたものだと思われるが、爺はトケビの勘違いを訂正しない事例や、⑧番の事例、「お爺さんは、トケビはこの瘤って、何だか分からないはずだから、歌が入った袋だと言ったら面白がるかも：と思った」という主人公の心理など、

韓国の事例の中に出る主人公の嘘の場面には、それほど悪い印象は感じられないことも特徴である。

日本昔話には、群馬県利根郡新治村須川伝承【表1】の59番事例)の場合、鬼の側から「この中にいい声の出るたねが入っているにちげえねえ」と、瘤を見て声が出るところだと勘違いするとか、群馬県利根郡新治村伝承(61番事例)の場合は、頭の天狗から、なぜそんなよい声が出るのかと聞かれた時、自分の瘤を指しながら、「こんなものが、あるせいだから、何だか、ありがたい事には、とつてもよう声がでますよ」と、嘘をつくなど、瘤は歌声が出てくるところだという設定の事例はみられる。ただ、それは、あくまでも、再び爺を招くために、質として預けておくことに意味がある。

日本昔話「瘤取爺」に、韓国昔話のような瘤を売るという事例は現在のところ見当たらない。【表2】によると、主人公の上手い踊りで楽しい遊びができた、異界の存在から、お礼や報いとして、宝物やお金などをもらう事例が確認できる。その他、瘤を取って欲しいと思った主人公が、異界の存在に瘤は質として価値のある大事なものだと思わせるための巧みな動きが見られる。『宇治拾遺』では、「たゞ目鼻をは召すとも、このこぶだけはゆるし給候はむ。年比持て候物を、故なく召されむ、ずちなき事に候なん」と、嬉しい心を隠して嘘をつく。昔話には、山形県米沢市窪田(24番事例)伝承の場合、瘤を取ろうとした時、「いや、このこぶ取らっちゃら大変だ」とあり、愛媛県八幡浜市日土町の伝承(128番事例)には、「これだけは預けることはできない」と言う。また、山形県最上郡最上町(43番事例)伝承の場合は、質として瘤を取られた爺が、わざと、「宝こぶ返せ」と、いう場面がみられる。自分に有利に事を運ぼうとする力点の置き方が異なるのである。

#### 四、質と「瘤を売る」こと

韓国昔話の特徴として、瘤から歌が出るということを聞いた後のトケビの対応についてみておこう。

(○番号は、【表2】の採録事例番号を表す)



- ① 「妖怪さらばいかでその瘤をば我に売り玉へとて、種々の宝共を持ち出で交換してけり」(『朝鮮の物語集』)
- ② 「妖怪は「然らばドウかして其の瘤を買って貰ひたい」と云つて、多くの宝を持ち出して其の瘤を爺の顔から無理に取り去ってしまった」  
(『朝鮮の奇談と伝説』)
- ③ 「トケビは嬉しい顔で、「そうか、そんな良いものを一人だけ持たずに、金銀宝貨ならたくさんあげるから、私に売ってくれ」と頼むのであった」  
(『朝鮮童話大集』)
- ④ 「きつと瘤から歌声が出るに違ひません。お爺さん、難しいとは思いませんが、その瘤、私たちに取ってくれませんか、代わりに良いものを牛や馬に乗せてあげますから」と、願うのであった」  
(『朝鮮伝来童話集』)
- ⑤ 「お爺さん、難しいとは思いませんが、その瘤、私たちにくれませんか、くれるなら、礼物をたくさんあげます」  
(『朝鮮語読本』)
- ⑥ 「頭のトケビは、何と自分もお爺さんのように上手に歌いたいと思つていたので、部下たちにたくさんの宝物を持って来いと命令した」  
(『韓国伝来童話読本』)
- ⑦ 「その歌の袋(瘤)、俺たちに売ってくれ。お金なら十分あげるから、俺たちに売ってくれ」(『伝来童話集』)
- ⑧ 「頭のトケビは、自分も瘤をもって美しい歌を歌いたいと思つた。「何どうぞ、その瘤を私にくれませんか。宝物をたくさんあげるから、交換しましょう」」  
(『韓国伝来童話全集』)
- ⑨ 「そのこぶをおれに出来ないか。もちろん、それに相当する宝物をいっぱいあげるから」(『朝鮮昔話百撰』)
- ⑩ 「代わりにたくさんのお金をあげるから瘤を私に取ってくれ」  
(『韓国口碑3-1』)
- ⑪ 「この二つとも取つて帰るなら、代わりに何か出来ないかい」と聞いた。(中略)トケビのホンドウケつて、あったでしょう、昔、トケビの棒というもの。「トケビの棒をあげるから交換しましょう」  
(『韓国口碑4-1』)

⑱ 「それじゃ、その瘤、千金をあげるからくれないか」

〔『韓国口碑5-3』〕

以上の韓国昔話「瘤取爺」話は、④⑫⑯⑳番の事例以外は、トケビが偶然、主人公の歌を聞くという設定である。瘤から上手な歌が出てくるという主人公の嘘を信じて、瘤を求めるトケビを相手に瘤を売るという設定も一つの特徴であろう。ほかに、①⑤⑩のように、トケビから瘤を売って欲しいという要求する事例もあるが、実際に売るといふ表現は見られないが、瘤の代わりに、金銀宝物や叩くと願いを叶えてくれるトケビの棒などといった、「お返し」をもらうという事例（⑤（補注2-7）、⑦⑧⑨⑩⑪⑬⑯⑰⑱）が多い。特に、⑱番事例の場合、主人公の方から「この瘤の変わりに何かくれないか」と、積極的に「お返し」を要求するという設定も珍しい。

このような主人公の嘘の場面や瘤を売るといふ場面は、日本の場合は、『宇治拾遺』には見られないが、昔話「瘤取爺」には、群馬県利根郡新治村伝承の場合（【表1】の59番事例）、鬼の側から「この中にいい声の出るたねが入っていつにちげえねえ」と、瘤を声が出るところだと勘違いするか、群馬県利根郡新治村伝承の場合（【表1】の61番事例）は、頭の天狗から、なぜそんなよい声が出るのかと聞かれた時、自分の瘤を指しながら、「こんなものが、あるせいだから、何だか、ありがたい事には、とつてもよう声がですすよ」と、嘘をつくなど、瘤は歌声が出てくるところだといふ設定の事例がみられる。

一見すると、韓国の事例と似ているとも考えうる。しかし、それは、あくまでも、再び爺を招くために、質として預けておくためにとって行動であり、私が集めた日本昔話「瘤取爺」一四七の採録事例の中に、「瘤を売るといふ場面は見当たらない。ほか、実際に「売る」といふ表現は使われないが、上手な踊りに対するお礼や報いとして、金銀宝をもらうか（【表1】の14、26、46、50、51、92、118、133番事例）、金銀宝の代わりに瘤を取って欲しいと要求する事例は確認できる（【表1】の63、89、91、111番事例）。

## 第五節 日韓比較の論点

同じ話型をもつ拾遺『宇治拾遺』第三話及び日本昔話と、韓国昔話の三者について比較を試みると、三者の共通点、相違点を次のように整理することができる。まず、日韓昔話ならびに『宇治拾遺』の説話と三者の同質性を話型に求めると、

主人公は、異界の存在によって瘤を取られる。

隣人は、異界の存在から瘤を付けられる。

という、単純で対照的な枠組みが共有されていることが確認できる。問題にすべきは、なぜ、どういう仕掛けによって災厄の除去もしくは呪福の獲得が可能になるのかを、どう説明するかという点の違いである。すなわち、日本と韓国という異なる地域性や伝承の歴史性によって表現に異なりが生じたものと捉えることができる。

日韓両国ともに、「瘤取りに行つて、瘤付けられる」という設定は同じだが、モチーフを詳しく分析してみると、日韓の「瘤取爺」ははっきりとしたモチーフで対比的に構成されている<sup>(46)</sup>。

【表2】の収録された事例の結末から考えると、韓国の場合、瘤を取るということを目的とするだけではなく、最後の結論としては、トケビによって金持ちになるといふことだと考えられる（二〇事例の中、一五の事例が瘤を売るか交換するかによって、宝物やお金をもらっている）。

発端部分において、韓国昔話では、偶然主人公の歌を聞いた異界の存在は、その歌に合わせて楽しく踊り遊ぶ。すなわち、異界の存在の遊びは上手な主人公の歌により始まるのである。一方、日本は、主人公から積極的に鬼の開く宴に入り込み、上手に踊ることによって、参加者となることができる。つまり、日本の場合は宴を開く際、主人公の上手な踊りを見るためには、必ず爺が宴に参加しなければならぬ。そのため、質を預けておく必要があっただろう。一方、韓国の場合、「瘤は美しい歌声が出てくる歌の袋とあるため、瘤さえ持っていればいつ

でも歌うことや聞くことができるので、爺を招く必要がない。したがって、質として瘤を預ける必要もない<sup>(47)</sup>のである。要するに、韓国昔話では、瘤を取る・取らないが最終の課題ではなく、瘤は主人公が裕福になるための手段なのである。それゆえ、韓国昔話は富を得ることができる方法の一つとして「瘤を売る」という設定が必要であったと考えられる。

したがって、韓国昔話には、宝物を与えても買い求めるほどの美しい主人公の歌声が必要であり、日本昔話には、命をかけても入り込みたくなるほどの宴の場面が必要であったのではなからうか。

日本昔話において、鬼は、集団で登場する。例えば、佐々木喜善の『聴耳草紙』に掲載されている「瘤取爺」(その一)の事例では、爺は瘤を取ってもらおうと「山の神様」に願をかけて「夜籠り」をする。すると、「賑やかな笛太鼓の囃の音」とともに「天狗」たちが現れる。「神楽」には「舞い手」が必要だ、と舞った爺に喜んだ天狗は、爺の瘤を取る。「瘤取爺」(その二)の事例でも、柴刈に出掛け日が暮れて困った爺は、「山ノ神様の御堂」に入って泊まる。その時、鬼たちが現われ、鬼の歌にうまく歌を「つけ加えた」爺は、「一緒に」なって「踊り」まわる。すると、鬼たちは「明日の夜」も来いと瘤を預かる<sup>(48)</sup>。いずれも、顕現する鬼は神の位置に立つ。神に対する祭祀の中で祝福を授かるという基本的な枠組みが働いている。昔話の鬼たちが出現する神遊びの祭は、『宇治拾遺』においては、貴族社会の饗宴として描かれる。したがって、日本昔話でも『宇治拾遺』でも、爺または翁は、祭祀や儀式的な場に参加できるかどうかが重要である。

日本昔話と比べると、『宇治拾遺』では、宴という祭祀の場が作り出される。そこでは鬼は、民俗学にいう神聖な「横座」に迎えられる神格を帯びている。「横座の鬼」を喜ばせるように、舞や踊りが奉納される必要がある。すなわち、宴において踊りや歌が不可欠である。爺の踊りや歌は鬼を喜ばせることが必要である。そのためには、鬼と人とが舞い踊る場を共にする宴が必要だったといえる。

それでは、日韓の伝承比較の論点を整理すると次のようである。

(1) 日本昔話では神として鬼や天狗の出現する祭が必要である。『宇治拾遺』の説話では、主人公が入り込む宴の設定が必要である。

(2) 『宇治拾遺』の説話では、主人公が宴に入り込む躊躇と勇氣ある決断が描かれている。

(3) 韓国昔話の場合、男が美しい歌声で歌う必要があるが、日本昔話ならびに『宇治拾遺』では、上手な踊りが必要である。

(4) 韓国昔話の場合、歌声は瘤から出るといふ発想と瘤をもつて最後には裕福になることが特徴的である。

(5) 韓国昔話の場合、瘤を売ることとお返しがあることが対応的に語られる。日本昔話と『宇治拾遺』では、鬼や天狗が翁または爺から、質として瘤を預かるという形で瘤が取り除かれる

(6) 日本昔話や『宇治拾遺』では瘤を取ってもらうことを目的とするのに対して、韓国昔話では金持ちになることを目的とする。

この中で、特に重要なモチーフは、韓国昔話の場合、男が美しい歌声は瘤から出ると嘘をつき、瘤を売ろうとすることである。瘤の代わりに金銀宝物を手に入れることもある。それは、異界の存在からの提案を基本とするが、男から積極的に要求する場合もある。

つまり、韓国昔話の特徴として、瘤から歌が出るという発想の特異さとともに、その瘤を売ったり、さらに瘤を取られた代りに、金銀宝物などといった補償を求めたりすることが特徴である。

一方、日本昔話では、主題が危機の回避や災厄の除去、もしくは幸福な結婚や富の獲得にある。とすれば、日本昔話「瘤取爺」や『宇治拾遺』第三話は、幸や福の獲得を究極の目的とするよりも、災厄の除去が重要な課題となっていると同時に、特に『宇治拾遺』では、結末に至るまでの説明や、主人公の心理の描写が顕著である。

もちろん幸運へのきっかけは、鬼の登場によって向こう側の世界からもたらされるのだが、翁が思い切って自分の意志で鬼の宴に飛び込んで行くところに特徴があり、これは『宇治拾遺』の説話が、神に対して人が積極的、

行動的に働きかけるといふ意味で、中世という時代の表現であることとかかわっているだろう。また、異界の存在である鬼が翁の瘤を取ろうとした時、「たゞ目鼻をば召すとも、このこぶだけはゆるし給候はむ」と、翁は嬉しくてたまらない内心を隠して、相手に瘤はもっと価値のあるものだと思わせる、かけひきの言葉の巧みさをこらしている。このような瘤が取られるまでの会話のやりとりに『宇治拾遺』のおもしろさがあり、中世説話集としての『宇治拾遺』のひとつの特徴であるといえる。

注

- (1) 金恩愛 「『宇治拾遺物語』「雀報恩事」考―韓国昔話との比較をめぐって―」『同志社国文学』第七三号、二〇一一年三月。
- (2) 浅見和彦・三木紀人校注 『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。以下、『宇治拾遺物語』の本文はこれに拠る。
- (3) 神谷正男 『産語の研究 校注篇』書籍文物流通会刊一九六二年。
- (4) 中島悦次 「宇治拾遺物語「鬼に瘤取らるる事」について」『跡見学園女子大学紀要』巻四、跡見学園女子大学、一九七一年〇三月。
- (5) 松村武雄 「日韓類話」『郷土研究』第二巻第四号、東京郷土研究社、一九一四年六月。
- (6) ①竹原威滋 「異界訪問譚における山の精霊たち―世界の「瘤取り鬼」をめぐって―」『説話―異界としての山』説話・伝承学会編、一九九七年。  
② 「説話の一生とジャンル変遷―「世界の瘤取り鬼」(AT503)をめぐって―」説話伝承学会編『説話・伝承の脱領域』岩田書院、二〇〇八年。  
③ 「『こぶとり爺さん』と『こぼびとの贈り物』―日欧民話比較論―」『翻訳の世界』第三巻第六号、日本

翻訳家養成センター、一九七八年。

(7) 大島建彦「宇治拾遺物語と昔話」説話文学会編『説話文学研究』第一二号、一九七七年六月。

(8) 柳田国男『日本昔話名彙』日本放送出版協会、一九四八年、一三九頁。

(9) 関敬吾『日本昔話集成』第二部の2、角川書店、一九五三年、七三五頁。

(10) 関敬吾『日本昔話大成』第4巻本格昔話三、角川書店、一九七八年、二五八頁。

(11) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観』全二六巻、同朋舎出版、一九七七年〜一九八四年。

(12) 中島悦次『宇治拾遺物語・打聞集全註解』有精堂出版、一九七〇年。

(13) 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九五八年。

(14) 廣田收『『宇治拾遺物語』第三話―構造からと、表現からと―』『入門説話比較の方法論』勉誠出版、二〇一四年。

〇一四年。

(15) 小峯和明「宇治拾遺物語と昔話―隣の爺型を詠む―」『説話と思想・社会』桜楓社、一九八七年。

(16) 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七五年。

(17) 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年。

(18) 神谷吉行「「瘤取爺」小攷」『相模国文』第三五号、二〇〇八年三月。

(19) 『睡隠集』は、朝鮮王朝時代の学者姜沆（一五六七〜一六一八年）が、慶長の役の時、日本の捕虜になっ

た（一五九七年から二年八ヶ月間）後、日本での捕虜生活など日本について書いた詩文集のこと。

(20) 中国の唐時代に段成式（八〇三〜八六三）による古今の神話伝説故事風習儀礼など多分野にわたる異聞を記した随筆集、二〇巻・続集十巻。

(21) 中国の宋時代、李昉による奉勅撰、九七七年から九八三年頃に成立した類書の一つ、全一〇〇〇巻。

(22) 朝鮮王朝時代、安鼎福（一七一二年〜一七九二年）により、古朝鮮から高麗末期までの歴史について書

いた歴史書のこと、全二〇巻。

- (23) 高木敏雄「日韓共通の民間説話」『東亜之光』第七卷一一号、一九一二年。
- (24) 高橋亨「瘤取」『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年、一〇五頁。
- (25) 今村与志雄『東洋文庫』401 西陽雜俎 卷四』平凡社、一九八一年、三十四頁。
- (26) 島津久基「瘤取」『国民伝説類聚』大岡山書店、一九三三年、七六頁。
- (27) 野村八良「瘤取」『国民童話』国史講習会、一九二二年、一〇九頁。
- (28) 注(4)に同じ。
- (29) 志田義秀『朝鮮の物語集』と日本の伝説童話』『日本の伝説と童話』大東出版社、一九四一年、二八一頁。
- (30) 金宗大「瘤取り爺の形成過程に関する試考」『韓国文学研究』二〇号、韓国文学会、二〇〇六年。金宗大「殖民地時代に輸入された「瘤取爺」譚」『韓国のとケビ研究』国学資料院、一九九四年、一四四頁。金宗大氏は、植民地時代の教科書に収録された「瘤取爺」の類話の内容の分析考察を通じて、殖民地時代に輸入され、意図的に教科書に載せられた日本伝承の説話だと主張する。
- (31) ①金容儀「日本「瘤取爺」話の類型と分布」『日本語文学』第五卷、韓国日本語学会、一九九八年、一六三頁。金容儀氏は、『日本昔話通観』に収録されている日本「瘤取爺」について、登場人物と異界の存在、出会った場所、祈願対象などに分け、日本「瘤取爺」を「木こり型」「浄土型」「祈願型」に分類している。
- ②ジョン・ジンヒ「韓国トケビ童話の形成と変形の様相研究」漢陽大学博士論文、二〇〇九年。
- ③方定煥「新たに開拓なる童話に関して―特に少年以外の一一般の大人に―」『開闢』第四卷一号、一九二三年一月。



④張貞姫「「瘤取爺さん」譚の韓日間の説話素の比較と原型分析」『韓国学研究』第四二卷、高麗大学国学研究所、二〇一二年、三八一〜四一一頁／『韓国学論集』第四八卷、啓明大学校韓国学研究院、二〇一二年。

(32) ①ソ・デソク「模倣譚の構造と意味」『古典散文研究』東和文化社、一九八一年。

②キム・ユジン「瘤取爺さんの構造と意味」『清覽語文学』第三卷、清覽語文学会、一九九〇年。

③金容儀「韓国と日本の「瘤取り爺」譚——教科書収録の過程で行われた改正を中心に——」『日本語文学』第六卷、韓国日本語文学会、一九九九年。

④金容儀「韓日の伝説の比較研究——近代期の教科書に収録された「瘤取り爺」譚を中心に——」『日本語日文学』日本語文学会、二〇〇三年。

⑤金容儀「韓日妖怪説話比較研究の課題」『日本語文学』第二卷、韓国日本語文学会、一九九六年、二三五頁。

⑥金容儀「日帝時代民譚の改作と収容の様相——『普通学校朝鮮語読本』巻四の「瘤取爺」譚を中心に——」『南道民俗研究』第六卷、南道民俗学会、二〇〇〇年。

⑦金容儀「民譚のイデオロギー的性格——日本の植民地時期の教科書に収録された民譚を中心に——」『日本研究』第一四卷、中央大学日本研究所、一九九九年。

⑧張貞姫「『朝鮮語読本』の「瘤取爺さん」説話と近代児童文学の影響関係考察」『韓国児童文学研究』韓国児童文学学会、第二〇号、二〇一一年。

(33) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、一九七八年。

(34) 日本昔話「瘤取爺」話型に対する話末評語については、廣田收「「瘤取爺」類話考——話型と表現の異同をめぐって——」『宇治拾遺物語』表現の研究』（笠間書院、二〇〇三年、一六七頁）を参照。

(35) 清水義範「瘰取りの翁」考」小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』月報27、小学館、一九九六年。

(36) 廣田收「『宇治拾遺物語』「瘰取爺」考」『人文学』第一六七号、同志社大学人文学会、二〇〇〇年三月。

(37) 渡邊網也・西尾光一校注『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九七二年、三〇三頁。

(38) 注(12)に同じ。

(39) 注(15)に同じ。

(40) 李元寿「歌の袋」『伝来童話集』現代社、一九六三年、四八〇頁。

(41) 山崎源太郎「朝鮮の妖怪」『朝鮮の奇談と伝説』ウツボヤ書籍店、一九二〇年、二二〇頁。

(42) 大百科事典出版部『東亜原色世界大百科事典』東亜出版社、一九八三年。

(43) 『釋譜詳節』は、一四四七年、朝鮮王朝第七代王、世宗(在位、一四一八〜一四五〇年)の命令により、首陽大君(後の世祖)が書いた釈迦の一代記をハングルに訳した本、全二四卷推定、現存、全八卷。  
『月印釋譜』は、一四五九年、朝鮮王朝第七代王、世祖(在位、一四五五〜一四六八年)により刊行された、釈迦の一代記、全三〇卷ほど推定、現存は、全一二卷。

(44) 金宗大「韓国トケビと日本の妖怪の比較研究に関する私論」『民俗学研究』第一五号、二〇〇四一二月、二九頁。

(45) 任哲宰「説話の中のトケビ」『国立博物館叢書1 韓国のトケビ』悦話堂、一九八一年、五二頁。

(46) 張貞姫「「瘰取爺さん」譚の韓日間の説話素の比較と原型分析」『国学研究』第四二卷、高麗大学校国学研究所、二〇一二年、三八一頁。

(47) 注(46)に同じ。

(48) 佐々木喜善『聴耳草紙』筑摩書房、一九六四年、一一九〜一二二頁。

### 第三章 『宇治拾遺物語』 第九六話 「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」考

― 昔話「藁しべ長者」と韓国昔話との比較を中心に ―

#### はじめに

日本昔話「藁しべ長者」は、『大成<sup>(1)</sup>』によると、分類番号「一五五 藁しべ長者」型に分類され、本格昔話「藁しべ長者」型として全国に分布している。この伝承は、藁から始まって物を次々と交換して、最後には長者になるという内容であり、古くは、日本の説話集『宇治拾遺』第九六話「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」として収録されている。そのほか、『今昔』巻第一六第二八話、『古本説話集』(以下、『古本』)下巻第五八、『雑談集』五、『御伽草子』「大悦物語」などの説話が類話として指摘されている。<sup>(2)</sup>

さて、日本昔話において、「藁しべ長者」型は二つの亜型に分けられる。一つ目は、貧しい男が藁を持って旅に出る、その藁を大根や三年味噌と交換し、次は刀に交換、また刀は米もしくはお金などと交換し、男は長者になるという亜型が「三年味噌型」(または「宝剣退治型」、本論においては「三年味噌型」に統一する)である。二つ目は男が観音に祈願しお告げを受けて、藁、蜜柑(または、果物)、馬、畑・家という順番に交換して、最後には長者になるという筋を持つ亜型で「観音祈願型」と言う。に分けられる。福田晃氏には、『宇治拾遺』第九六話「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」の類話として指摘されている『今昔』『古本』『雑談集』『御伽草子』は、「観音祈願型」に属<sup>(3)</sup>すると述べる。

さらに比較的視点に立つと日本昔話「藁しべ長者」型は、「欧州では本話型と全く一致する話型はみられないが A T 1655 「有利な交易」にやや似ている。中国には類した物語は報告されていないが、韓国では崔仁鶴氏『韓国昔話の研究』によると、日本の「藁しべ長者」にほぼ等しい「藁縄一本で長者になる」と、欧州の「有利な交易」に似た「粟一粒で」との二つの話型が存在する。もちろん、本話型は欧州の「有利な交

易」と直接の関係はなく、おそらく韓国か日本で独自に生み出された話型<sup>(4)</sup>であろうと推測している。

私は、昔話関連話群に対する同話・類話または関連話の比較考察において、日本の文献や昔話の採録資料を含め、同じ出典から伝承されたと指摘される韓国の口碑の採録事例を、新たな比較考察の対象として据え、共有されている話型の特質について考察したい。また、原典とされるインドの説話集やジャータカ・仏典を調べ、『宇治拾遺』第九六話と日本昔話「藁しべ長者」と韓国昔話「藁繩一本で長者になる」型との比較を中心に考察する。

## 第一節 『宇治拾遺物語』及び説話の中の「藁しべ長者」話型

### 一、『宇治拾遺物語』の諸注釈

最初に諸注釈の見解をみておきたい。

(1) 『古本』五十八話・『今昔』卷十六第二十八話と同話である。長谷寺縁起にはこれに似た話がある。

なお『雑談集』卷五の「信智之徳事」参照。さて、この話は、或はもと長谷寺に関係なかったものが、長谷寺利生記として取り入れられたものではなかったか。漸層的に事件が付加される形で発展して行く物語は世界的にもいろいろ見られるようだ。『集成』（本格昔話、一五五 藁しべ長者）に類話が見られる。  
(『宇治拾遺物語全註解』<sup>(5)</sup>)

(2) ふだんなら、踏みにじられもする藁くず一本が、大きなみかん三個になる。観音のはからいと、それへの信頼感が軸となつて、事件は思わぬ方に展開する。現代なら、すべてが偶然の幸運とかたづけられることが、ここでは大いなる観音の慈悲と偉力の必然として受けとめられていく。「物を食ふ」考えるとは真に迫る表現である。それにしても、「観音計らはせ給ふ事なれば、よもむなしくはやまじ」という、観

音への巖のような信頼はみごとである。つかんだ一本の藁がもととなり、藁一本↓みかん三つ↓布三段↓名馬↓家と田、と四度変化し、トントン拍子についている、世にも楽しい「藁しべ長者」の物語である。『今昔』巻十六第二十八話、『古本』五八話と同話であるが、『今昔』ではこの話の終りを「其ノ後ハ、長谷ノ観音ノ御助ケ也ト知テ、常ニ参ケリ。観音ノ靈験ハ此ク難有キ事ヲ示シ給ケル、トナム語り傳ヘタルトヤ」と結び、長谷観音の利生を前面に押し出した靈験説話となっている。本書では、その靈験をたたえながらも、どちらからといえば実にうまい話、おもしろく珍しい話という、話の筋の展開の妙のほうに重点が移っている。

(『日本古典文学全集』)

(3) この物語は長谷の観音を示すものであるから、当然『長谷寺縁起』『長谷寺靈験記』の類に見えるはずなのだが、それが見当たらずである。そうして『宇治拾遺』前後の主な説話集には、いずれも長谷寺にゆかりのある物語としてしるされる。(略)『今昔』のやや後(一一三〇年ごろ)の成立かとされる『古本』は『宇治拾遺』に近い。はたご馬の部分も、こんどは何がもらえるかの部分も、馬を売る部分もほぼ同じ、終わりの方の「風の吹きつくるやうに徳つきて」の句は全くの同文である。結びの文は「ことの外に徳ある者にてぞありける」。『宇治拾遺』よりも後の時代にしるされた僧無任の『雑談集』になると、語り方にかんがりの違いがあり、時代に応じた変化がある。無任には別に『沙石集』の者があり、共に説経の席などで語られた物語の集成と考えており、ここもその一例である。ここでは話の前半を特に簡単にして、ほんの二、三行ですませている。

(『鑑賞日本古典文学』)

(4) 『今昔』十六、二十八、『古本』五八、『雑談集』五には、これと同話に当たるものが収められている。それによると、まず藁一本からはじまって、柑子三個、布三匹、馬一頭、田と家というように、つぎつぎに別の品物と取りかえて、ついにはすばらしい長者となったというのである。特に『今昔』では、この説話の末尾に、「其ノ後ハ、長谷ノ観音ノ御助ケ也ト知テ、常ニ参ケリ。観音ノ靈験ハ此ク難有キ事ヲ示

シ給ケルトナム語り傳へタルトヤ」と記され、あくまでも観音の利生を中心に説かれている。『宇治拾遺』の方では、いちおう観音の靈験について触れながら、むしろ事件の展開を中心にまとめられている。

民間の「藁しべ長者」の昔話では、それらの文献と通ずる「観音祈願型」よりも、「三年味噌型」または「宝剣退治型」と名づけられるものが、いつそう多く伝えられている。それによると、やはり藁一本からはじまって、木の葉、味噌、刀というように、つぎつぎに別の品物と取りかえて、この刀をもって豊かな身となったというものである。

- (5) 『今昔』卷十六第二十八話、『古本』五八話と同話。世にも楽しい「わらしべ長者の物語」である。ころんでつかんだ一本の藁が、みかん三個となり、みかん三個が布三疋、やがて布が名馬に、名馬が土地と家にと、トントン拍子に豪勢になっていく、いかにもうまい話である。男の、山をも移すゆるぎない観音への信頼と、観音のありがたい御利益とが軸になって展開するおもしろい話だが、『今昔』は長谷観音の利生を前面に押し出した靈験説話として構成し、本書は筋の展開の妙に重点をおき、観音利益の宣伝の押しつけがましさが無い。この点が『今昔』と比較した場合の本書の特色の一つである。

(『新潮日本古典全集』)  
(『宇治拾遺物語評釈』)

- (6) この話は「わらしべ長者」の名で呼ばれる昔話としても有名である。内容、語り口など、人気を呼ぶに足る仕上がりである。生活苦にねざす男のしたたかなせまり方、これをうけ入れてさりげなく靈験を与える観音の慈悲と靈力、それが漸層的に示される展開の妙、遠い時代の日常と非日常、細部にうかがえる王朝物語の影などが印象的である。

(『新日本古典文学大系』)  
(『新日本古典文学大系』)

- (7) 長谷寺の門前でけつまずいて転んだ拍子に握った一本の藁しべが、三個の蜜柑となり、三個の蜜柑が三疋の布となり、三疋の布が名馬に、名馬が田地と家屋敷に、さらにそれが子孫繁栄へ、というふうには貧乏な青年がとんとん拍子に運が向いて、たちまち富裕な長者への階段を上がって行く。しかし、読者

はそれが観音の強力な加護によるものだということをしばらく忘れさせられる。それほどに、青侍が度胸と駆引きを武器にして自力で次々に幸運を手に入れて行く過程の叙述が巧妙で自然なのだ。本話すなわち昔話「わらしべ長者」が、飽かず語られ続けてきた理由もそこにある。 (『新編日本古典文学全集』<sup>(1)</sup>)

以上の諸注釈をまとめると、『宇治拾遺』第九六話は、男の観音への信頼と、観音のありがたい御利益が軸になって展開するが、『今昔』では観音の利生を中心に説かれており、『宇治拾遺』は、観音の靈験について触れつつも、むしろ事件の展開を中心にまとめている。『古本』は『宇治拾遺』に近い。『宇治拾遺』第九六話は、孤独で貧乏な青年に運が向いて、たちまち長者になるという、自力で次々に幸運を手に入れて行く過程の叙述の巧妙さが面白い話と言える。もともとは長谷寺に関係なかったものが、長谷寺靈験譚として取り入れられたものと考えられる。

これらの諸注釈によると、『宇治拾遺』第九六話の話型の出典と指摘されるインドの説話集『カタール・サリット・サーガラ』や『ジャータカ』との比較考察に基づく『宇治拾遺』の研究は少なかつたと考えられる。

## 二、『宇治拾遺物語』と『今昔物語集』との比較

ここでは、まず『宇治拾遺』第九六話「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」と、『今昔』巻第一六第二八話「参長谷男、依観音助得富語」との比較考察を行うことにする。

『今昔』巻一六「本朝付仏法」には、『靈異記』を出典とするもの一一話、『法華験記』を出典とするもの八話などを含め、「観音の靈験譚」を内容概要とする総計四〇話が収録されている。その中、長谷寺靈験譚は、第二八話のほか、第一九話「新羅の后国王の咎を蒙りて長谷の観音の助けを得る語」、第二〇話「鎮西従り上がる人観音の助けに侍りて賊の難を遁れ命を持つ語」、第二九話「長谷寺観音に仕ふる貧しき男金

の死人を得る語」と、全て四話がある。さらに、『宇治拾遺』には、第九六話「長谷寺参籠の男、利生に預かる事」を含め、総七話の観音靈驗譚が収録されている。

さらに、「『宇治拾遺』第九六話「長谷寺参籠の男、利生に預る事」類話の本文比較対照表」（補注3-1）を参照とし、『宇治拾遺』『古本』『今昔』に対する本文を比較考察してみよう。

① 本文番号10（本文番号は、（補注3-1）の「第九六話類話の本文比較対照表」の本文番号を表す）によると、

『宇治拾遺』 「藁すべ」

『古本』 「藁のすぢ」

『今昔』 「藁ノすぢ」

と、『雑談集』には、「ハラシベ」とある。

② 本文番号15

『宇治拾遺』 「仏の賜びたる物」

『古本』 「仏の賜びたる物」

『今昔』 「観音ノ給タル物」

『宇治拾遺』と『古本』『今昔』との相違点を挙げると、『宇治拾遺』『古本』には「仏の賜びたる物」とあるが、『今昔』には「観音ノ給タル物」とある。ほかにも藁一本から柑子三つに、また柑子三つが布三匹と、物がどんどん増えていく喜びを表わす場面において、『宇治拾遺』は、「藁一筋柑子三になりぬ。柑子三が布三匹になりたり」（本文番号37）とあるが、『今昔』は、「観音ノ示現ニ依テ、藁筋一ツヲ取テ柑子三ニ成ヌ。柑子亦布三段ニ成ヌ」（本文番号40）とあり、『今昔』は主人公の「観音」への気持ちが現れている。ほかにも『今昔』には、もっぱら「観音」とあるが『宇治拾遺』では、「観音」もしくは「仏」とある。



③ 本文番号 39

『宇治拾遺』 「皮はぎ給たりとも、え干し給はじ」

『古本』 「かはらにても、忽ちに、え干しえ給はじ」

④ 本文番号 48

『宇治拾遺』 「絹や銭などこそ用には侍れ」

『古本』 「絹布こそ要には侍れ」

『新大系』によると、「『古本』は、『宇治拾遺』「かははぎ」の誤写かとされるが、皮はぎの場として川原がもちいられていたことによるか<sup>(12)</sup>とあり、池上洵一氏は、「『古本』「かはらにても」は、『宇治拾遺』「皮はぎでも」の草体との字型類似から生じた誤写であったと思われる。そうであるとすれば、この話は『古本』の成立以前にすでに文献に記されていたのであり、『古本』と『宇治拾遺』の「藁べ長者」は祖を同じくする書承説話である<sup>(13)</sup>と述べたうえで、④本文番号48に当たる『古本』では「布」と『宇治拾遺』では「銭」とあることについて、「「布」から「銭」への変化の類は、誤写ではなく意識的に行われた書き変えであったろうが、とあれば、その変化は時代によって変化した口語りの話をそれぞれ説話集が個別的に受容したため起こったものではなく、あくまでも書承を軸として、その過程において時代の意識が反映したものと考えるべきであろう」と、『宇治拾遺』と『古本』の成立時期による、時代の反映だと指摘する。

⑤ 本文番号 49

『宇治拾遺』 「此鳥羽の近き田三町、稲すこし、米など」

『今昔』 「九条田居ノ田一町・米少」

⑥ 本文番号 54

『宇治拾遺』 「其家も我物にして」

『今昔』 「家ナド儲テ」

⑤の本文番号49では、『宇治拾遺』は馬を売って田を三町もあるが、『今昔』は一町をもらうとある。本文番号54では、『宇治拾遺』は、馬の代わりに畑や家をもらうとあるが、『今昔』は家を建てるとある。『今昔』『宇治拾遺』『古本』など、ほぼ同じ時期に成立した三つの説話集に共に収録されていたことから、同時代には有名な話であったと考えられるが、三つの説話集間における書承関係は明確にされていない。ただ、「⑤本文番号48」などから、『宇治拾遺』↓『古本』への書承関係は推測できる。

『今昔』と『宇治拾遺』における「観音」及び「仏」の用例から分かるように、『今昔』には、「観音」のみが出てくるが、『宇治拾遺』では、「観音」もしくは「仏」として使い分けられていることが分かる。

『今昔』が、特に観音に対する霊験譚を語ろうとする強い意識が読み取れることに対し、『宇治拾遺』の場合は、特に観音に焦点を置くと言うより、観音を含む幅広い意味としての仏の霊験を語ろうとしたと考えられる。

以上のことから、『今昔』巻一六第二八話が仏教説話として宗教的目的を持ち、長谷寺観音の霊験を語った霊験譚であるとすれば、『宇治拾遺』第九六話の場合は、当時流行の説話・世間話の一つとして語られたものと考えられる。そのような、仏教説話集として『今昔』の狙いは、「話末評語」においても読み取れる。すなわち、『今昔』は、話末評語において「観音ノ霊験ハ此ク難有キ事ヲ示シ給ケルトナム語り傳ヘタルトヤ」と、観音の霊験を強調することで話が終わっているが、『宇治拾遺』には、このような話末評語がないからである。

## 第二節 日本昔話「藁しべ長者」話型

次に、日本昔話「藁しべ長者」話型について考察する。先行研究によると、日本昔話「藁しべ長者」の話型は、交換する物のモチーフによって、「三年味噌型」と「観音祈願型」に分けられている。<sup>(15)</sup>つまり、

① 「三年味噌型」…藁↓絹や反物↓大根（もしくは、蓮の葉）↓三年味噌↓刀↓米 ↓長者になる。

② 「観音祈願型」…藁↓蜜柑↓絹や反物↓馬↓家・畑 ↓長者になる。

という亜型である。<sup>(補注312)</sup>この二つの亜型、「三年味噌型」と「観音祈願型」について、具体的な事例として昔話の本文を取り上げると、次のようである。

#### 一、「観音祈願型」

新潟県の採録の一つ「わらすべ長者」<sup>(16)</sup>から、事項を取り出すと次のようである。

(昔) あるどこに、一人者の男がいた。

男は、**観音に福をさずけてもらいたいと願う。**

観音は、寝ている男の夢に出て来る。

観音は、男に一つの福をさずけると約束する。

観音は、男に手に掴んだものを離さないようにと言う。

男は、出かける。

男は、藁しべ一本を得る。

男は、大きいアブ一匹を見つける。

男は、アブを藁しべに縛って歩く。

殿様の子供は、男の持つアブを欲しがる。

殿様の子供は、男にアブを売ってくれと言う。

男は、殿様の子供にアブを与える。

殿様の子供は、男にお礼として蜜柑二つを与える。

男は、蜜柑を持って歩く。

男は、喉が乾いたお嬢様と合う。

男は、嬢様に蜜柑を与える。

嬢様は、男にお礼として絹の反物一反を与える。

男は、反物をもって歩く。

男は、馬が死んで困っている旅人と会う。

旅人は、お供の者に馬の始末をしてくれと頼む。

男は、お供の者が馬の始末をするところを通る。

男は、馬と反物と交換する。

男は、馬に水を飲ます。

馬は、元気になる。

男は、馬をつれてある村へ泊めてもらう。

男は、荷物を運ぶに困っている村の人に合う。

村の人は、男に馬を売ってくれと言う。

男は、その村の人に馬を与える。

村のお人は、男にお礼として家と畑と田んぼを与える。

男は、畑と田んぼを作って安楽に暮らす。

## 二、「三年味噌型」

もう一つ、これは鹿児島県の事例であるが、「藁しべ長者<sup>(17)</sup>」から事項を取り出すと次のようである。

(昔) 親の言うことを聞かない子供がいた。

親は、子供に藁一束を渡す。

**子供は、藁一束を持って家を出る。**

ある人は、抜いた大根を束ねる物を探している。

子供は、人に藁一束を与える。

子供は、お礼として大根四五本をもらう。

子供は、法事の料理するところを通る。

料理する人は、大根を求める。

**子供は、料理する人に大根四五本を与える。**

料理する人は、お礼に味噌を一丸与える。

子供は、刀鍛冶屋の前を通る。

刀屋は、味噌を求める。

**子供は、味噌を与える。**

刀屋は、お礼として刀四五本を出す。

**子供は、刀一本をもらう。**

子供は、大池があるところを通る。

子供は、道でひと休みをする。

子供は、刀を枕元に置いたまま眠ってしまふ。

子供は、目覚めて血まみれになった刀を見る。

子供は、切れ切れにされた大蛇を見る。

(子供は)、名刀で鞘から抜けて行って大蛇を退治したと知る。

子供は、侍から大蛇を退治した訳を聞かれる。

子供は、侍に人の従来のため大蛇を切り殺したと答える。

侍は、子供の名前と住所を書いて役所に届ける。

地元の人たちは、大蛇を切り殺した子供に喜ぶ。

**地元の人たちは、子供にお金を与える。**

子供は、金を持って帰って来る。

子供は、親に今までの出来事を話す。

親は、子供の話を聞いて驚く。

両者の核心をなす事項群を太字で示している。

すなわち「観音祈願型」と「三年味噌型」の昔話はどちらも藁から次々と物を交換し、裕福になるという型であるが、「三年味噌型」の場合、最後に刀と金の交換ができたのは、(侍に人の往來のため大蛇を切り殺したという)主人公の作り話があったからこそ可能になったということも興味深い。

### 第三節 韓国昔話の二つの型 (補注 3-3)

次に、この二つの型を手掛かりとして、韓国昔話について検討してみたい。

崔仁鶴氏の分類<sup>(18)</sup>によると、日本昔話『集成』のタイプ番号、一五五「藁しべ長者」に対応する韓国昔話は、

結婚譚・致富譚として、(崔仁鶴氏) 分類番号二二三三「藁縄一本で長者になる」型(以下、「藁縄三本」型)と、二二三一「粟一粒で」型との、二つの話型に分けられている。

昔話の研究においては次のような伝承が、韓国における類話として指摘されている。『集成』の指摘では、  
 ①朝鮮「粟一粒で政丞の娘を貰ふ」(孫晋泰『朝鮮民譚集』)  
 があり、『大成』の指摘では、

②「アワ一つぶで大臣の娘を貰う」(崔仁鶴共編『朝鮮昔話百選』)

③「藁縄一本で長者になる」(崔仁鶴『韓国の昔話』)

などが取り上げられる。ほか『日本昔話事典』は、韓国昔話「粟一粒で」型が、欧州の「有利な交易」型に類似し、「藁縄三本」型は日本昔話「藁しべ長者」型に類似するという。

それでは、韓国昔話は、どのような系統に分けられるだろうか。今回、比較対象とする韓国昔話は、すでに日本語訳で紹介された日本語訳七話を含め、新たに『韓国口碑』に「藁縄一本で長者になる」類話として掲載されているもの総計二〇話(類系分類714.6)、そのほか、民譚集から九話と私が日本語に翻訳したものを合わせ、総計三六話採録事例を集め、総三四話の採録事例を対象に比較表を作成した(【表1】)これを以下の比較考察に参照することにした。

一、韓国昔話の採録事例一覧 (【表1】)

(1) 「藁縄三本」型 (24)

話	発端		展開		結果
	主人公	機械	交換		
①	田舎の怠け者	母が追い出す	藁縄三本	水かめ↓米三斗↓死んだ馬↓生きた馬↓死んだ娘↓生きた娘	結婚・幸せ
②	愚かな者	母が追い出す	藁縄三本	水かめ↓嫁↓(酒屋で)嫁を取られる	失敗譚

②④	②③	②②	②①	②⑩	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④	①③	①②	①①	①⑩	①⑨	①⑧	①⑦	①⑥	①⑤	①④	①③	①②	①①	
貧しい下人	愚かな婿	独り息子	水かめ商人	愚かな兄弟	怠け者	怠け者	貧しい農夫	トンケ	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	醜男	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	怠け者	
偶然道に藁縄を拾う	母が追い出す	母が追い出す	お金の代わりに藁縄	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	先祖のお告げ	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	母が追い出す	
藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	栗の穂二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄十二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	藁縄二本	三尺の藁縄	藁縄二本	
きしし！稲一石！稲一石！長者になる	餅こしき！山羊！嫁！謎を出す！お金嫁	水かめ！米三斗！小さい馬！嫁！神薬物・絹・馬十二匹	水かめ！馬！政丞の娘と結婚！（酒屋で）嫁を取られる。	米二斗！二人の娘！結婚！絹・牛	鼠！猫！嫁	鼠！猫！馬！死んだ娘！嫁三人	水かめ！山羊一匹！牛！熊！お姫様の病氣を治す！お姫様と結婚	水かめ！米一斗！死んだ娘！生きた娘と結婚	水かめ！米二斗！死んだ娘！生きた嫁！謎を出す！真鍮の器・馬・絹	猫！馬	塩！嫁三人！謎を出す！沢山の物	水かめ！米一斗！死んだ娘！嫁！謎を出す！お金	水かめ！米一斗！牛！嫁！謎を出す！お金	水かめ！米三斗！死んだ娘！村の娘と結婚	水かめを割れた娘！嫁！嫁を取られる	かめ！死んだ娘！お金持ち娘と結婚	水かめ！米一斗！死んだ娘！死んだロバ！生きた返ったロバ！謎を出す！お金・牛	水かめ！米一斗！美しい嫁！謎を出す！行長になる	水かめ！嫁！（他人）嫁を取られる	瓶！米三斗！死んだロバ！生きた返ったロバ！村長の娘！謎を出す！最高級の絹	水かめ！餅！嫁！謎を出す！宝物	水かめ！嫁！謎を出す！宝物	水かめ！嫁！謎を出す！宝物	水かめ！嫁！謎を出す！宝物
裕福	結婚・裕福	結婚・裕福	失敗譚	結婚・裕福	結婚・裕福	裕福	結婚・出世	結婚	結婚・裕福		結婚・裕福	結婚・裕福	結婚	結婚	失敗譚	結婚	結婚・出世	失敗譚	結婚・裕福	結婚・裕福	結婚・裕福	失敗譚	失敗譚	



(2) 「藁一粒で」型

話	発端		交換	展開	結果
	主人公	出発			
②5	若い男	科挙試験を受けに出る	粟一粒	鼠↓猫↓馬↓雄牛↓大↓臣の娘と結婚	結婚・出世
②6	ある人	旅に出る	キビの稲一本	鼠↓猫↓犬↓ロバ↓死んだ娘↓ある家の長女を嫁にもらう	結婚
②7	ある息子	国王に献上するため	粟の稲一本	鼠↓猫↓犬↓馬↓娘↓官庁に娘を取られる↓息子は虎に食われる	失敗譚
②8	未婚の男	科挙試験を受けに出る	粟一粒	鼠一匹↓猫↓犬↓馬↓牛↓大臣の娘と結婚	結婚・裕福
②9	未婚の男	科挙試験を受けに出る	粟一粒	鼠↓猫↓ロバ↓牛↓政丞の娘と結婚	結婚・出世
③0	貧しい士人	科挙試験を受けに出る	粟一粒	鼠↓猫↓ロバ↓牛↓政丞の娘と結婚	結婚
③1	未婚の怠け者	母が追い出す	粟の穂	鼠↓猫↓犬↓ロバ↓牛↓死んだ娘↓美しい嫁↓謎を出す↓絹	結婚・出世
③2	馬鹿なせむし男	科挙試験を受けに出る	粟一粒	鼠↓猫↓ロバ↓牛↓宰相の娘と結婚	出世
③3	怠け者	母が追い出す	粟一粒	鼠↓猫↓犬↓馬↓嫁↓嫁を取られる。	失敗譚
③4	怠け者	母が追い出す	稲一本	鼠↓猫↓犬一匹↓雄牛↓可愛い娘↓娘が逃げる	失敗譚

二、『宇治拾遺物語』第九六話と韓国昔話との比較考察

まず、韓国昔話は、「藁縄一本で長者になる」話（崔仁鶴『韓国の昔話』）を中心に考察することにした。そこで日韓の比較に基づく論点を整理すると次のようになるであろう。

(1) 人物

韓国昔話：怠け者の息子。

『宇治拾遺』：父母も主も、妻や子もいないただ一人の寂しい青侍。長谷寺に参り、観音の前にうつ伏し

て、助けを求める。

韓国昔話は、怠け者の息子で、お母さんの家から追い出されることになるが、『宇治拾遺』は、観音に祈願する切迫感から、主人公の「貧しさ」が感じられる。

(2) 発端

韓国昔話 …怠け者の息子は、自分でなった藁縄三尺を持たされて家から追い出され旅に出る。

『宇治拾遺』…観音のお告げにより、手に入れた藁一本を持って旅に出る。

(3) モチーフ

韓国昔話 …藁縄三尺↓壺一つ↓米三升↓死んだ馬↓死んだ馬が生き返る↓美女(村長の娘)の死体

↓美女が生き返る↓村長の娘と結婚↓謎最↓高級の絹織物 ↓長者になる。

『宇治拾遺』…藁一本↓蜜柑三つ↓三匹↓死んだ馬↓死んだ馬が生き返る↓鳥羽の近き田三町・稲・

↓長者になる。

(4) 結末

韓国昔話 ↓村長の娘と結婚し、長者になる。

『宇治拾遺』↓長者になる。

韓国は偉い人の婿になるという、結婚と結びつけられていて、日本は長者になるという結末で終わる。

#### 第四節 その他、諸外国における「藁しべ長者」類話

##### 一、研究史から知られる並行伝承

韓国昔話のほか、昔話の研究においては次のような伝承が、諸外国における類話として指摘されている。

『大成』の指摘では、

① インド『カタター・サリット・サーガラ』「鼠という名の商人の物語」<sup>(26)</sup>が、指摘されている。概要は次のとおりである。

『カタター・サリット・サーガラ』「鼠という名の商人の物語」

- (1) 男は、大金持ちの商人に商売の資本を借りに行った。
- (2) 男は、大金持ちの商人が、ある子に「有能な人は、死んだ鼠のようなわずかな物でも、商売によって長者になる、と言う話を聞く。
- (3) 男は、その死んだ鼠を資本として借りる。
- (4) 鼠を猫の食糧として売って、豆を両手一杯もらう。
- (5) 豆粉と水瓶を持って、疲れて休んでいる木材運搬業者にあげて、代わりに材木をもらう。
- (6) 材木を市場に売る↓金を儲ける↓たくさんの木材を買う。
- (7) 大雨で木材の運搬が絶えたので、持っていた木材が高く売れる。
- (8) 男は、店舗も開いて財産家となり、恩返しとして黄金の鼠を大金持ちの商人に送る。
- (9) これまでの事情を聞いた大金持ちの商人は、自分の娘をあげる。

② 「ジャータカ四話 チュツラカ豪商前生物語」<sup>(27)</sup>

さらに、中村元氏は、①『カタター・サリット・サーガラ』とともに次の二話を指摘する。

③ 「根本説一切有部毘奈耶」卷第三二<sup>(28)</sup>

④ 「六度集経」卷三第二二<sup>(29)</sup>

『ジャータカ』四話は、日本や韓国昔話のように、偶然に起きた出来事により物の交換が始まるというこ  
とではなく、裕福になったのは、主人公の商売の知恵と努力によるものであると考えられる。<sup>(補注 314)</sup>

日本の説話と昔話、韓国昔話「藁しべ長者」のように、わずかな物から次々と物を交換し、長者になるという話型は、古くはインドの説話集『カター・サリット・サーガラ』や『ジャータカ』などに見られるものである。その二つの話と仏典である『根本説一切有部毘奈耶』卷第三二と『六度集経』卷三第二二（補注<sup>31</sup>）など四つの話を考察した結果、交換するものは異なるが死んだ鼠を始発として、主人公の知恵と商売によって長者になる。その後、大金持ちの商人に（「ジャータカ 四話」の場合は、豪商）恩返しに行く、という共通点を持つことが分かる。

このように、大金持ちの商人は男が長者になった訳を聞いた後、自分の娘を与えるという筋は、極めて類似している。四つの類話とも、交換する物の始まりは死んだ鼠であり、このモチーフは韓国昔話には登場する事例も見られるが、日本昔話「藁しべ長者」の事例には、見られない。

ほかに、『宇治拾遺』の研究の側から『新大系』は『搜神記』を類話・関連話として指摘している。『搜神記』の本文は、

趙固所乘馬忽死、甚悲惜之、以問郭璞、璞曰「可遣數十人持竹竿。東行三十里、有山林陵樹。便攪打之、當有一物出。急宜持歸。」於是如言、果得一物似猿。持歸入門、見死馬跳梁。走往死馬頭、噓吸其鼻。頃之、馬即能起、奮迅嘶鳴、飲食如常。亦不復見向物。固奇之、厚加資給。（30）

というものである。乗っていた馬が死んで、悲しんでいた趙固は郭璞の言うとおりに、東へ三千里ほど行くと猿に似たものを発見する。それを持って帰りに門に入ると、死んだ馬がいたので馬の鼻を吸ったり吐いたりすると、馬が生き返った。こうした展開は、日本の「藁しべ者」話型に類似するが、物物交換によって出世もしくは長者になるという結末は認められない。

さらに、『民話・昔話集作品名総覧』（31）によると、欧州の「有利な交易」型（32）が知られている。このように「藁繩三本」型の類話は日・韓・中だけでなく、インドのジャータカの他、ヨーロッパのメルヘンにも広汎

にみられるものである。

この中から私は、特にアジアの広がりの中で、韓国昔話が日本昔話やジャータカとどこが共通し、どこが異なるかを考えたい。

## 二、諸外国昔話との比較考察

さて、この日韓昔話の亜型（サブタイプ）はどのように共通し、どのように異なるのであろうか。昔話「藁しべ長者」話型を含め、『宇治拾遺』第九六話、『今昔』『古本』の「藁しべ長者」類話の原典として指摘される、①『カタール・サリット・サーガラ』、②『ジャータカ 四話』、③『根本説一切有部毘奈耶 卷三』、④『六度集経』卷三と、四つの話を一覧表にすると、次のようである。

【表2】 諸外国昔話比対照一覧表

主人公	発端	始発	展開	結果
商人の子	偶然、大金持ち商人の話聞いて悟る	死んだ鼠	豆両手一杯↓豆粉・水瓶を木材二本と交換する(毎日、繰り返す) お金 金 材木 店舗を備え取引	娘を与える 恩返し(金の鼠)する
賢い子(父は亡くなる)	豪商の話聞く	死んだ鼠	猫を売って小銭をもらう小銭↓砂糖と水瓶↓ 花↓枯れた小枝や大枝と木の葉↓陶器を焼く人に売る↓馬の草の商売↓船で貿易	娘を与える(豪商の死後、あと続き)
商人の子(父は亡くなる)	偶然、長者の会話を聞いて悟る	死んだ鼠	一握りの豆↓木材一つ↓お金(繰り返す)金の店舗↓貿易(他の商人たちが主人公を殺そうと企てる)	娘を与える 恩返し(金の鼠)する
あると食の子	偶然、大金持ちの話聞いて悟る	死んだ鼠	お金↓野菜(百余り銭) 小さい物からどんどん増やして行く	財物と娘を与える。あと続き 恩返し(黄金の鼠と銀、宝物など)
			大きな財産を築く	
			船も持ち、金持ちになる	
			大金持ちになる	
			長者になる	

【表2】によると、貧しい子が偶然、「賢い人は死んだ鼠ほどわずかな物からでも、成功する」という話を聞いて、実際死んだ鼠から次々と物を増やして長者になり、恩返しとして死んだ鼠の代わりに黄金の鼠を返すという内容である。このような点から四つの昔話は類似するところが多いということが分かる。

特に、『カタール・サリット・サーガラ』と『根本説一切有部毘奈耶』卷三二は、人物の設定や発端、増やしていく物などよく似ている。『根本説一切有部毘奈耶』は『カタール・サリット・サーガラ』に比べ、話が長く、他の商人たちが主人公を殺そうと企てる場面や、船に乗って貿易に行く場面などが長く語られているが、その場面を除くと、ほとんど同じようである。

モチーフから見ると、韓国昔話類型によく似ている。特に「展開」部分の「他の商人たちが主人公を殺そうと企てる場面」は、【表2】の四つの昔話の中でも『根本説一切有部毘奈耶』の特徴的な場面であると言える。前半部分に加え、後半部分でもう一度難題が課せられ、これを解決して幸福になるという型は、「藁縄一本で長者になる」話の後半部分にもみられる。このような後半部分は【表1】によると(⑤⑧⑩⑬⑭⑮⑰⑲⑳㉑㉒番事例)に、人が謎を出して主人公から物や嫁を取ろうとしたが、主人公はその問題を解決するという場面として表れている。これらの分析考察については、別の機会に譲りたい。

ほかに、注目すべきこととして、物を交換していく始まりとなるものが、四話とも死んだ鼠であるという点とである。韓国昔話における「藁しべ長者」の事例の中で、死んだ鼠により物の交換が始まるというモチーフの事例は、『温突夜話』『朝鮮民譚集』『朝鮮昔話百選』『金徳順昔話集』『韓国口碑617』(四七頁・六三頁)『韓国民譚選』『全北民譚 語文叢書18』『任哲宰全集② 平安北道編Ⅱ』(一三一・一三九)などで確認できる。韓国昔話では、今回比較対象とした二八話の中、七話の事例が見られるのだが、このようなモチーフは、現在のところ日本昔話「藁しべ長者」話型には、見当たらない。ところが「ジャータカ 四話」も同様に、死んだ鼠を猫の食糧として売って金をもらおうとあり、それから次々と物を増やして

行き、最後には男の人格に感動した大金持ち（韓国は大臣）が自分の娘を与えるという筋である。この筋は、韓国昔話「粟一粒で」型に近いと考えられる。

## 第五節 日韓昔話の比較考察

すでに、『集成』『大成』に指摘があるように、昔話の研究においては、日本昔話「藁しべ長者」型と同じ話型として、韓国昔話「アワーつぶで大臣の娘を貰う」「藁縄一本で長者になる」という昔話が指摘されており、両国の先行研究によって、韓国・日本昔話「藁しべ長者」話型の出典として、インド説話集『カタ・サリット・サーガラ』、仏教説話集である『ジャータカ』、仏典『根本説一切有部毘奈耶』卷第三二・『六度集経』卷三第二二などが指摘されている。

まず、日本と韓国昔話の話型について考察してみよう。韓国昔話は、交換するモチーフからみると、

### 1 「粟一粒」型

粟一粒↓鼠↓猫↓牛↓大臣の娘

### 2 「藁縄三本」型

一本の藁縄↓壺↓驢馬↓大臣の娘

というふうには、二つの亜型に分けることができる。一方、日本昔話は、

#### a 「三年味噌型」

大根（蓮葉）↓味噌↓刀（武士）

#### b 「観音祈願型」

蜜柑↓反物↓馬↓田畑

という二つの亞型が認められている。日韓昔話の間では、韓国昔話の2「藁縄三本」型と日本昔話の「観音祈願型」とが類似していると指摘されてきた。いうまでもなく、モチーフの違いは、韓国と日本の文化的な相違にもとづいていると言える。

そこで日本と韓国昔話の話型の特徴について考えるために、日本昔話「藁しべ長者」話型と韓国昔話三四の事例の内容を一覧表にした比較表（【表1】）を参照し、比較考察を行うことにしたい。

#### （1）発端1〈主人公〉

日本昔話は「藁しべ長者」分析表によると、「若い子」「頭のきく子」「継子」など様々な人物が登場する。その中でも「親孝行な息子」や「貧しい人」などの例が多く見られ、「観音祈願型」には「貧しいが信仰心が深い若者」の例もある。日本昔話の主人公は、善人という印象を与えるものが多い。

ところが、韓国昔話は、怠け者の登場が多い。主人公の性格は、昔話や説話の結論において、偶然に起きた思いがけない結果ではなく、因果応報による結果というふうに読み取ることもでき、人物設定は展開において大事なモチーフである。

本論において、日本昔話の数に対して比較対象となる韓国昔話の数が若干少ない。日本昔話「藁しべ長者」の場合は、登場人物や語りの展開は多様であるが、韓国昔話の場合は、怠け者の息子が家から追い出される例が多く、二八話の中、一七話にも及んでいる。

#### （2）発端2〈契機〉（（ ）の番号は、【表1】による事例番号を表わす）

両国とも「藁筋」「藁すべ」「藁縄」の事例が多く見られ、藁が基本である。韓国昔話の場合は、二二三「粟一粒で」型において、交換するものの始発は「粟」であり、日本昔話は、山口県大島郡東和町「馬の毛」<sup>(33)</sup>のような事例もあるが、あまり変わりはない。

また、日本昔話の場合、「観音祈願型」は、具体的な採録としては「観音のお告げ」<sup>(34)</sup>、新潟県北蒲原郡豊



浦町「神様の夢のお告げ」<sup>(35)</sup>、鹿児島県薩摩郡下甕島「仏のお告げ」<sup>(36)</sup>などの事例が見られるが、【表1】によると、韓国昔話の場合は、「初めに見つかった物を持って東へ向って歩け」という「先祖のお告げ」(19)の例一つのみである。

### (3) 交換

日本…①観音のお告げ↓藁↓蜜柑↓絹か反物↓馬↓家・畑↓長者になる

↓「観音祈願型」

難題↓藁↓大根↓三年味噌↓刀↓米↓長者になる

↓「三年味噌型」

韓国…①忘れ者↓親が追い出す、藁縄↓水がめ↓米↓馬↓村長の娘↓**謎を出す**

↓「藁縄三本型」

②若い男(科挙試験受けに)↓粟↓一粒↓鼠↓猫↓雄牛↓**大臣の娘との結婚** ↓「粟一粒で型」

前述したように、日本昔話は「観音祈願型」「三年味噌型」は、何を交換するのかということによって、分類されてきた。韓国は「藁縄一本型」と「粟一粒で型」の二つの型に分けられる。同じ話型と指摘される日本の「観音祈願型」と韓国の「藁縄三本型」には、「藁すべ」と「藁縄」という、ほとんど価値のないものから次々と物を交換して行く点で同じである。特に「観音祈願型」と「藁縄三本」型の特徴として馬が登場し、死んだ馬が生き返って、その馬が幸運を呼ぶという場面は、他の話型には見られない点が挙げられる。日本昔話の場合は観音のお告げによるか、または偶然な出会いによって、思いがけない幸運を手に入れたという例が多い。

しかし、韓国では日本のように、善意の交換で利益を得るという型のほか、預けたものがなくなると、代わりに、もっと高価なものを求め(①②④⑥②③②④②⑤②⑥③①②番事例)、利益を得るというモチーフが多く見られる。あるいは、すでに死んだ人をまるで生きているように人をだまして、利益を得るという事例(⑤⑨⑩⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲)も見られる。

### (4) 結末

さらに、日本昔話は幸福な結婚が基本で、兵庫県宍粟郡千種町「大家の婿になる」<sup>(37)</sup>、鹿児島県大島郡徳之島町「姫君が嫁になる」<sup>(38)</sup>、岐阜県吉城郡（上宝村）「姫様の婿になる」<sup>(39)</sup>、愛媛県北宇和郡三間町「長者の婿になる」<sup>(40)</sup>、鳥取県岩美郡国府町「婿になる」<sup>(41)</sup>と六つの例がある。その中では、鳥取県岩美郡国府町「婿になる」話を除く五話が、身分の高い人との結婚という結果である。「三年味噌型」における「刀」の場合、日本においては武士という身分との関わりが考えられる。

一方、韓国昔話の場合、長者になる結果のほか、村長になるか（8）、または「粟一粒で」型の「大臣の娘と結婚」のように、身分の高い女性との結婚（①②④⑤⑱⑲⑳㉑㉒）という結末もみられる。身分の高い女性との結婚というのは、身分社会であった朝鮮においては、出世の意味も読み取れる。

### おわりに

（一）本稿における考察の結果、日本では、①難題、藁、大根、三年味噌、刀、米、長者になるという「三年味噌型」と、②観音のお告げ、藁、蜜柑、絹か反物、馬、家、畑、長者になるという「観音祈願型」という二つの系統があり、『宇治拾遺』『今昔』『古本』の説話は、「観音祈願型」に属する。

一方、韓国には、①若い男、科挙試験を受けに出る、粟一粒、鼠、猫、雄牛、大臣の娘と結婚といった。「粟一粒で型」と、②怠け者、家に出される、藁縄、水かめ、米、馬、村長の娘 謎、長者になるという「藁縄三本」型があることが分かった。

（二）右の事項の範囲からでも、交換の成立する条件が異なる。つまり、韓国昔話1「粟一粒」型では、例えば「鼠が粟粒を食べた」ことから、その責任を求めて鼠を捕まえてくることを求める。いわば、交換は要求した結果として生まれている。

ところが、韓国昔話2「藁縄三本」型では、やむをえない状況において交換が生まれるもので、そのこと

が観音という超越的な存在の介在する必然性とかかわる。これは日本昔話の交換とよく似ている。

(三) 日本の昔話、『宇治拾遺』や『今昔』では(特に『今昔』の場合)、観音に助けを求め、お告げによって、偶然な出会いから物の交換ができて、裕福(または成功、出世)になるという、宗教的思想を背景とする事例が多く見られる。しかし、韓国昔話の事例の中では「先祖のお告げ」の事例は見られるが、「観音のお告げ」の事例は現在のところ見当たらない。

一方、韓国昔話には、相手の責任を求めて替わりのものを要求するとか、人をだまして幸運を手に入れるとかという事例が多くみられる。これに対して、日本昔話・説話では、観音、地藏に助けられるか、お告げを受けるというモチーフが中心で、登場人物たちはどちらかというを受け身であって、偶然となりゆきに身を任せるといった印象が強い。

このような点から考えると、韓国昔話では「先祖のお告げ」というモチーフがあることから、儒教思想が見られるが、それに比べ、日本昔話では仏教的要素が強調されていると考えられる。

『ジャータカ』や仏典を出典としながら、韓国昔話「薫しべ長者」において、あまり仏教的要素が読み取れないということについて、成者説氏は「朝鮮時代には、仏教が<sup>(42)</sup>圧迫されていたことと、崇儒政策(儒教を崇めるといふ政策)によって、仏教的色彩からほとんど分離していった」からだ<sup>(42)</sup>と、指摘している。

(四) 日本昔話の場合、結婚の事例六話の中、五話が身分の高い人との結婚である。「三年味噌型」における「刀」は日本においては武士を意味するであり、韓国昔話と同様に身分や、出世との関わりが考えられる。一方、韓国昔話には、長者や出世のほか、大臣の婿になるなど結婚に成功する事例が多く見られるが、日本昔話は、婿になる話は少なく、長者になるといふ事例が多い。韓国昔話において身分の高い人との結婚の事例からみると、身分社会であった朝鮮時代において、出世が特に強調されている。

(五) 日本昔話・説話には現在のところ、失敗譚は見当たらないが、韓国昔話は次々と物を交換し、最後に

は、必ずしも裕福・結婚に成功するという事例だけではなく、③⑥⑦⑪⑲⑳㉓㉔㉕番事例のような失敗譚も見られる。

このほか、『根本説一切有部毘奈耶』にみえる「他の商人たちが主人公を殺そうと企てる場面」と、「藁一本で長者になる」型とが、前半と後半というふう複合している亜型も存在する。

さらに昔話の構成からみると、先行研究において、韓国昔話「藁繩三本」型と日本昔話「藁しべ長者」「観音祈願型」とが類似すると指摘されてきたが、今回の考察により、韓国昔話「藁繩三本」型は、むしろジャータカや仏典『根本説一切有部毘奈耶』に近いことが確認できたことは注目できる。

#### 注

- (1) 関敬吾『日本昔話大成』第3巻 本格昔話二、角川書店、一九七八年。
- (2) 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。
- (3) 福田晃「民間における仏教的因果思想の根——藁しべ長者」をめぐって——『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第一一、至文堂、一九七五年。
- (4) 稲田浩二・大島建彦『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年。
- (5) 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』有精堂出版、一九七〇年
- (6) 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九七五年
- (7) 佐藤謙三編『鑑賞日本古典文学 今昔物語・宇治拾遺物語』角川書店、一九七六年。
- (8) 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』新潮社、一九八五年。
- (9) 三木紀人・小林智昭・増古和子校注『宇治拾遺物語評釈』武蔵野書院、一九八六年。
- (10) 注(2)に同じ。

(11) 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年。

(12) (2)に同じ。

(13) 池上洵一「説話集と口承説話―藁しべ長者の場合―」『鑑賞日本古典文学 卷13 今昔物語集・宇治拾遺物語』角川書店、一九七六年。

(14) 柳田国男「藁しべ長者と蜂」『定本柳田国男集』第六卷、筑摩書房、一九六三年。

「人によると『宇治拾遺』は『今昔』を読んで書き直したように言うらしいがそれはまだうっかりとは信じられない。如何にも双方にも共通の話は十幾つかあるが、一つの土地ではほぼ同じ時代に、説話集を書けば重なるのは当たり前で、当時この話の有名だった証拠にはなっても、乙が甲から採ったという事にはなり難い。寧ろ、知っていたら避けたかと思うから、是は御互いに見せ合いはなかった証拠かもしれぬ。」

(15) ①志村有弘・諏訪春雄編『日本説話伝説大事典』勉誠出版、二〇〇〇年、一〇三三頁。

②注(4)に同じ、一〇四〇頁。

③乾克己共編『日本伝奇伝説大事典』角川書店、一九八六年、九六一頁。

(16) 水沢謙一『おぼばの昔ばなし』野島出版、一九六六年。

(17) 「藁しべ長者」柳田国男『甕島昔話集』三省堂、一九四四年。

(18) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、一九七六年。

(19) 「二一・粟粒で政丞の娘を貰ふ」孫晋泰『朝鮮民譚集』郷土研究社、一九三〇年、一七九―一九八頁。

(20) 「アワーつぶで大臣の娘を貰う」関敬吾・崔仁鶴共編『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、一九七四年。

(21) 「藁縄一本で長者になる」 崔仁鶴『韓国の昔話』三弥井書店、一九八〇年。

(22) 注(4)に同じ。

(23) 韓国精神文化研究院編『韓国口碑文学大系』韓国精神文化研究院、一九七八年(全八二冊、別巻三冊、総計一五一〇七話収録)。

(24) (1) 二三三「藁縄三本」型

(太字で表した題名は日本語訳本を表し、日本語に翻訳紹介されていない韓国の事例は、私に日本語で題名を付した)。

① 「藁縄三本で嫁をもらう」 任哲宰『任哲宰全集② 韓国口伝説話―平安北道編Ⅱ』平民法社、一九八八年、一四〇～一四一頁(一九三二年七月、平安北道宣川郡宣川邑採録)。

② 「87・愚か者」 任東権『韓国の民譚』瑞文堂、一九七二年、一八九～一七〇頁(熊谷治訳『韓国の民話』雄山閣出版、一九九五年、一二一～一二二頁)。

③ 「藁縄三本で」 韓相壽『韓国民譚選』正音社、一九七四年、一四七～一五二頁(忠清南道燕岐郡鳥致院邑、一九七四年採録)。

④ 「3・藁縄一本で長者になる」 崔仁鶴『世界民間文芸叢書 韓国の昔話』三弥井書店、一九八〇年、一六頁(忠清南道青陽郡、一九七三年採録)。

(以下、⑤～⑧は『韓国口碑文学大系』である)

⑤ 「藁縄三本」 『韓国口碑文学大系 1-2 京機道驪州郡』三七九頁。

⑥ 「藁縄三本が…」 『1-3 京機道楊平郡』二八九頁。

⑦ 「藁縄三本」 『1-7 京機道江華郡』一四三頁。

⑧ 「藁縄三本で婿になった話」 『1-7 京機道江華郡』二七五頁。

- ⑨ 「藁縄三本」 『1-9 京機道龍仁市』二五七頁。
- ⑩ 「怠け者の息子の藁縄三本」 『2-6 江原道潢城郡(1)』四八五頁。
- ⑪ 「藁縄三本で長者になった男」 『5-4 全羅北道郡山市沃溝郡』三一八頁。
- ⑫ 「謎に勝って長者になった怠け者」 『5-6 全羅北道井州市・井邑郡』二七一頁。
- ⑬ 「藁縄で幸運をもたらした話」 『6-1 全羅南道珍島郡』四〇九頁。
- ⑭ 「藁縄三本で馬と換えた話」 『6-2 全羅南道咸平郡』五七六頁。
- ⑮ 「藁縄三本」 『6-5 全羅南道海南郡』一八一頁。
- ⑯ 「トンケの知恵」 『6-5 全羅南道海南郡』三五七頁。
- ⑰ 「藁縄三本さえあれば」 『6-6 全羅南道新安郡(1)』二四六頁。
- ⑱ 「藁縄三本が嫁三人に」 『6-7 全羅南道新安郡(2)』四七頁。
- ⑲ 「粟稻三本で長者になった話」 『6-7 全羅南道新安郡(2)』六三頁。
- ⑳ 「藁縄三本」 『6-1-2 全羅南道寶城郡』五八七頁。
- ㉑ 「藁縄三本と換えた嫁」 『7-1-0 慶尚北道奉化郡』八八〇頁。
- ㉒ 「藁縄三本で長者になった息子」 『7-1-3 大邱直轄市』二〇三頁。
- ㉓ 「愚か者の金儲け」 『8-7 慶尚南道密陽郡(1)』四八八頁。
- ㉔ 「知恵のある男」 『8-1-4 慶尚南道河東郡』二一九頁。
- (25) (2) 「藁一粒で」型

㉕ 「94. 一粒の粟」鄭寅燮『温突夜話』日本書院、一九二七年（『世界民間文芸叢書 別卷三 温突夜話』三弥井書店、一九八三年、四二二〜四二四頁）／「二二・粟粒で政丞の娘を貰ふ」孫晋泰『朝鮮民譚集』郷土研究社、一九三〇年、一七九〜一九八頁。

- ②⑥ 「キビの稲一本でだんだん成功していたが」任哲宰『任哲宰全集② 韓国口伝説話―平安北道編Ⅱ』平民社、一九八八年、一三九―一四〇頁（一九三四年七月、平安北道宣川郡山面採録）。
- ②⑦ 「粟稲一本でどんどん成功したが」任哲宰『任哲宰全集② 韓国口伝説話―平安北道編Ⅱ』平民社、一九八八年、一三七―一三九頁（一九三六年一二月、平安北道宣川郡深川面採録）。
- ②⑧ 「粟一粒で政丞の娘をもらった人の話」朴英晩『朝鮮伝来童話集』学芸社、一九四〇年、七一―七六頁（咸鏡南道咸興市採録）／「アワーつづで大臣の娘を貰う」関敬吾・崔仁鶴『朝鮮昔話百選』日本放送出版協会、一九七四年、二三五―二三八頁。
- ②⑨ 「粟一粒で結婚したチョンカック」李元寿『伝来童話集』現代社、一九六三年、二三四―二三七頁。
- ②⑩ 「粟一粒で嫁をもらうまで」崔仁鶴共編『韓国伝来童話全集Ⅰ』章原社、一九七〇年、八四―八八頁。
- ③① 「粟一粒で」任哲宰『昔話選集3 韓国編』教学社、一九七二年、九八―一〇六頁。
- ③② 「粟一粒で出世した男」朴栄濬『韓国の民話と伝説 高麗編』韓国文化図書出版社編集部訳、韓国文化図書出版社、一九七五年、二〇五―二〇八頁（慶尚北道漆谷郡採録）。
- ③③ 「51. 怠け者と粟稲一本」崔来沃『語文叢書018 全北民譚』螢雪出版社、一九八二年、一七六頁（一九七七年、全羅北道全州市豊南洞採録）。
- ③④ 「なまけ者の嫁とり」依田千百子・中西正樹『金徳順昔話集―中国朝鮮族民間故事集―』三弥井書店、一九九四年、二六一頁。
- (26) 「鼠という名の商人の物語」『カタ・サリット・サーガラ』岩波文庫、一九五七年。
- (27) ① 「ジャータカ四話 チュッラカ豪商前生物話」中村元『ジャータカ全集1』春秋社、一九八四年。  
② 成耆説（「藁繩三本」『韓国説話の研究』韓国学研究所研究叢書一号、仁荷大学校出版部、一九



八八年、一一六―一三九頁)により、日本昔話「藁しべ長者」の類話として指摘される。

(28) 『高麗大蔵経根本説一切有部毘奈耶外四部』第二二卷、二六四頁上―二六六頁中／『大正新脩大蔵経』二三卷、八〇〇頁上―八〇一頁中。

(29) 『高麗大蔵経 月燈三昧経 外百五二部』第一一巻、三〇二頁下―三〇三頁上／『大正新脩大蔵経 本縁部上』第三巻、大正新脩大蔵経刊行会、一九二四年、一三頁下―一四頁上。

(30) 『搜神記』第三巻、六二巻(本文引用は、『干寶搜神記』白帝社、二〇〇四年)

(31) 『民話・昔話集作品名総覧』紀伊国屋書店、二〇〇四年。

(32) ①「テュルランデユ(フランス)」小澤俊夫『世界の民話2 南欧』ぎょうせい、一九七七年、一三四頁。

②「雌犬がそいつの鼻を食べた(ブルガリア)」小澤俊夫『世界の民話4 東欧I』ぎょうせい、一九七七年、二八三頁。

③「貧しいジプシー」小澤俊夫『世界の民話5 東欧II』ぎょうせい、一九七七年。

(33) ④「かほうにくるまったハンス」金田鬼一訳『グリム童話集三』岩崎美術社、一九八一年、三八頁。  
①「藁しべ長者 類話2」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第20巻 広島・山口』同朋舎出版、一九八七年、三七三頁。

(34) ①「藁しべ長者 類話3」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第25巻 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八七頁。

②「わらしび長者」田畑英勝『日本の昔話7 奄美諸島の昔話』日本放送出版協会、一九七四年、一三二頁。

③「藁しべ長者(その一)」岩倉市郎採録、柳田国男『日本昔話記録11 鹿児島県甕島昔話集』三

省堂、一九七四年、(新)七頁、(旧)八頁。

④ 「藁しべ長者(類話1)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第8巻 群馬・栃木』同朋舎出版、一九七八年、三〇二頁／「藁しべ長者(類話2)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第20巻 島根・山口』同朋舎出版、一九八七年、三七三頁。

(35) 「241. 藁しべ長者」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第10巻 新潟』同朋舎出版、一九七四年、四七三頁。

(36) 「藁しべ長者 その二」岩倉市郎採録、柳田国男『日本昔話記録 11 鹿児島県甑島昔話集』(新)九頁、(旧)一〇頁。

(37) 「148. 藁しべ長者(原題・ワラスべ長者)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第16巻 兵庫』同朋舎出版、一九七八年、二六四頁。

(38) 「藁しべ長者(類話2)」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観 第25巻 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八七頁。

(39) 「藁しべ長者(類話1)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第13巻 岐阜・静岡・愛知』同朋舎出版、一九七八年、三二六頁(『昔話研究』復刻版2-11、岩波美術社、一九八〇年、三五頁)。

(40) 「わらしべ長者(類話3)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観 第22巻 愛媛・高知』同朋舎出版、一九七八年、二二二頁。

(41) 「148. 藁しべ長者」『日本昔話通観 第17巻 鳥取』同朋舎出版、一九七八年、三九〇頁。

(42) 成者説「藁縄三本」『韓国説話の研究』韓国学研究所研究叢書、一号、仁荷大学校出版部、一九七八年、一三八頁。

#### 第四章 『宇治拾遺物語』第九二話「五色鹿事」考

―日韓比較文学の視点から―

##### はじめに

本章は、『宇治拾遺』の説話第九二話「五色鹿事」を取り上げたい。『新大系』<sup>(1)</sup>は、本説話の出典について、同話(1)に、『今昔』第卷五第一八、

同話(2)に、『仏説九色鹿経』、『法苑』五〇・背恩篇五二、『経律異相』一一、『六度集経』六・五八、「諸経要集八背恩縁三」、「金言類聚抄」二二三、『御伽草子』「るし長者」

類話・関連話に、「菩薩本縁経下」鹿品七、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』一五「摩訶僧祇律」一、「莫高窟壁画」、「ジャータカ 四八二」<sup>(2)</sup>「ルルの前生物語」、「大成」<sup>(2)</sup>二三四「報恩動物・恩知らずの人」、などの文献を指摘している。

序章において取り上げたように、『宇治拾遺』の中では、第九二話「五色鹿」のほか、『法苑』や『ジャータカ』などを出典とする説話が多数存在する。その中から、私は、すでに第八五話「留志長者事」<sup>(3)</sup>と、第九六話「長谷寺参籠男利生に預かる事」<sup>(4)</sup>について韓国昔話との比較考察を試みた。それに続き、本章では『宇治拾遺』第九二話「五色鹿事」について考察したい。

「五色鹿」の伝承は、インドのジャータカ、中国仏典、そして日本の『今昔』といった文献の他、『大成』などに紹介されているように、口承による昔話などが幅広く分布している。本論では、日本・韓国・中国の間に共有されている話型を明らかにするとともに、日本昔話「五色鹿」及び『宇治拾遺』「五色鹿事」の表現の特質について、日韓比較文学の視点から考察したい。

## 第一節 『宇治拾遺物語』「五色鹿事」の話型と構成

『宇治拾遺』第九二話「五色鹿事」の出典は、各諸注<sup>(5)</sup>積書の指摘をまとめると、『今昔』巻五・一八と同話であり、『法苑珠林』（以下、『法苑』）『仏説九色鹿経』である。

しかし、『宇治拾遺』は、本生譚の部分を削っており、『仏説九色鹿経』に比べれば、仏教色を失って慈悲報恩の大切さを説く教訓的な動物説話に変えている。この系統の説話は、後代まで説教師によって語られたものとなっており、その後、昔話の形態をとって伝えられていると考えられる。このように『宇治拾遺』「五色鹿事」は、仏教的な色を失って出典より世俗説話化されたため、昔話「報恩動物・恩知らずの人」に近いと言えよう。<sup>(補)</sup>

注 4-1-1)

まず『宇治拾遺』第九二話「五色鹿事」から事項を取り出す。その中で、説話を構成する骨格をなす基本的事項と、付加的に形成されている説明的事項とを区分することにしたい。すると、次のような結果が得られる。太字が基本的事項である。

### 1 天竺に、身の色は五色で、角の色は白い鹿がいた。

鹿は、人に知られず深い山に住んでいた。

鹿は、山で烏を友として過す。

ある時、男が川に流れて死にそうになる。

### 5 鹿は、男を助ける。

男は、鹿に恩を返すと言う。

鹿は男に、自分の居場所を人に語ってはいけなさと頼む。

鹿は、人が知ったら皮を取るため殺されると言う。

男は、何度も契り約束する。

10 男は、里に帰えって月日を送れても人に話さない。

国の后は、五色の鹿の夢を見る。

后は大王に、五色の鹿を探して欲しいと申し上げる。

大王は、五色の鹿を探した者に金銀を与えると命を下す。

男は、大王に鹿の居場所を申し上げる。

15 男は、大王に鹿を捕らえ差し上げると申し上げる。

大王は、多くの狩人をつれて狩りに出る。

大王は、男を道案内に連れて行く。

鳥が、大王と狩人たちを見て驚く。

鳥は声をあげて泣いて、鹿を起こす。

20 鳥は、鹿に大王と大勢の狩人をつれて来ると言う。

鹿は、大王の御輿のそばへ歩み寄る。

狩人たちは、鹿に矢を射すとす。

大王は、狩人を止めさせる。

鹿は大王に、どうして自分の居場所を知ったかと聞く。

大王は、男を指す。

鹿は、顔のあざを見て自分が助けた男であることが分かる。

鹿は男に、人に知らせないと契ったことを忘れたかと恨む。

鹿は男に、恩を忘れたと責める。

鹿は大王に、男の命を助けた事情を申す。

30 鹿は、男に深い恨みを持って泣く。

大王は、鹿の話聞いて涙を流す。

大王は鹿に、畜生なれども慈悲をもて人を助けたと褒める。

大王は、恩を忘れた男を畜生だと言う。

大王は、男の首を切る。

35 大王は、鹿を殺す者は罪を問わずと命ずる。

その後は、天下安全で国は豊かになった。(6)

1 行目から5行目までは鹿が危機に落ちた人間を助けるといふ、この説話の設定部分である。

6 行目から10行目までは、鹿が山深く隠れている理由とともに、他にこの場所を言っていないといふ鹿と助けられた人間と約束する場面である。命を助けられた人間の鹿に対する感謝の気持ちが読み取れる、この説話の発端部分といえる。しかし、13行目から17行目は欲に目が眩んで恩を忘れてしまう人間の姿が語られている。さらに、18行目から22行目までは鹿が危機の直面する場面で、26行目から30行目までは、人間の裏切りに対する鹿の恨みと悲しみが読み取れる。ここまでは展開部分である。その後、31行目から36行目までは、鹿からこれまでの事情を聞いた王様は感動して男を殺し、鹿は助かるという結末部分である。

それではまず、鹿の表現について比較をすると、鹿は九色・五色と二つの表現があることが分かる。

① 『仏説九色鹿経』

「菩薩身爲九色鹿。其毛九種色」

② 『法苑』卷五〇背恩篇

「菩薩身爲九色鹿、其九種色、角白如雪」

③ 「ジャータカ・四八二 ルルの前生物語」

「身に皮は、みがきぬかれた黄金の延べ板のようであった。前足後足は「赤い」ラック染料をほどこされてるようである」

④ 『今昔』巻五・一八

「身ノ色ハ九色ニシテ角ノ色ハ白キ鹿住ケリ」

⑤ 『宇治拾遺』九二話

「身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり」

⑥ 日本昔話「五色鹿」類型

「五色の鹿」、「五四の鹿」

鹿の色について、『宇治拾遺』及び日本昔話「五色鹿」では五色とあり、日本昔話は、五四とある事例も見られる。これについては、『法苑』自身の表現において明らかのように「『仏説九色鹿経』は菩薩というものの本質」を示すものであり、「五色」も「超越的な存在」を示すものであり、「金色を意味する」という指摘がある。(7)

## 第二節 日本昔話「五色鹿」の展開と話型

「五色鹿」類型の説話は、ヨーロッパ全域からインド、東南アジア、アフリカに及び、日本では太平洋岸に厚く、東北地域から北海道を経て九州にまで広く分布している。(8)

さらに、日本昔話「五色鹿」は、『大成』において、分類番号二三四「人間無情（報恩動物・恩知らずの人間）」に分類され、一〇話の事例が挙げられている。さらに、『集成』には、二三四A「人間無情」、二三四B「人忘恩」とあり、『通観』<sup>(10)</sup>には、分類番号402「人間忘恩」、403「狩人非情」と、二つの話型に分類されている。

これらの先行研究を整理すると、日本昔話「五色鹿」の採録事例は、大きく二つの話型に分けられる。

【表1】日本昔話「五色鹿」類話の採録事例一覧表(1)

(A)「恩知らずの人間」の話型

話	発端		報恩(1)	裏切る者(恩忘れ)	助けた者は	事件	報恩(2)	結果
	助けた者	助けられた者						
①	五色の鹿	木り	なし	鹿の居場所を口外する	王様 鹿狩りに来る	鹿が王様に、訳を話す	/	◇鹿狩り禁止 ◇死刑
②	五匹の鹿	狐師	なし	鹿の居場所を口外する	殿様 鹿狩りに来る	鹿は殿様に、事情を話す	/	◇命を助かる ◇国から追い出す
③	五匹の鹿	狩人	なし	鹿の居場所を口外する	殿様 鹿狩りに来る	鹿は殿様に、事情を話す	/	◇鹿は助かる ◇殿様にお詫ひ
④	鹿	狐人	なし	鹿の居場所を口外する	天子様 鹿狩りに来る	鹿は天子様に、事情を話す	/	◇助かる ◇殺される
⑤	大鹿	平作とい う若者	なし	鹿の居場所を口外する	長者 鹿狩りに来る	鹿は長者に、事情を話す	/	◇助かる ◇恥ずかしく 姿を隠す
⑥	五匹の鹿	狐師	なし	鹿の居場所を口外する	殿様 鹿狩りに来る	鹿は殿様に、事情を話す	/	◇助かる ◇鼻流しになる

(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型

⑦	一人の男	人	蛇・狐	蛇・素・金蔵・米蔵	人・殿様に訴える	死刑判決	狐・牢屋から助け	◇冤罪がはれる ◇死刑
⑧	舟に乗ったある人	人	クチナ・ 蛇・狐	狐・銭が入った塚を 教え	代官所に報告	牢屋に入れられる	蛇・薬を渡す	◇許される
⑨	甚五郎	人	蛇・狐・亀	狐・大水から甚五郎を 助ける 狐・銭	奉行所に報告	牢屋に入れられる	蛇・薬を渡す	◇赦されて、褒美をもらう



⑩	信心深いお百姓	人	へび・鼠		人・御上に誣告	牢屋に入れられる		鼠・へび・牢屋から百姓を助ける	○助かる
⑪	旅人(医者)	人	蛇・狐		人・役人に誣告	牢屋に入れられる	蛇が、長者の足を噛む		○厚いお札 ●牢屋に入れられる
⑫	税金集めネセ	青年	子犬・猿	子犬・猿・金籠を盗んで逃げようとする 青年を捕まえる	人・集めた税金を盗んで逃げようとする			○金籠を取り戻す ●追い出す	
⑬	旅人(医者)	男	蛇・狐			牢屋に入れられる	蛇が、わざと長者の足を噛む	●長者に、牢屋に いる医者のみが、足を治せると告げる	○釈放される ●牢屋に入れられる
⑭	親切なお爺さん	人	犬・狐・まむし		人・お爺さんのお金を奪おうとする		まむしが、わざと殿さんの足を咬む	●まむし・薬を渡す ●狐・逃査に化けてお爺さんを助ける	○殿様の足を治療してお金をもらう

つまり、日本昔話「五色鹿」は、設定の差異から生じる主題の異なりによって、(A)「恩知らずの人間」の話型、(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型という、二つの亜型に分けることができる。

『宇治拾遺』の昔話関連話群の中から、一三章において取り上げた、日本昔話の「腰折雀」や「瘤取り爺」「藁しべ長者」について調べた限りでは、全国的に採録事項は多いが、「五色鹿」の採録事例は少ない。これまでに私が調べ得た資料は左のとおりである。

(A)「恩知らずの人間」話型

【表1】によると、次に取り上げる①②③④⑤⑥番の事例が、この(A)「恩知らずの人間」に属する。

この話型は、(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型とは違い、五匹の鹿(②『旅と伝説』、③『下野昔話集』)か、五色の鹿(①「人間忘恩・類話2」『日本昔話通観 岐阜・静岡』)など必ず鹿が登場し、助けられた者は狩人であること(②『旅と伝説』、③『下野昔話集』、④『富山県明治期口承文芸資料集成』)が、一つの特徴である。その中では、特に①「人間忘恩(類話2)」、②「五匹鹿の話」『旅と伝説』は『宇治拾遺』に類似する話型をもつことが分かる。

(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型

【表1】によると、⑦～⑭番の事例がこの話型に属する。(B)話型の場合は、溺れた人を助けたのは人だけではなく、蛇(⑦)『甌島の昔話』、⑧『月刊昔話研究』、⑩『夢買長者―宮城の昔話』、⑪『聴耳草紙』) 狐(⑦)『甌島の昔話』、⑧『月刊昔話研究』、⑨『日本全国国民童話』、⑪『聴耳草紙』)、亀(⑨)『日本全国国民童話』、鼠(⑩)『夢買長者―宮城の昔話』などの動物の場合があるが、鹿の登場する事例は見当たらない。その後、助けられた動物は恩返しをするが、人は恩を忘れるという事が主題である。

それに対し、(A)の亜型の場合、鹿が助けたのは狩人という人のみである(②『旅と伝説』、③『下野昔話集』、④『富山県明治期口承文芸資料集成』)。

ここで注目したいのは、(A)(B)どちらの話型とも、背信する主体は人であることと、鹿と狩人という設定である。鹿の立場に立つと、人を助けた後、わが身に危険が起きる恐れがある。そのことを強調することで我が命を賭して人の命を助けたことが印象つけられ、鹿の恩が強調されることになるだろう。

さらに、恩返しの方法としては、お金のある場所を教える(⑧『月刊昔話研究』)、またお米や家(⑦『甌島の昔話』)を与える事例もみられる。その他、洪水に流されている主人公の命を助けてあげるといふ事例もないわけではない(⑨『日本全国国民童話』)。(B)話型は『ジャータカ 七三話』<sup>(12)</sup>によく類似する。

### 第三節 韓国昔話の類話

前節では、日本昔話「五色鹿」について二つの亜型に分類し、考察した。この分類によると、韓国昔話には日本昔話「五色鹿」(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型と一致する。

韓国昔話の話型について先行研究は、次のように分類している。

一、崔仁鶴氏<sup>(13)</sup>による韓国類話の話型

118 「老人に救われた鹿と蛇と男の子」

(1) 洪水と救済

- ① 川の上流の方で大雨があったらしく洪水になった。
- ② 老人が川に行ってみると、鹿・蛇と少年が激流に流されて助けを求めているので、救いあげてやった。
- ③ 鹿と蛇はどこかに去ったが少年は孤児になったので老人が育てることにした。

(2) 鹿と蛇の報恩と少年の背信

- ① ある日、鹿は老人に宝物が埋もれている場所を教えてあげ、おかげで金持ちになった。
  - ② 養子になった若者は財産に目がくらみ、官庁に偽証で老人を訴えた。
  - ③ 老人が投獄された時、蛇が毒を除く薬を与えたので、それで王妃の傷を治して釈放された。
  - ④ 官庁では若者が偽証をしたので投獄した。
- その他、次のように(変化)した類話もみられる。
- ・ 王様が蛇に噛まれ死にそうだったので老人が治してあげた。
  - ・ 郡守の母が蛇に噛まれ死にそうになったのを老人が治してあげた。

二、『韓国口碑文学大系』における「五色鹿」類型

韓国精神文化院編『韓国口碑』に、「五色鹿事類型の話」として分類された説話は、総計一六話である(類系分類 421-1 「獣は報恩するものの人は裏切る」)。

① 「人は救えない」 1-6 京畿道安城市採録

② 「鹿の報恩と人間の背信」 2-2 江原道春川市春城郡採録

- ③ 「人を救った鹿と大蛇」 2-9 江原道寧越郡寧越邑採録
  - ④ 「恩を裏切った話」 3-2 忠清北道清州市清原郡採録
  - ⑤ 「人不救の由来」 4-3 忠清南道牙山市新昌面採録
  - ⑥ 「川で（溺れている）人を救ったが、人でなしだ」 5-1 全羅南道南原郡採録
  - ⑦ 「恩返した蛇と鹿」 6-4 全羅南道順天市松光面採録
  - ⑧ 「恩返した猪とアリ」 6-6 全羅南道新安郡押海面採録
  - ⑨ 「恩返した大蛇」 6-7 全羅南道新安郡古蘭里採録
  - ⑩ 「獣は救っても人は救うな」 6-1 1 全羅南道和順郡採録
  - ⑪ 「雖獣援 人不援」 6-1 1 全羅南道和順郡採録
  - ⑫ 「恩返した虎」 6-1 1 全羅南道和順郡採録
  - ⑬ 「甲斐ない人間救済」 7-9 慶尚北道安東市礼安面採録
  - ⑭ 「恩返した獣と裏切った人間」 7-1 1 慶尚北道軍威郡孝令面採録
  - ⑮ 「獣は救っても人は救うな」 8-3 慶尚南道晉州市寺奉面採録
  - ⑯ 「恩返した獣と裏切った人間」 8-5 慶尚南道居昌郡加旨里採録
- その他、私が見つけた資料として、次のような事例がある。
- ⑰ 「鹿の恩返し」 5-7 全羅北道井州市井邑採録

### 三、その他、韓国の昔話集

（⑱番〜㉑番事例は、日本語訳本である）

⑱ 「報恩と忘恩」『伝説の朝鮮』三輪環、博文館、一九一九年、一九〇頁。

①9 「獐と蛇の御恩返し」中村亮平「朝鮮の神話伝説」一九二九年、『世界神話伝説大系12』名著普及会、一九七九年改訂版、二二四頁。

②0 「鹿と蛇」(一九三五年、慶尚南道統営で採集、語り手・金琪驩)鄭寅燮『温突夜話』一九八五年、三弥書店、三六九頁。

②1 「老人に救われた鹿と蛇と男の子」(一九六九年採集、語り手・朴洪根、咸鏡北道城津出身)崔仁鶴『朝鮮昔百選』日本放送出版協会、一九七四年、六七頁。

②2 「仏典から来た民族説話(1)洪水説話」(一九二三年釜山市鎮区採集、語り手・金升泰)孫晋泰『韓国民族説話の研究』韓国文化叢書第一輯、乙酉文化社、一九四七年、一六六頁。

②3 「老人と養子と鹿と蛇」(咸鏡南道咸興市採集)朴英晩『朝鮮伝来童話集』学芸社、一九四〇年、三五頁。

以上、取り上げた総計二三話の韓国昔話の事例が、日本昔話「五色鹿」の類話(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型に当たるということも興味深い。

#### 第四節 日本昔話「五色鹿事」類型と韓国昔話との比較

本節では、私が作成した『宇治拾遺』第九二話「五色鹿事」日本昔話類話比較表【表1】をもとに、【韓国類話対照表】【表2】との比較考察を試みたい。

第三節、(2)『韓国口碑』及び(3)韓国昔話類話において取り上げた、韓国昔話の採録事例二三話を整理し、【表2】とする。

【表2】〔韓国昔話の採録事例一覽表〕

話	発端			展開			結果
	助けた者	助けられた者	助けた後	報恩(1)	裏切る者(人間の背信)	報恩(2)	
①	船頭	人	蛇・虎	虎・高麗人参の畑	人・官家に誣告	官長が蛇に咬まれる	蛇・葉っぱ(毒薬) ●褒美をもらう ●捕まえる
③	老人	子共	鹿・大蛇	鹿・金のある場所	養子(Ⅱ) ↓ Ⅲ 官庁に誣告	村長が大蛇に咬まれる	大蛇・解毒薬 ●罪がはれる
④	二人の老人	人・子とも	鹿・大蛇	鹿・山参の畑	養子(Ⅱ) ↓ Ⅲ 官庁に誣告	官庁の娘が大蛇に咬まれる	大蛇・葉っぱ(毒薬) ●罪がはれる
⑤	船頭	子共		鹿・お金	子共(養子)が官庁に誣告	官庁の息子が大蛇に咬まれる	大蛇・毒薬(葉っぱ) ●釈放
⑥	ある人	人	鹿・大蛇	鹿・大蛇・お金	王様に誣告	お姫様(毒薬)	大蛇・葉っぱ(毒薬) ●罪がはれる
⑦	朴氏	鹿・大蛇	蛇・鹿	鹿・お金	子共・官庁に誣告	蛇・葉っぱ(毒薬)	王様の娘が蛇に咬まれる ●出世
⑧	ある人	子共		鹿・大蛇・お金	友達(Ⅱ) ↓ Ⅲ 官庁に誣告	村長の娘(病氣)	大蛇・葉っぱ(毒薬) ●罪がはれる
⑨	ある男	人	大蛇・キノ	鹿・金	国に誣告	国王の后が蛇に咬まれる	あり・葉っぱ(毒薬) ●財産をもらう
⑩	慈悲深いお爺さん	少年	鹿・蛇	鹿・金銀	役人に(Ⅲ) 密告	郡守の母が大蛇に咬まれる	蛇・草(毒薬) ●釈放
⑪	慈悲深い爺いさん	一人の子供	鹿・蛇	鹿・金や銀	人が男を閉じ込める	男は病気で死にそうになる	大蛇・毒薬 ●命を助かる
⑫	老人	一人の少年	鹿・蛇	鹿・金銀	一人の子供が役人に(Ⅲ) 密告	高官の母御様が蛇に咬まれる	蛇・毒を消す(毒薬) ●罪に処せられる
⑬	優しい老人	男の子	鹿・蛇	鹿・金銀	地方当局に(Ⅲ) 密告	郡守の妻・蛇に咬まれる	蛇・びんの薬(毒薬) ●釈放
⑭	優しいお爺さん	男の子	鹿・大蛇	鹿・金	養子(Ⅱ) が(Ⅲ) 官家に誣告	王様の母親が蛇に咬まれる	蛇・桃の木の葉(毒薬) ●捕まえる
⑮	船頭	ある子	鹿・大蛇	鹿・金	官家に誣告(船頭)	官庁の娘が蛇に咬まれる	蛇・葉っぱ(毒薬) ●命を助かる
⑯	優しいお爺さん	男の子	鹿・蛇	鹿・金	養子が(Ⅲ) 官家に誣告	王様の母親が蛇に咬まれる	蛇・桃の木の葉(毒薬) ●幸せになる

〔蛇の恩返し〕

⑭	ある人	未婚の男	大蛇・猫		猫・お金	未婚の男は人を殺して お金を取返すとする		大蛇・未婚の男をかみ殺す	
⑮	木トリヨン	男の子	あり・蛾	一緒に住む	あり・蛾・仕事を助ける	男の子・木トリオンの結婚 を助る		蛾・ヒント	結婚

〔その他〕

②	忠清の人	全羅道の人	鹿	介懐する	鹿・壺のお金	全羅道の人・盲女に警告			盲罪がはれる
⑤	夫婦と盲女	子共	豚・雀	子共を(一)		子共が可愛い娘を取ろうと 盲女を苦しめる	豚・雀・娘・あり・が盲女を 助ける		
⑧	夫婦	未婚の男	大蛇・豚・あり			未婚の男・夫を追い出す	豚とありが夫を助ける		夫婦は仲良くなる
⑩	ある人	子共	鹿		鹿・お金	子共・盲女に警告			盲罪がはれる
⑪	老人	鹿			鹿・お金	いとこ・盲女に警告	鹿・盲女に現す		釈放
⑫	ある人	人	虎	一緒に住む	虎・金	人・盲女に警告			

- ・(I)「養子として育てる」、(II)「お金を奪おうと」、(III)「父がお金を盗んだと」を、表わす。
- ・各話○番号は、第三節 韓国昔話類話において、一、二、三において取り上げた韓国昔話録事例の番号を表す。
- ・蛇の薬(公治療者としての蛇)

【表2】によると、日本昔話「五色鹿」では、(A)「恩知らずの人間」の話型と、(B)「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」の話型という二つの亜型が存在するが、【表2】によると、韓国昔話では、日本昔話「五色鹿」二つの亜型の中、(A)「恩知らずの人間」に当たる亜型は見当たらず、(B)の亜型のみが分布していることが確認できる。この点が今回の比較研究において得られた最も大きな成果である。

日韓昔話とともに、動物は命を助けてくれた人に恩返しをするが、人は裏切るといことが主題である。

恩返しする動物は、鹿・蛇などがあり、日本昔話の場合は狐の登場も多くみられる。特に韓国の場合、助けられた人間がその後、主人公の養子になるという話型（③『韓国口碑 1-6』「人を救済するな」、④ 3-2 「恩を裏切った話」、⑤ 4-3 「人不救の由来」、⑬ 7-9 「甲斐ない人間救済」、⑰ 5-7 「鹿の恩返し」、⑱ 「報恩と忘恩」『伝説の朝鮮』、⑲ 「獐と蛇の御恩返し」『朝鮮の神話伝説』、⑳ 「鹿と蛇」『温突夜話』、㉑ 「老人に救われた鹿と蛇と男の子」『朝鮮昔話百選』、㉒ 「老人と養子と鹿と蛇」『朝鮮伝来童話集』）（補注 4-2）が多くみられるが、日本昔話には見当たらない。

さらに、両国ともに動物が主人公にお金のある場所を教えてくれる話型が多い。その中で、韓国の場合は金やお金のほか、山にある野生の高麗人参の畑を教えてくれる話（① 「人を救済するな」『韓国口碑 1-6』）も興味深い。このようなモチーフは、虎の登場（① 「人を救済するな」『韓国口碑 1-6』、⑫ 「恩返した虎」 6-1-1）とともに、韓国という地域的な特徴であると考えられる。

このように、助けた動物からの恩返しによって主人公は裕福になるが、比較表【表 1】と【表 2】とを比べて見ると（報恩 1）、動物に助けられた人物の欲を刺激する原因にもなり、それによって主人公は危機に落ち、最後に再び動物により助けられる（報恩 2）ことになる。

韓国昔話の場合、この話型をもつ話の末尾は、動物さえ恩返しをするのに人は自分の利益のために恩を仇で返すものである。そのため人は危機から助けてあげることがないという意味の話末評語が付けられる話型が多くみられる（『韓国口碑』 1-6 「人を救済するな」、2-2 「鹿の報恩と人間の背信」、6-1-1 「獣は救っても人は救うな」、6-1-1 「雖獣援人不援」、6-1-1 「恩返した虎」、8-3 「獣は救っても、人は救うな」（補注 4-3）、5-7 「鹿の恩返し」（補注 4-4））。

以上、口承資料から、日本昔話の類話と韓国昔話の類話について比較考察した。結果を要約すると、まず、日本昔話「五色鹿」は大きく、（A）「恩知らずの人間」亜型（B）「動物は恩返しするが、人間は恩を忘れる」と、



二つの話型に分けることができる。

このとき (A) の話型の場合は、動物 (鹿) が人 (狩人) を助け、(B) の話型の場合は、人が動物 (蛇・鼠・亀・狐) と人両方とも助ける。そこで、(A) の話型は人の背信を、(B) の話型は動物の報恩と人の背信について語っていて、(A) (B) どちらの話型とも、背信する主体は人である。ここで、助けた者と助けられた者の設定が鹿と狩人であることも注目すべきであろう。

さらに、『宇治拾遺』第九二話は (A) 「恩知らずの人間」話型、韓国昔話の類話は (B) 話型に分類することができるほか、日本昔話は (A) 話型と (B) 話型が混合したものである。

これらの日本昔話 (A) (B) の話型の特徴を簡単に整理すると次のようである。

【表 3】

分類	助けた者		助けられた者	
	(A) 話型	(B) 話型	(A) 話型	(B) 話型
日本昔話類話	動物 (鹿)	人間	人間 (狩人)	人間
	なし	動物 (蛇・鼠・亀・狐)	なし	なし
	『宇治拾遺』第九二話	韓国昔話類話		

韓国昔話の中では、日本昔話 (A) 話型に当たる事例は、現在のところ見当たらない。ほかに、救われた者としての鹿の登場は見当たらないもの (③ 「人を救った鹿と大蛇」『韓国口碑 2・9』、⑦ 「恩返した蛇と鹿」『韓国口碑 6・4』、⑳ 「鹿と蛇」『温突夜話』、㉑ 「老人に救われた鹿と蛇と男の子」『朝鮮昔選』)、日本昔話類話 (A) 話型のような、助ける主体として鹿が登場する事例はない。

以上、日韓両国の「五色鹿」話型の特徴をまとめると、韓国昔話の類話の場合は、

- ① 日本昔話類話（A）に当たる話型は見当たらない。
  - ② 助けられた後、養子になる。
  - ③ 話末評語（人間は危機から助けてあげる必要がない）
- などを挙げることができる。一方、『宇治拾遺』と日本昔話の場合は、

- ① 狩人と鹿との設定
  - ② 五色の鹿（または五匹の鹿）
  - ③ 狐の登場が多くみられること
- などを挙げることができる。

このように日韓両国における「五色鹿」の伝承は、動物は恩返しをするものの、人は恩を忘れる、もしくは、恩を仇で返すものであるという主題を基本としている。

『宇治拾遺』第九二話にみられる「五色鹿」の話型は、ジャータカや『法苑』など、仏典を出典とするが、出典と比べると仏教色が消えて、慈悲報恩の大切さを説く教訓的な動物説話に変わっている。言い換えれば、仏教的な要素より人間社会における教訓について語っていると言える。このように出典より世俗説話化されたため、『宇治拾遺』「五色鹿」の話型は、『今昔』、『仏説九色鹿経』、『法苑』などに比べて、もっとも昔話「報恩動物・恩知らずの人」に近い。この話型において、人は危機に落ちたものを救う役割を果たすと同時に、恩を仇で返すという存在でもあることをも云える。そういった人の二重性を伝えるところに、この話型の特徴がある。

今後、『宇治拾遺』「五色鹿」という説話における叙述の特質といった問題については改めて論じたい。

注

- (1) 浅見和彦三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年、二五頁。
- (2) 関敬吾『日本昔話大成』角川書店、一九七八年。
- (3) 金恩愛『宇治拾遺』「留志長者事」考 廣田收編『日本古典文学の方法』新典社、二〇一五年一月、一五六―二一〇頁。
- (4) 金恩愛「韓国昔話「藁繩一本で長者になる」型の研究―日本昔話「藁しべ長者」型との比較をめぐって―」『文化学年報』第六三号、同志社大学文化学会、二〇一四年三月。
- (5) ほか、第九二話に関する先行研究は、次ぎのとおりである。

① 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』（有精堂出版、一九七〇年）

これは『今昔』第巻五、第一八と同話である。それは、『法苑』巻五〇背恩篇引証部か、「九色鹿経」の翻訳であろう。けれど本書では話主旨が変えられて、「恩を知れ」ということが強調されている。『今昔』では終わりを「然レバ、恩ヲ忘ル、ハ人ノ中ニ有リ。人ヲ助クルハ獸ノ中ニ有リ。此レ今モ昔モ有ル事也。彼ノ九色ノ鹿ハ、今ノ釈迦仏ニ在マス。心ヲ通ゼシ鳥ハ、阿難也。后ト云ハ、今ノ孫陀利也。水ニ溺レタリシ男ハ、今ノ提婆達多也トナムと語り伝ヘタルトヤ」で結んで、全く「本生経」のままに前生譚である。『宇治拾遺』の作者にとってはこうしたことは不用していない。『平家物語』巻二小松の教訓の条に「恩を知るを以て人とは云うぞ。恩を知らざるをば畜生とこそいへ。」と見えるような当時の道徳的傾向の示唆されている話である。

② 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』（小学館、一九七五年）

原典は『仏説九色鹿経』（大正新修大藏経 三巻・本縁部上所収）とその異訳である『六度集経』（同右、三巻所収）巻六「修凡鹿王本生」である。『法苑』五十・背恩篇五二の引証部には、『仏説九色鹿経』を引用

する)。それによるとこの話の末尾は、その後国内平各穩に五穀豊熟し、民には疾病がなかったとあり、ついで本話中の夫人は孫阿利、鳥は阿難、溺人はつねに釈尊に敵対した調達（提婆達多）、鹿は釈尊の前生修行を説いた本生説話になっている。『今昔』巻五第一八話もそれをそのままに踏襲したが、本話では本生譚の部分を削り、仏説色をすつかりぬぐい去って慈悲報恩を説く動物説話に変えている。こういうところに世俗説話化することに重さをおく本話の特色がうかがわれる。

### ③ 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』（新潮社、一九八五年）

この説話の原拠は、『仏説九色鹿経』の記事であって、『経律異相』一一一一、『法苑』六三―五二などに引かれている。その末には、仏の言葉として、「爾時九色鹿者我身是也。時国王者今悦頭檀是。時王夫人者今先陀利是。時溺人者今調達是」と記されており、やはり本生譚の形態を示している。この調達というには、提婆達多に当たり、つねに釈尊に敵対したものと伝えられる。『今昔』五、一八にも、これと同じ説話が揚げられているが、やはり「彼ノ九色ノ鹿ハ、今ノ釈迦仏ニ在マス。心ヲ通ゼシ鳥ハ、阿難也。后ト云ハ、今ノ孫陀利也。水ニ溺レタリシ男ハ、今ノ提婆達多也トナムと語り伝ヘタルトヤ」と結ばれている。本書では、このような仏教色を失って、一つの動物説話に変えられ、おもに慈悲報恩について説かれている。野村純一氏の『昔話伝承の研究』に示されたように、この系統の説話は、後代まで説教師によって語られたようであり、栃木県芳賀郡（『下野昔話集』）、富山県婦負郡（『富山県明治期口承文芸資料集成』）、宮崎県西都市（『続日向の民話』二）、鹿児島県会於郡（『手無し娘』）などに、昔話に形態をとって伝えられている。

### ④ 小林智昭・増古和子校注『宇治拾遺物語評釈』（武蔵野書院、一九八六年）

原典は『仏説九色鹿経』とその異訳である。『六度集経』巻六「修凡鹿王本生」であり、そこには鹿は釈尊自身の前生であったとする。釈尊の前生修行を説いた本生説話になっている。『今昔』巻五第一八話原

典をそのまま踏襲する。本話は「九鹿」を「五鹿」に変えただけでなく、本生譚の部分も削り、仏説色をすっかりぬぐい去って、慈悲報恩を説く動物説話に改変している。ここにも宗教性や固い教訓性を脱皮して世俗説話化することに重さをおき『宇治拾遺』の特徴がみられる。なお、『今昔』では、国王の后が鹿の夢を見て後、鹿を欲しがらるあまり病の床に臥してしまい、さらに「彼ヲ得テ皮ヲ剥ギ角ヲ取ラムト思フ」と語っている。『仏説九色鹿経』では、さらに皮で依を、白角で扨柄（『六度集経』ではイヤリング）を作りたいというような具体的、かつなまなましい描写がみられるが、本書では、それをさらりとながし、執拗などぎつさが無い。この点も、『今昔』との対比における本書の特色である。

⑤ 浅見和彦・三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』（岩波書店、一九九〇年）

『今昔』では「九色の鹿は今の釈迦仏にまします。心を通ぜし鳥は阿難也。后といふは今の孫陀利（そんだり）、水に溺れたりし男は今の提婆達也」と結んでおり原拠の仏説九色経でも鹿は釈迦、鳥を阿難、国王を悦頭壇王（浄飯王）、后を先阿利、男を調達として、本生譚の形をとる。『宇治拾遺』はそうした仏教的な色彩をするため、昔話「報恩動物・恩知らずの人」に近い。原拠にない、男の顔のあざに注目すると、「留志長者」（第八十五話）の「はわくひ」が連想されるところで、『御伽草子』「るし長者」で留志長者と本話接合されているのも、そんな点の連想が動いたかとも想像される。標題の「鹿」は、目録「塵」に誤るを訂。

⑥ 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』（小学館、一九九六年）

本話の原典とみられる『仏説九色鹿経』などによると、鹿は釈迦仏の前生であり、以下、鳥は阿難（釈迦の十六弟子の一人）、国王は釈迦の父である悦頭壇王（浄飯王）、国王夫人は先阿利（釈迦の異母弟）、水に溺れて助けられた男は調達（提婆達多）、釈迦の従兄弟、阿難の兄）の、それぞれ前生であるというふうな説明がなされ、釈迦の前生における修行の実態を説いた本生譚となっている。『今昔』巻五、一八話は原

典を踏襲して、釈迦の本生譚としているが、本話はそうせず、慈悲報恩の大切さを説く動物昔話的教訓話に変貌せしめている。

(6) 本文引用は、浅見和彦三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。

(7) 廣田收「淵源としての「類話」——「五色鹿」考——」『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年、四五九頁。

(8) 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦ほか『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年。

(9) 関敬吾『日本昔話集成』角川書店、一九五〇年。

(10) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観』同朋舎出版、一九七七年。

(11) ①「人間忘恩(類話2)」稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観 第13卷 岐阜・静岡』同朋舎出版、一九八〇年、二九〇頁。

②「一三・五匹の鹿の話」加藤嘉一『旅と伝説』第七年一二月号(通巻八四号)三元社、一九五八年、一九頁。

③「五六・五匹の鹿」加藤嘉一・高橋勝利『全国昔話資料集成18 下野昔話集』岩崎美術社、一九七六年、九七頁。

④「24・人忘恩」稲田浩二『富山県明治期口承文芸資料集成』同朋舎出版、一九八〇年、三六四頁。

⑤「奇しき色の大鹿」比江島重孝『日本の民話43 向日の民話』未来社、一九六七年。

⑥「三八八・五匹の鹿」稲田浩二・立石憲利『中国山地の昔話——賀島飛左嬸伝承四百余話——』三省堂、一九七四年、五一五頁。

⑦「39・人間無情」荒木博之・上村孝二『昔話研究資料叢書5 甕島の昔話』三弥井書店、一九七〇年、二〇五頁。

⑧ 「第五話・蛇と狐の報恩」『月刊昔話研究』（語り手・近所の農家の、まだ四〇になったばかりの男）三元社、一九三五年五月、四五頁。

⑨ 「放し亀」石井民司『日本全国国民童話』同文館、一九一一年、（旧）一八二頁、（新）一四一頁。

⑩ 「人間無情」佐々木徳夫編『夢買い長者―宮城の昔話―』桜楓社、一九七二年、一〇〇頁。

⑪ 「一三六番・人間と蛇と狐」佐々木喜善編『聴耳草紙』筑摩叢書、一九六四年、二四三頁。

⑫ 「一五三・犬と猿の報恩」田畑英勝『全国昔話資料集成15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七五年、二九一頁。

⑬ 「人間無情」瀬川拓男・松谷みよ子『日本の民話1 動物の世界』角川書店、一九七三年。

⑭ 「二九六・お爺さんと川流れ」稲田浩二・立石憲利『中国山地の昔話―賀島飛左嬢伝承四百余話―』三省堂、一九七四年、三九七頁。

(12) 『ジャータカ七三話 サツチャンキラ前生物語』中村元監修『ジャータカ全集2』春秋社、一九八四年。

(13) 崔仁鶴『韓国昔話の研究』弘文堂、一九七六年。

## 第五章 『宇治拾遺物語』 「留志長者事」考

— 韓国古典『壅固執伝』との比較をめぐって —

### はじめに

私は第一章において、日本と韓国両国の「腰折雀」型の昔話を検討することによって、同じ話型が日韓双方の昔話に共有されていることを明らかにした。それと同時に、鎌倉時代に成立した『宇治拾遺』第四八話「雀報恩事」に、日韓の昔話と同じ話型が共有されていること、ひるがえって、『宇治拾遺』の「腰折雀」型説話「雀報恩事」では、同じ話型を持ちつつ、鎌倉期における都市的な家族問題が主題として付加された説話となっていることを明らかにした。

さらに、韓国古典小説「興夫伝」が日韓両国の「腰折雀」型昔話と同じ話型を共有するとともに、民族的、歴史的な特質を付加している小説であることを明らかにした。

これらの考察を踏まえると、日韓両国に共有される昔話の話型を基礎として、さらに、

日本昔話 …… 日本説話

韓国昔話 …… 韓国小説

という並行関係が存在する。つまり、昔話の話型を構成する基本的事項に対して説明的事項を加えることによって成立する説話と小説とは、どちらもほぼ同様のジャンルと捉えることができる。説話と小説の違いは説明的事項がいかに詳細か、もしくはは心理や会話をいかに用いるかなどといった説明的な機能の増殖、敷衍の程度の問題であるといえる。

さて『宇治拾遺』の説話、第八五話「留志長者事」（以下、「留志長者」）は、インドのジャータカ、中国仏典、そして日本の『今昔』などとの比較分析はすでに行われてきたが、韓国の伝承との比較研究はほとんど研究され



ていない。そこで、新たにこの説話を考察の対象として据え、話型の分析を展開させ、日本・韓国・中国の間に共有されている話型を明らかにするとともに、『宇治拾遺』「留志長者」の表現の特質について考察したい。

## 第一節 『宇治拾遺物語』の話型と構成

### 一、『宇治拾遺物語』特徴の展開

『新大系』<sup>(1)</sup>によると、『宇治拾遺』第八五話「留志長者」は出典について、同話(1)に「盧至長者話」『今昔』巻第三第二二話・「留志長者事」・『古本説話集』下巻第五六話、同話(2)に『法苑』「盧至長者因縁経」(以下、「長者経」)七七(十悪篇八四、慳貪部第一一)・「るし長者」『御伽草子』、類話と関連話として、『ジャータカ五三五話』「天食前生物語」・『旧雜譬喻経上』一九・『敦煌本 仏説諸経 雜縁喩因縁集』二・五、『諸経要集』六、『私聚百因縁集』二・五などが指摘されている。<sup>(2)</sup>

本節では、『法苑』「長者経」、『今昔』巻第三第二二話「留志長者語」との本文比較を行い<sup>(補注5-1)</sup>、『宇治拾遺』「留志長者」に加えられた展開を取り挙げて、『宇治拾遺』における位置と意義について考察する。

### 〔本文1〕

「今は昔、天竺に、留志長者とて、世にたのしき長者ありける。大方、蔵もいくらともなく持ち、たのしきが、心のくちおしくて、妻子にも、まして従者にも、物食はせ、着する事なし。おのれ、物のほしければ、人にも見せず、隠して食ふ程に」

### 〔本文2〕

「人離れたる山の中の木の陰に、鳥獸もなき所にて、ひとり食みたる心のたのしき、物にも似ずして、誦ずるやう」

『法苑』七七「長者経」と『今昔』には「盧至」、『宇治拾遺』『古本』には「留志」、『御伽草子』には「るし」とある。「本文1」「本文2」から、裕福でありながらけちな留志の性格が読み取れる。「心のくちおしくて」とは、日葡「クチヲシイ」後悔や痛恨、激怒を感じることとあるが、この場合は、利己主義な男で位の意」（『大系』）、「心のほどは大変にがっかりさせられるのであって、長者の性格が大変な吝嗇であることをいう」（『新大系』）、「心が卑しくて」（『宇治拾遺物語全註解』）、「心のほうが残念ながら物惜しみするけちな性格」（『新編全集』）と、指摘されている。「本文2」は、留志は人のない山の中に行つて、一人で食事をしながら帝釈天を屈辱するよ  
うな内容の歌を歌う。その光景を見た帝釈天は憎らしいと思ひ、留志長者の姿に身を変えて、彼の家に行く。その歌を『法苑』『今昔』『古本』の条と比較してみる。(5)

『法苑』 「我今節慶會、縦酒大歡樂、逾過毘沙門、亦勝天帝釋」

『今昔』 「我今節慶際 縦酒大歡樂 踰過毘沙門 亦勝天帝釈」

『古本』 「今日曠野中、飲酒大安樂、猶過毘沙門、亦勝天帝釈」

右から、『宇治拾遺』と『古本』はほぼ同じであり、『今昔』のほうが原典に近いということが分かる。  
次は、ほんものとのせものとの区別方法について考察する。

〔本文3〕『宇治拾遺』 「腰の程に、はわくひといふものものとぞ候ひし」

『法苑』 「母答王言…兒左脅下有小瘡癩、猶小豆許」

『今昔』 なし

『古本』 「腰のもとに、黒子と物の跡こそ候し、それを御覽ぜよ」

はわく …「ははくそ」の誤か。「ははくそ」は、ほくろやあざの類。

〔本文4〕『法苑』

「王見是已，即別二人置於異處，各遣條牒，親屬頭數，種種財物，速書將來。二人持盡隱密之事，及以書迹、

悉皆相似」

〔本文3〕〔本文4〕から、『宇治拾遺』においては、「腰に、ははくそ」と、『古本』には「腰に黒子（ハハクロ）」、『法苑』では「小瘡癩」とある。ちなみに、『法苑』では、「本文4」のように、本物と偽物を別の所へ呼び、本物でなければ知り得ない家族の秘密を聞いたり、母を呼んで小瘡癩を確認したりする。（この展開は、『壘固執伝』と類似する）。『宇治拾遺』では「腰に、ははくそ」、『古本』には「腰に黒子」を確認するなど、本物と偽物を区別しようとする場面がある。『今昔』にはこのような、本物と偽物を区別しようとする展開がない。

〔本文5〕『宇治拾遺』

①「おのれ、物のほしければ、人にも見せず、隠して食ふ程に、物のあかず多くほしかりければ、妻にいふやう、「飯、酒、くだ物どもなど、おほらかにしてたべ。我につきて物惜しまする慳貪の神まつらん」といへば、「物惜しむ心、うしなはんとする、よき事」と喜て、色くに調べて、おほらかに取らせければ、うけとりて、「人も見ざらん所に行て、よく食はん」と思て」

②「我、山にて、物惜しむ神をまつりたるしるしにや。その神離れて、物の惜しからねば、かくするぞ」

〔本文6〕『法苑』

③我於前後、有大慳鬼、隨逐於我、使我慳惜、不著不昭、不與眷屬、皆由慳鬼。今日出行、値一道人、與我好呪、得除慳鬼、然此慳鬼與我相似。彼若來者、當好打棒

比較すると、「本文5」①傍線のように、妻に食べ物を用意させる展開や、それに対応する本文②のような、にせものが蔵を開けてみんなに財物を配り与えながら、山に行つて物惜しむ神を祭つたため神が離れて、物惜しむ心もなくなったと、言い分けのように語る展開は、『今昔』には記されていない。③『法苑』においては、妻に食べ物を用意させるような展開はなく、自分に物惜しむ心がなくなったのは、今日道で出逢つた人が、慳鬼を避ける呪詞を与えてくれたからだ、と記されている。このような場面について小林保治氏は、次のように述べる。

呼応の巧みな筋立ての工夫という点では、物惜しむ心の失せた理由を山で慳貪の神を祭ったおかげとしてあるのは、妻に料理を用意させる手立てとして構える偽りを帰宅して突然に蔵を開き、これまでなんびとも手を触れさせなかった財物を家人、他家の人、他国の人に至るまでに配与することを奇異に思わせぬ前提（変心の結果たる自然な振り舞いと理解させる前提）として活用するという、伏線の二重効果をねらった例であり、こうした配慮によって（はなし）はまったく無駄なく展開し、それが（短小さ）の獲得にもつながるのである。その証拠に、慳貪の神を祭るために出かけたという伏線を置かない場合には、以下に掲げる原典たる「長者経」のように、長者に変身した帝釈は開蔵に先立って財物頒与のいわれを長々と説き語らねばならなかったのである。（6）

この小林氏の考察を踏まえて、廣田收氏は、

『宇治拾遺』は妻を騙して酒や食物を手に入れる。「我につきて物惜しまする慳貪の神まつらん」ということは唐突であってわかりにくい。『今昔』にはそのような経緯はない。「慳貪の神」を祭るから食べ物を用意せよというのは、いかにも詭弁であるが、そのような言を弄するところに、長者の慳貪さがよりあらわになっていく。もしかすると、「慳貪の神」は物語において作り出された神であるかも知れない。

と述べている。そして、このような説明は『今昔』のもたないものであり、『古本』と共有する表現である。そこに「『宇治拾遺』の特質が見てとれる」と指摘した。<sup>(7)</sup>『法苑』や『今昔』にはない「妻に料理を用意させる展開」は、説話を樂しめるような『宇治拾遺』の特徴の展開であると考えられる。

さらに、「慳貪」とは『仏教大辞典』<sup>(8)</sup>によると、「梵語として慳悋貪者の意。即ち強欲にして物を慳み、人に布施せざるを云う」とされる。また「慳貪の神」とは、「仏語であり、物を惜しみむさぼる神の意味」とあり、ほかに『全集』によると、「仏教語であるというよりも、物を惜しみむさぼる神の意味で、日本の『宇治拾遺』もしくは『古本説話集』などの説話の生成において造られた表現」であると推測している。ほかに、『全集』の注釈に

よると、「長者経」には「慳鬼」とある。

そこで、『宇治拾遺』『今昔』における「慳貪」の用例について調べてみると、次のようである。

『宇治拾遺』第一四四話「聖宝僧正、一条大路を渡る事」

「昔、東大寺に、上座法師のいみじくたのしきありけり。露斗も、人に物あたふる事をせず。慳貪に罪深く見えければ」

『今昔』<sup>(9)</sup>卷二第三八話「天竺祖子二人長者、慳貪語」

「今昔、天竺ニ二人長者有リ。祖子也。父モ子モ共ニ家大富テ財宝豊也。但シ慳貪深クシテ、敢テ施ノ心無シ」

・卷三第二三話「跋提長者妻、慳貪女語」

「今昔、天竺ニ一人ノ長者有リ。跋提ト云フ。仏ノ御弟子、迦葉・日連・阿那律等ノ教化ニ依テ、邪心ヲ捨テ善道ニ趣ニケリ。其ノ妻ニ一人女有リ。慳貪女ト云フ」

・卷二〇第三四話「出雲寺別当浄覚、食父成鯨肉得現報忽死語」

「而ルニ、浄覚慳貪邪見深故ニ、夢ノ告ヲ思ヒモ不敢、忽ニ魚ノ大キニ楽気ナルニ耽テ」

・卷二〇第三六話「河内守、依慳貪感現報語」…本文に「慳貪」の用例は見当たらない。

以上、『今昔』には、四つの用例があることが分かる。

『宇治拾遺』において、「慳貪」の用例は、第八五話「留志長者」のほかには、第一四四話「聖宝僧正、一条大路を渡る事」にしか見当たらない。この二つから考えると、『宇治拾遺』は戒律違反に当たるか否か、というこ  
とよりも人物の性格を表すために「慳貪」という語を用いたものとみられる。

## 二、中国説話『法苑珠林』の話型と構成

『法苑』卷七七「長者経」から事項を取り出すと、以下のようである。

昔、仏の在世時、舍衛城に一人の長者がいた。  
名を盧至長者と言った。

盧至長者の財産は、無限であった。

盧至の裕福さは毘沙門天のようであった。

5 盧至は、昔に布施をしたことの応報を得た。

(その時盧至は)布施に志心がなかったので、裕福ではあるが下劣であった。

盧至は、衣装は垢で汚れ不浄であり、糠菜で飢えをしのぎ水だけを飲んだ。

(盧至は)朽ちた車に乗り、家の仕事をするにも下僕のようにであった。

(盧至は)常に世の人に笑われた。

10 ある時、国内の人民が節会(祭り)を催した。

(人民は)舍宅を飾り立て、香水を撒いた。

(人民は)(諸天のように)伎楽歌舞を楽しんだ。

盧至は(祭りを)見て楽しんだ。

盧至は家に帰り、蔵を開いて五銭を取り出した。

15 盧至は母や妻、眷属に(五銭を)奪われないように近づけなかった。

盧至は(五銭のうち)二銭で小麦菓子を買ひ、二銭で酒を買ひ、一銭で葱を買った。

盧至は家の中から塩をひとつかみ取り、城外に出て一本の樹のもとにおもむいた。

(盧至は)その樹のもとに多くの象や馬が来るのを見た。

(盧至は)猪や狗が静かな場所に逃げるのを見た。

(「慳貪」の罪)

20 (盧至は) 酒に塩を入れて飲み、小麦菓子を食べ、葱を噛んだ。

(盧至は) 泥酔して立ち舞い、声を挙げて歌った。

(偈①の内容) 私がこのめでたい節会に、思う存分酒を楽しむことは、まるで毘沙門天のようだ、

また帝釈天にも優れているほどだ、と。

(「驕慢」の罪)

ちやうど帝釈天は、天衆たちと共に仏のもとに出かけるところだった。

(帝釈天は) 盧至が酔って舞い、帝釈天に勝ると歌うところを見た。

25 帝釈天はこの慳貪人(盧至)が飲酒し自分を侮辱していることを黙って聞いていた。

帝釈天は盧至の姿形に変じて、盧至の家に行った。

(盧至の姿に化した帝釈天は) 母、妻、眷属や奴婢を集めた。

(帝釈天は) 母の前に座り、自分の前後に大慳鬼がいると言った。

(帝釈天は) 母に、自分がケチなのは、大慳鬼が私に取り付いているからだと言った。

30 (帝釈天は) 今日道で出逢った人が、私に大慳鬼を避ける呪詞を与えてくれた、と話す。

(帝釈天は) 大慳鬼は私と顔が似ている、もし大慳鬼が来たら棒で叩け、と話した。

(帝釈天は) 彼は私を詐称するだろうが、門を閉めておけ、と話した。

(帝釈天は) 大慳鬼が来たら私の指示を待て、と話した。

(帝釈天は) 門を開き、おいしい食事を作り、蔵を開いて財宝を出させ、衣服の飾りを母や妻、眷族その他

の人々に与え、歌舞歓楽をした。

35 盧至は酔いが醒め、家に帰り歌舞の声を聞いた。

盧至は驚いて門を叩き叫んだが、誰も聞かなかった。

帝釈天は呼び声を聞き、人々は門を叩いて大慳鬼と言った。

人は大慳鬼が門を開いて逃げたことを聞いた。

盧至は家に入ったが、眷属はみな（盧至の）言葉をきかなかった。

40 大慳鬼は足を捉え引き倒して体を打ち、（盧至を）門から追放した。

（盧至は）町に出て大声で泣き、自分の姿は元と変わらないのに、なぜ家人は見捨てるのか不思議だと言う。

（盧至は）大慳鬼が私を認めないなら、（どうして盧至だとわかるのか）どうしようもないと言った。

私はあなたの親だから、あなたを見（て調べ）ると慰め、論じた。

（盧至は）大勢の人に、私の顔を見て盧至だ（と証明してほしい）と求めた。

45 皆は、これからあなたが盧至だと答えた。

皆に、あなたたちは私であることを証明できなかったと言った。

皆は、あなたがほんものだと証明しようと言った。

盧至が答えて因縁を説いた。（偈②の内容を略す）

諸人はこの偈を聞いて共感した。

50 諸人は）盧至に、どうしてよいのかと聞いた。

盧至は自分であることを王に証明してほしいと願った。

（盧至は）白い紙を借りて金具を使いたいと願った。

王や貴族は盧至のことを笑った。

盧至は、二枚の紙をもって王門に至った。

55 盧至は、門番に、王に貢献したいので会わせてほしいと願った。

門番は驚き、王に伝えた。

王は盧至がケチで死にそうだったのに、よく来たものだと言った。



王は盧至を王の前に呼び入れた。

60 (王に会う前に) 盧至は、王のために麩を引き、王の脇に急に挟んだので引けなかった。力いっぱい引くと、出すことができた。

帝釈天は草の束と化した。

盧至はその草を見て慙愧して地に座し、泣き悲しんだ。

王はあわれみ、もしこの草が必要でないなら苦しむだろうと言う。

盧至は王に向かって泣いた。

65 (盧至は) その草を見ると慙愧を感じ、我身をどうしてよいのかが分からないと言った。(盧至は) 自分の身を無くしてしまいたいと言った。

王は(盧至を) 憐れみ、周りの人が彼は何を言うのかわからないと言った。

周りの人が、盧至は悲しんで役に立たないと答えた。

王は誰の顔形かわからない。家の中に入り詐称している。

70 盧至の家人は、財物を使い果たした。

(盧至の) 家人は、(盧至を) 棒で叩き、道に捨てた。

(盧至は) 悩み、何も言えなかった。

王は使いを派遣して似た者を王の前に並べた。

(王は二人の) 相貌を見て笑った。

75 王は、後者が盧至である、おまえは何を言おうとしているのか、言った。

盧至は自分が盧至であり、彼は盧至ではないと答えた。

王は、盧至が慳貪であるが、おまえはよく布施をするか、と問うた。

王は、仏説によると慳貪者は、餓鬼道に百千万年墮ち、飢餓の苦しみや怖れを受けるといふ。だから慳貪を捨てよと言った。

王は、垢衣は煩惱を浄化し、心が法を聞くのだと言った。

80 王は、二人を別の場所に置き、親族の人数や財物、隠密にしていることなどを書かせたが、同じだった。

王は（二人を）区別できず、母を呼んで尋ねた。

母は王に、これがわが子であり、彼はわが子ではない、これが大慳鬼だと言った。

王は再び、母に（盧至の）体のアザ・ホクロなどがあるかと尋ねた。

母は王に、子の脇の下には小豆くらいの小さなアザがあると答えた。

85 王は、衣を脱がせてアザの大小を調べさせた。臂を上げてみると、ふたりのアザは同じだった。

王は、笑ってただ仏だけが理解できると言った。

（王は）ふたりを象に乗せ、仏のもとへ連れて行き、疑問を解決してくれるよう求めた。

世尊は、喜び歓迎した。

帝釈天は、おまえは何をしたのかと言った。

90 帝釈天は、盧至の体を捨てて、もとの姿形に戻った。

帝釈天は、仏に向い合掌して偈を説いた。（偈③の内容を略す）

仏は、帝釈天以下一切衆生は罪過がある、化身を捨て帝釈天の姿に戻れと言った。

（帝釈天は）仏に、（盧至）が慳貪で、諸天を軽蔑したので、私は悩んだと言った。

仏は、帝釈天以下一切衆生は罪過がある、これを投げ捨てよと言った。

仏は、盧至に家に帰り、財物を見るように言った。

95 帝釈天は、（盧至に）私はおまえの財物を損なっていない、と言った。

盧至は、私は帝釈天を信じないが、仏を信じると言った。

(盧至は) 仏を信じて、悟り(須陀洹果)を得た。

天龍八部四衆はこれを聞き、因縁を悟った。

『法苑』と韓国の古典『壅固執伝』を比べると、次のような特徴が見出せる。

①『壅固執伝』では、盧至が本物か偽物かという判定を、七回にわたって繰り返している。この繰り返しが、この小説の面白さになっている。『法苑』では、このような繰り返しは顕著ではなく、むしろ王が判定できず、最終的に仏に判定を求めるところにこの説話の特質になっている。

②最終判定者が、『壅固執伝』では仙人であるが、『法苑』では仏(釈尊)である。

③導かれる結論は、『壅固執伝』では道徳的教訓であるが、『法苑』では仏の教えとしての因果である。また、盧至がケチであることについて、『壅固執伝』では性格の欠点とするが、『法苑』では、「慳貪」、「不飲酒」、「驕慢」の罪として表現されている。

## 第二節 韓国の古典「壅固執伝」の話型と構成

「留志長者」の説話と同じ話型を持つ韓国の作品『壅固執伝』<sup>オンゴジツ</sup>は、作家・年代未詳のパンソリ系小説である。金持ちである壅固執は、親不孝どころか仏教を侮り、僧を迫害する。そのため寺の大師が道術を使い、わら束で壅固執とまったく同じかかし(偽物)を作る。壅固執は自分が本物だと主張するが聞き入れる人もなく、偽物によって追い出される。その後、壅固執は自分の過ちを悔いて善人となるという内容である。

異本によって、『壅固執伝』『壅生員伝』『壅氏伝』とも呼ばれるが、内容の構成に大きな違いはない。現在、パ

ンソリ唱劇である「壅固執打令」は伝わっておらず、鄭魯湜『朝鮮唱劇史』<sup>(10)</sup>・宋晩載「観優戯五十首」<sup>(11)</sup>といった二つの資料から、『壅固執伝』がパンソリ作品として唄われたことが認められている。『朝鮮唱劇史』には、パンソリの一二作品中、最後の作品として「壅固執打令」が記されており、宋晩載「観優戯五十首」中「一七首」において、

壅生員 鬪一芻偶

孟浪談傳 孟浪村

丹籙若非金佛力

疑眞疑假竟誰分

とある。「観優戯」において、壅固執の身分は「壅生員」であり、場所は「孟浪村」とある。本論における比較対象である「金三不本」では、身分は「壅座首」、場所は「壅堂村」とある。壅固執の身分と舞台となる場所は、異本によって異なる場合がある。この右の詩は『壅固執伝』の結末に当たるところであり、『壅固執伝』が「壅固執打令」の形式を持ってパンソリとして唄われたことが分かる。李恵求氏は「観優戯」の本文「丁亥年十一月日所志」の記事と、作者の活躍時期を根拠として、ここに記される丁亥年とは一八二七年であると推測した。すなわち、「壅固執打令」は一九世紀の初・中期までは、すでに公演されていたということである。

印権煥氏は、「壅固執打令」の場合、現存する資料からみると、小説よりパンソリの方が先に形成されたと推測する。一八四三年、宋晩載により書かれた「観優戯五十首」には、「壅固執打令」を観覧した後、観劇詩を筆録したものである。その内容は『壅固執伝』の初期異本と共通する点が多く、その初期異本からパンソリ辞説と見なされる段落が数多く見られるからである<sup>(12)</sup>と述べている。

研究の成果に従って「観優戯」の成立時期を概観すると、①李恵求「宋晩載の観優戯」→一八二七年、②催来沃「壅固執伝の諸問題研究」→一八二七年、③印権煥「失伝パンソリ詞説研究」→一八四三年と、成立時期には

諸説が存在する。

しかし、「観優戯」の場合も、『宇治拾遺』第四八話「雀報恩事」の比較対象とあるパンソリ系小説『興夫伝』（説話→パンソリ→パンソリ系小説）のように、『壅固執伝』の場合も、説話→パンソリ→パンソリ系小説という成立が考えられる。パンソリ「壅固執打令」の唱は伝わっておらず、一九世紀末頃にパンソリとして歌われた台本を収録した『壅固執伝』（「金三不本」国際文化館、一九五〇年）が出版された。「金三不本」は『壅固執伝』異本の中で、最も伝写時期が早く、一九七〇年代までは唯一の伝本として、多くの研究者により研究されていたが、現在は絶版となっている。<sup>(13)</sup>そこで「金三不本」の注から、底本と伝写時期を表す記事を引用する。

『壅固執伝』の稿本は、距今四二年前に伝写したもので、朴憲玉氏の所蔵本をそのまま収録している。同じ稿本の中で抜けているところは、李明善氏の所蔵本を参照した。<sup>(14)</sup>

ここにある「距今四二年前」とは、「金三不本」『壅固執伝』の「序」の記された「一九四九年 四月」を根拠に、一九〇七年と推測できる。つまり、一九〇七年に朴憲玉氏の所蔵本を伝写したものである。一九七四年、「金三不本」を底本として注釈をつけ「鄭柄昱校註」『壅固執伝』という形で再版されている。<sup>(15)</sup>

### 一、『壅固執伝』の研究史

『壅固執伝』の出典に関する先行研究は、『壅固執伝』の主題の取り方によって三つに分けられる。つまり、僧を虐待すると罰が当たるといふモチーフを主題とするか、もしくは同じ姿に変身した者との争いを主題にするか、によって、指摘される出典は異なっている。出典として指摘される説話と先行研究をその主題ごとによって整理すると、次のようである。

#### I、僧を虐待すると罰に当たるといふ話型（「長者沼説話」類型）

崔来沃氏は、全国的に分布している「長者沼説話」類型の話を『壅固執伝』の出典とし、口伝と文献を合わせ、

一三八種の類話を指摘した。(16)

ちなみに張徳順氏は、奎章閣所蔵『朝鮮邑誌』に収録されている説話から、三つの話を取り上げ、「壅固執伝」の類話の一つであると指摘した。

黄海道『海西邑誌』『康翎邑誌』古蹟條〈跡婦岩〉

黄海道『海西邑誌』『松禾邑誌』古蹟條〈龍岩〉

慶尚道「咸昌邑誌」古蹟條〈萬枝臺〉

・張徳順「説話の小説化―壅固執伝と裴裨将伝を中心に―」『韓国説話文学研究』博而精出版社、一九九五年。  
張徳順氏は、ほかに本物と偽物の争いモチーフの話やインド説話、また「金慶争主説話」なども、出典として指摘している。

## II、本物と偽物との争いの話型

① 鼠がある人と同じ姿に化けて、本物を追い出すという話型。『韓国口碑』など、口承の民間説話に多く見られる。

・催来沃「壅固執伝の諸問題研究」『東洋学』第一九号、檀国大学校東洋学研究所、一九八九年。

・金鉉龍「壅固執伝の根源説話研究」『国語国文学』第六二号、一九七三年。

② 「爪を粗末にしてはならぬ」孫晉泰『朝鮮民話集』郷土研究社、一九三〇年。

・張徳順「説話の小説化―壅固執伝と裴裨将伝を中心に―」『韓国説話文学研究』博而精出版社、一九九五年。

③ 『柳淵伝』(17)

・金鉉龍「壅固執伝の根源説話の研究」『国語国文学』卷六二〜六三、国語国文学会、一九七三年。

## III、IとIIとが混ざった話型

① 『ジャータカ 七八話』「イツリーシャ前生物語」(18)

・鄭仁漢「壅固執伝の説話研究」『文学と言語』巻一、文学と言語研究会編、一九八〇年。

②『西遊記』（三九回）（五八回）

・丁奎福「西遊記と韓国古小説」『亜細亜研究』第四八号、高麗大学校アジア問題研究所編、一九七二年。

③「眞許仮許事」『破睡録』副墨子編（19）

・金東旭「パンソリ根源説話添補」『国語国文学』巻三四・三五、国語国文学会編、一九六七年。

④「金慶争主説話」『實事叢譚』巻二、福無非次自己召條（20）

・張徳順（I）「僧を虐げる類型をもつ説話」の挙げた論文に同じ。）

Iの僧を虐げると罰に当たるという「長者沼説話」の類型の説話において、托鉢をしに来た僧を虐げて追い出すという展開や、僧を虐げると罰に当たるという展開から見ると、『壅固執伝』前半部、偽物の登場の原因となった壅固執の悪行と類似している。しかし、「長者沼説話」の類型の説話には、本物と偽物が争うという展開はない。ところが、IIのような鼠がある人と同じ姿に化けて、本物を追い出す話型には、僧または仏教に関するモチーフはなく、仏教的な主題も持たない。従って、『壅固執伝』や『宇治拾遺』「留志長者」のような仏教的要素は認められない。こうしたことから、「長者沼説話」や「僧を虐げると罰に当たる」という類型の説話一つをもって、『壅固執伝』の出典と論ずることは難しい。

また、「長者沼説話」は『韓国口碑1-1』に、「龍井里龍沼の伝説」という題名で収録されているが、『韓国口碑』では、「壅固執伝類型の話」として分類されていない。考察した結果『韓国口碑』においては、本物と偽物との争いモチーフの話が、「壅固執伝類型の話」として分類されていることが確認できた。

本章においては、「壅固執伝」類話として、僧や托鉢をするというモチーフの登場のような仏教的要素とともに、本物と偽物との争いのモチーフが混ざった話型に注目したい。それは、仏教的要素とともに、本物と偽物との争いのモチーフの話型が、比較対象とする『宇治拾遺』「留志長者」、『今昔』、『法苑』と『壅固執伝』との共有する

話型であると考えるからである

## 二、『韓国口碑文学大系』における「壅固執伝類型の話」

そこで、先に私は、今回の考察に備え、韓国の古典『壅固執伝』を日本語に翻訳した<sup>(21)</sup>。まず『壅固執伝』から事項を取り出す、その中で、物語を構成する骨格をなす（基本的事項）と、付加的に形成されている（説明的事項）とを区分することにしたい。<sup>(補注512)</sup>

『韓国口碑』に、「壅固執伝類型の話」として分類されている説話は、総計三七話である（類系分類63112「主人に化けて本物の主人を追い出した鼠の退治」〈壅固執伝類型の話〉）。

『韓国口碑』に収録されている三七話の「壅固執伝類型の話」は、韓国各地域に分布していることが分かる。特に、鼠が化けて偽物の人間となり、本物と争うという話型が多く見られる（三三話）。（2）Ⅱのような化けた鼠がほんもの（人間）を追い出すという類型の話型を、先行研究においては、「（化けた）鼠説話類型」とも言う。調査の結果、『韓国口碑』において、その「（化けた）鼠説話類型」と「壅固執伝類型の話」は、同じ類系に分類（類系分類63112「主人に化けて本物の主人を追い出した鼠の退治」〈壅固執伝類型の話〉）されていることが確認された。同じ姿の者二人が出てきて迷わせるといふ話型は、数多くある韓国の古典小説の中でも『壅固執伝』だけであると指摘<sup>(22)</sup>されている。そのほか『今昔』には、卷二七第三九話「狐変人妻形来家語」と、狐が妻と同じ姿に化けて、家に入ってきて来るといふ説話があることは参考となるだろう。

## 第三節 『宇治拾遺物語』と『壅固執伝』との比較

『宇治拾遺』「留志長者」と『法苑』七七「長者経」及び『壅固執伝』の比較分析を行い（【表1】とする）、仏



典説話の受容と変化について考察する（「表1」を参照すること）。

【表1】『宇治拾遺』・『法苑』・『壺固執伝』の比較対照表

場所	人物	性格	歌	原因	区別 方法 (偽物)	危機	解決	結末	話末 評語
『法苑珠林』「盧至長者因縁経」	盧至長者	布施をしない、裕福であるが下劣、けち臭い。	「我今節慶費、縱酒大歡樂、 過過毘沙門、亦勝天帝釋」	お酒を飲んで帝釈天を屈辱したため	帝釈天が変身 食事を作り、蔵を開いて財宝や衣服の飾りを母や妻、眷属と人々に与える ①黄族の人数、財産、秘密の事を聞く ②脇の下にあるアザ	棒で叩かれ道に捨てられる 家人が、財産を使い果たす	仏の力で、 元の姿(帝釈天)に戻す。	仏を信じて須陀洹果を得る。 天龍八部四衆はこれを知り、因縁を悟る。	
『宇治拾遺』「留志長者事」	留志長者	心がけち臭い、吝嗇、貪欲	「今曠野中、食飯飲酒天安樂、 猶過毘沙門天、勝天帝尺」	(歌の内容から) 憎らしいと思つて	帝釈天が変身 蔵を開けて妻下、従者、修行者、乞食など、みんなに宝物を配る 腰に、ほくろのあと	ほんものだと信じて認めたくない。 にせものは蔵を開けて人々に宝物を配る	仏の力で、 元の姿(帝釈天)に戻す。	かやうに、帝釋は人をみちびかせ給事、はかりなし。そらうに、長者が財を失はんとは、なにしにおぼしめさん、慳貪の業により、地獄に落べきぞ、あはれませ給御心ぎしによりて、かく構へさせ給けるこそ目出けれ。	
『壺固執伝』	壺室(オンタン)村	① 性格が悪い ② 母親に親不孝		仏教を侮り、僧を迫害する 托鉢をしに来たハク大師を叩いて追い出す。 ハク大師が、わら束で作る。	① 妻(官服にある傷穴) ② 妻・頭の傷 ③ 毒・頭の傷 ④ 毒・頭の傷 ⑤ 毒・頭の傷 ⑥ 毒・頭の傷 ⑦ 毒・頭の傷 ⑧ 毒・頭の傷 ⑨ 毒・頭の傷 ⑩ 毒・頭の傷 ⑪ 毒・頭の傷 ⑫ 毒・頭の傷 ⑬ 毒・頭の傷 ⑭ 毒・頭の傷 ⑮ 毒・頭の傷 ⑯ 毒・頭の傷 ⑰ 毒・頭の傷 ⑱ 毒・頭の傷 ⑲ 毒・頭の傷 ⑳ 毒・頭の傷 ㉑ 毒・頭の傷 ㉒ 毒・頭の傷 ㉓ 毒・頭の傷 ㉔ 毒・頭の傷 ㉕ 毒・頭の傷 ㉖ 毒・頭の傷 ㉗ 毒・頭の傷 ㉘ 毒・頭の傷 ㉙ 毒・頭の傷 ㉚ 毒・頭の傷 ㉛ 毒・頭の傷 ㉜ 毒・頭の傷 ㉝ 毒・頭の傷 ㉞ 毒・頭の傷 ㉟ 毒・頭の傷 ㊱ 毒・頭の傷 ㊲ 毒・頭の傷 ㊳ 毒・頭の傷 ㊴ 毒・頭の傷 ㊵ 毒・頭の傷 ㊶ 毒・頭の傷 ㊷ 毒・頭の傷 ㊸ 毒・頭の傷 ㊹ 毒・頭の傷 ㊺ 毒・頭の傷 ㊻ 毒・頭の傷 ㊼ 毒・頭の傷 ㊽ 毒・頭の傷 ㊾ 毒・頭の傷 ㊿ 毒・頭の傷	にせものは、壺固執の妻はと幸せになり、たくさんの子供を産む。 仙人に化けて	にせものとき供は、わら束と人形に化ける。	壺固執は仏道を尊んで、親孝行と他人に積善する。 この本は、人の訓戒を目的とし、男女を問わず読む人は親孝行し、他人に積善するものだ。万一、積善を親孝行しないと、昔の壺固執と変わらぬ。天作孽善可違自作孽不可追、天災は避けられるが、自ら招いた災いは避けられないものだ。これを読む人は、心に深く刻み、なにごとを親孝行することだ。	

以下、説話の構成にそって比較してみたい。

(1) 発端 (登場人物の特徴と舞台)

両話の主人公である「留志長者」と「壅固執」は、裕福であったが、欲深いしけち臭い性格である。彼らが仏または僧を侮るような行動をとることから話は展開する。

すでに廣田收氏によって、「かつて長者の意味も、本来的には『私聚百因縁集』が示しているように、世俗的な次元を遥かに超えた存在である。それは中国文献や仏教説話集『今昔』における信仰としての意味をもつ。それが『宇治拾遺』において、長者は人間と等身大に俗化され、信仰の問題は稀薄化されている。(中略)『今昔』も『宇治拾遺』も、『法苑』やジャータカにいう「仏在世時」という時、「舎衛城」という所など、設定の枠組みを削っている。そして長者の信仰の意味を消し、共同体の中での長者の行動を個人的な悦楽の問題として日常化させていることと関係がある。それは単なる形式上の変化ではなく、物語を伝えようとする基盤の変化によるものである。それが日本化の受容に従う問題であった。そのとき、独立した伝承的な表現である偈を核として、漢文表現から和文表現に翻訳し、物語を再構成するにあたって、合理化させていく経過を物語の表現そのものが内在させていることが指摘できよう<sup>(23)</sup>と批評されてきたとおりである。

(2) 展開 (にせもの登場の原因となる主人公の悪行)

〔本文7〕 「留志長者」

「人離れたる山の中の木の陰に、鳥獣もなき所にて、ひとり食みたる心のたのしきさ、物にも似ずして、誦ずるやう、今曠野中、食飯飲酒大安樂、猶過毘沙門天、勝天帝尺」。此心は、今日、人なき所に一人みて、物を食ひ、酒を飲む。安樂なる事、毘沙門、帝尺にもまさりたり」といひけるを、帝尺、きと御覽じてけり。にくしとおぼしけるにや、留志長者が形に化し給て」

〔本文8〕 『壅固執伝』

「意地悪い根性を持っていて、仏教を侮って、罪のないお坊さんの耳に穴を開けたり、肩に火で熱した鉄をおしついたりして有名であった。この奴、これほど意地悪だったので、壅の家の近所には御坊さんすら近寄れないのであった」

〔本文9〕『壅固執伝』…母に対する親不孝の条

「長生きしたからって、何の意味があるんだい。昔から「人生七十古来稀なり」という話があるのに、八十歳もなる我がお母さんは、長生きすぎで困ったね」

『宇治拾遺』において、母は〔本文7〕のとおり、ほんものにとせものを区別する場面のみが登場する。『壅固執伝』のような母に対して親不孝な行動をする展開は、『宇治拾遺』『今昔』『古本』『法苑』には出て来ない。「親不孝」の場面や仏教を侮ってお坊さんを虐待するというモチーフは、仏教を抑圧し、儒教を重んじた朝鮮社会からの影響であると考えられる。(24)

### (3) 偽物登場と区別方法

この本文からみると、『宇治拾遺』は、帝尺が留志に変身する『壅固執伝』の場合はハク大師がわら束をもって偽物を作るところに特徴がある。『宇治拾遺』においては、本物の確認方法として腰にある小さなほくろが用いられる。『壅固執伝』では、官服の傷穴と頭の傷あと、そのほか官庁からは戸籍を聞かれる。この戸籍や財産、家の秘密のことについて聞かれる場面は『法苑』に類似する。

### (4) 結末

『宇治拾遺』には、本文「仏の御力にて」のように、「仏の力」で元の姿(帝釈天)に戻る。『壅固執伝』においては白髪道士の道術で、偽物はわら束に、子供は操り人形となる。『宇治拾遺』『壅固執伝』両話ともに、主人公は反省して仏教を敬い、善人となるハーピーエンドの結末である。このような相違は、小林保治氏が指摘されるように、

「長者経」では、王が釈尊の力を頼りに、二人の盧至を像に載せて共々に仏所に赴き、事の解決を計ろうとしたと叙することを、『宇治拾遺』は、「仏の御もとに、二人ながらまいりたれば」と、王は同行せず、帝釈と盧至の二人が自発的に連れ立って出かけたように語り、最終的な結着の場面には王は登場しないというように、王の扱いがいかに軽いものになっている。これも（日本化）の一端とみてよい。<sup>(25)</sup>と捉えることができる。

以上の考察から、『宇治拾遺』『今昔』と『壅固執伝』の展開上の特徴について整理すると、次のようである。

・『壅固執伝』の展開

- ① 僧を迫害する場面。
- ② わらで偽物を作ること。
- ③ 壅固執の妻が偽物の子供をたくさん産む。
- ④ 白髪道士に願って、問題解決（偽物がわら束に戻す）。
- ⑤ 母に対する親不孝。

・『宇治拾遺』『今昔』の展開

- ① 主人公が山の中に行つて、一人で食事をし、お酒に酔って歌う。
- ② 偽物が蔵を開けて、妻や母など人々に財物を与える。
- ③ 帝釈天の登場、（帝釈天が）偽物に変身する。
- ④ 仏の力で問題解決（帝釈天が元の姿に戻す）。

おわりに

以上、『宇治拾遺』第八五話「留志長者」と韓国の古典『壅固執伝』との比較を通じて、話型と構成について考

察した。『宇治拾遺』と『壅固執伝』は、僧や仏など仏教的モチーフとともに、偽物との争いというモチーフによって構成される話型を共有している。

ただし、二つの作品の構成は、説話とパンソリ系小説という異なった形式による。それで、まず、『壅固執伝』の事項を取り出し、比較分析を行った。その結果、『壅固執伝』は、「母親の親不行を嘆く歌」の条や、中国の故事の引用・本物の確認の際、丁寧に戸籍を説明する場面など、付加する修辭が多いということが分かった。

さらに「留志長者」の原典となる『法苑』の事項を取り出して、構成の特質や展開について考察し、『壅固執伝』との比較分析を行った。結論としては、『法苑』では仏の教えとしての因果が重視されているが、『壅固執伝』では道徳的教訓が重視されていると言える。

それでは、『宇治拾遺』・『壅固執伝』両話を、発端・展開・危機・解決・結末といった構成について、各話の特質について整理すると、【表2】のようになる。

【表2】から、①発端部分の特徴として『壅固執伝』に「親不孝」「僧を迫害する」ということが挙げられる。『宇治拾遺』には『壅固執伝』のような「仏教を侮り、僧を迫害する」といった、僧を虐待する展開と「親不孝」の展開はない。『壅固執伝』における「親不孝」の展開は、朝鮮の社会文化となる儒教思想とつながるものと考えられるが、『宇治拾遺』には、こういった儒教思想は読み取れない。②の展開において、『壅固執伝』は「托鉢をしに来たハク大師に激怒し、耳に穴を開け、お尻を叩いて追い出す」と、僧を迫害する場面が詳しく描かれている。これに対し、『宇治拾遺』では、僧を迫害するという展開はなく、留志長者が酒に酔って踊りながら帝釈天を屈辱するような内容の歌を歌ったために、偽物が登場するという展開である。ほかに、③偽物の登場において、『壅固執伝』はハク大師がわからずで偽物を作るとあるが、『宇治拾遺』では帝釈天がにせものに変身する、とある。しかし、偽物が元の姿に戻るという問題の解決において、『壅固執伝』は、偽物を作ったのはハク大師ではなく仙人とあるが、『宇治拾遺』では「仏の力」で帝釈天が元の姿に戻す、とある

④の本物の危機において、『壅固執伝』は、追い出されてこじきになるとあるが、『宇治拾遺』では、追い出された後、本物の苦勞する展開は記していない。『壅固執伝』は、「妻は偽物と幸せになり、たくさんの子供を産む」とあるが、『宇治拾遺』では「偽物は蔵を開けて人々に宝物を配る」と、他人に積善するという展開となっている。『壅固執伝』のような「妻が、偽物の子供を産む」という展開や、「僧を迫害する」「親不孝」のような展開は、観見客を意識した劇ならではの面白さを求めたものと考えられる。つまり、観劇というパンソリから生じた小説としての特徴であると考えられる。⑤の本物の区別方法として『壅固執伝』には、①妻：官服の傷穴②妻：頭の傷と白髪③官庁から戸籍、財産などを聞かれる内容について詳しく描かれている。それに対し『宇治拾遺』は、母による「腰に、ほくろのあと」を確認することが重視されている。

【表2】『宇治拾遺』『留志長者事』と『壅固執伝』比較表（太字は、各話の特徴の展開とされるところである）

				『宇治拾遺』『留志長者事』	「壅固執伝」
①発端	心がけちくさい	性格が悪くて、	親不孝、 仏教を侮り、 僧を迫害する		
②展開	お酒に酔って「今曠野中、食飯飲酒大安 楽、猶過毘沙門天、勝天帝尺」と歌う	托鉢をしに来たハク大師に激怒し、耳に穴を 開け、お尻を叩いて追い出す	ハク大師がわら束で作る。		
③にせ もの	帝釈天が変身 ほんものの事を、認めてくれない				
④危機	にせものは蔵を開けて人々に宝物を配る	追い出されて、こじきになる			

⑤区別	王と、 仏に訴える。 腰に、ほくろのあと、	壅固執の妻、にせものの子供を産む 金別監（壅座首の次官）と、 官庁に訴える			
⑥解決	仏の力で、	①妻：官服の傷穴 ②妻：頭の傷と白髪 ③官庁から：戸籍、財産などを聞かれる 仙人に礼拝して、			
⑦結果	元の姿（帝釈天）に戻す。 須陀洹果を証して、	にせものと子供は、わら束と人形に化ける			
⑧結末	悪い心が離れ、 物惜しむ心も失う	仏道を尊んで、 他人に積善する			

ちなみに、⑥の問題解決において、『壅固執伝』は、偽物を作ったのはハク大師、訴えたところは官庁、問題解決は白髪道士と、三人はつながりのない人物である。しかし、『宇治拾遺』は、帝釈天が偽物と変身し、偽物を区別してもらうため「仏」に訴え、最後には「仏の力」により問題が解決されるとあり、仏教との関係が深く感じられる。結末においては、両話とも主人公は反省し、善人になるというハーピーエンドであるが、『壅固執伝』の場合は、善人となった証拠として改めて儒教思想となる「親孝行」の事例が繰り返して出て来る。

それに対し、『宇治拾遺』は、「須陀洹果を証して、悪い心が離れ、物惜しむ心も失う」と、「仏の力」を強調しているようである。前述したように、『宇治拾遺』と『壅固執伝』は、先行研究により指摘される出典とされる説話は異なる。『壅固執伝』は、鄭仁漢・張徳順、印権煥氏などの先行研究により、仏典説話から伝承されたことは、すでに指摘されているが、仏典説話からの伝承・受容・過程を明らかにすることについては、これからの研究課題としたい。

要するに、『宇治拾遺』と『壅固執伝』とは、仏典説話から伝承された同じ話型を持つ説話である。ところが『壅固執伝』は、「母親の親不孝を嘆く歌」と「親不孝」が繰り返して表現されているなど、朝鮮伝統文化である儒教思想が読み取れる。それに対し、『宇治拾遺』には、仏教説話的要素とともに、

①「長者は人間と等身に俗化され、信仰の問題は稀薄化されている」<sup>(26)</sup>。

②「仏の御もとに、二人ながらまいりたれば」と、王は同行せず、帝釈と盧至の二人が自発的に連れ立って出かけたように語り、最終的な結着の場面には王は登場しないというように、王の扱いがいかに軽いものになっている」<sup>(27)</sup>。

と、①と②において、世俗説話的要素が感じられる。なお、③（第一節（2）『宇治拾遺』特徴の展開において指摘した）「妻に食べ物を用意させる展開」において、偽物が蔵を開けてみんなに財物を配り与えながら、言い分けるように語る展開では、まず、「妻に食べ物を用意させる」という、結論に至るまでの妻とのやりとりが語られて

いる。『法苑』や『今昔』には、このような展開は記されていない。『宇治拾遺』では、妻とのやりとりを長く語るところに物語の楽しさがある。このことは、物語化させるための『宇治拾遺』の工夫と言えよう。

このように、『壅固執伝』には、朝鮮の伝統的な社会文化である儒教思想が読み取れることに對し、『宇治拾遺』では儒教思想は重視されず、仏教説話的要素とともに、世俗説話として物語化されて、語られていると考えられる。

注

(1) 三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』岩波書店、一九九〇年。

(2) ほか、『宇治拾遺』第八五話「留志長者事」の諸注釈は、次のとおりである。

① 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』(有精堂出版、一九七〇年)

この話は「長者経」の話から得た所の『今昔』巻第三第二二話と同話である。しかし、大分話の進行において叙述が変化されている。

② 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』(小学館、一九七五年)

「長者経」がもとになる説話であろう。『今昔』巻第三第二二話と梅沢本『古本』五十六話と同じであるが、『今昔』のもととはきわめて簡略である(たとえば、ははくその話はない)。仏陀および帝釈天の慈悲と方便の力をたたえる仏教説話の一つであるが、仏に方便にでもよらなければ解脱できない人間本然の物欲の強さが描かれている。食糧をたつぷり持って、誰もいない山の中で一人存分に食う楽しさ、思わずとび出す鼻唱のあたりもほほえましく、またそれが契機となって帝釈天が化身する構成も自然で味があり、すぐれた一編といえよう。

③ 大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』(新潮社、一九八五年)



「長者経」に基づくもので、『法苑』七七に引かれている。『今昔』三一・二二には、いくらか簡略に説かれており、『古本』五六話には、本書と同様に伝わっている。仏陀および帝釈天のすばらしさが、人間の物欲の強さとともに、まことにいきいきと示されている。

④ 小林智昭・増古和子校注『宇治拾遺物語評釈』（武蔵野書院、一九八六年）

「長者経」を原典とする。『今昔』巻第三第二二話および『古本』五十六話と同話である。ただし『今昔』のものはきわめて簡略である。常套手段では済度しがたい物欲の権化となった男が、帝釈天に慈悲と方便によって解説したという、主題も情況もごく自然で受け溶けやすい仏教説話である。なお、人目をするので山中に入り、たらふく食べて一人悦に入る男の姿は描き得て妙であり、まさに本話の圧巻といえる。しかし翻って考えてみれば、物欲は人間体然のかなしむべき業ともいうべく、仏の方便によらねば解脱しえぬ、だれにも課せられたみじめさではあるまいか。

⑤ 浅見和彦・三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』（岩波書店、一九九〇年）

帝釈天が慳貪の業をあらためさせ、証果の身としたという内容で、構想上は仏教説話と全同。しかし、本話は、長者にも何やら愛するべきところがあるし、帝釈天の行動もきびしいが、情味がある。堅苦しい仏教説話にしないところが本書の特徴である。

⑥ 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集宇治拾遺物語』（小学館、一九九六年）

主人公の留志長者は、自分の貪欲ぶりを自覚しており、またそれが改めねばならぬ性向だということを承知しながらも、なお欲望に駆られて生きている。そういう設定ゆえに、彼の吝嗇ぶりが活写され、調子にのって毘沙門天や帝釈天の名を引き合いに出すくだりをも無理なく読ませてしまう。実は帝釈天の憤慨と報復は、留志の墜地獄を救う方便であったというまとめ方はやや牽強付会な印象を与えもするが、その枠組の堅苦しさを、さほどには感じさせない語り口に救いがある。

以上の諸注釈を考察してみると、『宇治拾遺』「留志長者」の説話は、「長者経」を原典とし、『今昔』『古本』と同話であるが『今昔』は簡略化されている。仏の慈悲と力を語ろうとした仏教説話でありながら、堅苦しい仏教説話ではなく、人間本然の欲深い心が、楽しく語られていると考えられる。

(3) 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』有精堂出版、一九七〇年。

(4) 小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』小学館、一九九六年

(5) 本論における『法苑』本文引用は、釈道世著、周叔迦・蘇晉仁校注『法苑珠林校注 五』（中国仏教辭典選刊、二〇〇三年）を用いる

(6) 小林保治「留志長者の事―『宇治拾遺物語』小考（二）―」『早大教育学部学術研究』巻二五、早稲田大学教育会編、一九七六年。

(7) 廣田收「留志長者事考」『『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年。

(8) 望月信亨『望月仏教大辞典』第一巻、世界聖典刊行協会編、第三版発行、一九六〇年。

(9) 本文引用は、今野達校注『新日本古典文学大系 今昔物語』（岩波書店、一九九九年）を用いる。

(10) 鄭魯湜『朝鮮唱劇史』朝鮮日報社出版部、一九四〇年。

(11) 宋晩載「観優戯五十首」（李恵求「宋晩載の観優戯」『三十周年記念論文集』中央大学校、一九五五年。

「観優戯五十首」とは、宋晩載（一七七八―一八五一年と推定）により書かれた、パンソリ公演の様子を歌った漢詩である。李恵求氏は、延世大学校図書館に所蔵された「観優戯」を初めてその存在を紹介し、論文「宋晩載の観優戯」に発表した。

(12) 印権煥「失伝パンソリ詞説研究」『東洋学』第二六巻、檀国大学校東洋学研究所、一九九九年。

(13) 「壅固執伝」の異本系統は次のようである。

『壅固執伝』異本は、一一本の筆写本が伝わっている。

- ① 「金三不本」『壅固執伝』金三不校註、国際文化館、一九五〇年（鄭柄昱校註『壅固執伝』（新丘文化社、一九七四年）として、再版された）
- ② 「朴順浩本」（三〇張本）『壅固執伝イラ』一九三四年もしくは一八七四年筆写（崔来沃「壅固執伝」『韓国学論集10』漢陽大学校韓国学研究所、一九八六年）
- ③ 「崔来沃本」（三五張本）『壅固執伝イラ』一九二四年筆写（崔来沃「壅固執伝」『韓国学論集11』漢陽大学校韓国学研究所、一九八七年。）
- ④ 「朴順浩本」（一五張本）『壅生員伝』一八九三年筆写、檀国大学校栗谷図書館所蔵（『ハングル筆写本古小説資料叢書37』五星社、一九八六年）
- ⑤ 「延世大本」（二五張本）『壅固執伝』一九四〇年筆写（崔来沃校註「延世大本壅固執伝」『東洋学19』檀国大学校東洋学研究所、一九八九年）
- ⑥ 「姜銓燮本」（一〇張）『壅固執伝卷之単イラ』筆写年代未詳（崔来沃「壅固執伝異編」『師大論文集4』漢陽大学校、一九八六年）
- ⑦ 「金一根本」『壅固執伝（打令調）』（巻物、後半部なし）筆写年代未詳（崔来沃『師大論文集4』漢陽大学校、一九八六年）
- ⑧ 「朴順浩本」（三三張本）『壅氏伝卷之ホラ』筆写年代未詳（『ハングル筆写本古小説資料叢書』第三六巻、五星社、一九八六年）
- ⑨ 「金東旭本」（三三張本）
- ⑩ 「史在東本」（一六張本）
- ⑪ 「金鐘喆本」（一八張本）一九〇九年筆写

パンソリ系小説は、口承というパンソリの性格上、聴衆や筆写者の意識と意図、時代的背景などの違いに

より、様々な異本が生じたと考ええる。

この論文においては、①「金三不本」②「鄭柄昱校註本」③「朴順浩本」④「崔来沃本」⑤「延世大本」を中心に比較考察を行うことにする。

(14) 金三不校註『壅固執伝』国際文化館、一九五〇年。

(15) 「鄭柄昱校註」『壅固執伝』(新丘文化社、一九七四年)(日本語訳については、論者がすでに『日本古典文学研究』「資料紹介 壅固執伝」第一号、二〇一一年一〇月)に発表した(本論における『壅固執伝』本文テキストとして、用いる)。

(16) 崔来沃「説話と小説化過程に対する構造分析―殊に長者沼伝説と壅固執伝の場合」ソウル大学校国文学研究会編『国文学研究』第七卷、ソウル大学校国文学研究会、一九六八年。

(17) 一六〇七年、朝鮮王朝時代に実際起きた事件を記した話のこと。李恒福『白沙集』卷一六に収録。

(18) 中村元監修・補注『ジャータカ全集 第八卷』春秋社、一九八二年。

(19) 『破睡録』は、作者・年代未詳の漢文笑話集のこと。異本としてソウル大学校所蔵『破睡録』・油印本『古今笑叢』『破睡録』がある。『古今笑叢』『破睡録』によると編者は副墨子、編纂年度は「歳壬戌陽月初吉」とあるが、確かな年次は知られていない。鄭容秀氏は「破睡録研究」において(一九九五年「韓国漢文学会」発表)、奎章本『金淵破睡録』を根拠として、一六八二年金淵によって編纂されたと推定。

(20) 一九一八年、崔永年(一八五六―一九三五年)により書かれた説話集のこと。

(21) 金恩愛「資料紹介 壅固執伝」『日本古典文学研究』第一号、二〇一一年一〇月。

(22) 丁奎福「西遊記と韓国古小説」『亜細亜研究』第四八号、高麗大アジア問題研究所、一九七二年。

(23) 注(7)に同じ。

(24) 印権煥「壅固執伝の仏教的考察―根源説話と主題を中心に―」『民族文化研究』第二八卷、民族文化研究

所、一九九五年。

印権煥氏による『壅固執伝』出典とされる説話の指摘を私に要約、整理すると次のようである。

『壅固執伝』は、インドの仏典説話から伝わった仏教説話を出典とし、パンソリを経て形成・展開された仏教的小説である。しかし異本の筆写が広がりつつ、(パンソリの)観客層の社会批判意識と当時の社会が諷刺的に描かれて、仏教的主題に付け加えられたと思われる。初めに説話化、パンソリ化、小説化に参加した伝承者・作家・編者たちの身分は、文章力のある僧、または仏教信徒・廣大類とも推測される。具体的には、作品に描かれる僧の様子か、その僧たちに好感や同情を持った仏教信徒だと考えられる。その僧たちは観相やお守りなど、民間的大衆的仏教階層に深く入り込み念仏と布施を求め、お寺増築や布教活動をしながら暮らす僧たちと考えられる。しかし、当時社会において僧は、支配階層や貴族たちから蔑視され、実際にも僧は権勢を失い、非難と嘲弄の対象となる場合も少なくない。そのため作品に出てくる仏教を侮り僧に対し虐待する場面は、当時僧の直面した現実であったと言えよう。

(25) 注(6)に同じ。

(26) 注(7)に同じ。

(27) 注(6)に同じ。

## 結章

鎌倉初期に成立したとされる説話集『宇治拾遺』を読もうとするとき、どのような分析方法が有効であろうか。いうまでもなく、国文学における伝統的な説話研究では、考察の対象とする説話を、並行する同一説話をもつて対照させ、表現上の異同を調べ、異同の意味するところを明らかにするというふうには、比較分析の方法によって『宇治拾遺』の説話の独自性を追求する手続きがあることは周知のとおりである。注釈の伝統に基づく分析を主とする物語研究とは異なり、説話は比較という独得の分析方法が有効であるとされてきた。

ところで、早くから日本の古典文学研究の有力な方法として、和漢比較文学という領域が存在する。ところが、それは特に中国の古文獻、経典や歴史書、『文選』や『白氏文集』に代表される漢詩や漢文、あるいは唐代の小説との比較が盛んに行われてきた。ところが、従来のこのような研究は、東アジアといっても日・中間の限られた比較に終始し、中国文学が日本に伝播し受容されたという枠組みのもとでだけ論じられてきた。ところが、伝播論は、伝播・受容が作品の本文すべてを決定するかのような印象を与えるところに、私は疑問をもつ。

それだけではない、残念なことに韓国文学は比較の対象範囲から除外されてきた。韓国の口承文芸もまた軽視されてきたことは言うまでもない。

そこで私は、日本古典の比較研究のために、中国だけでなく韓国という視点を加えること、また文献のみならず口承文芸を加えることを提案したい。

まず、『三国遺事』に代表される、韓国の古文獻はおよそ一三世紀に遡るものとされている。このことは、『宇治拾遺』の成立時期とほぼ時代といえる。異なる地域の作品ではあるが、同時代の空気を呼吸することにおいて伝承を比較することには意味がある。さらに、文献上の比較だけでなく、口承文芸もまた比較にとって有効な資料となる。なぜなら、いずれの地域の作品においても、口承文芸は説話の母胎をなすと考えられるからである。

説話の母胎が明らかになれば、説話の生成する過程と目的とが明らかになるはずである。

日本における口承文芸、例えば現在採録され資料化されている昔話は、江戸時代から近代に至る時期に農村に伝承されたものと推定できる。それらの多くは一九七〇～八〇年代に採録されたものであり、おそらく昔話の日本における伝承の終息期にあたるものであるう。

一方、『韓国口碑』に記録された口碑もまた一九七〇～八〇年代に採録されたものが多い。このことは、口承文芸同士の比較において、同時代性を共有するという意味をもつ。

本論文において私は、異なったジャンルでありながら、特に話型を共有する昔話、小説、説話を、同時に日・中・韓という地域を異にする本文を対象とし、比較という方法によって、『宇治拾遺』の説話の特質を考察してきた。

その中で『宇治拾遺』の説話には、一定の傾向を確認することができる。それは、簡潔に言えば『宇治拾遺』の成立した鎌倉時代の平安京・京都における、いわば家庭小説としての性質である。あるいは、『宇治拾遺』の説話は家庭的な内容と表現をもつことである。(1)つまり、説話の本文の中に、編者と読者の関心のありかをうかがう手がかりが比較のうちに浮かび上がってくるからである。

私は本論において、**第一章では、『宇治拾遺』**「雀報恩事」と韓国昔話「フンプ伝」の類話を調べ、採録事例の事項を取り出し、両国の話の構成や特徴などの比較を通じて共通点と相違点について分析し、各話の特徴と関連性について考察してきた。それによると、韓国昔話「フンプ伝」の類話の場合、兄弟の対立関係という家族内の対立関係が存在するが、日本昔話「腰折雀」の場合、ほとんどの事例が、隣の人との対立関係か、対立関係が成立しない。

これに対し、『宇治拾遺』の場合、老女と隣の老女との対立関係だけでなく、老女と孫との対立という、家族間の対立・葛藤が強調され、感情や態度の変化に伴って、家族内の葛藤を中心に説話が展開されている。そうい

った点が、『宇治拾遺』の説話「雀報恩事」の特徴の一つであり、口承の昔話「腰折雀」との大きな相違点だと考えられる。もう少し言えば、本説話は、鎌倉期の京都という都市における家庭を舞台とする物語であるといえる。つまり、昔話の語る「貧しい者が豊かになる」という典型的な転換構造をもつ話型の上に、都市的な老人問題<sup>(2)</sup>、すなわち老人は都市において労働力として期待されなくなると考えられ、家庭の人間関係の中で弱い立場に置かれていたと推測される。そこで、弱い立場にある主人公が相対的に強い立場へと転換する話型が重ねられる。それこそが、鎌倉期の都市、京都において生成した『宇治拾遺』の特質である。

**第二章では**、従来あまり取り上げられることのなかった韓国昔話を、新たに対照させることによって、日本昔話だけでなく「瘤取爺」と呼ばれる話型をもつ『宇治拾遺』第三話が、どのような特質を備えているかについて考察を試みた。この考察により、日韓両国ともに、設定や展開から見れば同じように見えるが、モチーフを詳しく分析することで、日韓の「瘤取爺」の異なりを明らかにした。そして、韓国昔話の特徴として、瘤から歌が出るという発想の特異さとともに、その瘤を売ったり、さらに瘤を取られた代りに、金銀宝物などといった補償を求めたりすることが特徴であることを明らかにした。一方、日本昔話では、主題が危機の回避や災厄の除去、もしくは幸福な結婚や富の獲得にあると考えられる。同時に、『宇治拾遺』では、結末に至るまでの説明や、主人公の心理の描写が顕著である。それが、中世説話集としての『宇治拾遺』のひとつの特徴であることを明らかにした。

**第三章では**、『宇治拾遺』第九六話と日本昔話「藁しべ長者」話型や、『今昔』『古本』との比較「藁しべ長者」類話の原典として指摘される、『カタール・サリット・サーガラ』『ジャータカ』『根本説一切有部毘奈耶』『六度集経』との比較考察を行った。『ジャータカ』や仏典を出典としながら、韓国昔話では、儒教思想が読み取れるが、日本昔話では仏教的要素が強調されていると考えられる。さらに昔話の構成からみると、すでに先行研究において、韓国昔話「藁繩一本」型と日本昔話「藁しべ長者」の話型「観音祈願型」とが類似すると指摘されてきたが、



今回の考察により、韓国昔話「藁繩一本」型は、むしろジャータカや仏典『根本説一切有部毘奈耶』に近いと考えられる。

第四章では、日韓両国における「五色鹿」の伝承は、動物は恩返しをするものの、人は恩を忘れる、もしくは、恩を仇で返すものであるという主題を基本としている。「五色鹿」の話型は、インドのジャータカや『法苑』など、仏典を出典としているが、『宇治拾遺』第九二話は、出典より仏教色が消され、慈悲報恩の大切さを説く教訓的な動物説話に変えられることで、仏教的な要素よりも人間社会における教訓が重視されている。そのように出典から世俗説話化されたため『宇治拾遺』「五色鹿」の話型は、『今昔』、「仏説九色鹿経」、『法苑』などに比べて、昔話「報恩動物・恩知らずの人」にもっとも近いと言える。

第五章では、『宇治拾遺』第八五話及び「留志長者」の原典とされる『法苑』から事項を取り出して、構成の特質や展開について考察し、『宇治拾遺』第八五話及『壅固執伝』との比較分析を行った。結論としては、『法苑』では仏の教えとしての因果が重視されているが、『壅固執伝』では道徳的教訓や「母親の親不幸を嘆く歌」と「親不孝」が繰り返し表現されているなど、儒教思想が重視されている。それに対し『宇治拾遺』は、仏教説話的要素とともに、原典より世俗説話として物語化されていると考えられる。

特に本説話は、韓国パンソリ系小説『壅固執伝』や、唐の時代に成立した中国仏教の類書『法苑』と比較すると、偽者か本物かを判定する者が、後者は実に多様である。特に韓国の『壅固執伝』においては、その判定が、金別監や官長という官僚や政府に委ねられることが多い。これに対して、本説話では判定者は母親ひとりに代表されている。主人公にとって（あるいは読者にとって）絶対的な存在である母親が判定できないゆえに、帝釈天しか真実を明らかにすることはできないというふうに、母親の存在は決定的なのである。

昔話関連話群についてこのように捉えてくると、『宇治拾遺』における他の話群にも、同様の傾向を指摘する

ことができる。

例えば、第四話「伴大納言の事」、第一一九話「吾婦人止ニ生贄一事」、第一九一話「極楽寺の僧、施ニ仁王経験一事」などである。例えば、第四話は、天下を取る縁起の良い夢を、本当は夢解きに占って解読してもらわなければならぬのに、妻に茶化されたために、失脚してしまったという説話である。歴史的に知られた伴大納言の政治的失脚の真相が、政治的な対立葛藤によるものではなく、夫婦間の問題だと家族的、私的なものへと引き落とすところに『宇治拾遺』の特質がある。

あるいは、第一一九話は、生贄を要求する神の正体を、東人が犬と刀でもって暴き、殺さないでくれと謝る猿を、今後は護り神となることを誓約させ、追放する。すでに指摘されているように、邪悪なる神を打倒したり殺害するのではなく、宥和するというこのような話型そのものが、神話の枠組みを引き継ぐものであるが、『宇治拾遺』の特質は、男が猿に「きやつにものわびしき知らせんと思ふなり」と言い放ったところにある<sup>(3)</sup>。つまり、男は猿に、人の立場になってものを考えることができるのか、と論じたことは、読者に対する教育的な働きがある。

第一九一話は、堀川太政大臣の病気に世の中すべての僧が招集され、僧たちは読経や祈祷に専念した。ところが、呼ばれなかった極楽寺の僧某が、中門の廊の隅で、誰も知らないのも構わず御経を読んで、大臣の全快を祈った。すると、大臣は悪鬼が退散させられる夢を見る。探すと、確かに読経する僧某が発見される。そこで、話末評語には「母の尼して祈りをばすべし」という。祈りをするときには、母の尼の気持ちで行うように、というものである。これもまた、母性を評価するものである。これらの説話に共通する性質は、『宇治拾遺』すべての説話において、一定の傾向を示すものであることは間違いない。

このように『宇治拾遺』の説話、特に昔話関連の説話群を分析しようとするときに、文献相互の比較研究だけではなく、口承文芸との比較研究が有効であることは明らかであろう。確かに、日本昔話を活用するだけではな

く、韓国の国家的事業の成果である『韓国口碑』の成果を活用し、韓国の口承文芸を対照させることによって、日中韓という広い視野のもとで説話研究を展開する可能性を追求できるものと確信するものである。その上で、さらに他の話群の分析を踏まえて、『宇治拾遺』全体の特質を考える必要があるだろう。

#### 注

(1) この問題は、まるでグリムが採録した昔話をもとに改訂を繰り返し、家庭小説として構成し直されていったことと想起させるかのようにある。

(2) 阿部奈南氏の御示唆による。

(3) 廣田收『『宇治拾遺物語』の説話と伝承―文芸比較の方法のために―』『説話・伝承学』第二二号、二〇一四年三月。

## 《参考文献》

本論文で直接引用・参照とした文献を中心に、《注釈書》、《事典類》、《単行本》、《論文》の順にまとめた。韓国文献の場合、論文題名や引用部分については、私に日本語に訳した。

### 《本文比較対照表テキスト》

- 『法苑珠林』 (唐) 釈道世著、周叔迦・蘇晋仁校注『法苑珠林校注』(中国仏教辭典選刊、二〇〇三年)  
「仏説九色鹿経」『大正新脩大蔵経』第三卷 本縁部上 「仏説九色鹿経」二卷 (大正新脩大蔵経刊行会、一九二四年)  
『宇治拾遺物語』三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語・古本説話集』(岩波書店、一九九〇年)  
『古本説話集』三木紀人・浅見和彦校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語・古本説話集』(岩波書店、一九九〇年)  
『今昔物語集』今野達校注『新日本古典文学大系 今昔物語集』(岩波書店、一九九九年)

### 《その他》

- 『六度集経』 『国訳一切経印度撰述部 本縁部六』(大東出版社、一九七五年)  
『大正新脩大蔵経』第三卷本縁部上 (大正新脩大蔵経刊行会、一九二四年)  
『搜神記』竹田晃訳 (『干寶 搜神記』(東洋文庫、平凡社、一九七八年)  
森野繁夫・先坊幸子編『干寶 搜神記』(百帝社、二〇〇四年)  
『西遊記下』太田辰夫・鳥居久靖訳『中国古典文学大系 西遊記』下、第三卷、(平凡社、一九七二年)  
『西陽雜俎』今村与志雄『東洋文庫401 西陽雜俎』卷四 (平凡社、一九八二年)  
『産語』太宰春台『和文 産語』(研学叢書号外、国立国会図書館デジタルコレクション、一九五五年)  
太宰春台『観文堂叢書 産語』11編 (国立国会図書館デジタルコレクション、一九二二年)  
『醒睡笑』鈴木棠三校訂『醒睡笑』上・下 (岩波文庫、一九八六年)  
『嬉遊笑覧』日本随筆大成編集部『嬉遊笑覧』(成光館出版部、一九二七年)

『睡隱集』 姜沆『睡隱集』卷三（王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ）  
『五常内義抄』 太田次男編『五常内義抄』第三七三冊（古典文庫、一九七七年）

〈注釈書〉

野村八良校注 『日本古典全書 宇治拾遺物語』上・下（朝日新聞社、一九四九年）  
中島悦次校注 『宇治拾遺物語』（角川書店、一九六〇年）  
山内洋一郎 『古本説話集総索引』（風間書房、一九六九年）  
中島悦次校注 『宇治拾遺物語・打聞集全註解』（有精堂出版、一九七〇年）  
渡邊網也・西尾光一校注 『日本古典文学大系 宇治拾遺物語』（岩波書店、一九七二年）  
小林智昭校注 『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』（小学館、一九七三年）  
小林智昭・増古和子校注 『宇治拾遺物語評釈』（武蔵野書院、一九七六年）  
三木紀人・小林保治校注 『宇治拾遺物語』（桜楓社、一九七六年）  
池上洵一 『今昔物語集 天竺部』全2巻（東洋文庫、平凡社、一九八〇年）  
国東文麿 『講談社学術文庫 今昔物語三』（講談社、一九八一年）  
小林智昭・小林保治・増古和子『完訳日本の古典 宇治拾遺物語』（小学館、一九八四年）  
高橋貢 『古本説話集全註解』（有精堂出版、一九八五年）  
横山重・松本隆信『室町時代物語大成』第一三巻（角川書店、一九八五年）  
山田孝雄他校注 『日本古典文学大系 今昔物語集』一（岩波書店、一九六五年）  
大島建彦校注 『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』（新潮社、一九八五年）  
小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』（小学館、一九九六年）  
池上洵一 『今昔物語集 天竺・震旦部』（岩波書店、二〇〇一年）  
小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』（小学館、二〇〇三年）

〈事典類〉

- 望月信亨 『望月仏教大辞典』第一卷（世界聖典刊行協会編、第三版発行、一九六〇年）  
長野省一 『説話文学辞典』（東京堂出版、一九六九年）  
吉田精一 『日本文学鑑賞辞典 古典編』（東京堂出版、一九七〇年）  
稲田浩二・大島建彦・川端豊彦ほか 『日本昔話事典』（弘文堂、一九七七年）  
日本古典文学大辞典編集委員会 『日本古典文学大辞典』第四卷（岩波書店、一九八四年）  
相賀徹夫 『日本大百科全書8』（小学館、一九八五年）  
乾克己共編 『日本伝奇伝説大事典』（角川書店、一九八六年）  
大阪外国語大学朝鮮語研究室 『朝鮮語大辞典』全三冊付補巻（角川書店、一九八六年）  
相賀徹夫 『日本大百科全書14』（小学館、一九八七年）  
下中直也 『世界大百科事典』（平凡社、一九八八年）  
志村有弘・諏訪春雄編 『日本説話伝説大事典』（勉誠出版、二〇〇〇年）  
伊藤亜人・大村益夫共編 『新訂増補 朝鮮を知る事典』（平凡社、二〇〇〇年）  
野村純一他 『日本説話小事典』（大修館書店、二〇〇二年）  
中村元・福永光司・田村芳郎共編 『仏教辞典』第二版（岩波書店、二〇〇二年）  
日外アンシエーツ編 『民話・昔話集作品名総覧』（紀伊国屋書店、二〇〇四年）

〈単行本〉

- 滝沢馬琴 「燕石雑志」『日本随筆大成』第二期一九卷（吉川弘文館、一九七五年）  
高橋亨 『朝鮮の物語集附俚諺』（日韓書房、一九一〇年）  
榎本秋村 『世界童話集―東洋の巻第二部― 朝鮮童話』（実業之日本社、一九一八年）  
三輪環 『伝説の朝鮮』（博文館、一九一九年）

- 山崎源太郎 『朝鮮の奇談と伝説』 (ウツボヤ書籍店、一九二〇年)
- 野村八良 『国民童話』 (国史講習会、一九二二年)
- 松村武雄 『世界童話大系 日本童話集・朝鮮童話集』 第二六卷 (世界童話大系刊行会、一九二四年)
- 朝鮮総督府 『朝鮮民俗資料第二編 朝鮮童話集』 (朝鮮総督府刊行、一九二四年)
- 中村亮平 『朝鮮童話集』 (富山房、一九二六年 / 改訂版『世界神話伝説大系』 第二六卷、名著普及会、一九七九年)
- 鄭寅燮 『温突夜話』 (日本書院、一九二七年 / 『世界民間文芸叢書 別巻三 温突夜話』 三弥井書店、一九八三年)
- 田中梅律 『朝鮮説話文学 興夫伝』 (大阪屋号書店、一九二九年)
- 島津久基 『国民伝説類聚』 (大岡山書店、一九三三年)
- 金台俊 『朝鮮小説史』 (清進書館、一九三三年 / 安宇植訳注『増補朝鮮小説史』 平凡社、一九七五年)
- 柳田国男 『桃太郎の誕生』 (三省堂、一九三三年)
- 柳田国男 『全国昔話記録』 全二一冊 (三省堂、一九四二年)
- 柳田国男 『日本昔話名彙』 (日本放送出版協会、一九四八年)
- 関敬吾 『日本昔話集成』 全六冊 (角川書店、一九五〇年)
- 金素雲 『ネギをうえた人』 岩波少年文庫七二号 (岩波書店、一九五三年)
- 岩本裕訳 『インド古典説話集 カター・サリット・サーガ』 全四冊 (岩波書店、一九五七年)
- 益田勝美 『説話文学と絵巻』 (三二書房、一九六〇年)
- 市古貞次・大島建彦 『日本の説話中世Ⅱ』 (東京美術、一九六〇年)
- 西尾光一 『中世説話文学論』 塙選書 28 (塙書房、一九六三年)
- 小沢謙一 『おばばの昔ばなし―池田チセの語る百四十話』 (野島出版、一九六七年)
- 稲田浩二 『日本昔話資料叢書』 全二五冊 (三弥井書店、一九六八年)
- 仏教説話文学全集刊行 『仏教説話文学全集』 第一卷 (隆文館、一九六九年)
- 佐々木徳夫ほか 『日本の昔話』 全18冊 (未来社、一九六九年)

- 白田甚五郎 『会津百話』(国学院大学説話研究会編、桜楓社、一九七〇年)  
 八束周吉・洪相圭訳 『韓国古典文学全集』(東京大陸書房、一九七二年)  
 山屋静 『世界むかし話集』上・下(社会思想社、一九七一年)  
 八束周吉 『韓国古典文学全集』(ソウルバルグン文化社、東京大陸書房、一九七二年)  
 川合勇太郎 『青森県の昔話』(津軽書房、一九七二年)  
 稲田浩二・武田正ほか 『日本の昔話』全三〇冊(日本放送出版協会、一九七二年)  
 佐竹昭広 『民話の思想』平凡社新書25(平凡社、一九七三年)  
 京都府総合資料館 『丹後伊根の昔話』(白川書院、一九七三年)  
 関敬吾・崔仁鶴共編 『朝鮮昔話百選』(日本放送出版協会、一九七四年)  
 白田甚五郎他編 『全国昔話資料集成』全四〇冊(岩崎美術社、一九七五年)  
 境田四郎監修 『宇治拾遺物語総索引』(清文堂、一九七五年)  
 朴榮濬 『韓国の民話と伝説 古代編』(韓国文化図書出版社、一九七五年)  
 池上洵一他 『鑑賞 日本古典文学13 今昔物語集・宇治拾遺物語』(角川書店、一九七六年)  
 崔仁鶴 『韓国昔話の研究』(弘文堂、一九七六年)  
 小沢俊夫編・竹原威滋訳 『世界の民話』全二五冊(ぎょうせい、一九七六年)  
 関敬吾 『日本の昔話 比較研究序説』(日本放送出版協会、一九七七年)  
 稲田浩二・小澤俊夫 『日本昔話通観』全三二冊(同朋舎出版、一九七七年)  
 関敬吾 『日本昔話大成』全二二冊(角川書店、一九七八年)  
 松谷みよ子・瀬川沢男ほか 『日本の民話』全二六冊(未来社、一九七八年)  
 崔仁鶴 『韓日昔話の比較研究』(三弥井書店、一九七八年)  
 白田甚五郎・崔仁鶴編 『東アジア民族説話の比較研究』(桜楓社、一九七八年)  
 小沢俊夫・武田正他 『日本の民話』全二二冊(ぎょうせい、一九七九年)



- 関敬吾 『日本昔話の比較研究』(同朋舎出版、一九八〇年)
- 崔仁鶴 『韓国の昔話』(三弥井書店、一九八〇年)
- 関敬吾 『比較研究序説―関敬吾著作集六』(同朋舎出版、一九八二年)
- 武田正 『佐藤家の昔話』(桜楓社、一九八二年)
- 中村元監修・補注『ジャータカ全集』全一〇冊(春秋社、一九八二年)
- 姜漢永・田中明訳注『パンソリ』(東洋文庫、平凡社、一九八二年)
- 崔仁鶴採話・申東雨絵『世界の昔ばなし6 韓国の昔ばなし―大ムカデたいじ』(小峰書店、一九八三年)
- 野村純一 『昔話と民俗』(名著出版、一九八四年)
- 野村純一 『昔話伝承の研究』(同朋舎出版、一九八四年)
- 福田晃 『日本昔話研究集成2 昔話の発生と伝播』(名著出版、一九八四年)
- 野村純一 『日本昔話研究集成5 昔話と文学』(名著出版、一九八四年)
- 野村純一 『日本昔話研究集成3 昔話と民俗』(名著出版、一九八四年)
- 稲田浩二 『昔話の時代』(筑摩書房、一九八五年)
- 小峯和明 『日本文学研究資料新集6 今昔物語集と宇治拾遺物語―説話と文体―』(有精堂出版、一九八六年)
- 中村禎里 『日本動物民俗誌』(海鳴社、一九八七年)
- 三木紀人 『今昔物語集・宇治拾遺物語必携』(別冊国文学、学燈社、一九八八年)
- 岩瀬博 『伝承文芸の研究口語りと語り物』(三弥井書店、一九九〇年)
- 伊藤清司 『昔話伝説の系譜―東アジア比較説話学』(第一書房、一九九一年)
- 小峯和明・藤沢周平 『新潮日本古典文学アルバム9 今昔物語集・宇治拾遺物語』(新潮社、一九九一年)
- 稲田浩二・稲田和子 『日本昔話百選』(三省堂、一九九二年)
- 三浦佑之 『昔話にみる悪と欲望』(新曜社、一九九二年)
- 武田正 『日本昔話の伝承構造』(名著出版、一九九二年)

- 稲田浩二 『日本昔話通観・研究篇1 日本昔話とモンゴロイド―昔話の比較』(同朋舎出版、一九九三年)  
 岩本裕 『インドの説話』(紀伊国屋書店、一九九四年)  
 依田千百子・中西正樹 『金徳順昔話集―中国朝鮮族民間故事集―』(三弥井書店、一九九四年)  
 稲田浩二 『日本昔話通観・研究篇2 日本昔話と古典』(同朋舎出版、一九九八年)  
 川森博司 『日本昔話の構造と語り手』(大阪大学出版会、二〇〇〇年)  
 邊恩田 『語り物の比較研究―韓国のパンソリ・巫歌と日本の語り物』(翰林書房、二〇〇二年)  
 廣田收 『宇治拾遺物語』表現の研究』(笠間書院、二〇〇三年)  
 廣田收 『宇治拾遺物語』「世俗説話」の研究』(笠間書院、二〇〇四年)  
 廣田收 『宇治拾遺物語』の中の昔話』(新典社新書二九、新典社、二〇〇九年)

〈論文〉

- 高木敏雄 「日韓共通の民間説話」『東亜之光』第七卷二一号一九二二年／『増補 日本神話伝説の研究2』平凡社、一九七四年)  
 松村武雄 「日韓類話」『郷土研究』第二卷第四号東京郷土研究社、一九一四年四月)  
 鳥居きみ子 「腰折れ燕」『アジア学叢書225 土俗上より観たる蒙古2』(六文館、一九二七年)  
 鳥居きみ子 「蒙古の童話に就いて」『旅と伝説』三元社、一九三六年四月)  
 柳田国男 「藁しべ長者と蜂」『昔話と文学』創元社、一九三八年／『定本柳田国男集』第六卷、筑摩書房、一九六三年)  
 佐藤信彦 「説話文学の伝承」『文学』第八卷第一〇号岩波書店、一九四〇年)  
 中島悦次 「宇治拾遺物語の民話性」『国語と国文学』東京大学国語国文学会、一九四一年一〇月)  
 荒木良雄 「中世説話集の生成とその時代」『国語と国文学』東京大学国語国文学会、一九四一年一〇月)  
 斎藤清衛 「中世説話文学と意欲表象」『国語と国文学』東京大学国文学研究室、一九四一年一〇月)  
 柳田国男 「昔話の発端と結び」『昔話と覚書』三星堂、一九四三年／『定本柳田国男集』卷六、筑摩書房、一九六三年)  
 永井義憲 「勧進聖と説話集―長谷寺観音験記の成立―」(『国語国文』第三卷第一〇号、京都大学国文学会、一九五三年一〇月)

- 野村八良 「今昔物語集と印度説話」 (『駒沢大学研究紀要』第一八号駒沢大学、一九六〇年三月)
- 永積安明 「宇治拾遺物語の世界」 (『文学』第三二号(岩波書店、一九六四年一月))
- 高橋貢 「『宇治拾遺物語』の中世的性格」 (『国文学言語と文芸』東京教育大学国語国文学会、一九六九年五月)
- 岡雅彦 「醒睡笑と宇治拾遺物語」 (フェリス女学院大学国文学会編『玉藻』第五号フェリス女学院大学国文学会、一九六九年七月、五〇頁)
- 小池藤五郎 「記録を基礎とした『古切雀』説話の研究―銅鑄小本『古切雀』から原稿本『新曲舌喜里寿々女』まで」 (『立正大学人文学部研究年報』通八号、一九七〇年一月)
- 西原和美 「『宇治拾遺物語』の説話空間」 (『国語国文学研究』熊本大学法文学部国語国文学会、一九七一年)
- 中島悦次 「宇治拾遺物語『鬼に癩取らるる事』について」 (『跡見学園女子大学紀要』第四卷、跡見学園女子大学、一九七一年三月)
- 三木紀人 「説話にみられる中世的人間像―宇治拾遺物語をめぐる―」 (『国文学』解釈と鑑賞』至文堂、一九七二年一月)
- 小林保治 「宇治拾遺物語小考」 (『学術研究』国語・国文学編) 早稲田大学教育学部、一九七二年)
- 松谷みよ子・瀬川沢男再話「フンプとノルブ」『朝鮮民話集3 金剛山の虎退治』(太平出版社、一九七二年)
- 佐竹昭広 「藁しべ長者のこと」『民話の思想』(平凡社新書25、平凡社、一九七三年)
- 高橋俊夫 「今昔物語集天竺部出典の再検討―その一、経律異相―」 (『国学院大学大学院紀要』第4輯、一九七三年三月)
- 中島悦治 「宇治拾遺物語の説話の特性」 (『日本古典文学全集』月報28』(小学館、一九七三年六月)
- 高橋俊夫 「今昔物語集天竺部出典の再検討―その二、法苑珠林―」 (『国学院大学大学院紀要』第5輯、一九七四年三月)
- 宮田尚 「『今昔物語集』天竺部の方法―震旦部との同一性について―」 (『日本文学研究』梅光学院大学日本文学会、一九七四年一月)
- 志村有弘 「宇治拾遺物語の伝承と成立」 (『日本文学研究』第二〇号、梅光学院大学日本文学会、一九七四年一月)
- 高橋亨 「宇治拾遺物語の性格」 説話と文学研究会編『宇治拾遺物語―説話文学の世界―第二集』(笠間書院、一九七四年)
- 水沢謙一 「スズメのくれた瓢箪」『日本民話雪国のおぼえの昔』(講談社、一九七四年)
- 小峯和明 「宇治拾遺物語の成立と宇治大納言物語」 (『国文学研究』第五五集、早稲田大学国文学会、一九七五年二月)
- 福田晃 「民間における仏教的因果思想の根―藁しべ長者』をめぐる―」 (『国文学』解釈と鑑賞』卷四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 西村亨 「民間における勸善懲惡の眼」 (『国文学』解釈と鑑賞』卷四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)

- 三原幸久 「対立の論理」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 水沢謙一 「至富譚」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 稲田浩二 「昔話・伝説・世間話」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 小島瓊禮 「本格昔話と笑話―語りの様式の問題―」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 荒木博之 「地域による話型の類似と相違」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 飯豊道男 「日本の民話と外国の民話」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 大島建彦 「昔話研究の課題」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 石川純一郎 「報恩譚」 (『国文学 解釈と鑑賞』巻四〇第二二号、至文堂、一九七五年一月)
- 春田宣 「宇治拾遺物語」 説話の特質 (『説話文学研究』第二二号、説話文学研究編、一九七七年六月)
- 大島建彦 「宇治拾遺物語と昔話」 (『説話文学研究』第二二号、説話文学研究編、一九七七年六月)
- 稲田浩二 「兄弟譚と隣の爺譚一考」 (京都女子大学国文学会編『女子大國文』第八三号、一九七八年六月)
- 久保田淳 「宇治拾遺物語」の「都」 (『説話文学研究』第二二号、説話文学会編、一九七七年)
- 佐竹昭広 「宇治拾遺と雀の夕顔」 (『陽明叢書 宇治拾遺物語 月報12』思文閣出版、一九七七年二月)
- 小林保治 「留志長者の事―『宇治拾遺物語』小考(二)―」 (『學術研究』巻二五、早稲田大学教育会編、一九七七年二月)
- 大林太良・小澤俊夫 「昔話の種類と分類」『民間説話の研究』(同朋舎出版、一九七八年)
- 野口博久 「宇治拾遺物語」の構成をめぐって―試論「二巻説」の提唱― (『説話』説話研究会、一九七八年五月)
- 高橋貢 「宇治拾遺物語」の仏法説話 (『日本文学研究』巻一四、梅光女学院大学日本文学会、一九七八年二月)
- 坂本学 「宇治拾遺物語の中の民話」 (『東大阪短期大学研究紀要』巻五号、東大阪短期大学編、一九八〇年一月)
- 鶴見充展 「五色の鹿」について (『中世近世文学研究』第一三卷、一九八〇年一月)
- 小峯和明 「宇治拾遺物語―作品としての説話集―」 (『国文学 解釈と鑑賞』第四六卷八号、至文堂、一九八一年八月)
- 小出素子 「宇治拾遺物語」の説話配列について―全巻にわたる連関表示の試み― (『平安文学研究』第六七輯、平安文学研究会、一九八二年六月)
- 西尾光一 「宇治拾遺物語」における連纂の文学」 (『清泉女子大学紀要』第二二号、清泉女子大学、一九八三年二月)

- 安東花 「はなしの伝承機能と伝承意識」『昔話の語り手』（法政大学出版局、一九八三年）
- 野村純一 「五色の鹿の事」前後「昔話伝承の研究」(同朋舎出版、一九八四年)
- 小澤俊夫 「昔話にみられる隣モティーフー日本」(川田順浩・徳丸吉彦『口頭伝承の比較研究1』弘文堂、一九八四年)
- 野村純一 『日本昔話研究集成5 昔話と文学』(名著出版、一九八四年)
- 三木紀人 「無名人への眼―「女二人」の物語」『国文学 解釈と教材の研究』第二九卷九号、学燈社、一九八四年七月
- 池上洵一 「原話との乖離―基盤と作品世界―」(『国文学』第二九卷九号、学燈社、一九八四年七月)
- 藤本徳明 『宇治拾遺物語』における〈翁〉と〈童子〉―その〈他界〉性をめぐって―『文芸と思想』福岡女子大学国際文理学部、一九八五年一月
- 佐藤晃 『宇治拾遺物語』における言語遊戯と表現(『日本文芸論叢』第四号、東北大学文学部国文学研究室、一九八五年三月)
- 小峯和明 「宇治拾遺物語と昔話―隣の爺型を読む―」(『説話と思想・社会』桜楓社、一九八七年)
- 森正人 「場の物語としての宇治拾遺物語」『日本文学』第三六卷二号、日本文学協会、一九八七年二月
- 小峯和明 「世俗説話集の語り―『宇治拾遺物語』を中心に―」(日本文学協会『日本文学講座3 神話・説話』大修館書店、一九八七年七月)
- 井本英一 「ふくべの話」『説話と思想・社会』(桜楓社、一九八七年)
- 小澤俊夫 「昔話の話型と分類」『民間説話の研究』(同朋舎出版、一九八七年)
- 川添裕希 「昔話に見られる想像力―客人歓待伝説から隣の爺型の昔話へ―」(『三田国文集委員会編』『三田国文』第八号、三田国文の会、一九八七年二月)
- 荒木浩 「宇治拾遺物語の時間」『中世文学』第三三卷、一九八八年六月
- 清水美智子 「昔話の絵本化の諸問題―「わらしべ長者」を中心に―」(『日本保育会大会研究論文集』第四二号、日本保育会編、一九八九年)
- 山岡敬和 「隣の爺考―『宇治拾遺物語』を中心に―」(『国学院雑誌』第一〇九卷第六号、国学院大学編、一九九〇年)
- 関敬吾 「昔話の社会的機能―口承文芸研究の一課題―」(『日本文学研究資料新集10 民話の世界・常民のエネルギー』有精出版社、一九九〇年)
- 佐々木孝二 「中世説話における翁媪の語り―物羨みの教訓をめぐる―」(『日本文学協会』『日本文学』第三九卷第一号、一九九〇年二月)
- 高橋貢 「今昔物語」所収の藁しべ長者譚(卷一六第一八話)をめぐる―(『専修国文』卷四六、一九九〇年二月)
- 小林保治 「雀、報恩の事」(『月刊国語教育』第二一巻二〇号、東京法令出版、一九九一年一〇月)
- 三浦佑之 「特集・親族名称の謎「おじいさん」と「おばあさん」の謎―昔話の親族名称と爺婆の位相―」(『月刊言語』大修館書店、一九九一年)

- 小林保治 「宇治拾遺物語を読む3 ―五色の鹿の事―」（『月刊国語教育』第一一巻七号、東京法令出版、一九九一年七月）
- 氏家千恵 「『宇治拾遺物語』隣の婆の話」（『日本文芸の潮流』東北大学文学部国文学研究室編、一九九四年）
- 水谷玲子 「『宇治拾遺物語』第九六話の新解釈」（『日本文学論叢』巻一九号、シオン短期大学日本文学会、一九九四年三月）
- 松前健 「伝承文学と比較―その研究方法をめぐって―」（『講座日本の伝承文学第一巻 伝承文学とは何か』三弥井書店、一九九四年）
- 丸山顯徳 「『日本霊異記』におけるオーラル・コンポジション―上巻第五縁を通して―」（『国文学論究』第三号、花園大学国文学会、一九九五年一月）
- 竹村信治 「『宇治拾遺物語』の表現」（『研究叢書』169 中古文学の形成と展開―中古から中世へ―』和泉書院、一九九五年五月）
- 岡田美也子 「『宇治拾遺物語』第三話鬼に瘤取らるる事をめぐる考察―新古今歌壇の様相との関連を中心に―」（お茶の水女子大学国語国文学会『国文』巻八三号、一九九五年七月）
- 清水義範 「『瘤取りの翁』考」小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語（月報）』（小学館、一九九六年）
- 廣田收 「昔話における『唱え言』―『瘤取翁』をめぐって―」（『人文学』第一六一号、同志社大学人文学会、一九九七年三月）
- 菅原利晃 「『宇治拾遺物語』の教訓の独自性―評語から見る教訓的要素の可能性―」（『札幌国語研究』第二号、北海道教育大学、一九九七年五月）
- 小林保治 「『宇治拾遺物語』の文学的性格」（『説話論集』第7集 中世説話文学の世界』説話と説話文学の会、一九九七年一〇月）
- 中込重明 「拾い物立身譚―藁しべ長者から塩原多助へ―」（『日本文学誌要』第六〇巻、法政大学校国文学会、一九九九年七月）
- 竹原威滋 「異界訪問譚における山の精霊たち―世界の『瘤取り鬼』をめぐって―」（『説話―異界としての山―』説話・伝承学会、一九九七年）
- 大島建彦 「『宇治拾遺物語』と昔話」（『説話文学研究』第二一〇号説話文学会、一九九七年六月）
- 石井正己 「『宇治拾遺物語』にみる昔話の論理」（『絵と語りから物語を読む』大修館書店、一九九七年）
- 岡田美也子 「『宇治拾遺物語』第四八話の再検討―実方説話との関わりから―」（『国文学年次別論文集 中世2』学術文献刊行会、一九九七年／『中世初期説話文学研究―『宇治拾遺物語』とその周辺―』お茶の水女子大学校、二〇〇二年）
- 佐生久美子 「『宇治拾遺物語』に見る庶民の姿―巻三ノ十六雀報恩事より『老い』を生きるとは―」（『二松学舎大学人文論叢』第五九号、二松学舎大学人文学編、一九九七年一〇月）
- 松濤誠達 「帝釈天信仰の起源と文化」（『浅草寺佛教文化講座』第四三集、浅草寺編、一九九七年）

- 沼波政保 「中世文学に見る人間観(二)——『宇治拾遺物語』について」(『同朋文学』名古屋同朋大学日本文学会、一九九八年六月)
- 小峯和明 『宇治拾遺物語の表現時空』(若草書房、まんぼう社、一九九九年)
- 廣田收 『宇治拾遺物語』「癩取爺」考」(『人文学』同志社大学人文学会、第一六七号、二〇〇〇年三月)
- 廣田收 『宇治拾遺物語』の編纂と物語の表現」(『人文学』同志社大学人文学会、第一七〇号、二〇〇二年二月)
- 廣田收 『宇治拾遺物語』の思想——末尾話冒頭話をめぐって——」(『同志社国文学』第五三三号、二〇〇〇年二月)
- 千二斗 「韓国のパンソリと日本の語りもの」(『同志社国文学』第五二二号、二〇〇〇年三月)
- 小石川正文 『宇治拾遺物語』に見る待遇表現意識——他説話の同話・類話との比較から——」(『国語国文学論考』二〇〇〇年四月)
- 池上洵一 「『説話文学』を考える」(『池上洵一著作集第二卷 説話と記録の研究』和泉書院、二〇〇一年)
- 池上洵一 「説話集と口承説話」(『池上洵一著作集第一卷 今昔物語集の研究』和泉書院、二〇〇一年)
- 山口眞琴 「葛藤する観音靈験譚「藁しべ長者」説話攷」(『言語表現研究』第一七号、兵庫教育大学言語表現学会、二〇〇一年三月)
- 廣田收 『宇治拾遺物語における同話と類話——説話分析の方法——」(『同志社国文学』第五六号、二〇〇二年三月)
- 高岡幸一 「『藁しべ長者譚』の説話的技法」(『言語文化研究』第二八号、大阪大学言語文化部、二〇〇二年)
- 邊恩田 「昔話「腰折れ雀」とパンソリ「興甫歌」——大工の家建てをめぐって——」(『語り物の比較研究』翰林書房、二〇〇二年)
- 廣田收 「淵源としての「類話」——「五色鹿」考——」(『宇治拾遺物語』表現の研究』笠間書院、二〇〇三年)
- 邊恩田 「韓国の語り物パンソリ「興甫歌」——語り手・流派・語りの継承——」(『同志社国文学』第五八号、二〇〇三年三月)
- 森正人 「宇治拾遺物語癩取翁譚の解釈」(『国語と国文学』第八〇巻第六号、二〇〇三年六月)
- 廣田收 『宇治拾遺物語』「世俗説話」の研究」(『人文学』第一七四号、同志社大学人文学会、二〇〇三年二月)
- 鈴木満 「癩取話——その広がり——」(『昔話の東と西 比較口承文芸論考』(国書刊行会、二〇〇四年)
- 邊恩田 「東アジアから見た日本昔話「腰折れ雀」と朝鮮——巫歌「成造プリー」の縁起説話をめぐって——」(『同志社国文学』第六一号、二〇〇四年一月)
- 邊恩田 「「フンブ伝」の伝本系統と日本語訳本について」(『同志社国文学』第六二二号、二〇〇五年三月)
- 藤井俊博 『宇治拾遺物語』説話の文章構造——話末評語を手がかりに——」(『同志社国文学』第六六号、二〇〇七年三月)
- 小林保治 「わらしべ長者の話」(『中世説話の人間学』勉誠出版、二〇〇七年)

- 飯島裕三 「初瀬（長谷）寺観音信仰より探る―『源氏物語』から「藁しべ長者」伝説への道程―」（『学習院高等科紀要』第五号、二〇〇七年七月）
- 小林保治 「宇治拾遺物語の仏教話の性格」（『説話文学研究』第四三号、説話文学会、二〇〇八年七月）
- 竹原威滋 「説話の一生とジャンル変遷―「世界の瘤取り鬼」をめぐる―」（『説話・伝承学会編『説話・伝承の脱領域』岩田書院、二〇〇八年）
- 神谷吉行 「「瘤取爺」小攷」（『相模国文』通巻三五、相模女子大学国文研究会、二〇〇八年一〇月）
- 久保華蒼 「交換の果てに」（『日本における外国昔話の受容と変容―和製グリムの世界―』（三弥井書店、二〇〇九年）
- 伊東玉美 「藁しべ長者」（『宇治拾遺物語のたのしみ方』（新典社選書35、新典社、二〇一〇年）
- 斧原孝守 「鳥の国からの贈り者―「舌切り雀」「太陽国」「脚折れ燕」の変成―」（『昔話―研究と資料』第三九号、日本昔話学会編、二〇一一年三月）
- 廣田收 「宇治拾遺物語』第三話と昔話「瘤取爺」構造からと、表現からと」（『入門説話比較の方法論』勉誠出版社、二〇一四年）

### 《韓国語参考文献》

- 東国大学校訳経院「諸経要集 外十部」『高麗大藏経』（東国大学校出版部、一九七五年）
- 崔永年 「金慶争主説話」（『實事叢譚 福無非次自己召條』卷二、一九一八年）
- 韓国学文献研究所編『韓国地理誌叢書 黄海道邑誌』（亜細亜文化社、一九八五年）

### 《単行本》

- 朝鮮総督府 『朝鮮童話集』（大阪屋号書店、一九二四年）
- 沈宜麟 『朝鮮童話大集』（漢城図書、一九二六年）
- 孫晋泰 『朝鮮民譚集』（郷土研究社、一九三〇年）
- 朝鮮総督府 『朝鮮語読本 卷四』（朝鮮総督府刊行、一九三三年）
- 鄭魯湜 『朝鮮唱劇史』（朝鮮日報社出版部、一九四〇年／日本語版、『現代文学史資料集成 朝鮮唱劇史』卷四、国学資料院、一九九七年）
- 朴英晩 『朝鮮伝来童話集』（学芸社、一九四〇年）



- 孫晋泰 『朝鮮文化叢書第一集 朝鮮民族說話の研究』(乙酉文化社、一九四七年)
- 金三不校註 『壅固執伝』(國際文化館、一九五〇年)
- 李秉岐・白鐵共 『国文学全史』(新丘文化社、一九五七年)
- 李相魯 『韓国伝来童話読本』(乙酉文化社、一九六二年)
- 李元寿 『伝来童話集』(現代社、一九六三年)
- 崔仁鶴共編 『韓国伝来童話全集3』(ソウル、一九七〇年)
- 任哲宰 『昔話選集』(教学社、一九七二年)
- 鄭柄昱校註 『壅固執伝』(新丘文化社、一九七四年)
- 成耆説 『韓国民潭の比較研究―変異様相を中心に―』(二潮閣、一九七九年)
- 洪沢青花 『朝鮮民話集』(現代教養文庫、社会思想社、一九八〇年)
- 成耆説 『韓国口碑伝承の研究』(二潮閣、一九八一年)
- 張徳順 『説話文学概説』(二友出版社、一九八三年)
- 韓国精神文化研究院編 『韓国口碑文学大系』全八五卷(附録三冊、韓国精神文化研究院、一九七八年)
- 成耆説・催仁鶴 『韓国・日本の説話研究』(仁荷大学校出版部、一九八七年)
- 印権煥 『興夫伝研究』(集文堂、一九九一年)
- 催仁鶴 『口碑説話研究』(セムン社、一九九四年)
- 趙東一・張徳順 『口碑文学概説―口碑伝承の韓国文学的考察―』(二潮閣、一九九五年)
- 催仁鶴 『韓・中・日説話比較研究』(民族院、一九九九年)
- 李相澤 『半万年間朝鮮怪譚 朝鮮朝末口碑説話集』(図書出版博而精、一九九九年)
- 李相澤 『韓国古典小説理論1』(セムン社、二〇〇三年)
- 金鎮英・金賢柱 『古典名作異本総書 興夫伝全集』全三卷(図書出版博而精、二〇〇三年)
- 鄭忠権 『興夫典研究』(図書出版ウォリン、二〇〇三年)

〈論文〉

- 崔南善 「蒙古のフンプ・ノルプ」『東明』第三号、一九二二年九月）  
「新たに開拓なる童話に関して―特に少年以外の一一般の大人に―」『開闢』第四卷一号、一九二三年一月）  
方定煥 「興夫伝研究」『国語国文学』第一三三号、国語国文学会、一九五五年）  
張徳順 「宋晩載の観優戯」『三〇周年記念論文集』中央大学校、一九五五年）  
李恵求 「韓国小説發達段階における中国小説の影響」(慶北大学校出版部編『慶北大学論文集』一九五六年)  
李在秀 「パンソリ根源説話添補」『国語国文学』卷三四・三五号、国語国文学会、一九六七年）  
金東旭 「説話と小説化過程に対する構造分析―殊に長者沼伝説と壅固執伝の場合」『国文学研究』第七卷、ソウル大学校国文学研究会編、一九六八年）  
崔来沃 「興夫伝の両面性」『啓明論叢』第五集、啓明大学校出版部、一九六九年）  
趙東一 「西遊記と韓国古小説」『金細亜研究』第四八号、高麗大学校アジア問題研究所、一九七二年）  
丁奎福 「壅固執伝の根源説話研究」『国語国文学』第六二号、国語国文学会、一九七三年）  
金鉉龍 「興夫伝の民譚的考察」『国語国文学』第六七号、国語国文学会、一九七五年）  
徐大錫 「興夫伝の説話的考察―根源説話の探索と小説化過程を中心に―」(高麗大学校国語国文学研究会『語文論集』第一六卷、一九七五年)  
印権煥 「韓国説話―〈夜来者譚〉と〈浜下り行事由来譚〉をめぐって―」『民間説話の研究』同朋舎出版、一九七八年）  
崔仁鶴 「壅固執伝の説話研究」『文学と言語』第一卷、文学と言語研究会編、一九八〇年）  
鄭仁漢 「説話の中のトケビ」『国立博物館叢書1 韓国のトケビ』悦話堂、一九八一年）  
任哲宰 「模倣譚の構造と意味」『古典散文研究』東和文化社、一九八一年）  
徐大錫 「累積譚の韓日比較―『藁繩二本』の場合―」(『人文科学研究所論文集』第二一号、仁荷大学校出版部、一九八五年九月)  
成者説 「藁繩二本」『韓国説話の研究』(韓国学研究所研究叢書第一号、仁荷大学校出版部、一九八八年)  
成者説 「韓国のイエンナル・イヤギ(昔話)」(君島久子編『日本基層文化の探求日本民間伝承の源流』小学館、一九八九年)  
崔仁鶴 「壅固執伝の諸問題研究」『東洋学』第一九号、檀国大学校東洋学研究所、一九八九年）  
崔来沃 「癡爺さんの構造と意味」『清覽語文学』第三卷、清覽語文学会、一九九〇年）  
金ユジン

- ノ・ヨンジャ「韓・印民譚の比較研究―変えるほど多くなる類型―」(『インド研究』第一卷第一号、韓国インド学会、一九九三年)
- 金昌辰 「興夫伝の異本と構成研究」(慶熙大学大学院博士論文、一九九二年)
- 鄭忠權 「壅固執伝」異本の変異様相と意味」(『パンスリ研究』卷四、パンスリ学会、一九九三年)
- 金昌辰 「フンブ・ノルブ故郷の現場的考察―「興夫伝」の発祥地を探して(2)―」(『文学ハングル』第七号、ハングル学会、一九九三年)
- 金宗大 「殖民地時代に輸入された「瘤取爺」譚」(『韓国のとケビ研究』国学資料院、一九九四年)
- 印権煥 「壅固執伝の仏教的考察―根源説話と主題を中心に―」(『民族文化研究』第二七号、民族文化研究、一九九五年)
- 金昌辰 「興夫伝」発祥地の文献的考證―「興夫伝」の発祥地を探して(一)―」(古小説研究創刊号、古小説学会、一九九五年)
- 張徳順 「説話の小説化―壅固執伝と裴裨将伝を中心に―」(『韓国説話文学研究』博而精出版社、一九九五年)
- 金容儀 「韓日妖怪説話比較研究の課題」(『日本語文学』第二卷、韓国日本語学会、一九九六年)
- 呂連弼 「興夫伝」(『韓国古典小説作品論』集文堂、一九九七年)
- 金容儀 「日本「瘤取爺」話の類型と分布」(『日本語文学』第五卷、韓国日本語学会、一九九八年)
- 金容儀 「韓国と日本の「瘤取り爺」譚―教科書収録の過程で行われた改正を中心に―」(『日本語文学』第六卷、韓国日本語学会、一九九九年)
- 金容儀 「民譚のイデオロギー的性格―日本の植民地時代の教科書に収録された民譚を中心に―」(『日本研究』第一四卷、中央大学、一九九九年)
- 金容儀 「日帝時代民譚の改作と収容の様相―『普通学校朝鮮語読本』卷四の「瘤取爺」譚を中心に―」(南道民俗学会『南道民俗研究』第六卷、二〇〇〇年)
- 金容儀 「韓日の伝説の比較研究―近代期の教科書に収録された「瘤取り爺」譚を中心に―」(『日本語日文学』日本語学会、二〇〇三年)
- クオン・ヒヨミョン 「『芳色説話』モチーフの教科書収録様相の研究」(『語文教育』第二九卷、韓国語文教育学会、二〇〇四年)
- 金宗大 「瘤取り爺の形成過程に関する試考」(『韓国文学研究』二〇号韓国文学会、二〇〇六年)
- ジョン・ジンヒ 「韓国とケビ童話の形成と変形の様相研究」(漢陽大学大学院博士論文、二〇〇九年)
- 張貞姫 「『朝鮮語読本』の「瘤取爺さん」説話と近代児童文学の影響関係考察」(『韓国児童文学研究』韓国児童文学学会、第二〇号、二〇一一年)
- 張貞姫 「『瘤取爺さん』譚の韓日間の説話素の比較と原型分析」(『韓国学研究』第四二卷、高麗大学校国学研究所、二〇一二年)

『宇治拾遺』昔話関連話群の研究

第一章補注 《補注1-1》『宇治拾遺』「雀報恩事」【分析表】

(前半)

老女が虫を取る。

童部が(石で)雀の腰を折る。

老女は雀に食物を与える。

老女は雀を桶に入れる。

老女は雀に葉を与える。

○子や孫は老女を憎み笑う。

雀は元気になる。

○雀は(老女の介抱を)嬉しいと思う。

老女が雀の面倒を子や孫に頼む。

子や孫は老女を憎み笑う。

雀は(飛ぶほどに)元気になる。

雀が飛び去る。

老女は悲しむ。

人は老女を笑う。

雀が老女のもとに戻る。

雀が老女にひさごの種を落として去る。

老女はひさごの種を(大切に)持つ。

III

II

I

III

II

I

子は（ひさごの種を大切に持つ）老女を笑う。

老女はひさごの種を植える。

（ひさごがたくさんの実を付ける）

老女は里隣の人々にひさごの実を与える。

子や孫はひさごの実を（喜んで）食べる。

老女は里中にひさごの実を配る。

老女は（大きな）ひさごの実を吊り置く。

（ひさごの実が熟する）

老女はひさごの実の口を開ける。

老女はひさごの実から白米を得る。

老女が（また）ひさごの実から白米を得る。

老女は裕福になる。

隣里の人が老女を羨む。

（後半）

隣の老女は老女に（裕福になった）わけを尋ねる。

老女は隣の老女に（詳しく）わけを話す。

隣の老女は老女にひさごの種を求めめる。

老女は隣の老女の求めを断る。

隣の老女は雀を探す。

隣の老女は三羽の雀の腰を折る。

隣の老女は三羽の雀に食物を与える。

隣の老女は三羽の雀に菓を与える。

三羽の雀は元気になる。

三羽の雀が飛び去る。

隣の老女は（うまくできた）と喜ぶ。

三羽の雀は隣の老女を恨む。

三羽の雀は隣の老女のもとに戻る。

三羽の雀は隣の老女に種を与える。

隣の老女は種を植える。

（ひさごが大きく育つ）

隣の老女はひさごの実をひとりじめする。

隣の老女は隣人にひさごの実を食べさせる。

隣の老女はひさごの実を食べる。

隣の老女は子にひさごの実を食べさせる。

隣人は気分を悪くする。

隣の老女は吐き散らす。

隣の子に吐き散らす。

隣人や隣の子や隣の老女は恢復する。

隣の老女は（残りの実を）吊り置く。

隣の老女はひさごの実の中の物を取り出す。

ひさごからあぶ・はち・むかで・などが出る。

毒虫たちが隣の老女を刺す。

I

III II I III II I

毒虫たちが隣の子を刺す。

毒虫たちが隣の老女を殺す。

III II

〔話末評語〕

右の事項の中で I・II・III の記号は、表現の繰り返しを示す。これは、叙述を押し進めて行くときに働く、語りの原理である。このような反復は、口承の昔話だけでなく、書承の説話や物語にも働いていることがわかる。また（ ）は、主語＋述語という事項に対して、説明的な表現であることを示す。

〔話末評語〕において、雀は（隣の老女に）腰を折られて恨み、毒虫をけしかけて（ひきごの実の中に）入っていた。最初の雀は、腰を折られてカラスに食べられるところを助けられたので、嬉しいと思っただからだという。だから「物うらやみ」はするべきではないという。太字で示した事項は、日本や韓国の昔話に共有されている話型に付加された部分である。つまり、それらは『宇治拾遺』が独自に付加した事柄であることが明らかになる。

さらに先に発表した論文（金恩愛 『宇治拾遺物語』 「雀報恩事」 考―韓国昔話との比較をめぐって―）『同志社国文学』第七三号、二〇二一年三月）において、説話から取り出した「雀報恩事」の事項分析を挙げておきたい。さらに整理した事項群を載せる。

媼が腰折れ雀を助ける

○子孫が媼を憎み笑う。

○雀が媼に感謝する。

雀が媼に瓢の種を与える。

媼がたくさんの瓢を得る。

○子孫が瓢を食べる。

○媼が瓢の中から白米を得る。

瓢の実が熟する。

媼が裕福になる。

隣媪が雀を傷つける。

○雀が隣媪を憎み恨む。

雀が隣媪に瓢の種を与える。

隣媪は味の悪い瓢を得る。

○隣媪が瓢の中から毒虫を得る。

隣媪が命を落とす。

右に挙げた事項の中、○印を付けたものには、対立関係と雀の感情を表した『宇治拾遺』の特質が端的に示されている。ここで、『宇治拾遺』表現の独自性として挙げられるのは、「老女と隣の人との対立関係」「老女の子や孫との関係」と、子孫や雀の感情の表す表現であろう。子孫や雀の感情を表す事項を要約すると次のようである。

子や孫は老女を憎み笑う。

雀は喜ぶ。

子や孫は老女をばかにする。

人は老女をばかにする。

子は（ひさごの種を大切に持つ）老女をばかにする。

子や孫はひさごの実を（喜んで）食べる。

隣の老女は（子に褒められようと）雀の腰を折る。

三羽の雀は隣の老女を恨む。

隣の老女は子に（老女に勝ったことを）誇る。

『宇治拾遺』においては、隣の老女だけではなく、最初の老女が子や孫に馬鹿にされる。子や孫が老女を敬ったり従ったりするのではなく、憎み笑うところに、鎌倉期の京都における家族の問題が端的に示されているのではないだろうか。



《補注1-2》 『搜神記』二〇 (本文引用は、千寶『東洋文庫10 搜神記』竹田晃訳、平凡社、一九七八年)

漢時、弘農楊宝。年九歳時、至華陰山北、見一黄雀。爲鷓鴣所搏、墜於樹下、爲螻蟻所困。寶見愍之、取歸。置巾箱中、食以黄花。百餘日毛羽成、朝去暮還。一夕三更、寶讀書未臥、有黄衣童子、向寶再拜曰「我西王母使者。使蓬萊、不慎爲鷓鴣所搏。君に愛見拯、實感盛徳」乃以白環四枚、與寶曰「令君子孫潔白、位登三事、當如此環」

漢のとき、弘農(河南省)に楊宝という男がいた。九歳のとき、華陰県(陝西省)にある山に北側で、一匹の黄雀がみみずくに襲われて、木の下に落ち、そこをまた螻や蟻にいじめられているのを見つけた。宝はあわれに思つて抱き帰り、小箱のなかに入れ、黄色花を食べさせた。こうして、百日あまりたつうちに羽が生え揃い、朝飛び立つては、夕方になるとまた帰ってくるようになった。ある夜ふけに、宝は体を読んでまだ床につかなかつたが、そこへ黄色い着物を着た少年が現われ、宝に再拝して言った。「私は西王母さまの使者です。以前蓬萊山までお使いに行く途中、うっかり油断していてみみずくに襲われたところを、お情け深いあなたに救っていただきました。あなたの厚いご人徳に心から感謝いたします」そして白い玉環を四つ、宝に差し出して、「あなたのご子孫は、きつとこの環のように清兼潔白で、位は三事を極められるでしょう」と言うのだった。

第二章補注 《補注2-1》

『産語』『五常内義抄』『醒睡笑』『嬉遊笑覧』の類話をまとめ、対照すると、次のようである。

		『産語』	『五常内義抄』 一四話	『醒睡笑』 卷一(前半)	『嬉遊笑覧』 (或問附録)
主人公	晋人に瘡を項に患ふ者		顔に瘡ある法師	目の上に大なる瘡ある禪門	うみまじに瘡ある一人
出発	材を取りに山へ			修行に出る	涼を取りに
異界のもの	鬼	天狗	天狗	山路を通る	神

出合った場所	空舎	山中ナル古堂	古辻堂	かの辻堂	廟の中
宴の場面	宴(歌へ・舞へ)	田楽	酒宴	酒宴	
瘤	質	質	質	前者との勘違い	神命じて
(瘰癧取られ・付けられた)理由					
話末評語	唯自ら量らずして徒に人を羨むの禍なるのみ	なし	なし	なし	

『産語』

『五常内義抄』一四話

『醒睡笑』卷一 卷六

『嬉遊笑覧』或問附録

鎌倉時期 一二六五年頃

江戸時代一六二八

江戸時代後期

(1) 『産語』

昔人有患瘤于項者。取材于山。還而日暮。投空舎宿焉。夜有羣鬼宴于舎。見瘤者曰。客何為者也。対曰。山下邑人。取材于山。日暮不可行也。故借宿於此。非異人也。鬼曰。子欲食乎。日不飲也。欲飲乎。日唯欲酒。不飲也。鬼曰。善。因飲之。宴酣。鬼謂瘤者曰。能歌乎。対曰。里巷下曲。恐不足聽已。鬼曰。第歌。瘤者擊節而歌。羣鬼咸稱善。又曰。子能舞乎。対曰。下節。恐不足觀已。鬼曰。第舞。瘤者起舞。羣鬼咸悅。日善。於是飲甚。至曉鬼將去。謂瘤者曰。吾曹夜集于此。子豈能復來会乎。瘤者曰。諾。鬼曰。雖然。子能無食言哉。請必以物多質。瘤者曰。我樵夫。唯有一斧。它無所有。請以斧為質。鬼曰。噉。是何足以為質。觀子項瘤。可以為質。因取其瘤。不痛且不見血。鬼既去。黎明。瘤者走歸家。家人觀其亡。瘤。因問之。告之故。里人有患瘤于頸者。聞之。就其家而謁曰。子且復往乎。対曰。未必也。日。余願撰子事。幸可。以去吾瘤也。日。可也。里人遂往。夜鬼至。見里人曰。惡。是何非昔者所見也。里人曰。疇昔瘤者。不幸疾作。故使予來謝諸兄也。鬼曰。子亦好酒乎。日。否。能歌舞乎。日。略能。令之歌舞。不。善。羣鬼不悅。日。子歌舞不。善。吾曹無以為歡。可趨歸。昔者所質。煩繭致之前人。因以昔物所取之瘤。著里人項。遂遣歸。旧瘤未除。更負新瘤而歸。唯不量而徒羨人之禍也。

(本文は、中島悦次「宇治拾遺物語」「鬼に瘤取らるる事」について、『跡見学園女子大学紀要』第四号、一九七一年)

(2) 『五常内義抄』

人ノ云ン事ニ聞耽<sup>フケリ</sup>テ、夕、チニ振舞事ナカレ、後ニ夕（ユ）ル事ノアル也、其故ハ、顔ニコブツキタル法師ノ道（ニ）行ケルニ、山中ナル古堂ノアリケリニ留テ（ケ）ル程ニ、夜打深<sup>フシク</sup>天狗（ト）モ、多ク集テ田樂ヲシケル、此法師思ヤウハ、只今ニグトモニ（カ）サジ、ヤワラ居タリトモ見付ラレナン、同シ事シ思テ、（ワ）ラ座ノアリケルヲ腰ニ引當テ、天狗ニ交テ面白クヲトリタリケレハ、天狗共面白シ興アリト云テ、俱ニ夜モスカヲトリ遊ヒケル程ニ、曉方ニ成テ今ハ常ニ寄合テ可遊由契テ、天狗共ノ云ク、若後コヌ事モコンアレトテ、質ニ取ントテ、此法師ノ顔ニアリ（ケ）ル、コブヲ引チキリテトリヌ、夜明ケ私<sup>（或ハ、ゴ）カ</sup>宅ニ帰（リ）タレハ、顔ニアツテ見若シカリツルコブナカリケレハ、弟子小法師原マテモ喜ヒアヘリケリ、其ノ隣ノ里ニ、同ヤウニ顔ニコブノアル人入道ノ有ケルカ、是ヲ聞テ、我モ彼堂ニ行テ此コブ失ント云テ、無ニ左右カシコニ行テケレハ、安ノ知（如）ク、天狗共集テ面白ク遊ケルニ、交テヲトリケレバ、天狗ノ云ク、神妙ニ約束タカヘス来リタリ、今ハ質ノ物返サントテ、今片顔ニコブヲソ付タリケル、左右ノ顔ニ角ノ如クニコブ付テ家ニ帰リタリケレバ、妻子供是ヲ見テ、ニクム事無レ限、様ナキ人マネシテ、生レヌ片輪付ヌト人ノ咲ケレハ、無ニ為方テ自害セントハケミケレハ、ヨコカマシクモ覚ヘケル、サレバ、事ノ風情ハカハルトモ、聞フケリハ皆同シヘルヘシ、不レ見<sup>ス</sup>所<sup>サツ</sup>モテ不レ信<sup>シ</sup>ト云文アリ。

（本文は、太田次男編『五常内義抄』第三七三冊、古典文庫、一九七七年、底本は宮内庁書陵部蔵本）

### （3）『醒睡笑』巻の一「謂へば謂はるる物の由来」二「いぶ取命の話」

「鬼に瘤をとられた」といふ事なんぞ。目の上に大なる瘤をもちたる禪門ありき。修行に出しが、或山中に行暮れて宿なし。古辻堂にとまれり。夜既に三更に及ぶ。人音あまたして、かの堂に來り酒宴をなす。禪門おそろしく思ひながら、詮方なければ心うきたる貌し、圓座を尻につけ立ちて踊れり。明方になり、天狗ども歸らんとする時いふ、「禪門うき藏主にてよき伽なり。今度もかならずきたれ」と、約束ばかりは僞あらん。たゞ質にしくはあらじとて、目の上の瘤を取りてぞ行きける。禪門寶をまうけたる心地し、故郷に歸る。見る人感じ、親類歡喜する事かぎりなし。」

#### 『醒睡笑』巻の六「推はちがうた」三五「瘤取り爺後日物語」

ある所に、禪門目の上に大きな瘤を持てり。かなしきながら、せん方なく過ごしけるに、人の語るやう、「その里に住むなる老人、山路を通ふとて道にて鬼に行き合ひ、年頃うるさかりし目の上のこぶを取られ、一門眷屬までよろこび限りなし」といふを聞き、あながちにこれ

をうらやみ、はるばるとその人のもとにたづねあひ、ありしおもむきを尋ねきはめ、瘤をとられん望みに、かの汁堂に行き、待ち居たり。案のごとく、何とも知らぬ者ども、夜更け、多くあつまり、どしめきののしり、酒案をはじむる時、禪門、円座を腰につけをどりければ、「また来しなり。約束を違へず来りたるがうれしきに、以前の瘤をとらせよ」といふまま、ひしと打ち付けたれば、思の外なる災をもとめ、瘤二つの主になりて帰りぬ。

(本文は、鈴木棠三校訂『醒睡笑』上・下、岩波文庫、一九八六年)

#### (4) 『嬉遊笑覧』「或問附録」

一人項有<sub>二</sub>懸疣<sub>一</sub>、困<sub>レ</sub>取<sub>レ</sub>涼、夜宿<sub>二</sub>廟<sub>一</sub>。神問「此何人」。左右答云「蹴<sub>二</sub>氣毬<sub>一</sub>者。」神命取<sub>二</sub>其疣<sub>一</sub>来。其人失<sub>レ</sub>疣、不<sub>レ</sub>勝<sub>二</sub>踴躍<sub>一</sub>而出。次晚、復有<sub>レ</sub>疣者来、廟宿<sub>二</sub>于廟<sub>一</sub>。神如<sub>レ</sub>前問<sub>レ</sub>之。左右仍以<sub>二</sub>蹴<sub>レ</sub>毬者<sub>一</sub>を対。神曰「何<sub>二</sub>昨將毬還<sub>レ</sub>也<sub>一</sub>。」其人至<sub>レ</sub>且竟負<sub>二</sub>兩疣<sub>一</sub>而去。評云、患<sub>レ</sub>失<sub>レ</sub>之患<sub>レ</sub>復<sub>レ</sub>之。是求無<sub>レ</sub>益<sub>二</sub>于得<sub>一</sub>也。

(本文は、日本随筆大成編集部『嬉遊笑覧』成光館出版部、一九二七年)

#### 《補注2-2》

ほか、諸注釈を調べると、次のとおりである。

#### ① 中島悦次校注『宇治拾遺物語・打聞集全註解』(有精堂出版、一九七〇年)

この話は多分当時民間に語られていた話を記録したものである。所謂「瘤取り爺」の話である。この話の中に翁が鬼はアマノジャクで何でも反対したがるものという性質を利用するかのよう、瘤は目鼻よりも大事なだから取ってくれるなと云う所は、まるで瘤のとられることを予期しているのである。こんな破綻は明らかに机上で考えて創作された話でないことを立証して余りがある。物羨みするなどの教訓談が後の福富草子や花咲翁話などに栄えを見せたことは人々の知る所であろう。この話は高橋亨氏編『朝鮮の物語』や支那の楊茂謙氏編の『笑林評』などに似たものが見える所から考えると、日本で生まれた話ではないかも知れない。

#### ② 小林智昭校注『日本古典文学全集 宇治拾遺物語』(小学館、一九七五年)

質に瘤を取ると言われた時、翁はどう感じたか。後の言葉通りにほんとうに困ると思ったのか。そうではなく、むろん内心ではありがたいと喜んだことだろう。その本心を隠して「ただ目鼻をば召すとも」と言つて、鬼に気持ちをいつそうあおるあたり、翁もなかなかの才

覚者であり、だまされる鬼も、こわいわりには案外単純無邪気ではほえましい。(略) 鬼なども不気味さとかこわさはなくて、かえって明るく愛嬌があり、いわゆる「瘤取り翁」の説話として、古来親しまれてきたゆえんである。

③大島建彦校注『新潮日本古典集成 宇治拾遺物語』(新潮社、一九八五年)

「瘤取翁」の昔話に当たるものである。この型の昔話は、ヨーロッパからアジアまで広く世界の各国に伝えられており、アールネおよびトンプソンの『昔話の型』には、「五〇三 小人の贈り物」としてあげられている。中国の記録では、戦国末から秦代にかけて、『産語』上の「阜風第六」に、瘤取翁の説話が収められており、明代の『笑林評』にも、同じ型の説話があげられて、『嬉遊笑覧』の「或問附録」にも引かれている。崔仁鶴氏の『韓国昔話の研究』には、「四六七 瘤取り翁」という型があげられている。日本の記録では、『五常内義抄』にあげられたものが、かなり古い事例であったといえよう。それらの二つの記録は、いくらか違っており、本書の方では、翁が山の木のうつほに隠れて、鬼の酒宴に出逢ったというのに、『五常内義抄』では、法師が山の中の古い堂に泊まって、鬼田楽を見かけたと記されている。安楽庵策伝の『醒睡笑』では、巻一の「謂へば謂はるる物の由来」と巻の六「推はちがうた」とに、同じ説話が二つにわけているが、『五常内義抄』の方に近かったようである。現行の昔話の例は、『名彙』の完形昔話の「動物の援助」に、「瘤取翁」という型としてあげられ、『大成』の本格昔話の「隣の爺」に、「一九四 瘤取翁」という型としてあげられている。

④小林智昭・増古和子校注『宇治拾遺物語評釈』(武蔵野書院、一九八六年)

この説話はほとんど変形されずに子供向けの話として現在も伝わっている。鬼もなかなか愛嬌があり、器用な爺さんと不器用な老翁との対照もあざやかである。最後に附加された教訓も当時の女、子供向きの結論としてふさわしい。

⑤浅見和彦・三木紀人校注『新日本古典文学大系 宇治拾遺物語』(岩波書店、一九九〇年)

昔話として広く知られる内容。それを型どおり語るようよそおいつつ、人生の断面をさりげなく映す。描かれる鬼の姿勢・生態も面白い。

⑥小林保治・増古和子校注『新編日本古典文学全集 宇治拾遺物語』(小学館、一九九六年)

「隣の爺型話」の典型的な語られ方で、この隣に住む翁は、すべての点で先の翁とは対照的。先の翁が上手な踊りと巧みな駆引きによって、鬼首領にどうしても顔を預かることにしたいと思わせてしまう、その弱者である翁の臨機応変な知恵ぶりが光る。この「瘤取り翁」の話は中国・朝鮮半島からヨーロッパまで世界的に分布・伝承されている。本話は、本来笑い話として享受されていたと見ることもできそ

うである。

《補注2-3》 『睡隱集』卷三 雜著

「瘤戒」原文

呂宋。東海中小國也。地偏而水又湍駛。故人多癭瘤。某甲額口生瘤。幾如甕盎。抑首不能起。其妻子羞而逐之。寢息山間者數日。夜半。山鬼擊鼓群譟。自遠而近。甲不勝其怖。應節起舞。示若無懼者然。山鬼吐舌相顧曰。異哉。不意空山中。有此良朋之可與娛者。因擊鼓不已。甲亦舞不已。天欲明。鬼謂甲曰。我鬼非人。日出不可留。來夜當復來。公亦能復來耶。甲曰諾。鬼三問甲三諾。鬼猶不信曰。人情難保。請取公瘤以爲質。遂拏取瘤去。甲喜幸走倒。至家則全人矣。妻子改觀。隣里聳傳。某乙額又有瘤。幾如某甲之大。聞甲之失瘤。盤跚往問之。甲悉告之故。喜甚。直造甲所寢息地而胥之。夜半。山鬼果擊鼓譟叫而至。乙豫起亂舞。一如某甲之爲。山鬼至。喜曰有信哉。相與盡懽而罷。遂謂乙曰。恐公失信。故取瘤爲信。公既能來。可還公瘤。遂取甲瘤安之乙額而去。對峙如雙家。乙大慟曰。一瘤之不堪。而況兩瘤耶。遂自經於溝瀆死。日東僧舜首座。爲余談是事。余以俘擄生還。見棄於昭世。余又與世相忘。久而不知身之曾忝一命也。所親或勸之曰。君之絕意於榮進。譬如黃門之絕意於房室。盍且求之。以洒廢棄之恥乎。余應之曰。籍令求之。誰卽與之。前恥之未洒。而竊恐更得後恥。此與某乙欲去一瘤而更得雙瘤何異。勸者太息而去。

(本文は、(韓国)王室図書館蔵書閣デジタルアーカイブ)

「瘤戒」日本語訳(右の原文を私に日本語で翻訳した、□は、判読できないところを表す)

呂宋とは、(中国の)東海にある小さな国である。地域が片寄っており、海の流れも早かったため、国の人に瘤のある者が多い。ある人の額に瘤ができた。瓶ほどの大きさの瘤が頭を押して、起きられなくなると、妻子は恥ずかしく思い、彼を追い出してしまった。追い出され、山の中で過ごしてから数日となった。夜中になると、山の中で鬼たちが太鼓を打ち、大きい声で騒いながら、遠くから近づいてきた。男は恐れる心を振り払おうと、太鼓の音に合わせて踊り始めた。鬼たちが男を見ては、驚いて言うに、

「おかしい。人が住んでいない山の中に、このように楽しく遊べる友たちがいるなんて」と、言いながら続いて太鼓を打つと、男も楽しく踊り続けた。夜明けになると、鬼たちが男に言うには、

「我々鬼は人とは違つて、日が出て明るくなつてからは、一緒にすることができない。明日の夜、必ずもう一度遊びに来るので、君も来てくれるのかい？」

と言つた。すると、男もそうすると、約束した。鬼は、三度も繰り返して尋ね、男もそのたび、喜んで承諾した。しかし鬼はまだ不審に思つたのか、

「人の心は信じ難いものだから、君の瘤を預かつて約束のしるしとしよう」

と言ひ、すぐに瘤を取つては去つていった。彼は嬉しく幸いなことだと思ひ、走つて家に戻ると瘤がなくなり、本来の姿になつてゐた。妻も喜んで迎えてくれて、この噂は、隣の村まで広がつた。その村の人々の中には、男と同じような大きさの瘤のある人がもう一人いた。村の男、は山で瘤を取つてきた噂を聞いて、ためらつて訪ねて事情をすべて聞いてから、非常に喜んだ。すぐに、瘤を取つてきた人が泊まつた山へ行つて待つてゐた。夜中になると、言われた通り、鬼たちが太鼓を打ちながら、大きい声で騒いながら近づいてきた。村の男は言われた通り、一所懸命踊つた。鬼たちは、非常に楽しくて

「信用のある者だ」と、一緒に楽しく遊んだ。遊びが終わつた後、鬼たちが言うに、

「君が約束を守らないと思つて、瘤を預かつておいたが、君がこのように来てくれたので、瘤を返す」

と言ひながら、昨日、先の男から取つた瘤を、村の男の額に付けてから去つて行つた。その瘤の形は、まるで二軒の家が互いに向かい合つてゐる様子であつた。村の男は大声をあげて悲しく泣きながら、「一つの瘤の時も大変だつたのに、二つになるなんて」と思つて、首を絞めて死んでしまつた。

《補注 2-4》 『西陽雜俎』卷四、続集卷一、支諾臯上

#### 「旁缶説話」

新羅の国に、金哥という第一貴族がいた。その遠い祖先は、旁缶という名であつた。弟が一人いて、たいへん、財産があつた。兄の旁缶は、そこで、分家をして衣服や食料をもらつてゐた。その国の人が空闲地一畝を与えたので、蚕と穀物の種子を弟に求めた。弟は、種子を蒸して与えた。旁缶は、気がつかなくつた。蚕のかえるときになり、一匹だけ蚕が生まれた。日に一寸あまりずつ大きくなり、十日後には、牛ぐら

い大きさに生長し、数本の桑の葉を食べても足りなくなつた。これを知つた弟はすきをねらつて、その蚕を殺した。日がたつうちに四方百里以内の蚕が飛んできて、その家に集まつた。国の人々は、それを「巨蚕」といつた。蚕の王様であろうと思つたのである。隣近所みな糸をくり、供出しなかつた。穀物は、一本だけ生えたが、穂の長さが一尺あまりあつた。旁缶は、いつも、その番をしていた。不意に、鳥が穂を折つてくわえていた。旁缶はそれを追つて、五、六里、山をのぼつた。鳥はある岩のわれ目に入った。目が沈み、山道は、まっ暗いであつた。そこで、旁缶は、岩のそばに野宿をした。夜半になつた。月光の下、赤い衣の小児たちが、群れが遊ぶ光景が見えた。一人の小児は、「お前、なにが欲しいか」といつと、別の小児は、「酒が欲しい」といつた。小児は、金錐子をとり出して、岩を打つた。すると、酒と樽〔酒器〕が、のこらずそろつた。もう一人が、「食物が欲しい」といつと、さらに、岩を打つた。すると、餅やスープ、焼肉などが、岩の上にならんだ。ながい間、飲んだり、食べたりしてから、散つていつた。金錐は、岩の割れた目に挿したままであつた。旁缶は、大喜びで、その錐を取つてかえつてきた。その欲しい物は、錐で打つとすぐに手に入った。そのため、国全体の富に匹敵する富豪になつて、つねに、真珠宝石をその弟に恵んだ。弟は、前に蚕や穀物で欺いたことをやつと後悔した。だが、例によつて、旁缶にむかつていつた。「ためにしに、蚕と穀物で、わたしを欺してください。わたしは、これによると、兄さんのように金錐が得られるかも知れない」旁缶は、弟の愚かさに気づいていつた。しかし、これをさしてもどうにもならなかつた。そこで、言うとうりした。弟は、蚕を飼つてみたが、ありふれた蚕とかわらない蚕が一匹育つた。穀物を植えたところ、一本だけ生えてきた。みのあるころになつて、やはり鳥にくわえられた。弟は、たいへんうれしがり、そのあとについて山へ入つた。鳥の入つたところに着いたとき、鬼の群に出会つた。

「こいつは、わしらの金錐を盗んだやつだ」そこで、男をつかまえて、「お前は、わしらのため、糠で塀を三つ築く気があるか。それとも、鼻を一丈のばしたいか」

その男は、糠で三つ塀を三つ築きましようと思つた。三日後、餓えにくるしみ、できあがらなかつた。鬼に哀願したところ、鬼はその鼻をひっぱつた。鼻は、象のようになつて、帰つてきた。国の人々は、奇怪に思い、あつまつて見物したら、はずかしさと憤りのため、亡くなつた。その後、子供がふざけて、錐で打つて狼糞を求めた。すると、雷が鳴り、錐はどこにいつたのか、見失つてしまつた。

（本文は、今村与志雄『東洋文庫 酉陽雜俎 卷四』平凡社、一九八一年）



「瘤取りに行つて、瘤付けられた話」

昔の右頬に一つの大きな瘤のあるお爺さんがいた。ある日、このお爺さんは山へ柴刈りに行つた。しばらく柴刈りをしていると、雨がしとしと降り始めた。それで、雨が止んだらもう一度柴刈りをしようと思つて、まず大きな木の下に逃げ込んだ。ところが、どんどん大雨になつて、木の下でも雨を避けるのが難しくなつてきた。ちようどその時、向かい側に壊れかけのお寺が見えたので、そちらへ走り逃げた。しかし、雨は止まず、もう日が暮れて暗くなつてしまった。お爺さんは仕方なく、そこで一晚泊まろうと、寺の片隅に行つてじつとしやがみこんでいた。夜中になると、どこからか、トケビたちが群がって来ては、棒をトントン叩いた。すると、お酒やお肉、お餅とそばムク（こんにゃくのようなもの）など、食べ物がたくさん出てきた。それで、しばらく食べて飲んだ。たくさん食べてから、トケビたちはみんな立ち上がつて、踊りを踊つたり歌を歌つたりして大騒ぎであつた。お爺さんは、トケビたちが（とっても楽しく）遊んでいる様子を見てみると、何か自分も浮かれて、トケビたちの遊ぶ間に入り込んで、ひよいひよいと踊りながら歌を歌つた。お爺さんが上手に踊りながら歌を歌うと、トケビたちはもつと興がわいて、お爺さんにお酒やお餅、お肉などをどんどん持つてきて食べさせた。お爺さんは、ちようどお腹も空いていたので、遠慮なく食べた。このように楽しく遊ぶ間に、日が昇つてきて、鶏の泣き声が聞こえて来た。すると、トケビたちは、「ああ、もう夜が明けたぞ。早く行かなくちゃ」

と言いながら、それぞれに戻る準備をした。その時、トケビの大将がお爺さんのところへ来て、「お爺さん、お爺さんのおかげで楽しく遊びました。明日の夜もまた来て遊びましょう」と、また来るように言った。お爺さんは、また来られないと思つて迷っていると、

「おい、このお爺さん、もう来ないつもりだぜ。この瘤を取つて、我々が預かつておけば、受け取りに来るだろう」と言いながら、瘤を取つてから持つて帰つてしまった。お爺さんは痛くなかつたが、驚いたふりをして、

「それはいけません。返してください」

と、大声を立てた。しかし、トケビの大将は知らぬふりをして、瘤を持つてどこかへ去つて行つた。このお爺さんは、醜い瘤を取つてもらえたので、嬉しく思つて家に帰つて、家族に瘤を取られた事情について語つた。ところで、隣の家にも左に瘤のあるお爺さんがいた。右頬に瘤が付いたお爺さんが、山に柴刈りに行つて、トケビに瘤を取られたという話を聞いて、自分も瘤を取つてもらおうと、山に柴刈りに行つた。

山に行つて柴刈りはせず、早速壊れかけのお寺に行つて、トケビたちが来るのを待つていた。夜中になると、トケビたちが数多く集まつてきた。そして、棒をトントン叩いて酒や肉などをたくさん用意して、食べて飲んで踊つて歌を歌つた。このお爺さんは、またトケビたちが遊び始めたばかりなのに、その場に飛び込んで、

「よいや、よいや」と、ただ腕を伸ばしたり、曲げたりするだけであつた。トケビたちが見てみたが、上手くないし、全然楽しくなかつた。

「あのお爺さん、今夜は何だ？歌も踊りも全然上手くないし、もう興がわかない。ひよつとしたら、瘤を取られたからかも知れない。もう返してやろう」と言いながら、昨日の夜、取つておいた瘤を右の顔に付けてしまった。お爺さんは、瘤を取つてもらおうと思つて山へ行つたのに、かえつてもう一つ付けられてしまった。だから、その後から瘤取りに行つて、瘤付けられたという言葉ができたということだ。

《補注2-6》 (朴英晩『朝鮮伝来童話集』学芸社、一九四〇年、翻訳金恩愛)

「瘤取られ、瘤もらい」

今は昔、あるところへ首に瘤のある老人が住んでいた。ある日、深い山の中にたきを取りに行つた。たきぎを取っていると、いつの間にか日が暮れた。周囲はどんどん暗くなり、山道はとっても険しいので、方向も全然分からなくて気の毒なことにあちこち迷つてしまった。このようにあちこち迷つている時、山の中に壊れかけの空き家が見えてきた。瘤取り爺はとっても喜んだ。「良かった。今日はここで一晩泊まろう」と思つて、家の中に入った。中をみて見ると、窓の障子紙は全て破れ、垣も壊れてあり、とっても汚い家であつた。しかし、「外で寝るよりはましだ」と思つて、疲れた身体を休ませたが、どうしてか、なかなか眠れなかつた。夜中に山で道迷つたので、あんまりにも疲れたみたいです。仕方なく首に瘤のある老人は起き上がりました。そして、あたりを見まわすと、月は明るくて、星は高く見え、風の吹く音はゆらゆらと聞こえます。「退屈だし、歌でも一曲歌つてみようか」と思つて、柱に寄りかかつて歌い始めた。歌の声は静かな山の中の木や草などを喜ばせました。とっても美しい声であつた。この老人がしばらく歌つてから、歌を止めると、突然コツコツと足音が聞こえてきた。瘤取り爺は不思議だと思つていると、数えきれないほどたくさんさんのトケビが押しかけて来た。瘤取り爺は驚いて逃げようとしたが、魁首トケビが老人の袖を掴んで止めさせた。そして、

「お爺さん、驚かないで、私たちはお爺さんの歌を聞きに来たんだから、もう一曲だけ歌つてくれ」と言つた。その話を聞

いて、首に瘤のある老人はほつとして、フウーと、長い息を吐き出した。その後、再び柱に寄りかかって歌い始めた。

「泰山がいくら高いとは言え、空の下にある山にすぎない。登り続けると、登れないはずがないが、人々は登らずに、山の高さを言い訳とする」

この歌を聞いていたトケビたちは、いいね、いいね、と拍子を取って手を打った。そしてトケビたちは、「爺さん、もう一度、もう一度」と言いながら、また歌を頼んだ。

「退屈だし、もう一曲歌ってみようか」と言いながらお爺さんは、

「カラス争う所へ、白露よ、行かないで、怒ったカラス、白色に妬ましくなって、清水に綺麗に洗った身体、汚れるかも」と、お爺さんは歌った。すると、トケビたちは、とつても楽しくなって踊り廻った。歌が終わると、魁首トケビが老人の前に座って、「爺さん、本当に楽しい。ありがとう。いったいそんなに美しい歌の声はどこから出るのでしょうか?」と聞いた。

老人は微笑みながら、「どこからって、喉から出るでしょう」と、からからと笑った。すると、魁首トケビは、「爺さん、嘘言わないでくれ、爺さんの美しい声はきくと爺さんのその大きな瘤から出るはずだ」と言った。

そうすると、お爺さんは大きな瘤をなでながら、「この瘤? 瘤から出るのかい?」と言いながら、魁首トケビを見上げた。すると、魁首トケビは首をこつくりとうなずきながら、「ああ、そうだとも、きつとそうだ。爺さん、難しいとは思いますが、その瘤を私たちにくれないか。その代わり良いものを牛に乗せるほど、馬に乗せるほどたくさんあげる」と、責めた。瘤取り爺は目を大きくして、「この瘤を?」と、大声を立てた。そうすると、トケビたちが老人に寄り集めて、瘤を触りながら、「瘤をください。瘤をください」と、騒ぎ立てた。魁首トケビは、手を挙げてトケビたちを静かにさせてから、「ちよつと、爺さん、その瘤をくれたら、本当にありがたい」と言いながら、頭を下げた。すると、老人は、

「そう、私にとって、邪魔なものだから、あげても構わないが、痛くてどうやって瘤を取るんだい」と、話した。すると、魁首トケビは嬉しい顔をして、

「痛いはずがない。痛くならないように取ってあげる」と言って、魁首トケビはまんまのように瘤を取ってどこかへ去って消えた。老人は驚いた顔をして瘤があったところをなでながら周囲を回って見ると、トケビたちはどこへ行ったか、一人も

おらず、金銀財宝がたくさんおいてあった。老人は邪魔くさい瘤が取られたことに喜んで、踊りながら歌った。その爺はたくさんの金銀財宝を持って家に帰って、とっても幸せに暮らし、ちょうど、昨日亡くなったが、私も（葬式に）行って美味しいお餅やら御馳走になりました。あなたの家にも今日美味しいものを持って来るでしょう。

《補注2-7》（沈宜麟『朝鮮童話大集』漢城図書、一九二六年、翻訳金恩愛）

「瘤のある老翁」

昔、ある所に一人の正直な老人がいた。その老人は、あごの下に大きな瘤が付いてあって、ヒョウタンのようにぶらりと垂れ下がっていたので、辛いどころか、どこかへ出かけようとしても、従来する人たちが見ては笑ったりして、恥ずかしかったので、どうすればこの瘤を取ってやろうかと、昼も夜もいろいろ考えても、まったく良い方法がなかった。ある日、用事があって、遠い所に行って帰る途中で、日が暮れた。しかし、近くには人の家もなく、見回ってみても真っ暗で足元も見えない状況とあって困っていたところ、ちょうど山すそのところに、一つの空き家が見えたので、そこで泊まろうと思つて家の中に入った。空き家に入って一人していると、怖くて寂しいと思つて、大きい声で歌を歌い始めた。しかし、この家は本来から、化け物がたくさん出て来る家だった。そのため、もうし、この家に住みに来た人がいたとしても、みんなすぐ逃げ出してしまったため、いつも空いたままであった。そこで、老翁が歌を歌うと、鬼たちは突然美しい歌声が聞こえてきたので、耳を澄まして聞いていると、だんだん興がわいて、肩をくねらしながら寄つてきた。その中で頭のトケビがさつと前に出て老翁に近寄つては、

「ちよつと、お爺さん、本当に歌が上手だね。美しい歌声で、知らないうちに踊りが出るんだ。いったい、こんな美しい歌声はどこから出て来るのかい」

と聞いた。瘤のある爺は、

「それは、ほかのところではなく、顎下に付いてある瘤から出ます。この瘤さえあれば、いくらでも上手に歌うことができます」と答えた。すると、トケビはとても嬉しい顔で、

「そうしたら、そんなよい瘤を一人だけ持たずに、金銀や財宝をたくさん渡すから、私に売ってくれ」

と、求めたのであった。もともと、この瘤のことで困っているのに、まして、財宝まで与えて買ってくれるなんて、お爺さんは嬉しくてその場で売った。トケビたちは金銀財宝をたくさん渡しながら、瘤を取って行ったが、老翁は少しも痛くなかった。

この噂はだんだん広がって、また、ある所に住む一人の瘤のある欲深い老人が、噂を聞いて訪ねてきては、いろいろ詳しく聞いた。この老人は、瘤を取るといふよりも、もっと金銀や財宝を得る欲があったので、すぐにその空き家に行つて、日が暮れる前から、板の間に横になつて、上手でもない耳障りの歌を大きい声を出して歌いながら、トケビが来るのを待っていた。夜になって、トケビたちが遊びに来て歌を聞いたが、あまり聞きたくもない下手な歌声が聞こえたので、「どんなヤツが来たのだろうか」と、中に入つて、

「ちよつと、誰だ、何で人の家に入つて、大きい声で騒ぐのかい」

と聞いた。欲深い瘤のある爺は、トケビをだましてやろうと、

「それが、私のあごの下に付いている、美しい歌声が出る瘤を売りに来ました。もし、この瘤を金銀財宝で買っておいたら、美しい歌が聞きたい時はいつでも聞くことができます」

と言つた。トケビたちは、その話を聞いて笑いながら、

「この前もあるやつが来て、美しい歌声が出て来る瘤だとだまして、金銀財宝を奪つて帰つたのに、このやつもまた同じまねをするんだね。この前に買った瘤もまったく効果がないし、持って行け」

と、もう一つの瘤を付けてやったので、二つの瘤を付けたまま帰つて来た。

その時から「瘤取りに行つて、瘤付けられた」という話しができるということさ。

〔付記〕『朝鮮童話大集』は、一九二六年、沈宜麟（一八九四〜一九五一年）により発行された最初のハングル童話集であり、説話集とされている（総二八〇頁、六六話収録）。それにもかかわらず、韓国にはその本が残っていないため、これまで全体の内容がきちんと知られていなかった。最近、シンウオンキ氏や崔仁鶴氏によって、翻訳出版された。

第三章補注 《補注3-1》 (『宇治拾遺』第九六話と類話の本文比較対照表)

	『宇治拾遺物語』 第九六話	『古今物語集』 第五八話	『古今物語集』 卷一六第二八話
1	今は昔、父母、主もなく、妻も子もなく、只一人ある青侍ありけり。今は昔、父も母も、主も、妻も子もなく、たゞ一人ある青侍有けり。	今は昔、父も母も、主も、妻も子もなく、たゞ一人ある青侍有けり。	今昔、 <sup>二</sup> 父母・妻子モ無ク、知タル人モ無カリケル青侍有ケリ。
2	すべき方もなかりければ、「観音たすけ給へ」とて長谷にまいりて、御前にうつぶし伏て申けるやう、「此世にかくてあるべくは、やがて、此御前にて干死に死なん。」	すべき方もなかりけるまじに、「観音、助けさせ給へ」とて、長谷に参りて、御前にうつぶし臥して申けるやう、「この世にかくてあるべくは、やがてこの御前にて干死に死なん。」	長谷ニ参テ、観音ノ御前ニ向テ、申シテ云ク、「我レ、身貧クシテ一塵ノ便難シ。若シ、此ノ世ニ此クテ可止クハ、此ノ御前ニシテ干死ニ死ナム。
3	もし又、をのつからなる使もあるべくは、そのよしの夢を見ざらんかぎりは出まじ」とて、うつぶし臥したりけるを、寺の僧見て	又をのつからなる使もあるべくは、そのよしの夢見ざらん限りはまかり出づまじ」とて、うつぶし臥したりけるを、寺の僧見て、	若シ、自然テ、少ノ便ヲモ可与給クハ、其ノ由ヲ夢ニ示シ給ヘ。不然ラム限リハ更ニ罷出シト云テ、低シ臥タリ。寺ノ僧其此レヲ見テ、
4	「こはいかなる者の、かくては候ぞ、物食所も見えず。かくうつぶし臥したれば、寺のため、けがらひいできて、大事に成なん。誰を師にはしたるぞ。いつくにてか物は食ふ」など問ひければ	「こはいかなる物の、かくては候ぞ、物食所も見えず、かくてうつぶし臥したれば、寺のため穢らひ出でて来て、大事なりなん。誰を師にはしたるぞ。何処にてか物は食ふ」など問ひければ	「此ハ何ナル者ノ此テハ候フゾ。見レバ、物食フ所有トモ不見ズ。若絶入ナバ、寺ニ穢出来ナムトス。誰ヲ師トハ為ソ」ト問ヘバ、男ノ云ク、
5	「かくたよりなき物は、師もいかでか侍らん。物食する所もなく、あはれと申人もなければ、仏の給はん物を食へて、仏を師とたのみ誓て候也」とこたへければ、寺の僧ども集まりて、	「かく便りなき人は、師取りもいかにしてかし侍らん。物食する所もなく、あはれと申人もなければ、仏の給はん物を食へて、仏を師と頼みたてまつりて候也」と答へければ、寺の僧ども集まりて、	「我貧身也、誰師トセム。只観音ヲ憑奉テ有ル也、更物食フ所無シ」ト。寺ノ僧共此レヲ聞テ、集テ云
6	「此事、いと不便の事也。寺のために悪しかりなん。観音をかこち申人にこそあんなれ。是集まりて、養ひてさぶらはせん」とて、かはる物を食はせければ、もてくる物を食ひつゝ、	「この事、いと不便のこと也。寺のために大事なり。観音をかこち申人にこそあめれ。これ集まりて養ひて候はせん」とて、かはる物を食はせければ、持て来たる物を食ひつゝ、	「此人偏ニ観音ヲ憑奉テ、更ニ寄ル所無シ。寺ノ為ニ大事出来ナムトス。然レバ、集テ此ノ人ヲ養ハム」ト定テ、替ヒル物ヲ食スレバ、其レヲ食テ、
7	御前を去ら乎候ける程に、三十七日に成にけり。	御前に立ち去ら乎候ける程に、三十七日になりにけり。	仏ノ御前ヘヲ不去ズシテ、昼夜ニ念シ入テ居タルニ、三十七日ニモ成ヌ。
8	三十七日はてて、明んとする夜の夢に、	三十七日の果てて明けんする夜の夢に、	其ノ暁ヌル夜ノ夢ニ、
9	御帳より人の出でて、「此おのこ、前世の罪のむくひをば知らず、観音をかこち申て、かくて候事、いとあやしき事也」とはあれども、田事のいとおしければ、いさゝかの事、はからひ給りぬ。先、すみやかにまかり出でよ。なににてあられ、手にあたらん物を取て、持して持たれどくまかり出でよ」と追はるゝと見て、はい起きて、約束の僧のがりゆきて、物うち食てまかり出ける程に、大門にてけつまつまきて、うつぶしに倒れにけり。	御帳より人の出で来て、「この男の、己れが前の世の罪の報いをは知らず、観音かこち申て、かくて候こと、いとあやしきこと也。さはあれども、申ことのをしければ、いさゝかなること計らひ給をはりぬ。まづ速やかにまかり出でぬ。まかり出でんに、何にまれ、彼にまれ、手に当たらん物を取りて、捨て持たれ。それぞ、きつちが給はりたる物。疾くまかり出でよ。追はるゝと見て、起きて、「あれ」と言ひける僧のむくみに寄りて、物うち食ひて、かく養かけて、まかり出ける程に、大門にけつまつまきて、うつぶしに倒れにけり。	「御帳ノ内ヨリ僧出テ、此ノ男ニ告テ宣ハク、「汝方前世ノ罪報ヲバ不知シテ、強ニ責メ申ス事、極テ不当ズ。然レドモ、汝ヲ哀方故ニ、少シノ事ヲ授ケム。然レバ、寺ヲ出ムニ、何物也ト云フトモ、只手ニ当ラム物ヲ不棄シテ、汝方給ハル物ト可知ベシ」ト宣テ、ト見テ夢覺ヌ。其後、哀ヒケル僧ノ房ニ寄テ、物ヲ食テ食テ出ツルニ、大門ニシテ、躓テ低ラシニ倒ヌ。

<p>10</p> <p>起きあがりたるに、あるにもあらず、手ににぎられたる物を見れば、<u>藁す</u>といふ物をたゞ「筋にぎられたり。」</p>	<p>起き上がりたるに、手にあれにもあらず握られたる物を見れば、<u>藁</u>の筋といふ物の、たゞ「筋握られたるを」</p>	<p>起上ル手ニ不意ニ被拳タル物有り。見レバ藁ノ筋也</p>
<p>11</p> <p>「仏の賜ぶ物にて有にやあらん」と、いとほしく思へども、仏のはからせ給やうあらんと思へ、</p>	<p>「賜ぶ物にてありけるにやあらん」と、いと物はかなく思へども「仏の謀らせ給やうあらん」</p>	<p>「此レヲ給フ物ニテ有ニヤ」ト思ドモ、夢ヲ憑テ此ヲ不棄シテ返ル程ニ、夜モ嗟ヌ。</p>
<p>12</p> <p>これを手まさぐりにしつゝ行程に、蛇一ぶめきて、かほのめぐりに有を、うるさければ、木の枝を折りて払捨つれども、猶た同じやうに、うるさくぶめきければ、とらへて腰をこの藁すぢにてひきくゝりて、杖のさきにつけて持たなければ、腰をくゝられて、ほかへはえ行かで、ぶめき飛まはりけるを。</p>	<p>これを手まさぐりにしつゝ行く程に、蛇の一つぶめきて、顔のめぐりにあるを、うるさければ、木の枝折りて払ひ捨つれども、なをたゞ同じ様にうるさくぶめきければ、手に捕へて、腰をこの藁の筋してひき括りて持たなければ、腰を括られて、ほかへはえ行かで、ぶめき飛みけるを。</p>	<p>而ル間、蛇、顔ヲ廻シ飛ブヲ、煩シケレバ木ノ枝ヲ折テ掃ヒ去レドモ、尚同ジ様ニ来バ、蛇ヲ手ヲ捕ヘテ、腰ヲ此藁筋ヲ以テ引キ括リテ、持タルニ、蛇、腰ヲ被括レテ飛ビ迷フ。</p>
<p>13</p> <p>長谷にまいるりける女車の、前の簾をうちかづきてあたる兎の、</p>	<p>長谷に参りける女車の、前の簾をうち被きてあたる兎この、</p>	<p>而ル間、京ヨリ可然キ女、車ニ乗テ参ル。車ノ簾ヲ打チ纏テ居タル兎有り</p>
<p>14</p> <p>いとうつくしげなるが、「あの男の持ちたる物はなにぞ。かれをひて、我に賜べ」と、馬に乗るともにある侍にいひければ、その侍「その持たる物、若公の召すに参らせよ」といひければ、</p>	<p>いとうつくしげなるが、「あの男の持ちたる物は何ぞ。かれをひて、我に得させよ」と、馬に乗りて供にある侍に言ひければ、その侍「かの男、その得たる物、若君の召すに、参らせよ」と言ひければ、</p>	<p>其形チ美麗也。兎ノ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物ハ何ゾ。其レ、乞テ得セヨ」ト。馬ニ乗テアル侍来テ云ク、「彼ノ男、其ノ持タル物若君ノ召ヌニ、奉レ」ト。</p>
<p>15</p> <p>「仏の賜ひたる物に候へど、かく仰事候へば、参らせて候はん」と、とらせたりければ、「此男、いとあはれなる男也。若公の召す物を、やすく参らせたる事」といひて、</p>	<p>「仏の賜ひたる物に候へど、かく仰せ言候へば、参らせ候はん」と、取らせたりければ、「この男、いとあはれなる男也。若君の召す物を、心やすく参らせたる事」と言ひて、</p>	<p>男ノ云ク、「此レハ觀音ノ給タル物ナレドモ、此ク召セバ奉ラム」ト云テ渡タレバ、「采哀レニ奉タリ」トテ、「喉乾クラム。此レ食ヨ」トテ、</p>
<p>16</p> <p>大柑子を、「これ、喉かはくらん、食べよ」とて、三、いとかうばしき陸奥国紙に包てとらせたりければ、侍、とりつたへてとらす。</p>	<p>大柑子を、「これ、喉渴くらん、食べよ」とて、三つ、いと香ばしき陸奥国紙に包みて、取らせたりければ、取り伝へて、蛇取りける侍、取らせたりければ</p>	<p>大柑子ニツツラ腹シキ陸奥國紙ニ裹テ、車ヨリ取タレバ、給ハリテ、</p>
<p>17</p> <p>「藁一筋が、大柑子三になりぬる事」と思へ、</p>	<p>「藁一筋が大柑子三つになりぬること」と思ひて、</p>	<p>「藁筋一ツガ大柑子三ツニ成ヌル事」ト思テ、</p>
<p>18</p> <p>木の枝にゆい付て、肩にうちつけて行ほどに、「ゆへある人の忍てまいるよ」と見えて、侍などあまた具して、かちよりまいる女房の、歩み困じて、たゞたりにたりのたるが、</p>	<p>木の枝に結び付けて、肩にうち懸けて行く程に、「故ある人の、忍びて参るよ」と見えて、侍などあまた具して、徒歩より参る女房の、歩み困じて、たゞ垂りに垂りたるが、</p>	<p>木ノ枝ニ結ビ付テ肩ニ打係テ行ク程ニ、品不賤ヌ人忍テ侍ナド具シテ、歩ヨリ長谷ヘ参ル有り。其ノ人歩ヒ極テ只垂ニ垂居タルヲ見レバ、</p>
<p>19</p> <p>「喉のかはけば、水飲ませよ」とて、消え入やうすれば、とももの人、手まどひをして、「近く水やある」と走さはぎもとむれど、水もなし。「こはいかゞせんする。御旅籠馬にや、もしある」と問へど、はるかにをくれたりして見えす。</p>	<p>「喉の渴げば、水飲ませよ」と、ゆき入りなんする様にすれば、供の人々、手惑ひをして、「近く水やある」と走り騒ぎ、求むれども、水もなし。「こはいかゞせんする。御旅籠馬や入りにたる」と問へど、遙かに後れたりして見えす。</p>	<p>「喉乾テ、水飲セヨ。既ニ挿入トス」ト云ドモ、共ノ人々、手ヲ迷シテ、「近く水ヤ有ル」ト騒ギ求ドモ、水無シ。「此ハ何ガセムト為ル」ト云フ間ニ、</p>

20	<p>ほとく しきさまに見ゆれば、まことにさはぎまどひて、しあつかふを見て、「喉かききてさへ人よ」と見ければ、やはら歩み寄りたるに、「こゝなる男こそ、水のあり所は知りたるらめ。此辺近く、水の清き所やある」と問ければ、<small>「此四五町がうちには清き水候はじ。」</small></p>	<p>ほとく しき様に見ゆれば、まことに騒ぎ惑ひて、為扱うを見て、「喉渴きて騒ぐ人よ」と見えてければ、やをら歩み寄りたるに、「こゝなる男こそ、水のあり所は知りたるらめ。この辺近く、水の清き所やある」と問ひければ、<small>「この四五町が内には、清き水候はじ。」</small></p>	<p>此ノ男 和ヲ歩ビ寄タルニ、「此ノ辺近ク淨キ水有ル所知タリヤ」ト問ヘバ、男ノ云ク、「近クハ水不候ハズ。」</p>
21	<p>いかなる事の候にか」と問ひければ、「歩み困せさせ給て、御喉のかはかせ給て、水ほしがらせ給に、水のながき大事なれば、たづぬるぞ」といひければ、</p>	<p>いかなることの候にか」と問ひければ、「歩み困せさせ給て、御喉の渴かせ給て、「水召さん」と仰せられるに、水のながき大事なれば、尋ぬるぞ」と言ひければ、</p>	<p>但シ、何ナル事ノ候ニカト。人トノ云ク、「長谷ニ参ラセ給ヲ人ノ歩極ゼサセ給テ、御喉乾カセ給ヒタレバ、水ヲ求ル也ト。」</p>
22	<p>「不便に候御事かな。水の所は遠て、汲て参らば、程へ候なん。これはいか」とて</p>	<p>「不便に候ふことかな。水候の所は遠き也。これはいか」とて</p>	<p>男云ク、「己レ、柑子三ツヲ持タリ。此レ奉ラム」ト。</p>
23	<p>つゝみたる柑子を、三ながらとらせたりければ、悦さはぎて食はせられたれば、</p>	<p>包みたる柑子を三つながら取らせられたれば、喜び騒ぎて食はせられたれば、</p>	<p>其ノ時ニ、主人ハ、極シテ寝入タルニ、人寄テ驚カシテ、「此ナル男コノ柑子ヲ持タルヲ奉レル也」ト云テ、柑子三ツヲ奉レバ、主人ノ云ク、「我ハ喉乾テ既ニ絶入シタリケルニコソ有ハレ」ト云テ、柑子ヲ食テ、</p>
24	<p>それを食て、やうく 目を見あげて、「こは、いかなりつる事ぞ」といふ。御喉かかせ給て、「水飲ませよ」とおほせられつまに、御殿籠り入らせ給つれば、水もとめ候つれども、清き水も候はざりつるに、こゝに候男の、思かけぬに、その心を得て、この柑子を三、奉りたりつれば、参らせたるなりといふに、</p>	<p>それを食ひて、やうく 目を見開けて、「こはいかなりつることぞ」と言ふ。「御喉渴かせ給ければ、「水飲ませよ」と仰せられつまに、御殿籠り入らせ給つれば、水求め候ひつれども、清き水も候はざりつるに、こゝに候男の、思ひかけぬに、その心を得て候けるにや、この柑子を三つ奉りたりつれば、参らせたりつる也」といふに、</p>	<p>「此ノ柑子无カラマシカバ、旅ノ空ニテ絶入リ畢マシ。極テ喜シキ事也。其ノ男ハ何コニ有」ト問ヘバ、「此ニ候」ト答フ。主人ノ云ク、「彼ノ男ノ喜シト思許ノ事ハ、何方可為キ。食物ナドハ持来タルカ。食ハセテ遣ハセ」ト云ヘバ、其ノ由ヲ男ニ云フニ</p>
25	<p>此女房、「我はさは、喉かききて、絶えたりけるにこそ有けれ。「水飲ませよ」といひつる斗はおぼゆれど、其後の事は露おぼえず。此柑子をさらましかば、此野中にて消え入なまし。うれしかりける男かな。此男、いまだあるか」と問へば、「かしこに候」と申。「その男、しばしあれといへ。いみじからん事ありとも、絶え入はてなば、かひなくてこそやみなまし</p>	<p>この女房、「我は、さは、喉渴きて、絶え入りたりけるにこそ有けれ。「水飲ませよ」と言ひつるばかりはをのづから覚ゆれど、その後の事は、いかにもつゆ覚えず。この柑子得させせざらましかば、この野中にて消え入りなまし。嬉しかりける男かな。この男はまだあるか」と問へば、「かしこにまな候」と言へば、「その男しばしあれと言へ。いみじからんことありとも、絶え入り果てなましかば、かひなくてこそ止みなましか。</p>	<p>其ノ由ヲ男ニ云フニ旅籠馬・皮籠馬など来着きたり。「な</p>
26	<p>男のうれしと思ふばかりの事は、かゝる旅にては、いかゞせんずるぞ。食物は持ちて来たるか。食はせてやれ」といへば、「あの男、しばし候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など食てまかれ」といへば、「うけ給ぬ」とて、あたるほごに、旅籠馬、皮籠馬など「など、かゝるかにをくれては参るぞ。」</p>	<p>この男の嬉しと思ふばかりの事は、かゝる旅にては、いかゞせんずる」とて、「食物などは持ちて来たるか。物など食はせてやれ」と言へば、「かの男、しばし候へ。御旅籠馬など参りたらんに、物など食てまかれ」と言へば、「うけ給はりぬ」とて居たる程に、旅籠馬や皮籠馬など来着きたり。「などかく違かに後れて、遅くは参るぞ。」</p>	<p>即チ屏幔引、疊敷テドシテ、昼ノ食物此ニテ奉ラム云。</p>
27	<p>御旅籠馬などは、つねにさきだつこそよけれ。とみの事などもあるに、かくをくるゝはよき事かは」などいひて、やがて幔引き、疊など敷きて、「水遠かなれど、困せさせ給たれば、</p>	<p>御旅籠馬などは、常に先に立ち候ふこそよけれ。頼の事などもあるに、かく後るゝはよきことか」など言ひて、やがてこゝにへい幔引き、疊なども敷きて、「水を遠かなれど、困せさせ給たれば、</p>	<p>即チ屏幔引、疊敷テドシテ、昼ノ食物此ニテ奉ラム云。</p>



<p>28 召し物は、こゝにて参らすべき也」とて、夫どもやりなどして、水汲ませ、食物しいだせば此男に、清けにして、食はせたり。物を食ふ、 「ありつる柑子、なにかならんずらん。」 観音はからはせ給事なれば、よもむなくしてはやまじ」と思ひたる程に、</p>	<p>人の召し物はこゝにて召すべきなり」とて、とまりぬ。 夫ども遣りなどして水汲ませ、食物し出だしたれば、この男に、いと清けに物して食はせたり。「何にかならんずらん。」 観音導かせ給ことなれば、よも空しくしてはやまじ」と思ひたる程に、</p>	<p>此ノ男ニモ食セタレバ食ヒツ。</p>
<p>29 白くよき布を二匹取り出でて、「これ、あの男に取らせよ。」 此柑子の喜は、いひつくすべき方もなければども、かゝる旅の道にては、うれしと思ふ斗の事はいかゞせん。これはたゞ、心ざしのはじめを見する也。京のおはしまし所は、そこゝになん。必ず参れ。</p>	<p>白くよき布を三疋取り出でて、「これ、あの男に取らせよ。」 この柑子の喜びは、言ひ尽くすべき方もなければども、かゝる旅にては、嬉しと思ふばかりの事はいかゞはせむする。これはたゞ心ざしの初めを見する也。京のおはしまし所はそこゝになんをほします。かならず参れ。</p>	<p>主人此ノ男ニ云ク、清キ布ヲ三疋取出シテ給テ云ク、 「此ノ柑子ノ喜シキハ可云辰クモ無ケレドモ、此ル旅ニテハ何ニカハセムト為ル。只此ハ志ノ初メ許ヲ見スル也。京ニハ其ニナル有ル 男、布三疋ヲ取テ脇ニ挟ムテ、</p>
<p>30 此柑子の喜をばせんずるぞ」といひて、布三匹取らせられたれば、悦て布を取りて、 「羸筋一筋が、布三匹になりぬる事」と思ひて、腋にはさみてまかる程に、其日は暮れけり。</p>	<p>この柑子の代りの物は賜はせんずるぞ」と言ひて、布三疋を取らせられたれば、嬉びて、布を取りて、 「羸筋一ツガ布三疋になりぬる」と思ひて、脇に挟みてまかる程に、その日は暮れにけり。</p>	<p>「羸筋一ツガ布三疋ニ成ヌル事、此レ観音ノ御助也ケリ」と、心ノ内ニ喜テ行ク程ニ、其ノ日暮ヌレバ、道辺ナル人ノ小家ニ宿リス。</p>
<p>31 道づらなる人の家にとまりて、明ぬれば鳥とともに起きて行程に、日さしあがりて辰の時ばかりに、えもいはず良き馬に乗りたる人、此馬を愛しつゝ、道も行きやらす、ふるまはするほどに、 「まことにえもいはずぬ馬かな。これを千貫かけなほいふにやあらん」と見るほどに、此馬にはかにたつれて、たゞ死にに死ぬれば、主我にもあらぬけしきにて、下りて立ちたり。</p>	<p>道面なる人の家に泊まりて、明けぬれば、鶏とともに起きて行く程に、日さしあがりて、辰の時になる程に、えもいはず良き馬に乗りたる人、この馬を愛しつゝ、道をも行きやらす振る舞はする男会ひたり。 「まことにえもいはずぬ馬かな。これを千段かけなほいふにやあらん」と見る程に、この馬のにはかに倒れて、たゞ死にに死ぬれば、主我にもあらぬ気色にて、下りて立ちたり。</p>	<p>夜睡ヌレバ、疾ク起テ行ク程ニ、辰時許ニ、吉馬ニ乗タル者ノ、馬ヲ愛シツ、道モ行キ不遺ヌ翔ハセテ合アリ。 「美ニ日出タキ馬カナ」と見ル程ニ、此ノ馬俄ニ倒テ只死ニ死ヌレバ、主我レニモ非ヌ気色ニテ下テ立テリ。</p>
<p>32 「かくてこゝにありとも、すべきやうもなし。我等は去なん。これ、ともかくもして引き隠せ」とて、下種男を一人とめて、去ぬれば、手まじひして、従者どもも、鞍下ろしなむして、「いかげせんずる」といへども、かひなく死にはてぬれば、手を打ち、あさましがり、泣ぬばかりに思ひたれど、すべき方なくて、あやしの馬のあるに乗ぬ。</p>	<p>我等は往なん。これ、ともかくもして、引き隠せ」とて、下衆男一人を留めて、往ぬれば、惑ひて鞍下ろしつ。「いかゞせんずる」と言へども、かひなく死に果てぬれば、手を打ち、あさましがり、泣きぬばかりに思ひたれど、すべき方なくて、あやしの馬のあるに鞍置き換へて、「かくてこゝにありとも、すべきやうもなし。」</p>	<p>即チ鞍下シツ。「此ハ何ガセムト為ル」と云ヘドモ、甲斐無クテ、死ニ畢ヌレバ、手ヲ打テ泣ク許思テ、賤シノ馬ノ有ルニ鞍置キ替テ乗去ヌ。徒者一人ヲ留テ、「此レ引き隠セ」と云ヒ置タレバ、男死タル馬ヲ守リ立テルニ</p>
<p>33 此男見て、「此馬、わが馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりぬ。羸筋一筋が、布三匹になりたり。此布の、馬になりぬる」といふ。</p>	<p>この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりたり。羸筋一筋が、布三匹になりたり。この布の、馬になりぬる」といふ。</p>	
<p>34 此男見て、「此馬、わが馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりぬ。羸筋一筋が、布三匹になりたり。此布の、馬になりぬる」といふ。</p>	<p>この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりたり。羸筋一筋が、布三匹になりたり。この布の、馬になりぬる」といふ。</p>	
<p>35 此男見て、「此馬、わが馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりぬ。羸筋一筋が、布三匹になりたり。此布の、馬になりぬる」といふ。</p>	<p>この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりたり。羸筋一筋が、布三匹になりたり。この布の、馬になりぬる」といふ。</p>	
<p>36 此男見て、「此馬、わが馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりぬ。羸筋一筋が、布三匹になりたり。此布の、馬になりぬる」といふ。</p>	<p>この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりたり。羸筋一筋が、布三匹になりたり。この布の、馬になりぬる」といふ。</p>	
<p>37 此男見て、「此馬、わが馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりぬ。羸筋一筋が、布三匹になりたり。此布の、馬になりぬる」といふ。</p>	<p>この男見て、「この馬は、我が馬にならむとて死ぬるにこそあれぬ。羸筋一筋が、柑子になりたり。羸筋一筋が、布三匹になりたり。この布の、馬になりぬる」といふ。</p>	

<p>38 歩み寄りて、此下種男にいふやう、「こは、いかなりつる馬ぞ」と問ひければ、陸奥国よりえさせ給へる馬なり。よろづの人のほしがりて、あたひも限らず買んと申つるをも惜しみて、放ち給はずして、今日かく死ぬれば、そのあたひ、少分をもとらせ給はずなりぬ。</p>	<p>歩み寄りて、この男に言ふやう、「こはいかなりつる馬ぞ」と問ひければ、「陸奥国より、この馬をたゞ据えて上らせ給つる馬を、よろづの人の欲しがりて、価も限らず買はんと申つるをも、放ち給はざりつる程に、今日かく死ぬれば、その価一疋をただに取らせ給はずなりぬ。</p>	<p>此ノ男コ歩ビ寄テ云ク、「此ハ何カナリツル馬ノ俄ニ死ヌル」ト。蒼ク云ク、「此レハ陸奥國ヨリ此レヲ財ニテ上リ給ヘルニ、万人欲ガリテ、「直モ不限ズム」ト云ツレドモ、惜ムテ持チ給ヘリツル程ニ、其ノ直一疋ヲニ取シテ止ヌ。</p>
<p>39 おのれも、皮をたにはがばやと思へど、旅にてはいかがすべきと思へ、まもり立て侍なり」といひければ、「その事也。いみじき御馬かなと見侍りつるに、はかなくかく死ぬる事、命ある物はあさましき事也。まことに、旅にては、皮はぎ給たりとも、えんし給はじ。」</p>	<p>己れも「皮をたに剥がばや」と思へど、「旅にてはいかどはせむずる」と思ひて、目守り立ち侍なり」と言ひければ、「そのこと也。いみじき馬かなと見侍りつる程に、はかなくかく死ぬること、命ある物はあさましきなり。かはらにても、忽ちに、えんしえ給はじ。」</p>	<p>「皮ヲダニ剥バヤ」ト思ヘドモ、「剥テモ旅ニテハ何ニカハセム」ト思テ、守リ立テル也」ト。此ノ男ノ云ク、「實ニ極キ馬カナ」ト見ツル程ニ、此ク死ヌレバ、命有ル者ハ奇異也。皮剥テモ忽マチ三千得難カリナム。</p>
<p>40 おのれは此辺に待れば、皮はぎてつかひ侍らん。得させておはしね」とて、此布を一匹とらせたれば、男、思はずなる所得したりと思へ、思ひもぞかへすとや思ふらん。布をとるまゝに、見たにもかへらず走り去ぬ。</p>	<p>己れはこの辺に待れば、かはらにて使ひ侍らん。得させておはしね」とて、この布を一疋取らせられたれば、男、「思はずなる所得したり」と思ひて、「思ひもぞ返す」とや思ひらん。布を取るまゝに、見たにも返らず、走り去ぬ。</p>	<p>己ハ此ノ辺ニ住マバ、皮ヲ剥ギテ可仕事ノ有ル也。己レニ得サセテ返リ給ヒネ」ト云テ、此ノ布□メヲ□ハセテラレバ、男、「不思ハヌニ所得シタリ」ト思テ、「思ヒ返ス事モヤ有ル」ト思ヘバ、布ヲ取テ、逃方如クシテ去ヌ。</p>
<p>41 男、よくやりはてて後、手かきあらひて、長谷の御方のむかひて、「此馬、生けて給はらん」と念せ入りたる程に、</p>	<p>男、よく遣り果てて後に、手かき洗ひて、長谷の御方の向かひて、「この馬、生けて給はらん」と念せ入りたる程に、</p>	<p>男、よく遣り果てて後に、手かき洗ひて、長谷の御方の向かひて、「この馬、生けて給はらん」と念せ入りたる程に、</p>
<p>42 この馬、目を見あくるまゝに、頭をもたげて、起きんとしければ、やはら手をかけて起し給へぬ。</p>	<p>この馬、目を見開くるまゝに、首をもたげて起きむしければ、やをら手をかけて起し立てつ。</p>	<p>馬目ヲ見開テ、頭ヲ持上テ起ムトスレバ、男寄テ手ヲ係テ起シ立テツ。</p>
<p>43 うれしき事限なし。「をくれて来る人もぞある。又、ありつる男もぞ来る。あやうくおぼえければ、やうく、かくれの方に引入て、時移るまでやすめて、もとのやうに心地もなりにければ、人のもとに引もて行て、その布一匹して、轡やあやしの鞍にかへて馬乗ぬ。</p>	<p>うれしき事限なし。「後れたる人もぞ来る。ありつる男もぞ帰る来る」など、危うく覚えければ、やうく、隠れの方へ引き入れて、時変るまで休めて、もとのやうに心地もなりにければ、人のもとに引もて行て、その布一疋して、轡やあやしの鞍に替へて馬に置きて、</p>	<p>喜シキ事無限シ。「若シ人モゾ来ル」ト思テ、漸ク隠タル方ニ引入レテ、時替マデ息マセテ、本ノ様ニ成ヌレバ、人ノ家ニ引入テ、布一段ヲ以テ賤ノ鞍ニ替ヘテ、</p>
<p>44 京さまに上る程に、宇治わたりにて日暮れにければ、その夜は人のもとにとまりて、今一匹の布して、馬の草、わが食物などにかへて、その夜はとまりて、つとめていとく、京さまにのぼりければ、九条わたりなる人の家に、物へ行かんずるやうにて、立きはる所あり。</p>	<p>京さまに上る程に、宇治辺りにて日暮れにければ、その夜人の許に泊りて、いま一疋の布して、馬の草やわが食物などに替えて、その夜は泊りぬ。翌朝、いと痴く京さまにの上りければ、九条辺りなる人の家に、物へ行かむずるやうにて、立ち騒ぐ所あり。</p>	<p>此ニ乗テ京ノ方ニ上ルニ、宇治ノ程ニテ日暮ヌレバ、人ノ家ニ留テ今一段ヲ以テ馬草・我方糧ニ成シテ睡ヌレバ京ヘ上ルニ、九条渡ナル人ノ家ヲ見ルニ、物ヘ行ムズル様ニ出立テ騒グ。</p>
<p>45 京さまに上る程に、宇治わたりにて日暮れにければ、その夜は人のもとにとまりて、今一匹の布して、馬の草、わが食物などにかへて、その夜はとまりて、つとめていとく、京さまにのぼりければ、九条わたりなる人の家に、物へ行かんずるやうにて、立きはる所あり。</p>	<p>京さまに上る程に、宇治辺りにて日暮れにければ、その夜人の許に泊りて、いま一疋の布して、馬の草やわが食物などに替えて、その夜は泊りぬ。翌朝、いと痴く京さまにの上りければ、九条辺りなる人の家に、物へ行かむずるやうにて、立ち騒ぐ所あり。</p>	<p>此ニ乗テ京ノ方ニ上ルニ、宇治ノ程ニテ日暮ヌレバ、人ノ家ニ留テ今一段ヲ以テ馬草・我方糧ニ成シテ睡ヌレバ京ヘ上ルニ、九条渡ナル人ノ家ヲ見ルニ、物ヘ行ムズル様ニ出立テ騒グ。</p>

46	<p>「此馬、京に率て行たらんに、見知りたる人ありて、盗みたるかなどいはれんもよしなし。やはら、これを売てはや」と思ひて</p>	<p>「この馬、京に率て行きたらんに、見知り人ありて、「盗みたるか」など言はれんもよしなし。やをらこれを売てはや」と思ひて</p>	<p>男ノ思ハク、「此ノ馬ヲ京ニ將行ラムト、若シ見知タル人モ有テ、盗タルト被云ムモ由無シ。然レバ、此ニテ売ラム。」</p>
47	<p>「かやうの所に、馬など用なる物ぞかし」とて下り立て、寄りて、「もし馬などや買せ給ふ」と問ひければ、「馬がなと思けるほどにて、此馬を見て、「いかせせん」ときはきて</p>	<p>「かやうの所に馬など要する物ぞかし」とて、下り走りて、寄りて、「もし馬などや買せ給ふ」と問ひければ、「馬をがな」と願ひ惑ひける程に、この馬を見て、「いかせせん」と騒きて</p>	<p>出立ヌル所ニハ馬要スル物ゾカシト思テ、馬ヨリ下テ寄テ、「馬ヤ買フ」ト問ケレバ、馬ヲ求ル間ニテ、此ノ馬ヲ見ルニ、実ニ吉キ馬ニテ有</p>
48	<p>「只今、かはり絹などはなきを、この鳥羽の田や米などにはかへてんや」といひければ、「中へ、絹よりは第一の事也」と思ひて、「絹や銭などこそ用には侍れ、おのれは旅なれば、田ならば何にかはせんずると思給ふれど、馬の御用あるべくは、たゞ仰にこそしたはめ」といへば、此馬に乗り心み、馳せなごして、「たゞ、思つるさま也」といひて</p>	<p>「たゞ今、かはり絹などはなきを、この鳥羽の田や米などには替えてんや」と言ひければ、「中へ、絹よりはだいたいちの事也」と思ひて、「絹布こそ要には侍れ、己れは旅なれば、田などは何にかはせんずると思ひ給ふれども、馬の御用あるべくは、たゞ仰せにこそは從はめ」と言へば、この馬に乗り心み、馳せなごして、「たゞ思ひつるさまなり」と言ひて</p>	<p>「只今絹・布ナドハ無キヲ、此ノ南ノ田居ニ有ル田ト米少トニハ替ムヤ」ト。男ノ云ク、「絹・布コソハ要ニハ侍レドモ、馬ノ要有ラバ、只仰ニ隨ハム」ト。然レバ、此ノ馬ニ乗り試ムルニ、実ニ思フ様也ケレバ、</p>
49	<p>此鳥羽の近き田三町、稲すこし、米など取らせて</p>	<p>この鳥羽の近き田三町、稲少し、米など取らせて</p>	<p>九条田居ノ田一町・米少ニ替ヘツ。</p>
50	<p>やがて此家をあつて、「おのれ、もし命ありて帰のぼりたらば、その時返し得させ給へ。のぼららんかぎりは、かくて居給へ。もし又命たえて、なぐもなりなば、やがてわが家にして居給へ。子も侍らねば、とかく申人もよも侍らじ」といひてあつて、やがて下りにければ、その家に入居てみたりける。</p>	<p>やがてこの家を預けて、「己れ、もし命ありて、帰の上りたらば、その時に返し得させ給へ。上らざらむ限りは、かくて居給つれ。もし又命絶えて亡くもなりなば、やがて我が家にし給へ。子も侍らねば、とかく言ふ人もよも侍らじ」と言ひて、預けて、やがて住にければ、その家は得たりける。</p>	<p>男、券ナド拵メ取テ、京ニ駕知タルケル人ノ家ニ行キ宿リテ</p>
51	<p>米、稲など取をきて、たゞひとりなりけれど、食物ありければ、かたはら、そのへんなりける下種などいできて、つかはれなどして、たゞありつきに居つきにけり。</p>	<p>米、稲など取り置きて、替り居にけり。たゞ一人なりけれど、食物ありければ、傍らなりける下衆など出で来て、使はれなどして、たゞありつきにありつきにけり。</p>	<p>其ノ米ヲ糶トシテ、</p>
52	<p>二月斗の事なりければ、その得たりける田を、半らか人に作らせ、今半らは我料に作らせたりけるが、人の方のもよけれど、それは世の常にて、おのれが分とて作たるは、このほか多くいできたければ、稲おほく刈をきて、それよりうちはじめ、風の吹つくるやうに徳つきて、いみじき徳人にてぞありける。</p>	<p>二月計りの事なりければ、その得たりける田を、半らは人に作らせ、いま半らは我が料に作らせたりけるが、人の方にとて作りたりける、良けれど、例のまゝにて、己れが料と名付けたりける、それうち始め、風の吹きつくるやうに徳つきて、いみじき人にてぞありける。</p>	<p>二月許ノ事ナレバ、其ノ田ヲ其ノ渡ノ人ニ預テ合作テ、半ヲバ取テ、其レヲ便トシテ世ヲ過スニ、便リ只付キニ付テ、</p>
53	<p>その家あるじも、音せずなりにければ、其家も我物にして、子孫などいできて、このほかに采へたりけるとか。</p>	<p>その家主も音せずなりにければ、その家もわが物にて、このほかに徳ある物にてぞありける。</p>	<p>家ナド儲テ楽シク有ケル。</p>
54	<p>て、このほかに采へたりけるとか。</p>	<p>その家主も音せずなりにければ、その家もわが物にて、このほかに徳ある物にてぞありける。</p>	<p>其ノ後ハ、「長谷ノ觀音ノ御助ケ也」ト知テ、常ニ參ケリ。觀音ノ靈驗ハ此ク難有キ事ヲ示シ給ケルトナム語り傳ヘタルトヤ。</p>
55	<p>て、このほかに采へたりけるとか。</p>	<p>その家主も音せずなりにければ、その家もわが物にて、このほかに徳ある物にてぞありける。</p>	<p>其ノ後ハ、「長谷ノ觀音ノ御助ケ也」ト知テ、常ニ參ケリ。觀音ノ靈驗ハ此ク難有キ事ヲ示シ給ケルトナム語り傳ヘタルトヤ。</p>

《補注3-2》日本昔話「藁しべ長者」話型の採録事例

(◎、◆、( )印はそれぞれ、「三年味噌型」、「観音祈願型」、交換する順序、を表わす)

	伝承地	採録事例(交換する順序)	型
1	愛知県西尾市平原町	「108. 藁しべ長者」『昔話研究資料叢書18 西三河の昔話』三弥井書店、一九八一年、二三九頁。	
2	青森県黒森市片裏町	「86. 藁しべ長者」白田甚五郎監修『津軽百話』国学院大学説話研究会編、一九七五年、一七七頁。	◎
3	青森県三戸郡五戸町	「藁みご長者」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、二一一頁。 (藁三本→葱→三年味噌→鍔刀→千三百円)	◎
4	青森県黒森市	『日本昔話名彙』柳田 国男、日本放送協会編、一九七一年。	
5	秋田県北秋田郡上小阿仁村	「269. 藁しべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観5 秋田』同朋舎出版、一九七八年、四六三頁。	◎
6	岩手県紫波郡矢巾町	「八七. 蜻蛉長者」『紫波郡昔話集』郷土研究社、一九二六年、一六九頁。	◆
7	岩手県水沢市	「難題を解いて婿になった話」『黄金の馬』三弥井書店、一九七一年、八六頁。	◎
8	岩手県遠野市	「わらしべ長者 類話1」稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観3 岩手』同朋舎出版、一九七八年、四七三頁。	
9	岩手県遠野市附馬牛町	「笑うしゃれこうべ」『日本の昔話10 遠野の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、九九頁。	◎
10	岩手県	「87. 藁しべ長者」佐々木徳夫『遠野の昔話』桜楓社、一九八五年、一七四頁。 (藁二本と握り・飯二つ→銀杏の葉→小刀→米千俵)	
11	岩手県遠野市新町	「107. 一把の葉千両」稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観3 岩手』同朋舎出版、一九七八年、二二二頁。	◎
12	愛媛県北宇和郡三間町	「わらしべ長者」『日本の民話10 四国』ぎょうせい、一九七九年、一七四頁。	◎
13	愛媛県八幡浜市日土町	「105. わらしべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観22 愛媛・高知』同朋舎出版、一九七八年、二一九頁。	
14	愛媛県温泉郡神和村	「わらしべ長者」『日本昔話集成第二部の1』武田明採集話、角川書店、一九五三年、四三九頁。	◎
15	愛媛県上浮穴郡柳谷村	「わらしべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観22 愛媛・高知』同朋舎出版、一九七八年、二二二頁。	
16	愛媛県北宇和郡三間町	「わらしべ長者 類話3」稲田浩二ほか『日本昔話通観22 愛媛・高知』同朋舎出版、一九七八年、二二二頁。	
17	大阪市北区天神橋筋	「藁すべ一本」『日本の昔話7 浪速の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、五五頁。	
18	岡山県岡山市	「九三. 藁しべ三本」柳田国男『日本昔話記録6 岡山県御津郡昔話集』三星堂、一九七四年、一三八頁／「14. 藁しべ三本」上巻岡山民話の会『なんと昔があったげな』一九六四年、一四八頁。	◎
19	岡山県阿哲郡哲西町	「六三. 蓮の葉長者」稲田浩二・立石憲利編『中国山地の昔話 賀島飛左唄伝承四百余話』三省堂一九七四年、九三頁。	◎
20	岡山県阿哲郡西町	「わらしべ長者」『日本の民話9 山陽』ぎょうせい、一九七九年、七三頁。	
21	岡山県	「わらしべ長者」(原話は、「仁多郡誌」『日本の民話15 岡山・出雲』未来社、一九七七年、四一五頁。	
22	岡山県井原市野上町	「165. 藁しべ長者(類話2)」稲田浩二ほか『日本昔話通観19 岡山』同朋舎出版、一九七八年、三七二頁。	
23	沖縄県宜野湾市	「屍黄金を以て恩に報いた話」佐喜真興英『南島説話』郷土研究社、一九二二年、九三頁。	
24	沖縄県中頭郡読谷村	「藁しべ長者」『日本の昔話30 沖縄の昔話』日本放送出版協会、一九八〇年、五〇頁。 (藁一杯→味噌銅金→刀→金の弊風→与座の井戸→南山の王→中山の王)	◎
25	香川県	「一五六. 藁しべ長者」『全国昔話資料集成32 東讃岐昔話集』岩崎美術社、一九七七年、二四四頁。	◎
26	鹿児島県薩摩郡下甕島	「藁しべ長者(その一)」柳田国男『日本昔話記録老 鹿児島県甕島昔話集』三省堂、一九七四年、(新)七頁、(旧)八頁(観音のお告げ→藁すべ・蛇→蜜柑三つ→白布三反→馬→田・嫁・家→長者になる)。	◆
27	鹿児島県薩摩郡下甕島	「藁しべ長者(その二)」岩倉市郎採録、柳田国男『日本昔話記録11 鹿児島県甕島昔話集』三省堂、一九七四年、(新)九頁、(旧)一〇頁(藁一本→大根→味噌一丸→刀→お金)。	◎
28	鹿児島県薩摩郡下甕島	二八. 兄弟話『昔話研究』復刻版巻二、岩崎美術社、一九八〇年、五五一頁。	
29	鹿児島県薩摩郡下甕島	「23. 藁しべ長者」荒木博之『昔話研究資料叢書5 甕島の昔話』三弥井書店、一九七〇年、一四五頁。 (藁一本→大根→三年味噌→刀→米千俵)	◎
30	鹿児島県鹿児島市	「八四. 屍黄金うい以て恩に報いた話」『南島説話』故郷研究所、一九二二年、九三頁。	
31	鹿児島県大島郡喜界島	「12. 二人の兄弟(二)」『昔話研究』復刻版巻一、岩崎美術社、一九八〇年、二二六頁。	

32	鹿児島県中種子町	「35. 七つ子と藁一把」『昔話研究資料叢書17 種子島の昔話1』三弥井書店、一九八〇年、一四〇頁。	
33	鹿児島県南種子町	「36. 一粒の麦」「藁しべ長者」と似る)『昔話研究資料叢書17 種子島の昔話1』三弥井書店、一九八〇年、一四四頁。	◎
34	鹿児島県大島郡徳之島町	「27. 幸運な男の子」『南島昔話叢書3 徳之島の昔話』同朋舎出版、一九八四年、一三一頁。	
35	鹿児島県大島郡与論町	「わらしび長者」田畑英勝『日本の昔話7 奄美諸島の昔話』日本放送出版協会、一九七四年、一三二頁。 (観音のお告げ→藁しべ一本・蛇→蜜柑二つ→絹反物一反→馬→畑田)	◆
36	鹿児島県	「一三七. 藁しび長者」『全国昔話資料集成15 奄美大島昔話集』岩崎美術社、一九七五年、二五九頁。	◎
37	鹿児島県名瀬市	「鮫お追ひ払う小刀」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観25 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八四頁。 (忘れの息子→地藏のお告げ→藁しべ・蛇→お金→畑田・圧屋になる)	◆
38	鹿児島県大島郡宇検村	「藁しべ長者 類話1」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観25 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八七頁。	
39	鹿児島県	「わらしべ童子」『日本の昔話3 久永ナオマツ姫の昔話 奄美大島』日本放送出版協会、一九七三年、八三頁。	◎
40	鹿児島県大島郡徳之島町	「藁しべ長者 類話2」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観25 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八七頁。	
41	鹿児島県大島郡大和村	「藁しべ長者 類話3」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観25 鹿児島』同朋舎出版、一九七八年、二八七頁。 (観音のお告げ→藁一本・蛇→蜜柑二つ→絹一反→馬→家と畑田)	◆
42	岐阜県吉城郡(上宝村)	「藁しべ長者 類話1」稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観13 岐阜・静岡・愛知』同朋舎出版、一九七八年、三二六頁／『昔話研究』復刻版2-11、岩波美術社、一九八〇年、三五頁。 (地藏様のお告げ→藁しべ・蛇→お金→畑田・圧屋になる)	◆
43	岐阜県郡上郡大和村	「藁すべ長者」稲田浩二『日本昔話16 美濃の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、一七九頁。 (藁一本→お菓子と果物→白絹三反→金→お金持ちになる)	◎
44	岐阜県加茂郡白川町	「る. 藁しべ婿」『昔話の年輪80選』ちくまライブラリー32、筑摩書房、一九八九年、二六六頁。 (三尺の縄→蓮の葉→三年味噌→小刀→矢→お金や着物を買う)	◎
45	岐阜県加茂郡白川町	「二五. 醜男の婿入り」『全国昔話資料集成25 恵那昔話集』岩崎美術社、一九七七年、七八頁。	
46	熊本県天草郡有明町	「藁しべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観24 長崎・熊本・宮崎』同朋舎出版、一九七八年、二〇九頁。	
47	群馬県沼田市	「一七. わらしべ長者」上野勇『全国昔話資料集成13 利根昔話集』岩崎美術社、一九七七年、四三頁。 (藁三本→蓮の葉→味噌→反物→家・楽に暮らす)	◆
48	群馬県吾妻郡吾妻町	「藁しべ長者 類話1」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観8 群馬・栃木』同朋舎出版、一九七八年、三〇頁。 (藁しべ・蛇→蜜柑→反物→馬)	
49	滋賀県伊香郡余呉村	「藁しべ長者」『余呉村の民俗-滋賀県伊香郡余呉村-』東洋大学民俗研究所、一九七〇年、一五八頁。	◎
50	島根県邑智郡桜江町	「113. 藁しべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一七頁。	◎
51	島根県大田市富山町	「藁しべ長者 類話1」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一八頁。 (お告げ→藁・蛇→反物→馬→次々交換して長者になる)	◆
52	島根県大田市山口町	「藁しべ長者 類話2」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一八頁。 (藁しび一本→わかめ一枚→小刀→傘一本→米→千石・馬)	◎
53	島根県仁多郡	「藁しべ長者 類話3」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一八頁。	
54	島根県美濃郡匹見町	「藁しべ長者 類話4」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一八頁。	
55	島根県出雲地方	「藁しべ長者 類話5」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観18 島根』同朋舎出版、一九七八年、三一八頁。	◎
56	長崎県壱岐郡志原村	「百十六. 藁しび長者」『老岐島昔話集』郷土研究社、一九三五年、一七〇頁／「二六. 藁シビ長者」『全国昔話記録壱岐島昔話集三省堂、一九四一年、三四頁。』	◎
57	長崎県北松浦郡有川村	「藁三本が千三百圓」『五島民俗図誌』一誠社、一九三四年、二四四頁(『日本民俗選集第10 クレス出版、二〇〇九年)。	
58	長崎県下県郡美津島町	「102. わらしび長者(類話3)」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観24 長崎・熊本・宮崎』同朋舎出版、一九七八年、二〇九頁。	
59	徳島県美馬郡(西祖谷山村)	「八. 一筋の縄」『日本昔話記録8 徳島県祖谷山地方昔話集』三省堂、一九七四年、一五頁。	◎
60	徳島県美馬郡(東祖谷)	「四九. 藁しべ長者」『日本昔話記録8 徳島県祖谷山地方昔話集』三省堂、一九七四年、七二頁。	◎

	山 村)		
61	徳島県	「四九. 藁しべ長者」『全国昔話記録 阿波祖谷山昔話集』三省堂、一九四三年、七六頁。	
62	鳥取県東伯郡関金町	「148. 備後のみわら屋」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観17 鳥取』朋舎出版、一九七八年、三八頁。	
63	鳥取県岩美郡国府町	「148. 藁しべ長者」『日本昔話通観17 鳥取』同朋舎出版、一九七八年、三九〇頁。	
64	栃木県芳賀郡茂木町	「33. 藁しべ長者」『昔話研究資料叢書12 那珂川流域の昔話』三弥井書店、一九八〇年、一一九頁。 (縄三尺→蓮の葉→三年味噌→小刀→弓の矢一本)	
65	新潟県松尾市	「藁しべ長者」『日本昔話大成第1巻 本格昔話二』角川書店、一九七八年、二一一頁。	
66	新潟県松尾市	「9. 藁しべ長者」野村純一『増補改訂 吹谷松兵衛昔話集』増補改訂吹谷松兵衛昔話集刊行会、一九七五年、四二頁(藁一本→箸→味噌→刀→王の子の守る刀とわかる)。	◎
67	新潟県	「藁しべ長者」『あしなか』一四頁、山村民俗の会、一九七〇年。	
68	新潟県	「三三. わらすべ長者」水沢謙一『おぼぼの昔ばなし—池田チセの語る百四十話—』野島出版、一九六七年、一三八頁(観音→ワラスベ一本→蜜柑二つ→絹一反→馬→畑・屋敷、安楽に暮らす)。	◆
69	新潟県北蒲原郡豊浦町	「241. 藁しべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観10 新潟』同朋舎出版、一九七四年、四七三頁。	
70	新潟県長岡市願成寺町	「藁しべ長者(類話2)」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観10 新潟』同朋舎出版、一九七四年、四七四頁。 (藁一束→味噌→かたまり→刀→金→お金持ちになる)	◎
71	新潟県長岡市村松町	「ワラスベ長者」『日本の民話29 佐渡・越後』未来社、一九七五年、三七二頁。	
72	新潟県滝谷町	「ワラスベ長者」水沢謙一『日本民話 雪国のおぼぼの昔』講談社、一九七四年、一三三頁。 (観音↑ワラスベ一本→蜜柑二つ→絹一反→馬→畑・屋敷→安楽に暮らす)	◆
73	新潟県長岡市高見町	「藁しべ長者 類話3」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観10 新潟』同朋舎出版、一九七八年、四七四頁。 (神様のお告げ→藁・蛇↑蜜柑二つ→絹一反→馬→家・田畑)	◆
74	新潟県五泉市	「藁しべ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観10 新潟』同朋舎出版、一九七四年、四七四頁。	
75	広島県呉市	「155. 藁しべ長者」『日本昔話集成第二部の1』角川書店、一九五三年、四二五頁。	
76	広島県呉市	「三九. 藁しべ長者」磯貝勇『全国昔話資料集成5 安芸国昔話集岩崎美術社』一九七四、(新) 八四頁。 (観音のお告げ→藁一本・蛇→蜜柑→布子三反→馬→家→一生安楽に暮らす)	◆
77	広島県双三郡	「わらしべ殿様」『日本の民話16 安芸・備後』未来社、一九七七年、三九二頁。	◎
78	広島県甲奴郡甲奴町	「二四. わらしべ長者」『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』岩崎美術社、一九七七年、七三頁 / 『昔話の研究 広島』広島県師範学校郷土研究室、一九三九年、一七一頁(藁一本→蓮の葉→味噌→婿)。	◎
79	福島県いわき市	「二六. 藁しび長者」『日本昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、三〇頁。	
80	福島県双葉郡久之濱町	「二六. 藁しび長者」柳田国男『日本昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、(新) 二六頁、(旧) 三〇頁。	◆
81	兵庫県宍粟郡千種町	「148. ワラスベ長者」稲田浩二・小沢俊夫『日本昔話通観16 兵庫』同朋舎出版、一九七八年、二六四頁。	◆
82	山口県都濃・佐渡・吉敷郡	「藁しべ長者」『日本の民話17 周防・長門』頁未来社、一九七七年、三〇九頁。	◆
83	山口県大島郡東和町	「藁しべ長者(類話2)」稲田浩二ほか『日本昔話通観20 広島・山口』同朋舎出版、一九八七年、三七三頁。	
84	山形県	「四四-2. とらんぼのむかし2」『全国昔話資料集成24 真室川昔話集』岩崎美術社、一九七七年、一八一頁。	
85	山形県	「109. わらみご長者」武田正『佐藤家の昔話』桜楓社、一九八二年。 (藁一本→蓮の葉→味噌→刀→大金持ちになる)	◎
86	山形県米沢市田沢	「275. 藁しべ長者(梗概)」稲田浩二ほか『日本昔話通観6 山形』同朋舎出版、一九七八年、四三三頁。	◎
87	和歌山県西牟婁郡すさみ町	「わらしべ長者」『日本の昔話13 紀伊半島の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、五九頁。	

《補注3-3》韓国昔話の二つの亜型

日・韓の亜型（サブタイプ）はどのように共通し、どのように異なるのであろうか、考察してみよう。

(1) 一三三三「藁縄三本」型

ここでは、一三三三「藁縄三本」型の一例として、「藁縄一本で長者になる」（崔仁鶴『韓国の昔話』）を取り上げて分析してみよう。ここから話型を考えるために崔氏の翻訳された採録にもとづいて、事項を取り出すと次のようである。

母が、**怠け者の息子**と暮す。

母は、息子に「仕事をしろ」という。

（息子は、仕事をしない）

母は、息子に「仕事を手伝え」という。

息子は、仕事をしない。

母は、「仕事をしろ」という。

息子は、仕事をしない。

母は、息子に「家から出て行け」という。

息子は、母に「藁をくれ」という。

母は、息子に藁を渡す。

怠け者は、藁を編む。

母は、怠け者に「家から出て行け」という。

**怠け者は、藁を持って家を出る。**

怠け者は、縄が切れて困っている瓶商人に出会う。

**怠け者は、瓶商人と、藁と瓶を交換する。**

怠け者は、水瓶を壊して困っている女に出会う。

怠け者は、女と、瓶と米を交換する。

怠け者は、（居酒屋の前で）倒れている驢馬を発見する。

怠け者は、驢馬の持ち主である老人に出会う。

怠け者は、老人と、米と死んだ驢馬を交換する。

（死んだ）驢馬は、生き返る。

驢馬は、怠け者を乗せて古墳に行く。

怠け者は、（雨を避けるために）古墳に入る。

怠け者は、娘の死体を発見する。

（死んだ）娘は、生き返る。

娘は、怠け者に御礼をいう。

娘は、怠け者に村長の娘であると告げる。

娘は、怠け者を村長のもとに連れて行く。

村長は、怠け者に娘を与える。

怠け者は、村長の娘と結婚する。

怠け者は、嫁と驢馬とふるさとに向かう。

三人の商人は、怠け者から嫁と驢馬を奪おうと企てる。

商人は、怠け者が出した謎を解けない。

三人の商人は、各自の織物を持って逃げ出そうとする。

怠け者は、地方の長に訴えた。

地方の長は、三人の商人を捕えさせた。

地方の長は、「持っている物を若者に譲るがよい」と判決をくだした。



怠け者は、幸福に暮らした。

表現に即して取り出した右の具体的な事項群から、さらに基本的な事項を抽出すると次のようになる。

怠け者は、藁と瓶を交換する。

怠け者は、瓶と米を交換する

怠け者は、米と死んだ驢馬を交換する。

怠け者は、村長娘の死体を発見、娘が生き返る。

怠け者は、村長の娘と結婚する。

商人は、怠け者から嫁と驢馬を奪おうと企てる。

商人は、謎をだす。

怠け者は、織物をもらう。

怠け者は、幸福に暮らした。

## (2) 「藁一粒で」型

もう一例、二二三「粟一粒で」型の一例として、「粟一粒で政丞の娘を貰ふ」（孫晋泰『朝鮮民譚集』）を取り上げて分析してみよう。

まず、孫晋泰氏の翻訳から事項を取り出すと次のようである。この採録事例は、部分的に要約されているところと、比較的語りの特徴が残っているところがある。様式的に語られたときに予想される典型的な語りを（ ）で補った。

若者が、科挙（の試験）に出かける。

若者は、（宿屋に泊まる）。

（若者は、）宿屋の主人に粟粒を預ける。

宿屋の主人は、若者に「鼠が粟粒を食べた」という。

若者は、主人に「鼠を捕ってこい」という。

主人は、鼠を（捕って）若者に渡す。

若者は次の宿屋に（泊まる）。

（若者は、次の宿屋の主人に）鼠を預ける。

主人は、若者に「猫が鼠を食べた」という。

若者は、主人に「猫を捕ってこい」という。

（主人は、若者に猫を渡す）

若者は、第三の宿屋に泊まる。

（若者は、主人に猫を預ける）

主人は、「猫が馬に蹴られて死んだ」という。

若者は、主人に「馬を連れてこい」という。

（主人は、若者に馬を渡す）

若者は、京城近くの宿屋に泊まる。

（若者は、主人に馬を預ける）

主人は、「馬が牛に殺された」という。

若者は「牛を連れてこい」という。

（主人は、若者に牛を渡す）

若者は、京城内の宿屋に泊まる。

若者は、主人に牛を預ける。

主人は、若者に「息子が政丞に牛を売った」という。

若者は、主人に「政丞を連れてこい」という。

主人は、政丞の家に行く。

主人は、政丞に訳を話す。

政丞は、主人に「若者を連れてこい」という。

若者は、政丞に「牛を渡せ」という。

政丞は、若者に「牛を食べた」という。

若者は、政丞に「牛を食べた者を連れてこい」という。

政丞は、若者を許す。

政丞は、若者に娘を与える。

右の具体的な事項群から、さらに基本的な事項を抽出すると次のようになる。

怠け者は、粟粒と鼠を交換する。

怠け者は、鼠と猫を交換する。

怠け者は、猫と馬を交換する。

怠け者は、馬と牛を交換する。

怠け者は、牛と（政丞の与える）褒美（ほうび）を交換する。

これが韓国昔話「藁一粒で」型の中心をなす事項である。そこで「藁縄二本」型と「藁一粒で」型とを事項において比較すると次のようになる。

【表3】「藁縄二本」型と「藁一粒で」型の比較

	「藁二本」型 *1	「藁一粒で」型 *2
前	藁と瓶を交換する。 瓶と米を交換する。	粟粒と鼠を交換する。 鼠と猫を交換する。
半	米と死んだ驢馬を交換する。 村長娘の死体を発見、娘が生き返る。 村長の娘と結婚する。	猫と馬を交換する。 馬と牛を交換する。 牛と褒美を交換する。

半	後
<p>商人は、怠け者から嫁と驢馬を奪おうと企てる。 商人は、謎をたず。 怠け者は、織物をもろう。 怠け者は、幸福に暮らした。</p>	

\*1 「藁縄三本で嫁をもろう」任哲宰『任哲宰全集② 韓国口伝説話—平安北道編Ⅱ』平民社、一九八八年、一四〇—一四二頁（一九三二年七月、平安北道宣川郡宣川邑採録、【表1】の①番事例）。

\*2 「一粒の粟」鄭寅燮『温突夜話』日本書院、一九二七年（『世界民間文芸叢書 別巻三 温突夜話』三弥井書店、一九八三年、四二二頁）／「粟粒で政丞の娘を貰ふ」孫晋泰『朝鮮民譚集』郷土研究社、一九三〇年、一七九頁、【表1】の②番事例）。

これを見ると、「粟一粒で」型は単純に交換を繰り返して裕福になるという亜型であるが、「藁縄三本」型は、交換による致富という前半部分に対して、もう一度難題が課せられ、これを解決して幸福になるという後半部分とが複合的になっている亜型だといえることができる。

「藁縄三本」型のような、前半部分と後半部分が複合的になっている亜型は、後にも触れるが、中国の仏典である『根本説一切有部毘奈耶』巻第三二にもみられるものである。

《補注3-4》『ジャータカ 四話』「チュッラカ大豪商前生物語」の事項を取り出す。

（チュッラカ）豪商は、死んだ鼠を見つける。

豪商は、星宿を占う。

（占った結果）

豪商は、鼠を取れば、妻を養い事業を営むと言う。

ある良家の息子は、(豪商のことばを聞き) 鼠を取った。

かれ(良家の息子)は、鼠を猫用に売って小銭をもらう。

かれは、小銭で砂糖と一個の水瓶を買う。

かれは、花環作り人たちに、砂糖と水を与える。

花環作り人たちは、かれにかみの花をあげる。

かれは、翌日も砂糖と水瓶を持って花園へ行く。

花環作り人たちは、かれに花の茂みを与える。

かれは、八カハーパナを得る。

園丁は、風で落ちた葉を捨てる方法を探す。

良家の息子は、落ち葉をもらう。

かれは、子供らと落ち葉を片づける。

かれは、庭園の門の所に落ち葉を山積みさせる。

(王家の) 陶工は、陶器を焼くため、木を探す。

陶工は、積みさせた落ち葉を見つける。

陶工は、かれから落ち葉を買う。

かれは、十六カハーパナと、五個の陶器をもらう。

かれは、五百人の草刈り人たちに水を供給する。

かれは、陸路・水路の商人と親しくなる。

陸路の商人は、かれに五百頭の馬と仲買人が来ると教える。

かれは、草刈り人たちに草束を頼む。

かれは、草を売らないことを頼む。

(馬の) 仲買人は、馬の草を入手することができない。

**仲買人は、かれに千「カハーパナ」を渡して草を買う。**

水路の商人は、かれに港に大きな船が来ると教える。

かれは、貸し車を借りる。

かれは、船を買う約束として指輪を与える。

(百人の) 商人たちは、品物を買いに来る。

商人たちは、ある大商人が、すでに買う約束をしたことを聞く。

商人たちは、各自千「カハーパナ」を出して、船の所有者になる。

商人たちは、各自千「カハーパナ」を出して、品物の所有者になる。

**かれは、二十万「カハーパナ」を獲得する。**

**かれは、大豪商に恩返しをしに行く。**

大豪商は、かれに財産を獲得した訳を聞く。

かれは、今までの出来事を語る。

**大豪商は、かれに娘と全財産を与える。**

かれは、豪商の地位を得る。

世尊は、(自分によって) 豪商が全世にも財産を獲得したと言う。

世尊は、前生を現在にあてはめられと説法する。

『ジャータカ 四話』は、韓国昔話や日本昔話のように、偶然に起きた出来事により物の交換が始まるということではなく、裕福になったのは、主人公の商売の知恵と努力によるものであると考えられる。

《補注 3-5》 『六度集經』卷三第二二

『六度集經』の説話から会話や修辭などを外し、重要な事項を取り出すと、次のようである。

(本文引用は、『国訳一切經印度撰述部 本縁部六』(大東出版社、一九七五年第四刷發行)を用いる)

(昔) 菩薩がいた。

(菩薩は) 大理家になって、国のように寶を積むほど金持ちであった。

大理家は、常に貧しい人を救済した。

あるとき、友人がいた。

(大理家の) 友人の子は、遊蕩にふけて家の財産を全部なくす。

大理家は、(財産をなくした) 友人の子を気の毒に思う。

大理家は、友人の子に「(道をもって生きよ)、金千兩を(子に与えて) 元手にせよ」という。

大理家は、友人の子に(資本として) 金千兩を与える。

友人の子は、商売を始めた。

友人の子は、(鬼や妖・姪蕩酒樂して) 再び窮乏に陥る。

友人の子は、五回も繰り返し、(財物をなくして) 貧乏になる。

大理家は、糞上ふんじょうに死んだ鼠を見つける。

大理家は、(死んだ鼠を見ながら) 友人の子に教えを垂れる。

大理家は、「(聰明な人は) 死鼠を持って生を治よ」と言う。

大理家は、また友人の子に金千兩を与える。

乞食の子が、遙に大理家の話を聞く。

乞兒は、大理家の教えを聞いて、深く感じる。

乞兒は、乞食の帰りに死んだ鼠を取って帰る。

乞兒は、大理家の妙教に従う。

乞兒は、鼠に味をつけて売り、両錢を得る。

乞兒は、野菜を売って百餘を得る。

乞兒は、わずかなもの（どんどん物を増やし）長者になる。

乞兒は、大理家に恩返しすることを決めた。

乞兒は、一銀案ごんあんと金鼠こんそを作る。

乞兒は、銀・金鼠や宝物を持って大理家を訪ねる。

長者は、様々な宝物で（鼠の）お腹を満たす。

長者は、金鼠の周りを宝物で回す。

長者は、大理家にお礼をする。

長者は、大理家に長者になった訳を話す。

大理家は、長者に娘を（妻として）やる。

大理家は、長者に住む処をあげる。

大理家は、長者に三宝と四等心をあげて後継者とする。

大理家は、長者に衆生を救済せよという。

長者は仏教を修めたいと答えた。

国の人が、長者の孝行をほめる。

（大理家は、仏が変身したものである）

仏は沙門に、大理家は私であり、蕩の子は調達で、鼠を持って致富した者は槃特だと告げる。

調達は、死んで太山地獄に落ちた。

槃特は、世の中の苦しみから切り抜けることができた。

III II I

III II I



ところでこの事項群の中で、次のような問題が見つかる。

友人の子は、商売を始める。

友人の子は、姪蕩する。

友人の子は、窮乏に陥る。

友人の子は、姪蕩する。

友人の子は、窮乏に陥る。

このような単純な繰り返しだが五回あるのは本来的な語りが、文章として記されるときに要約、省略が生じたと考えられる。

さて、右の事項群の中で昔話の骨格をなす基本的な事項は次のようなものである。

乞兒は、鼠を取って帰る。

乞兒は、鼠に味をつけて売る。

乞兒は、両錢を得る。

乞兒は、野菜を売る。

乞兒は、百餘を得る。

乞兒は、わずかな物を売る。

乞兒は、長者になる。

ちなみに、右の事項の中で、「わずかな物を売ってどんどん長者になる」というところだけが具体的でない。

つまり、ここに要約、省略が生じているとみることができる。

また、逆に、

大理家は、長者に娘を（妻として）さし出す。

大理家は、長者に住む処をあげる。

大理家は、長者に三宝と四等心をあげて後継者とする。

I  
II  
III

このような事項群は繰り返しが丁寧になされていることが分かる。

さて、このように比較を進めると、日本昔話「藁しべ長者」はわずかなものから交換を繰り返して長者になるという単純な話型であることが明らかになる。すなわち、長大な物語ある『六度集経』は、

どのようにして貧乏になるか。 (a)

鼠や野菜を売って金持ちになる。 (b)

恩返しをする。 (c)

という三段構成になっている。つまり、日本昔話はこの (b) 部分にあたるということが分かる。

第四章補注 《補注4-1》 『宇治拾遺』第九二話 「五色鹿事」と類話の本文比較対照表

									『仏説九色鹿經』卷一
1								又九色鹿經云	『法苑珠林』卷第五〇「九色鹿經」
2	昔者	昔者	昔者	昔者	昔者	昔者	昔者	今昔	『今昔物語』「八身色九色鹿 住山出河辺助人語」
3								天竺三ノ山有り。其ノ山ノ中ニ、	天竺に、
4	菩薩身爲九色鹿 其毛九種色 其角白如雪。	菩薩身爲九色鹿 其九種色 角白如雪。	身ノ色ハ九色ニシテ角ノ色ハ白キ鹿住ケリ。	身ノ色ハ九色ニシテ角ノ色ハ白キ鹿住ケリ。	身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり。	身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり。	身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり。	身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり。	身の色は五色にて、角の色は白き鹿一ありけり。
5	常在恒水邊 飲其水草	常在恒水邊 飲其水草	其ノ山ニ此ノ鹿有リト云事ヲ不知ス。 其山ノ麓ニ二の大キナル河有リ。 彼ノ山ニ二ノ鳥有リ、	其ノ國ノ人、 其ノ山ニ此ノ鹿有リト云事ヲ不知ス。 其山ノ麓ニ二の大キナル河有リ。 彼ノ山ニ二ノ鳥有リ、	深き山にのみ住て、人に知られず。 その山のほとりに大なる川あり。 その山に又鳥あり。 此鹿を友として過す	深き山にのみ住て、人に知られず。 その山のほとりに大なる川あり。 その山に又鳥あり。 此鹿を友として過す	深き山にのみ住て、人に知られず。 その山のほとりに大なる川あり。 その山に又鳥あり。 此鹿を友として過す	深き山にのみ住て、人に知られず。 その山のほとりに大なる川あり。 その山に又鳥あり。 此鹿を友として過す	深き山にのみ住て、人に知られず。 その山のほとりに大なる川あり。 その山に又鳥あり。 此鹿を友として過す
6	常與一鳥爲知識 時水中有一溺人 隨流來下 或出或沒得著樹木	與一鳥爲知識 時水中有一溺人 隨流來下、 或出或沒	而程ニ、此ノ河ヨリ一人ノ男渡ルニ、水ニ溺レテ流レテ没ミ 浮ミ、下ダル、 既ニ死ナムトス。 男、木ノ枝ニ取り付テ流下テ呼テ云ク、	而程ニ、此ノ河ヨリ一人ノ男渡ルニ、水ニ溺レテ流レテ没ミ 浮ミ、下ダル、 既ニ死ナムトス。 男、木ノ枝ニ取り付テ流下テ呼テ云ク、	ある時、この川に男一人流れて、 既死なんとす。	ある時、この川に男一人流れて、 既死なんとす。	ある時、この川に男一人流れて、 既死なんとす。	ある時、この川に男一人流れて、 既死なんとす。	ある時、この川に男一人流れて、 既死なんとす。
7	山神樹神諸天龍神。何不救像於我 仰頭呼天	「山神樹神、諸天龍神、何不救我！」 仰頭呼天	「山神・樹神・諸天・龍神、何ソ我レヲ不助ザルベキ。」	「山神・樹神・諸天・龍神、何ソ我レヲ不助ザルベキ。」	「我を、人助けよ」と叫ぶに、	「我を、人助けよ」と叫ぶに、	「我を、人助けよ」と叫ぶに、	「我を、人助けよ」と叫ぶに、	「我を、人助けよ」と叫ぶに、
8			音ヲ拳テ叫フト云ヘドモ、其時二人無クシテ助クル事無シ。 而ルニ此ノ山ニ住ム彼ノ鹿、其ノ時三河ノ辺ニ來レリ。	音ヲ拳テ叫フト云ヘドモ、其時二人無クシテ助クル事無シ。 而ルニ此ノ山ニ住ム彼ノ鹿、其ノ時三河ノ辺ニ來レリ。					
9	鹿聞人聲走到水中。語溺人言 汝莫恐怖、汝可騎我背、上捉我兩角	鹿聞、下水救之、語言 「汝可騎我背、捉我角」	此ノ音ヲ聞テ男ニ云ク、 「汝ヲ恐ル、事無レ、我方背ニ乘テ二ノ角ヲ捕ヘヨ。 我レ、汝ヲ負テ陸ニ付ムトテ、	此ノ音ヲ聞テ男ニ云ク、 「汝ヲ恐ル、事無レ、我方背ニ乘テ二ノ角ヲ捕ヘヨ。 我レ、汝ヲ負テ陸ニ付ムトテ、	此鹿、この叫ぶ声を聞きて	此鹿、この叫ぶ声を聞きて	此鹿、この叫ぶ声を聞きて	此鹿、この叫ぶ声を聞きて	此鹿、この叫ぶ声を聞きて

20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
我思得其皮作坐褥、欲得其角作拂柄 我昨夜夢見非常之鹿、其毛九種色其角白如雪 答曰、	王問夫人、何故不起 答曰、	其毛九種色其角白如雪 即詐病不起	是時國主夫人、夜於臥中夢見九色鹿 時、國主夫人夜夢見九色鹿	於是潮人受教而去 人食我皮角必來殺我	人食我皮角 必來殺我			且各自去、欲報恩者莫遺我在此 大家作奴供給、使令採取水草、鹿言、不用汝也、 鹿言、不用、且各自去、欲報恩者、莫遺我在此。	我當相負出水、既得着岸 負出上岸。	鹿大疲極
我思、欲得其皮作坐褥、其角作拂柄。 「我昨夜夢見非常之鹿、其毛九種色、其角白如雪、 彼ヲ得テ皮ヲ剥ギ角ヲ取ラムト思フ。	后、國王ニ申シ給 國王、「何ノ故ニ不起サルゾ」ト宣フ。	夢又覺テ後、 其ノ色ノ鹿ヲ得ムト思フニ依テ、后病ニ成テ臥シヌ。	其ノ時ニ、其ノ國ノ后夢ニ見給フ様、大ナル鹿有り、 身ノ色九色也、角ノ色白シ。	男、鹿ノ契ヲ聞テ、泣キク、不可語サル由ヲ返シテ請ケテ別レ去ヌ。 男、本郷ニ還テ月日ヲ送ルト云ヘドモ、此ノ事無シ。	此事ヲ恐ル、ガ故ニ、深キ山ニ隠テ住所ヲ敢テ人ニ不知セヌ。 而ルニ汝ガ叫ブ音ヲ鬚ニ聞テ、哀ミノ心口深クシテ出デ、助ケタル也」ト。	我ガ身ノ色、九色也。世ニ亦無シ。 角ノ白キ事、雪ノ如シ。	鹿ノ云ク、「汝テ何事ヲ以テカ我レニ恩ヲ報ゼム。 只、我レ此ノ山ニ住ムト云フ事ヲ努ム人ニ不可語ズ。	男、命ノ存シヌル事ヲ喜フ、鹿ニ向テ手摺テ泣クミク云ク、「今日、我ガ命ノ生ヌル事ハ、鹿ノ御徳也。何事ヲ以テカ此ノ恩ヲ可報申キヤ」ト。	水ヲ遊テ此男ヲ助ケテ岸ニ上ツ。	かなしみにたへずして、 川を泳ぎ寄りて、此男を助けてけり。
「かゝる夢をなん見つる。この鹿、さだめて世にあるらん。」 大王に申給はく、		夢覺テ、	かゝる程に、國の後、夢に見給はく、大なる鹿あり。身は五色にて角白し。	男「これ、誠にことほり也。さらにもらす事あるまじ」と、返々、契て去りぬ。 もとの里に帰りて月日を送れども、更に人に語り。	この事をおそるゝによりて、かゝる深山にかくれて、あへて人に知られず。 然を、汝が叫ぶ声をかなしみて、身の行多を忘て、助けつるなり」といふ時に、	我身の色、五色なり。	鹿のいはく「何事をもちてか恩をば報はん。たゞの山の山に我ありといふ事を、ゆめく、人に語るべから	男、命の生きぬる事を悦び、手をすりて、鹿にむかひてい、はく、「何事をもちてか、この恩を報ひ奉るべき」といふ。		

<p>26</p> <p>鳥便下樹蹄其頭上、啄其耳言</p>	<p>鳥下啄耳</p>	<p>鹿ノ耳ヲ喰テ引ク時ニ鹿驚キヌ。</p> <p>鳥鹿ニ告テ云ク、「國ノ大王鹿ノ色ヲ用シ給フニ依テ、多ノ軍ヲ引具シテ、此ノ谷ヲ立チ圍マシメ給ヘリ。</p>	<p>耳をくひてひくに、鹿おどろきぬ。</p> <p>鳥告て云、「國の大王、おほくの狩人を具して、此山をとりまきて、すでに殺さんとし給</p>
<p>25</p> <p>鹿故 不覺</p>	<p>鹿故熟眠臥 不覺</p>	<p>九色ノ鹿、敢テ此ノ事ヲ知ル事無クシテ、彼ノ住む峒ニ深く寝入タリ。其ノ時ニ、此ノ心ヲ通スル鳥此ノ御行ヲ見テ、驚キ騒テ鹿ノ許ニ飛ヒ行テ、音ヲ高く鳴テ驚カス。然レドモ鹿敢テ不驚ヌ。鳥木ヨリ下テ查テ、</p>	<p>此鹿、あへて知らず。洞の内にふせり。</p> <p>かの友とする鳥、これを見て大におどろきて、声をあげてなき、</p>
<p>24</p> <p>王聞此言即大歡喜、便語溺人、 汝若能得九色鹿者、我當與汝半國。此言不虛、溺人答王、我能得之、於是溺人面上即生癩瘡、溺人曰王、此鹿雖是畜生大有威神、王宜多出人衆、乃可得耳、王即大出軍衆、往至恒水邊、時鳥在樹頭見王軍來、疑當殺鹿、即呼鹿曰、知識且起、王來取汝</p>	<p>王大歡喜言、 「汝若能得其皮角來者、報之半國」溺人面上即生癩瘡、溺人言、「大王、此鹿雖是畜生、大有威神、王宜多出人兵、乃可得耳」。王即大出人衆、徑到恒水邊鳥在樹頭、見人兵來、即呼鹿言、知識且起、王兵來至。</p>	<p>大王此ノ由ヲ聞キ給テ喜テ宣ハク、 「我レ、軍ヲ引將テ彼ノ山ヘ可行向シ」ト。 即チ多ノ軍ヲ引具シテ、彼ノ山ニ御行シ給フ。 彼ノ男、御輿ニ副ヒテ、道ノ指南ヲ申ス。既ニ其ノ山ニ入給ヒヌ。</p>	<p>大王、大に悦給て、 みづからおほくの狩人を具して、此男をしるべに召し具して、行幸なりぬ。その深山に入給</p>
<p>23</p> <p>於是溺人聞王寡重、心生憂念、我說此鹿可得富貴。鹿是畜生死活何在</p>	<p>溺人聞之、 欲取富貴、念言、「鹿是畜生、死活何在」。 往至王所、言「知鹿處」。</p>	<p>其ノ時ニ、此ノ鹿ニ被助シ男、此ノ官言ノ狀ヲ聞テ、貧欲ノ心ニ不堪スシテ忽ニ鹿ノ恩ヲ忘レヌ。 國王ニ申シテ云ク、 「其ノ、國其ノ山ニ、被求ル、所ノ九色ノ鹿有リ、我レ其ノ所ヲ知レリ。速ニ軍ヲ給ハリテ取テ可奉シ」ト。</p>	<p>内裏に参て申やう、 「尋らるゝ色の鹿は、その国の深山にさぶらぶ。あり所を知れり。狩人を給て、取て参らすべし」と申に、</p>
<p>22</p> <p>王即募於國中、 若有能得、九色鹿者、吾當與其分國而治、即賜金鉢盛滿銀粟</p>	<p>王募國中、 若有能得、當分國而治、賜其金鉢、盛滿銀粟</p>	<p>王、即宣言ヲ下シ給フ、 「若シ然レノ鹿尋テ奉ラム者ニハ、金銀等ノ宝ヲ給、申シ請コトヲ可給シ」ト宣言ヲ被下ヌ</p>	<p>大王、宣言を下して、 「もし五色の鹿、尋て奉らん物には、金銀、珠玉等の宝、并に一國等をたぶべし」と仰ふれらるゝに、 此助けられたる男、</p>
<p>21</p> <p>王當爲我覓之、王若不得者我便死矣 王告夫人、汝可且起、我爲一國之主何所不得</p>	<p>王當爲我得之。王若不得、我將死矣。</p>	<p>大王必ズ彼ヲ尋取テ我ニ与ヘ給ヘ」ト。</p>	<p>大王、必ず尋とりて、我に与へ給へ」と申給に、</p>

<p>34 鹿蘭王言 眼中涙出不能自止</p>	<p>33 車邊癩面人は 鹿即仰頭、視此人面、</p>	<p>32 王便指示 車邊癩面人「是也」</p>	<p>31 王言、誰道我在此耶 王言「誰道我在此」。</p>	<p>30 鹿重語大王言、且莫殺我。我有大恩在於王國、王語鹿言、汝有何恩、鹿言、我前活王國中一人、鹿即長跪重問 鹿言「大王且莫射我。我前活王國中一人、鹿復長跪問」</p>	<p>29 鹿語王人、且莫射我、自至王所欲有所 「莫射、此鹿、非常、將是天神」。</p>	<p>28 見王軍衆、已遠百匝無復走地、即趣王車前、時王軍人即便挽弓欲射 無復走地、便往趣王車邊傍。 臣欲射、王曰</p>	<p>27 知識且起王軍去矣 鹿方驚起便四向顧視 鹿方驚覺、四向顧望</p>
<p>眼中涙出、不能自勝</p>	<p>鹿即仰頭、視此人面、</p>	<p>王便指示、</p>	<p>王言「誰道我在此」。</p>	<p>鹿言「大王且莫射我。我前活王國中一人、鹿復長跪問」</p>	<p>「莫射、此鹿、非常、將是天神」。</p>	<p>無復走地、便往趣王車邊傍。 臣欲射、王曰</p>	<p>鹿方驚覺、四向顧望</p>
<p>鹿、彼ノ男ニ向テ云ク、「汝ガ命ヲ助ケシ時、其ノ恩ヲ喜ビテ、人ニ不可告サル由ヲ返ミス契リシ者也」</p>	<p>鹿、王ノ仰セラ聞テ、御輿ノ喬ニ有ル男ヲ見遣ルニ、面ニ疵有り、我ガ助ケシ人也。</p>	<p>「我レ年来鹿ノ栖ヲ不知ス」</p>	<p>大王何ニシテ我ガ栖ヲ知り給ヘルゾト。大王ノ宣ハク、</p>	<p>其ノ時ニ軍共、箭ヲハツシテ見ル。鹿、大王ノ御輿ノ前ニ跪テ申サク、</p>	<p>「汝達暫ク此ノ鹿ヲ射事無カレ。鹿ノ跡ヲ見ルニ只ノ鹿ニ非ズ。軍ニ不恐スシテ我ガ輿ノ前ニ来レリ。暫ク任セテ彼レガ為ム様ヲ可見シト」。</p>	<p>今ハ逃ケ給ト云フトモ、命ヲ存シ可給キニ非ズト告テ、鳴テ飛ヒ去ヌ。鹿驚テ見ルニ、</p>	<p>今ハ逃ケ給ト云フトモ、命ヲ存シ可給キニ非ズト告テ、鳴テ飛ヒ去ヌ。鹿驚テ見ルニ、</p>
<p>鹿、かれに向ていふやう、「命を助たりし時、此恩、何にても報じつくしがたきよしひしかば、こゝに我あるよし、人に語るべからざるよし、返り契りし処也」</p>	<p>鹿見るに、顔にあざありて、御輿傍に居たり。我助けたりし男なり。</p>	<p>「此輿のそばにある、顔にあざのある男、告申たるによりて来れる也」。</p>	<p>しかるに大王、いかにして我住所をば知り給へるぞや」と申に、大王の給</p>	<p>その時、狩人ども矢をはつして見るに、御輿の前にひざまづきて申さく、</p>	<p>「鹿、おそろゝ事なくして来れり。さためてやうあるらん。射事なかれ」と。</p>	<p>いまは逃べき方なし。いかんすべきと云て、泣く去りぬ。</p>	<p>鹿、おそろきて</p>

<p>40</p> <p>佛言、爾時九色鹿者我身是也。爾時鳥者今阿難是。時國王者今悅頭檀是。時王夫人者今孫陀利是。時溺人者今調達是。調達與我世世有怨。我雖有善意向之。而故欲害我。阿難有至意。得成無上道。菩薩行屬提波羅蜜。忍辱如是。</p>	<p>39</p>	<p>38</p> <p>於是衆鹿數千爲群皆來依附。飲食水草不侵禾稼。風雨時節五穀豐熟。人無疾病災害不生。其世太平運命化去。</p>	<p>37</p> <p>汝受人重恩云何反欲殺之。於是大王即下令於國中。自今已往若驅逐此鹿者。吾當誅其五族。</p>	<p>36</p> <p>王聞鹿言甚大慙愧。責數其民語言。</p>	<p>35</p> <p>鹿聞王言。眼中淚出不能自止。鹿言。大王。此人前日溺深水中。隨流來下或出或沒。得着樹木仰頭呼天。山神樹神諸天龍神何不救傷於我。我於爾時不惜身命。自投水中負此人出本要不相道。人無反復。不如負水中浮木。</p>
<p>時。九色鹿。我身是他。鳥者。阿難是也。國王者。今父王悅頭檀是也。時王夫人者。今孫陀利是也。時溺人者。調達是也。我雖有善心向之。故欲害我。難有至意。</p>	<p>時。九色鹿。我身是他。鳥者。阿難是也。國王者。今父王悅頭檀是也。時王夫人者。今孫陀利是也。時溺人者。調達是也。我雖有善心向之。故欲害我。難有至意。</p>	<p>鹿數千皆來依附。飲食水草。不侵禾稼。風雨時節。五穀豐熟。人無疾病。其世太平。</p>	<p>反欲殺之。即下敕國中。若有驅逐此鹿者。當誅五族衆。</p>	<p>王有愧色。汝受其恩。奈何。</p>	<p>此人不溺在水中。我不惜身命。自投水中。負此人出。約不相導。人無反復。不如出水中浮木也。</p>
<p>其ノ後、 國二雨、時二隨テ降り、荒キ風不吹ズ。國ノ内ニ病ヒ無ク、五穀豊饒ニシテ、貧シキ人無カリケリ。 然レバ、恩ヲ忘ル、ハ人ノ中ニ有リ。人ヲ助クルハ獸ノ中ニ有リ。此レ今モ昔モ有ル事也。 彼ノ九色ノ鹿ハ、今ノ釈迦仏ニ在マス。心ヲ通ゼシ鳥ハ、阿難也。后ト云ハ、今ノ孫陀利也。水ニ溺レタリシ男ハ、今ノ提婆達多也トナムト語り伝ヘタルトヤ。</p>	<p>其ノ時ニ、大王ノ宣ク、</p>	<p>其ノ後、 國二雨、時二隨テ降り、荒キ風不吹ズ。國ノ内ニ病ヒ無ク、五穀豊饒ニシテ、貧シキ人無カリケリ。</p>	<p>「今日ヨリ後、國ノ内ニ鹿ヲ殺ス事無カレ。若シ此ノ宣旨ヲ背テ鹿ニテモ殺セル者有ラバ、其ノ人ヲ殺シ家ヲ可亡シ」ト宣ヒテ、軍ヲ引テ宮ニ還リ給ヌ。鹿モ喜テ還ヌ。</p>	<p>我レ命ヲ不顧ズシテ遊ギ出テ、陸ニ至ル事ヲ令得ヌテキ。其レニ、恩ヲ不知ザル事ハ、此レ無限キ恨ミ也」ト云テ、涙ヲ流シテ泣ク事無限シ。 此ノ男、鹿ノ言ヲ聞テ更ニ答ル方無シ。</p>	<p>而ルニ其ノ恩ヲ忘レテ、今大王ニ申シテ我レヲ殺サスル心何ゾ。水ニ溺レテ死ナムト爲シ時 我レ命ヲ不顧ズシテ遊ギ出テ、陸ニ至ル事ヲ令得ヌテキ。其レニ、恩ヲ不知ザル事ハ、此レ無限キ恨ミ也」ト云テ、涙ヲ流シテ泣ク事無限シ。 此ノ男、鹿ノ言ヲ聞テ更ニ答ル方無シ。</p>
<p>然に今、其恩を忘て、殺させ奉らんとす。かに汝、水におぼれて死なんとせし時、我命を顧ず、泳ぎ寄りて助し時、汝かぎりなく悦し事はおほえずや」と、深く恨たる気色にて、泪をたれて泣く。</p>	<p>其時に、大王同じく泪をながしてのたまはく、「汝は畜生なれども、慈悲をもて人を助く。彼男は欲にふけりて恩を忘たり。畜生といふべし。恩を知るをもて人倫とす」とて、此男をとらへて、鹿の見る前にて、首を斬らせらる。</p>	<p>天下安全に、国十ゆたかなりけりしぞ。</p>	<p>又のたまはく、今より後、国の中に鹿を狩事なかれ。もし此宣旨をそむきて、鹿の一頭にても殺す物あらば、速に死罪に行はるべし」とて帰給ぬ。 其後より、</p>	<p>其時に、大王同じく泪をながしてのたまはく、「汝は畜生なれども、慈悲をもて人を助く。彼男は欲にふけりて恩を忘たり。畜生といふべし。恩を知るをもて人倫とす」とて、此男をとらへて、鹿の見る前にて、首を斬らせらる。</p>	<p>然に今、其恩を忘て、殺させ奉らんとす。かに汝、水におぼれて死なんとせし時、我命を顧ず、泳ぎ寄りて助し時、汝かぎりなく悦し事はおほえずや」と、深く恨たる気色にて、泪をたれて泣く。</p>

《補注 4-2》 【表 2】の②番事例、朴英晩『朝鮮伝来童話集』学芸社、一九四〇年、翻訳金恩愛)

「老人と養子と鹿と蛇」

昔、ある所にとつても心の優しい老人が一人住んでいた。その老人は、特に動物をかわいがる人だった。

ある日、老人が川辺に行くと、川の上流のところ到大雨があたりらしく、家が流れてきて、木も流れてきた。その中で一頭の鹿が、足をしきりにもがきながら流れてくるのが見えた。優しい老人は急いで小舟を漕ぎ出して行き、鹿を救いあげた。ちょうどその時、また蛇一匹が、とても苦しそうに流れてきたので、蛇も救いあげて、小舟に乗せて川辺に運んだ。さらに今度は、男の子が川に溺れて流れて来るのが見えた。心の優しい老人は、この男の子も救いあげて、小舟に乗せて川辺まで運んであげた。

鹿と蛇は大変ありがたそうに、鹿は涙を流しながら、ぺこんと頭を下げて感謝の礼をして、蛇は老人の体を巻いたりほどいたりした。蛇と鹿はそれぞれどこかに行った。その後、男の子は老人が養子として育てることにした。

ある日、その優しい老人と養子が一緒に中庭で仕事をしていると、川で救ってあげた鹿が現れ、老人の袖を引っ張るので、「何かあるのかい」と思いながら鹿を追いかけ行くと、鹿は山の中にある岩を指しながら、前脚で、土を掘るふりをした。鹿は何度も何度も老人の顔を見ながら土を掘れというふうに誘うのであった。老人が変だと思つて岩をあげてみると、穴があつてそこには大きな壺が二つあった。ふたをあけてみると、ああ、これは……。その壺には、黄金がいっぱい入つていた。老人が鹿に振り向いてみると、鹿は、

「お爺さんが私の命を助けてくれた恩は、なにをもつて報いることができるでしょうか。小さなことですが、その恩返しとして差し上げたいと思ひます」

と言つた。老人はその金を家に持ち帰り、豊かに生活していた。ところが養子はだんだんと意地悪な子になつていき、お酒に酔つて来て老人に向かつて悪口ばかり言つてから

「父親（老人）とは一緒に住みたくないから、財産を分けてくれ」

と話した。仕方なく老人は財産の半分を分けてあげた。老人の家を出ていった養子は、一年たらずのうちに分けてもらった財産をみんなつかい果たし、また老人のところへやつてきて、財産を要求した。老人は、養子の話を聞いて怒つて叱つた。すると、養子は

「父は、他人の家から、お金をずいぶん盗んできました」



と官家に訴えた。老人は牢屋に入れられ、むちで叩かれ、体が傷だらけになった。くたびれた老人が牢屋の中で横になっていると、突然前に救いあげた蛇が現れ、老人の腕を咬んだ。すると、老人の腕は次第に腫れ上がり、痛みもひどくなった。老人は、

「あの蛇は、恩も知らず、わたしをこんな目に合わせ、殺そうとするのか」

と、考えながら悲しくて泣いていた。すると、その蛇が現れた。今度は桃の木の葉っぱを二・三枚持ってきて、その葉っぱで老人の痛い腕をこすってあげると、腕はたちまちなおった。蛇は他に二枚の葉っぱを老人の前に置いたまま、姿を消した。ちょうどこのとき、牢屋の前に大勢の人が集まって騒いでいるので、老人が通りかかった人に、

「どうしてこんなに大騒ぎをするのでしょうか」

と、その訳を聞いてみると、

「王様の母親が蛇に咬まれましたが、百薬が無効で、いまにも死にそうになっているのだ。もしこの病気を治せた者には、たくさんの褒美を与え、高い位も授けるといふ布告が今立てられたのだ」

と言った。老人は、やっと蛇が自分にやったことが何を意味しているのかに気がついた。それで老人は、その病気が私が治せるから、私を王様の前につれて行ってくださいと訴えた。

「治せるなら、つれていってやる」

と言った。

優しい老人は、牢屋に入れられ時、蛇が置いた桃の木の葉っぱをもって、王様の母親の腫れ上がった部分に当ててゆつくりとこすった。すると、傷跡は次第にもと通りにもどり、痛みもおさまった。王様は大変よろこんで、老人にお礼を言った。そしてこんな立派な老人がどうして牢屋に入れられたのかそのわけを詳しく聞いた。老人がそのままを話すと、王様はたちまちその意地悪い養子をつまえるよう命令を下し、老人は釈放された。そして、老人は一生、幸せに暮らした。

《補注 4-3》 【表 2】の⑩番事例、『韓国口碑文学大系 8・3 慶尚南道晋州市』翻訳金恩愛)

「獣は救っても、人は救うな」

ある人が船頭をしていたが、その年は雨がたくさん降って川の水が多くなつたようだ。その時、船頭が舟で渡る時、大蛇一匹と鹿一匹、また一つは思い出せないが、そのように三匹が流れてくるのを助けてやった。

助けてやると、みんな消え去つた。一〇年か二〇年くらいが経つたある日、鹿一匹が現れた。あの時、助けやつた鹿かどうかは知らないが、鹿が来て何か、船頭について来いという行動を見せた。

「君について来いというのかい？」

と言うと、そうだというように首をこつくりとうなづくのであつた。それで鹿について行つた。どれくらい歩いたか、鹿が足で土を掘るような行動をした。まるで、船頭ここに掘ってみてくださいと言っているようにみえた。それで、船頭が掘ってみると、昔、誰かがお金をここにたくさん埋めて置いたのか知らないが、壺の中にお金がたくさん入つていた。たくさん。それで、それを掘り出してから家に持つてきて、船頭は金持ちになつた。そうだ、先ほど川で流れてきたのは男の子だ。船頭は川から助けてきた男の子を自分の家で育てていた。

親もいないようだったので、大人になるまで育て、勉強もさせて、今は嫁も迎えたそうだ。そこまで育ててあげたのに、この奴、どうするかと言うと、お金をくれと責めるのであつた。育ててあげた恩も忘れて、自分の本当の親でもないのに何度も何度もお金を要求した。それで、船頭は自分の子ではなかつたが、お金をあげたそうだ。しかし、どんどん船頭も苦しくなつてきたので、これ以上金は無理だと言つたそうだ。すると、この奴はどうするかと言うと、官庁に言つて、自分のお父さんが人のものを盗んで金持ちになつたと訴えた。そうしなくてもその人が、突然金持ちになつたので怪しいと思つていたのに、息子が訴えたということだ。それで、その人を捕まえた。捕まえて取り調べを始めた。そして、大きな罪を犯したと判決されて、船頭は牢屋に入れられた。

その時、死刑まではいかなかつたようだ。牢屋に入れられていると、ある日、天井から何かがどんと落ちてきた。見てみると、一匹の大蛇であつた。その大蛇は、船頭の脚を咬んだ後、天井に逃げ去つた。すると、脚がひどく腫れ上がつてきた。しばらくいると、上から何か葉っぱが落ちた。それで、葉っぱを脚の傷口にあてておいた。すると、すぐに怪我が治つた。

大蛇がどこに行つたかというのと、その官長の息子に行つてその息子を咬んでしまった。官長の息子の脚が、先ほどの船頭のように腫れ上がつてきたので官庁は大騒ぎになつた。そういう噂を船頭も聞いた。官庁の息子が大蛇に咬まれて、もう死にそうになつたと。

それで、牢屋に入れられた船頭は言つた。

「その人、私に見せてください。私に治せる方法がありますから、見せてください」

「治せる方法が本当にあるかい？」

と言った。

「治せてあげたらいいでしょう。だから、私に見せてください」

それで（官長の息子のところに）行った。行ってから、その木の葉っぱを傷口にあてた。すると、傷がすぐ治った。それで、船頭は冤罪が晴れた。そんな話があったのさ。

「話が終わった後、語り手は「獣は救うものの、人は救うな」という意味で、そういう話があったそうだと、自分の考えを付け加えた」。

（晋州市寺奉面採録）

《補注4-4》 【表2】の⑩番事例、『韓国口碑文学大系5-7 全羅北道井州市』翻訳金恩愛）

「鹿の恩返し」

二人の老人が住んでいた。おじいさんは船頭であったが、ある日、船の船頭をしていると鹿が来てこくりこくりとした。

「どうした」すると、また頭をこくりとした。

「渡してほしいのかい？」

「そうです」

と言った、それで渡してあげた。鹿を。そして、少し時間が経つと、また大きな大蛇が来て話した。それで、「どうした？」と聞いたら、舌をちよろちよろしたので、船に乗せて、渡してあげた。そう、二人の老人が住んでいたが、子供がいなかったので一人の息子を拾って育ったそうだ。その子を育てていたが、ある日、いうことを聞かないので叩いたところ、国へ訴えに行った。そう、人を育ててあげても、恩返しどころか、そのようなことが返ってくるということだ。しかし、獣は違う。ある日鹿が首をこくりこくりしたので、そこに行ってみると、ここを掘れと言った。それで土地を掘ってみると、このくらの箱にお金がたくさんあったようだ。これはどういことかと聞くと、箱を指しながら首をこくりした後、そのまま去ったようだ。

そのようにして恩返ししたということだ。その鹿が。そして、そう、国に訴えたため、あの奴が国に訴えたためおじいさんは捕まえられてしまった。その後、小さな部屋に閉じ込められていたが、ある日、国王の后が蛇に噛まれたのに、いろんな薬を使っても効かないということだ。

「ああ、どうして、こんなことが起きたのか」

と門番が言った。その時、お爺さんが、

「私が見てみたいですが…」

と頼んだ。しかし門番は、

「あなたに何が分かるって言うんだい」と言った。

「ああ、それでもないですから」

と、(お爺さんは) また頼んだ。

しかし、アリが来て何か葉っぱをあげたようだ。そのおじいさんに。それでその葉っぱをしっかりと握っていた。その後、ヘビに噛まれた部位につけたところ、すぐ治った。すると、(国王はお爺さんに) 財物を与えたそうだ。

そのような獣も恩返しをするのに、人間は恩返しどころか、そのような災いが返ってくるということだ。

そういう話だ。ロバは財産を増やしてくれて、嫁も作ってくれたのでお爺さんは豊かに暮らしたそうだ。(井州市井邑採録)

第五章補注 《補注5・1》 『宇治拾遺』第八五話「留志長者」と類話の本文比較対照表

<p>『法苑珠林』「盧至長者因緣經」</p>	<p>『今昔物語』「盧至長者語」</p>	<p>『宇治拾遺』「留志長者事」</p>	<p>『古本説話集』「留志長者事」</p>
<p>1 昔仏在世時、舍衛城中有一長者、</p>	<p>今昔 天竺ニ一人ノ長者有り。</p>	<p>今は昔、天竺ニ、</p>	<p>今は昔、</p>
<p>2 名曰盧至。</p>	<p>盧至ト云フ。</p>	<p>留志長者トて、世にたのしき長者ありけり</p>	<p>留志長者トて、世にたのしき長者ありけり。</p>
<p>3 其家巨富、財産無量、如毘沙門。由於往昔施勝福田、故獲斯報。</p>	<p>大方、蔵もいくらともな、持ち、たのしきが、</p>	<p>大方、蔵もいくらともなく持ち、樂しなどは、この世ならずめでたきが、</p>	<p>大方、倉もいくらともなく持ち、樂しなどは、この世ならずめでたきが、</p>
<p>4 然其施時不能忘心、故今雖貧、意長下劣、所著衣裳、垢弊不淨、食則糠菜、以充其飢、渴唯飲水、行乘朽車、勤營家業、猶如奴僕、常為世人之所嗤笑。</p>	<p>慳貪ノ心深クシテ、妻ノ眷屬ノ為メニ物ヲ吝ム事無限シ。</p>	<p>心のくちおしくて、妻子にも、まして従者にも、物食はせ、着する事なし。</p>	<p>心の口惜しくて、妻にも、子にも、まして使ふ者などには、いかのも物食はせ、着することなし。</p>
<p>5 後於一時、城中人民大作節會、莊嚴宮宅、懸繪幡蓋、香水灑地、散衆名華、種種嚴麗、伎樂歌舞、歡娛受樂、猶若語天。盧至見已、便生念、彼既歡會、我亦當爾、即疾歸家、自開庫藏、取得五錢、得自己思念、若在家中、母妻眷屬、不可周備、若至他舍、恐妻主所奪。</p>	<p>おのれ、物のほしければ、人にも見せず、隠して食ふ程に、物のあかす多くほしかりければ、妻にいふやう、</p>	<p>己れ、物の欲しければ、たゞ人にも見せず、盗まはれて食ふ程に、物の飽かず多く欲しかりければ、妻に言ふ。</p>	<p>己れ、物の欲しければ、たゞ人にも見せず、盗まはれて食ふ程に、物の飽かず多く欲しかりければ、妻に言ふ。</p>
<p>6</p>	<p>「飯、酒、くだ物どもなど、おほらかにしてたべ。我につきて物借しまする慳貪の神まつらん」といへば、</p>	<p>「果物、御物、酒、合はせどもなど、おほらかにしてくれよ。我に憑きたる物借しまする慳貪の神、祀らん」と言へば</p>	<p>「果物、御物、酒、合はせどもなど、おほらかにしてくれよ。我に憑きたる物借しまする慳貪の神、祀らん」と言へば</p>
<p>7</p>	<p>「物惜しむ心、うしなはんとする。よき事」と喜びて、色くくに調じて、おほらかに取らせければ、うけとりて、「人も見ざらん所に行て、よく食はん」と思て、</p>	<p>「物惜しむ心失はん」と思ひてし立つ。まことに「人も見候はざらん所に行きて、よく食はん」と思て、虚言をするなりけり。</p>	<p>「物惜しむ心失はん」と思ひてし立つ。まことに「人も見候はざらん所に行きて、よく食はん」と思て、虚言をするなりけり。</p>
<p>8 於是即用兩錢買糖、兩錢酤酒、一錢買葱、從內家中、取鹽一把、衣袴裏へ、</p>	<p>外居に入れ、瓶子に酒入などして持ちて出ぬ</p>	<p>さて、取り集めて、行器に入れ、瓶子に酒入れなどして、荷いて出ぬ。</p>	<p>さて、取り集めて、行器に入れ、瓶子に酒入れなどして、荷いて出ぬ。</p>

<p>9 齋出城外、趣一樹下、既至樹下、見多象馬、恐來搏撮、即詣塚間、復見諸狗、尋更逃避、至无靜處、酒中著鹽、和麩食之、時復嘔噦、先不飲酒、即時大醉、醉已起舞、揚聲而歌。 辭曰：</p>	<p>只独り人無クシテ静ナル所ニ行テ、心ノ如ク飲食セムト思フニ、鳥獸自然ラ此レヲ見テ来ル。人モ無ク鳥獸モ不来又所尋ネ得テ飲食ス。歎樂無限クシテ歌舞シテ云ク、</p>	<p>「此木のもとには鳥あり」「かしこには雀あり」など選りて人離れたる山の中の木の陰に、鳥獸もなき所に、ひとり食むたる心のたのしきさ、物にも似ずして、誦するやう、</p>	<p>人離れたる山中の木の下に、鳥、げた物もなく、食ふべき物もなきに、食ひいたる、楽しく心地よくて、誦する事、</p>
<p>10 「我今節慶會、縱酒大歡樂、逾過毘沙門、亦勝天帝釋」 時值帝釋與諸天衆欲佛所、遇見盧至醉舞而歌、</p>	<p>「我今節慶際、縱酒大歡樂、踰過毘沙門、亦勝天帝釈ト誦シテ、</p>	<p>「今曠野中、食飯飲酒大安樂、猶過毘沙門天、勝天帝尺」。此心は、</p>	<p>「今日曠野中、飲酒大安樂、猶過毘沙門、亦勝天帝釈」</p>
<p>11 言勝帝釋、帝釋默念・此慳貪人屏處飲酒、罵辱於我、我常惱之。即變己身作盧至形、往到其家、</p>	<p>瓶ヲ蹴テ舞ヒ喜ブ事無限シ。其ノ時ニ天帝釈、仏ノ御許ヘ詣リ給フニ、此ノ長者ノ如此ク嘲ケル声ヲ聞給テ忿ヲ成シテ、盧至ヲ罰セムガ為ニ、忽ニ變シテ、盧至ガ形ト成テ盧至ガ家ニ至テ、</p>	<p>「今日、人なき所に一人あて、物を食ひ、酒を飲む。安樂なる事、毘沙門、帝尺にもまさりたり」といひけるを、帝尺、きと御覽してけり。</p>	<p>この心は、今日、人なき所に一人あて、よき物を多く食ふこそ、毘沙門にも天帝釈にも勝りたれ、と申を、帝尺、きと御覽してけり。</p>
<p>12 聚集母妻奴婢眷屬、於母前坐、而白母言・我於前後、有大慳鬼、隨逐於我、使我慳惜、不著不啗、不與眷屬、皆由慳鬼、今日出行、值一道人、與我好呪、得除慳鬼、</p>	<p>自ラ庫倉ヲ開テ財宝ヲ悉ク取出テ、十方ノ人ヲ喚テ与フ。家ノ妻子・眷屬、奇異也ト思フ程ニ、実ノ盧至来テ門ヲ扣ク。</p>	<p>「我、山にて、物惜しむ神をまつりたるしるしにや。その神離れて、物の惜しからねば、かくするぞ」と</p>	<p>「我が、山にて、物惜しむ神を祀りたる故に、その神離れて、物の惜しからねば、するぞ」とて、</p>
<p>13 然此慳鬼與我相似。彼若來者、當好打棒、其必詐稱我是盧至。一切家人莫信其語、急當閉門。</p>	<p>蔵どもをあげさせて、妻子を初めて、從者ども、それならぬよその人共、修行者、乞食にいたるまで、宝物どもを取り出して、配り取らせれば、みなく、悦び、分とりける程にぞ、まことの長者は帰たる。</p>	<p>倉どもをこそと開かせ給て、妻子ども、親從者どもをはじめとして、知る知らぬなく、財物どもを取り出して配らせ給時に、喜び合ひて給はる程にぞ、まことの長者は帰りたる。</p>	<p>倉どもをこそと開かせ給て、妻子ども、親從者どもをはじめとして、知る知らぬなく、財物どもを取り出して配らせ給時に、喜び合ひて給はる程にぞ、まことの長者は帰りたる。</p>
<p>14 慳鬼儻來、待我所作、然後閉門。即作好食、令家充飽。復開庫藏、出諸財寶衣服瓔珞、賜與母妻居家眷屬、及施餘人。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>
<p>15 聞歌舞聲、極大驚愕。打門叫喚、都無聞者。帝釋聞喚聲、語衆人言・打門喚者、或是慳鬼、人聞慳鬼、開門走避。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>
<p>16 聞歌舞聲、極大驚愕。打門叫喚、都無聞者。帝釋聞喚聲、語衆人言・打門喚者、或是慳鬼、人聞慳鬼、開門走避。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>	<p>聞盧至慳鬼得除、皆來觀看、盧至酒醒、歸家到門。</p>

<p>22</p> <p>我欲身王、并願貸我二張白氈、可使直於四鉢金計、當用上王。諸人皆笑言：「盧至今乃是大施主。挾一氈氈、到於王門、語守門人：為我通王、我欲貢獻。門人驚笑：即入白王。」</p>	<p>21</p> <p>爾時、諸人聞是語已、皆悉同心、咸言：盧至、汝今云何欲何所為盧至云、願為我證。</p>	<p>20</p> <p>即語眾人言：汝等若能為作證不眾人皆言：我為汝證、實是盧至。盧至答言：汝等至吾言：汝等若爾、聽說因緣：</p>	<p>19</p> <p>收淚而言：諸人我更看我面我實是盧至以不人貸答言：汝於今者實是盧至。</p>	<p>18</p> <p>盧至爾時如似顛狂、傍人親里咸來慰喻：汝是盧至、我是汝親、故來看汝、汝好強意、當作方計、用自分明。盧至爾時間是語已、意用小安。</p>	<p>17</p> <p>盧至得人、居家眷屬悉皆不認、言是癡鬼、即便捉脚、倒曳打棒、驅令出門。到巷大哭、唱言：怪哉！我今身形為異於本、為不異本何故家人見棄如是、言我是鬼、都不見認。我於今者知何所道。</p>
<p>又國王二此ノ事ヲ申スニ、國王二人ノ盧至ヲ召テ見給フニ、同ジ形ノ盧至一人有リ。 更ニ実否ヲ不知ズ。カ、レバ國王、実否を知らムガ為、二人ノ盧至ヲ具シテ仏ノ御許ニ詣ゾ。</p>			<p>妻子有テ、帝釈ノ變ジ給ヘル盧至ヲ指テ、「此レ実ノ盧至也」ト云フ。</p>	<p>此ニ依テ証人ヲ判ゼシムルニ、証判ノ者、盧至ガ妻子ニ向テ二人ノ実否ヲ問フ。</p>	<p>家ノ人出テ此ヲ見ルニ、又同ジ形ナル盧至來レリ。「此變化ノ者也」ト云テ打追フ時ニ、「我レハ此レ実ノ盧至也」と云フ。雖然、人何レヲ実ノ盧至ト云フ事ヲ知ズ。</p>
			<p>「あれは變化の物ぞ。我こそ、そよ」といへども、聞きいるゝ人なし。</p>		<p>室どもみな人の取りあひたる、あさましく、かなしき、いはん方なし。 「いかにかくはするぞ」とのゝしれども、我とたゞ同じ形の人出来てかくすれば、不思議なる事がぎりなし。</p>
			<p>「これはあらず。我ぞそれ」と言へど、聞きいるゝ人もなし。</p>		<p>人の取りあひたるに、あさましく、悲しく、我とたゞ同じ形にせさせ給に、</p>

26	25	24	23
<p>王不能別。王喚母問。母語王言：此是我兒。彼非我子、是慳鬼也。王復問母：頗見身上瘡癩黑子私密之事、可識以不</p>	<p>王謂後者是其盧至、語前者言：汝今復欲何所論道。盧至答言：我是盧至、彼非盧至。王問語者：盧至慳貪、汝好惠施、云何稱言是盧至耶。即答之王言：我聞佛說、慳貪之者、墮餓鬼中、百千萬歲、受飢渴苦、畏怖因緣、故捨慳貪。王言：實爾。如似垢衣、灰洗即淨。煩惱垢心、聞法即除。王見是已、即別二人置於異處、各遣條牒、親屬頭數、種種財物、速書將來。二人持盡隱密之事、及以書迹、悉皆相似。</p>	<p>既得出已、帝釋即化作兩束草。盧至見草、慳愧坐地、悲噓歔歔、不能得言。王見慈愍、而語之言：縱令是草、亦無所苦。欲有所說、隨汝意道。盧至悲噓向王說言：我見此草、羞慳極盛。不能以身陷入於地。不知今者為有此身、</p>	<p>王聞念言：盧至慳吝、將不死到、卒能如是。王即喚入。既到王前、以手挽髮、用奉於王。其腋急挾、挽不能得、便自迴身、盡力痛挽、方乃得出。</p>
<p>御門に愁へ申せば、「母に問へ」と仰せらる。母に問へば、「物人に嗚ふこそ、我子にて候らめ」と申せば、する方なし。</p>			



34	33	32	31	30	29	28	27
	<p>虛至語言・我不信釋 唯信佛語 以信佛故 即更得須陀洹果 時天龍八部及以四衆 凡聞是已 得四道果 有種三乘因縁 一</p>	<p>佛語虛至・汝還歸家 看汝財物 虛至曰佛・所有財物 帝釋用盡 歸家何為 帝釋語言・我不損汝一毫財寶物。</p>	<p>佛語帝釋・一切衆生皆有罪過 宜應放捨 化身還復釋形而白佛言・此人慳貪 不自衣食 五錢酒麴 著鹽和飲 酒醉歌舞 輕罵諸天 故我惱之 佛語帝釋・一切衆生皆有罪過 宜應放捨</p>	<p>帝釋即滅虛至身相 還復本形 種種光明 合掌向佛而說 偈言・ 「常為慳所使 不肯自衣食 以五錢酒麴 著鹽飲之 飲已即大醉 戲笑而歌舞 輕罵我諸天 以是因縁故 我故苦惱之。」</p>	<p>王見大笑 怪未曾有 深自對責・一切衆生愚暗所覆 不別真偽 如此之輩 唯佛能了 即以二人置於象上 共至佛所 請決所疑 爾時世尊舉相好臂莊嚴之手 語帝釋言・汝作何事</p>	<p>王遣脫衣高舉臂看 見兩瘡癩大小相似。</p>	<p>母答王言・兒左脅下有小瘡癩 猶小豆許。</p>
	<p>仏虛至長者ヲ勸メ誘ヘ給テ、為ニ法ヲ説給フ。 長者、法ヲ聞テ道ヲ得テ歡喜シケリトナム語 リ伝ヘタルトヤ。</p>			<p>其ノ時ニ、帝釈本形ニ復シテ、虛至長者方過 ヲ申シ給フ。</p>			
<p>その時、帝尺、もとの姿に成て、御前におはしませば、「論じ申べき方なし」と思ふ程に、</p>	<p>仏の御力にて、やがて須陀洹果を証したれば、悪き心離れたれば、悪き心離れたれば、物惜しむ心も失せぬ。</p>			<p>二人ながら、おなじやうに、物のあとあれば、力なくて、仏の御もとに、二人ながら参りたれば、</p>	<p>あけて見れば、帝尺、それをまなばせ給はざらんは、</p>	<p>「腰の程に、はわくひといふものあとぞ候ひし。それをしるしに御覽せよ」といふに、</p>	
<p>かやうに、帝尺は人をみちびかせ給事、はかりなし。そのろに、長者が財を失はんとは、なにしにおぼしめさん。 慳貪の業によりて、地獄に落すべきを、あはれませ給御心ざしによりて、かく構へさせ給けるこそ目出けれ。</p>	<p>「悲し」と思へれど、須陀洹果とて、人の永く悪しき所を離るゝはじめたる果 証しつれば、物惜しむ心も失せぬ。</p>		<p>帝釈、元の形になりて、御所におはしませば、論じ参らすべき方なし。</p>	<p>二人ながら物の跡もあれば、術なくて、仏の御許もとに二人ながら参りたれば、</p>	<p>あけて見るに、帝釈、落させ給はんやは。あけて見るに、帝尺、落させ給はんやは。</p>	<p>腰のもとに、黒子と物の跡ぞ候し、それを御覽せよ」と申たれば、</p>	

《補注5・2》 『壅固執伝』の構成

『壅固執伝』から事項を取り出すと、次のような結果が得られる。まず少し長いが、丹念に事項を取り出して見たい。なお、文頭の番号は、取り出した事項の番号である。

(ほんものの壅座首は、壅座首と、ハク大師が作った壅座首は、にせものの壅座首とする)

1 壅堂村に長者がいた。

長者の名を壅固執(オン・ユジツプ)と言った。

壅固執の性格は悪く、頑固であった。

壅固執は金持ちであった。

5 家の豊かさは、石崇や陶朱公の及ばないほどであった。

前庭には、稲藁を積んでいた。

裏庭には、蜂箱を置いていた。

(裏庭には) 梧桐の木を植え、東屋を建てていた。

(裏庭には) 池を作り、東屋を建てていた。

10 (裏庭の東屋には) 風鈴が鳴り、池には金魚が泳いでいた。

東庭には、牡丹の花が咲き、躑躅(つつじ)の花は満開である。

西庭には、桜花が咲き、さつきは満開で、池に映っている。

梅と桜が満開となり、庭を彩っている。

(建物の) 板の間と欄干、窓の戸(などはすばらしく)、取手は色彩鮮やかである。

15 娘は縫い物をし、嫁は糸繰りをする。

母親は看病してもらえず、虐待されている。

母親は歌で壅固執の親不孝を嘆いた。

壅固執は（長生きする）母親に口ごたえした。

**壅固執は仏教を侮り、僧を迫害した。**

20 僧たちは固執を（嫌って）遠ざけていた。

月出峰の翠庵寺にひとりの大師がいた。

大師はすぐれた術法を持っていた。

大師はハク大師に、壅座首をこらしめるように命じる。

ハク大師は村に行き、壅座首の家に着いた。

25 ハク大師は壅座首に布施を求める。

召使の婆はハク大師に、壅座首が僧を迫害すると警告する。

老僧は再び（壅座首に）布施を求める。

下僕が老僧の布施の要請を壅座首に伝える。

壅座首は（老僧の布施を）激怒する。

30 老僧は更に（壅座首に）布施を求める。

壅座首は（老僧の布施を）断わる。

壅座首は老僧に観相を求める。

老僧は壅座首の不幸を予言する。

壅座首は老僧を逮捕する。

35 壅座首は老僧を叩いて追放する。

ハク大師は道術を用いてもとの姿になり、寺に戻る。

坊さまたちは閻魔大王に頼み、壅座首を地獄に墮とそうと提案する。

大師は提案を非難する。

I

III

II

I

坊さまたちは鷹となつて壅座首を襲いたいと提案する。

40 大師は提案を非難する。

坊さまたちは虎となつて壅座首を食べてしまいたいと提案する。

大師は提案を非難する。

坊さまたちは狐となつて壅座首を誘惑し、寝冷えして死なせたいと提案する。

大師は提案を非難する。

45 **ハク大師は、わら束で壅座首に似たかかし(にせもの)を作る。**

ハク大師に命じられたにせものの壅座首は、壅座首の家に行く。

にせものの壅座首は、下僕たちに仕事を命じる。

壅座首が家に入る。

にせものの壅座首は、壅座首をとがめる。

50 壅座首は怒つて、にせものの壅座首を掴まえるように下僕たちに命ずる。

**下僕たちはふたりの区別に迷う。**

下僕たちは壅座首の妻に事態を報告する。

妻は壅座首の仏罰、神罰だと考えて、母親に報告するように下僕たちに命ずる。

**母親はほんものの壅座首とにせものの壅座首との区別に迷う。**

55 母親は妻にふたりの区別ができないと報告する。

妻は壅座首の官服にある傷穴を調べるように命じる。

母が壅座首の官服の傷穴を認める。

母はにせものの壅座首の官服の穴を認める。

母は二人の区別ができないと妻に報告する。

60 妻はふたりの区別ができず迷う。

にせものの壻座首がほんものは自分だと嫁に訴える。

壻座首がほんものは自分だと嫁に訴える。

嫁がほんものには頭に傷があることを確認してはどうかと提案する。

にせものの壻座首は道術でほんものに変装する。

65 壻座首はくやしがる。

下僕は旦那様に壻座首がふたりいることを報告する。

にせものの壻座首は旦那様に（壻座首が）財物を奪おうとしていると訴える。

壻座首はにせものの壻座首が同じことを先に言うと言え。

息子はふたりの区別ができないと迷う。

70 壻座首は息子に母に助けてくれと言うように頼む。

息子は母にふたりの区別を頼む。

にせものの壻座首は妻に区別を頼む。

妻はにせものの壻座首をほんものだと証言する。

壻座首は怒る。

75 妻はふたりの区別ができないと迷う。

金別監（壻座首の次官）が家に来て壻座首を呼ぶ。

にせものの壻座首が別監に区別を頼む。

壻座首は別監に区別を頼む。

別監は（ふたりの区別ができないと迷う）そして官庁に訴える。

80 壻座首は自分がほんものだと訴える。

III

IV

V

VI

にせものの壅座首は自分がほんものだと訴える。

官長は争いを止めるように言う。

刑房が官庁に訴えることを提案する。

壅座首は官長に（簡単に）自分の戸籍を言う。

85 官長はほんものの壅座首を疑う。

にせものの壅座首は官長に（丁寧）自分の戸籍を言う。

**官長はにせものの壅座首を信用する。**

官長はにせものの壅座首に酒を勧める。

にせものの壅座首は（喜んで）酒を飲む。

90 壅座首は鞭打ちの罰を受ける。

壅座首は（罰を恐れ）自分がにせものだと（嘘の）証言をする。

衛前（下級官吏）の号令で、ほんものの壅座首は追放される。

**壅座首はこじきになる。**

壅座首は後悔する。

95 にせものの壅座首は（喜んで）家に戻る。

妻がにせものの壅座首の勝訴を喜ぶ。

にせものの壅座首が勝訴を喜ぶ。

にせものの壅座首は幸福な毎日を過ごす。

**妻が人形の落ちる夢を見る。**

100 にせものの壅座首は、妻の夢が妊娠の兆しであると言う。

妻は子どもをたくさん産む。

妻は子どもを育てる。

にせものの壱座首は幸福に暮らす。

壱座首は、悲観して山に入る。

105 壱座首は白髪道士に出会う。

**ほんものの壱座首は白髪道士に礼拝し、懺悔して、家族との再会を願う。**

白髪道士はほんものの壱座首に、懺悔して悔い改め、家に戻るよう言う。

壱座首は家に戻る。

妻はまた、にせものの壱座首が現れたと驚く。

110 妻は、にせものの壱座首と子どもたちが、わら束と人形に化けていたことを発見する。

壱座首は妻に経過を尋ねる。

妻は子どもたちが人形になっていたことを発見する。

妻は親孝行と仏道を尊ぶことを誓う。

親孝行と他人に対する積善を勧める。(以下、教訓の部分)

105 壱座首を例に、親孝行と他人に対する積善をしないと災厄がもたらされると説く。

親孝行を勧める。

というものである。これは実に長い小説で、登場人物の行動には常に長い会話を伴う。おそらくこのような部分は、伝承の基本的な枠組みに対して、描写として付加されたものと考えられる。このとき、太字で組み込まれている基本的事項は、伝承の基本的な枠組みとして日韓の間で空間的、地域的に共有されているものであり、説明的事項は付加的な説明であって、韓国における小説化の課程で整えられたものと考えられる。

具体的に論じると、1行目から14行目は、主人公壱固執の提示である。名前と性格、そして裕福であることをいう。その中でも、5行目から14行目は、広く物語の伝統に見える「四方四季」の叙述であり、邸宅のようすと植物の配置を説明することで、壱固執の裕福さを強調して

いる。この部分は、壅固執の裕福さを説明する付加的部分である。次に、21行目から35行目まで、ハク大師が変身して僧として現われ、壅座首（壅固執）がこの僧（ハク大師）を迫害することを繰り返す。この繰り返しが叙述を進める。

次に、36行目から45行目まで、ハク大師は壅座首をこらしめるために、わら束でほんものそつくりの（にせものの）壅座首を作る。さらに、ほんものの壅座首の家に赴いたにせものの壅座首は、ふたりの区別ができないことを順番に試験させる。まず、51行目下僕に、54行目母親に、60行目妻に、69行目息子に、79行目別監に、82行目官庁に、順番に区別を求めるが結局誰もできない。いったい何人にはほんものかにせものかを試験するかは、他の中国唐時代の『法苑』や日本の『今昔』『宇治拾遺』などと比較して、相違がある。伝承間に認められる相違、すなわちその内容とほんものかどうか確認する回数とは、韓国『壅固執伝』の個別性の問題であるとわかる。

次に、84行目から98行目、官長が、ほんものの壅座首とにせものの壅座首とを取り間違える。にせものの壅座首は宴で歓待され、幸福な生活を送るが、ほんものの壅座首はおちぶれてこじきになる。ところが、99行目から103行目妻は人形の夢を見て妊娠し、子どもを産む。104行目、ほんものの壅座首は悲観して山に入り、白髪道士と出会う。白髪道士は、壅座首がほんとうに懺悔し反省したことを確認して、家に戻るように言う。壅座首が家に戻ると、にせものの壅座首と子どもたちは、わら束と人形に化していた。

末尾三行は、この小説から親孝行と神仏に対する信仰を求める教訓である。

それから日本説話と比較するときに問題になるであろうが、17行目「母親は歌で壅固執の親不孝を嘆いた」条において、歌は付加的なものなのかどうかである。また、18行目「固執は（長生きする）母親に口ごたえした」という条で、中国の故事を引く。27行目「老僧は再び（壅座首に）布施を求める」条で、中国の故事を引く。また、86行目「にせものの壅座首は官長に（丁寧）自分の戸籍を言う」条に、付加する修辭などが多いということから、韓国パンソリ系小説『壅固執伝』の文芸性が認められる。



## 補論1 韓国昔話「フンブ伝」の伝承と異本

今度は韓国昔話の側から、この類話について考察を加えてみたい。

「フンブ伝」の形式は大きく、「朴打令」「興甫歌」といった唱本型、パンソリの内容が小説化されたパンソリ系小説型、他、説話(昔話・民譚)形式に分けることができる。

### 一、先行研究

パンソリ系小説形式は、作品によって「興甫伝」「朴興甫伝」「ノルブ伝」「燕の脚」「フンブ伝」とも呼ばれ、兄弟間の「友愛」を目的とした、「善悪兄弟譚」「動物報恩譚」「無限財宝譚」の構成を持つ朝鮮時代の代表的な庶民文学である。

小説形式「フンブ伝」は、「春香伝」「沈青伝」とともに代表的なパンソリ系小説として最も有名な作品である。

パンソリ「興甫歌」が記録物として初めに登場したのは、一八四三年宋晩載(一七八八〜一八五一年)により書かれた「観優戯五十首」である。その後「興甫歌」が小説作品化されたのは、一九世紀中期頃で、現在伝えられている異本の中で最も古いと推定されるのは、木板本である京板本系「京板二十五張本」である。しかしながら、「京板二十五張本」は、刊行時期が記されていないため確かな刊行年度は明らかでない。当時、京板本が刷り出された刊行所の活動時期から、一八六〇年頃、いくら遅くとも一八七〇年以前に刊行されたと推測される。<sup>\*1</sup>

現在伝えられている「フンブ伝」の異本は、木板本である「京板二五張本」「京板二十張本」を含め、板本系が三種、「金東旭完本」「ハーバード大本」などの筆写本、「新文館本」「博文書館本」「世唱本」などの旧活字本、「申在孝唱本」などのパンソリ唱本が伝えられている。「異本は京板系本を除いて、概してパンソリ的な形式から始まることから「フンブ伝」は、パンソリの書述過程から生じたもの<sup>\*2</sup>」であると考えられる。その中、現在日本語で翻訳されたのは、京板本系が八種<sup>はち\*3</sup>、博文書館系が二種<sup>\*4</sup>、申在孝本「朴打令」一種<sup>\*5</sup>、民話が五種<sup>\*6</sup>など、総計一八種<sup>\*7</sup>が挙げられる。

それらの伝本から考えると、「フンブ伝」は最初から一つのジャンルを持って創作された作品ではなく、長い間に渡って様々なジャンルとし

て形成・変模されることによって、最後に小説として定着した作品<sup>\*8</sup>であると推測できるのである。

趙東一氏の論じる、伝本の変化について要約すると次のようである。

一つは、口承文学と民俗文学のジャンルを持つ民潭(説話)から「フンブの話」に、  
二つは、口承文学の形式でありながら、創作文学としての特徴も持つパンソリに、  
三つ目は、口承文学から記録文学作品となる。つまり「フンブ伝」は、民潭(説話からパンソリ「興甫歌」、それから小説「フンブ伝」という過程を経て形成された<sup>\*9</sup>、  
というふうにとまることができる。

これまでの考察により「フンブ伝と」は、説話からパンソリとなり、また小説として書かれたのは確かなようである。「一つ、または二つ以上の説話が口から口へと伝承される過程において変化が続いて生じ、パンソリの語り手によって、一つの物語としてまとめられ、パンソリ台本、または小説として書かれた<sup>\*10</sup>」と推測できるが、説話や昔話からパンソリへ変化、パンソリから小説へ変化、または、説話や昔話からパンソリとなり、そのパンソリから小説への変化という、その三つの変化過程と相互関連性については、現在のところ明らかにされていない。

## 二、韓国昔話「フンブ伝」異本

「題名」(筆写・刊行時期)所蔵(者)、『収録文献』(出版社、出版年)(異本系統)との、順番である。ただし、題名については、私に日本語で訳した)。

### (1) 木版本

①「フンブ伝巻之単」(一八六〇年頃と推定)金東旭教授他所蔵『影印古小説板刻本全集』第三卷(延世大学人文科学研究所、一九七三年)に影印本収録(京板二五張本)。

②「フンブ伝」(ソウル宋洞、一八九〇年頃)、金根洙教授所蔵『影印古小説板刻本全集』(延世大学校人文科学研究所、一九七三年)に影印本収録、(京板二十張本)。

③ 「興夫伝」〈翰南書林本〉とも言う、〈翰南書林、一九二〇、一九二二、一九三二年〉韓国精神文化研究院図書館・ソウル大学図書館（一蓑文庫）他所蔵、〈京板二五張本〉。

(2) 筆写本

④ 「フンボ伝」〈金文基本〉とも言う、〈筆者未詳、一九〇一年〉金文基教授所蔵、金文基『古典文学精選』（太学社、一九八二年）に影印本収録、〈京板二十張本系〉〈二六張本〉。

⑤ 「張フンボ伝」〈呉永順本〉〈筆者未詳、一九〇八年〉呉永順所蔵、史在東教授複写本所蔵、『フンボ伝研究』柳光秀、啓明文化社、一九九三年）に影印本収録（二七張本）。

⑥ 「フンブ伝」〈二蓑文庫本〉〈筆者未詳、一九一三年〉ソウル大学校図書館 一蓑文庫所蔵 〈京板二十張本の模本〉『フンボ伝研究』柳光秀（啓明文化社、一九九三年）に影印本収録（四一張本）。

⑦ 「朴興甫伝」〈林熒澤本〉〈筆者未詳、一九一六年〉林熒澤教授所蔵『古典小説選』（韓国語文学会編、蚩雪出版社、一九七七年）に影印本収録。

⑧ 「興甫伝」〈ハーバード大本〉（五一張本）〈筆者未詳、一九一三〜一九五七年〉ハーバード大学校・燕京図書館・李相澤教授複写本所蔵『海外蒐佚本韓国古小説叢書』（太学社、一九九八年）に収録。

⑨ 「フンブ伝（興夫伝）」〈金東旭 A 本、三七張本完本〉〈筆者未詳、一九一六年〉金東旭教授所蔵（元本は檀国大大学栗谷図書館羅孫文庫所蔵）（「燕の脚（フンブ歌）」一九一三年、新旧書林本）を母本とする。

⑩ 「興甫伝」〈金東旭 B 本〉（落張本、三四張本）〈筆者未詳、筆写年度未詳〉金東旭教授所蔵、韓国精神文化研究院図書館（マイクロフィルム）（元本は、檀国大大学校栗谷図書館羅孫文庫所蔵）。

⑪ 「興甫伝」〈金東旭 C 本〉（落張本、十四張本）〈筆写年度未詳〉金東旭教授・韓国精神文化研究院図書館所蔵。

⑫ 「フンブ伝」〈史在東 A 本〉（落張本、四六張本）〈筆者未詳、筆写年度未詳〉史在東教授所蔵、韓国精神文化研究院図書館（マイクロフィルム）。

⑬ 「フンボ伝」〈史在東 B 本〉（落張本、十四張本）（筆者未詳、筆写年度未詳）史在東教授所蔵、韓国精神文化研究院図書館（マイクロフィルム）。

⑭ 「燕の脚 フンボ伝」〈高麗大図書館本〉（四六張本）（筆者未詳、筆写年度未詳）高麗大大学院図書館所蔵 『フンボ伝研究』（柳光秀、啓明文化社、一九九三年）に影印本収録（新旧書林本模写本）。

⑮ 「朴興富伝」〈鄭明基本〉（七九張本）（筆者未詳、筆写年度未詳）鄭明基教授所蔵。

### （3）旧活字本

⑯ 「フンブ伝」〈新文館本〉（崔昌善改作）（新文館、一九一三年）国立中央図書館所蔵 『旧活字本古小説全集』第七卷（仁川大校民族文化研究所編、一九八四年）に収録（京板本二五、二十張を母体とする）。

⑰ 「燕の脚」〈新旧書林本〉（李海朝改作）（新旧書林、一九一三年）国立中央図書館所蔵 『旧活字本古小説全集』第一七卷（仁川大校民族文化資料叢書一、一九八三年）に収録。

⑱ 「フンブ伝／フンボ伝」〈博文書館本〉（博文書館、一九一七年、一九二四年（三版本））朴順浩所蔵・韓国精神文化研究院図書館（マイクロフィルム）（世昌書館本を母体とする）。

⑲ 「燕の脚／興夫伝」〈永昌書館本〉（永昌書館、一九二二年以降と推定）ソウル大校図書館一蓑文庫所蔵。

⑳ 「燕の脚／フンブ歌」〈京城書籍業組合本〉（京城書籍業組合、一九二五、一九二六年）国立中央図書館所蔵（新旧書林本と同一本）。

㉑ 「燕の脚／フンブ歌」〈世昌書館本〉（世昌書館、一九五二年）『旧活字本古小説全集』第二九卷（仁川大校民族文化研究所編、一九八四年）に収録（新旧書林本と同一本）。

㉒ 「フンブ伝／フンボ伝」〈世昌書館本〉（世昌書館、一九五二年）韓国精神文化研究院図書館所蔵（博文書館本を母体とする）。

### （4）パンソリ唱本

㉓ 「バク打令」〈申在孝改作本／嘉藍本〉とも言う、（申在孝、一八七〇、一八七三年）ソウル大校中央図書館嘉藍文庫所蔵、姜漢永校註『申在孝パンソリ辞説集』（民衆書館、一九七八年）に収録、七四張本。他に、「朴フンボ歌」〈申在孝本／星斗本〉（一九一八年、『申在孝パンソリ

全集』(延世大学校人文科学研究所編、一九六九年)に収録(六一張本)。

- ②4 「バク打令」(李善有唱本) (金澤洙、一九三三年) 『五歌全集』(大東印刷所、一九三三年)。
- ②5 「興甫歌」『増補 歌謠集成』(青丘古典音楽学院、一九六一年)。
- ②6 「興甫歌」(朴憲鳳改作本) 『唱楽大綱』(国楽芸術学校出版部、一九六六年)。
- ②7 「興甫歌」(金素姫唱本) 『国楽大全集』(新世紀レコード出版部、一九六八年) 李昌培 『韓国歌唱大系』(弘人文化社、一九七六年)。
- ②8 「興甫歌」(金演洙唱本) (沈清歌・興甫歌・水宮歌・赤壁歌) (文化財管理局、一九七四年)。
- ②9 「興夫歌」(朴東鎮唱本) 『韓国音楽』第六卷(伝統音楽研究会、一九七五年) 『国楽全集』第十三卷(国立国楽院、一九八五年)。
- ③0 「フンボ歌」(朴緑珠唱本 A 本) 鄭炳昱 『韓国のパンソリ』(集文堂、一九八一年)。
- ③1 「フンボ歌」(朴緑珠唱本 B 本) / (朴松熙・朴緑珠唱本) 朴松熙 『朴緑珠唱本』(集文堂、一九八八年)。
- ③2 「フンボ歌」(朴奉述唱本) 根の深い木編 『パンソリ五つのマダン』(韓国ブリタニカ会社、一九八二年)。
- ③3 「興甫歌 (二名バク打令)」(丁珖秀唱本) 丁珖秀 『伝統文化五歌辞全集』(文苑社、一九八六年)。
- ③4 「フンボ歌」(姜道根・朴奉述唱本) 李クツチャ編 『パンソリ研究』(正音社、一九八七年)。
- ③5 「フンボ歌」(林香任唱本) 完唱パンソリ(国立劇場、一九八七年)。
- ③6 「フンボ歌」(安淑善唱本) 完唱パンソリ(国立劇場、一九八八年) (林香任唱本と同じ唱本)。
- ③7 「フンボ歌」(崔蘭洙唱本) 完唱パンソリ(国立劇場、一九九〇年)。
- ③8 「朴打令ノルボとフンボ」 姜漢永・田中明訳注 『パンソリ』(平凡社、東洋文庫、一九八二年)。

注

\*1 金鎮英・金賢柱 『古典名作異本総書 興夫伝全集2』 図書出版博而精、二〇〇三年。

「京板二五張本」の解説を私に訳すると、「当時、京板本が刷り出された刊行所の活動時期が一八四〇年から一八八〇年までとあるが、

ハンブル小説類は、その後半部に刊行されたと推測される」とある。

\*<sup>2</sup> 金昌辰「興夫伝の異本と構成研究」慶熙大学大学院、一九九一年。

\*<sup>3</sup> ①「興夫伝」高橋亨『朝鮮の物語集附俚諺』日韓書房、一九一〇年。

②「足折燕」三輪環『伝説の朝鮮』東京、博文館、一九一九年。

③「のる夫と興夫」朝鮮総督府『朝鮮童話集』京城、大阪屋号書店、一九二四年。

④「興夫伝」田中梅吉『朝鮮説話文学興夫伝』大阪屋号書店、一九二九年。

⑤「フンブとノルブ」松谷みよ子・瀬川扱男再話『朝鮮民話集3金剛山の虎退治』太平出版社、一九七二年。

⑥「フンブとノルブ」松谷みよ子・瀬川扱男再話『朝鮮民話集』太平出版社、一九七三年。

⑦「フンブとノルブ」松谷みよ子・瀬川扱男再話『朝鮮の民話下』偕成社、一九八〇年。

⑧「足折れ燕」渋沢青花『朝鮮民話集』現代教養文庫、社会思想社、一九八〇年。

\*<sup>4</sup> 「興夫伝」洪相圭訳『韓国古典文学選集1 沈清伝・興夫伝』高麗書林、一九七五年。

「ホンブとノルブ」依田千百子・中西正樹『金得順昔話集』三弥井書店、一九九四年。

\*<sup>5</sup> 「朴打令（ノルボとフンボ）姜漢永・田中明訳注『パンソリ』平凡社、東洋文庫、一九八二年。

\*<sup>6</sup> ①金素雲「カボチャの種」『ネギをうえた人』岩波少年文庫、一九五三年。

②崔仁鶴「ホンブとノルブ」『朝鮮昔話百撰』日本放送出版協会、一九七四年。

③韓国文化図書出版社編集部訳・安藤昌敏訳監修・朴榮濬「フンブ伝」『韓国の民話と伝説1』高麗書林、一九七五年。

④崔仁鶴採話・申東雨絵「ホンブとノルブ」『世界の昔ばなし6 韓国の昔ばなし―大ムカデたいじ―』小峰書店、一九八三年。

⑤小澤俊夫編訳「つばめの足」『世界の民話9 アジア1』ぎょうせい出版、一九七六年。

\*<sup>7</sup> 邊恩田「「フンブ伝」の伝本系統と日本語訳本について」『同志社国文学』第六二号、二〇〇五年三月（日本語訳資料がどの系統に属す

るかという判断は、この論文を参照とした）。

\* 8 趙東一「興夫伝の両面性」『啓明論叢』五集、啓明大学、一九六九年。

\* 9 注8に同じ。

\* 10 印権煥「興夫伝の説話的考察―根源説話の探索と小説化過程を中心に―」高麗大学校国語国文学研究会編『語文論集』第一六卷、高麗大  
学校、一九七五年。

## 補論2 韓国昔話・説話の中のトケビ（異界の存在）

韓国昔話及び説話の中にトケビはどのように描かれているのだろうか。韓国昔話及び説話に出て来るトケビのイメージやトケビの登場する韓国昔話の特徴について調べてみよう。

山崎源太郎氏は『朝鮮の奇談と伝説』において、「朝鮮の妖怪」は「全く母国の妖怪とは別種のもので、多く支那式の妖怪」とし、トケビについて、

「トツカツピ、独脚鬼と書く。朝鮮の人に聞くと色々な事を云うが、何でも女の月経の血が箒に著くと、トツカツピになるとか、古い道具類が此の鬼になるとか云ってゐる。此の鬼は悪い事も色々するが、其の中でも最も多くする悪戯は、人の家を焼く事である。原因なくして家の中から突然火が出て家事になるのは此の鬼の仕業である。併し此の鬼は悪い事する代わりに懇意になれば、金を持って来て呉れるので、欲の深い者は密かに此の鬼を祭る、されど一朝仲が悪くなったら最後其の儲けさせた金を、みんな攫って行く、だからトツカツピと懇意になって金の出来た者は直ぐに田地畑を買って、持って行かれぬ様にするのであるが、トツカツピは之に対して畑の四隅に棒杭を立て行くさうすると作物が穫れなくなるといふ。又此の鬼は時に婦人を挑むことがある、之に應ずる時は金持ちになるが、拒む時には貧乏人になると伝えられてゐる。所が此のトツカツピの苦が手は驢馬でいって、驢馬の鳴き声を聞くと直ぐ逃げる、故に田舎の金持ちは驢馬を飼ふ者が多いとの事である」<sup>\*1</sup>

と述べている。

韓国においてトケビの登場する類型の話は、「瘤取りに行つて、瘤付けられた爺」や「瘤爺さんとトケビ」とも呼ばれ、「トケビの棒」（もしくは「金の棒・銀の棒」、本論においては、トケビまたはトケビの棒を得て裕福になった類話を総称する）とともに、韓国ではトケビの登場する代表的な昔話とされる。この二つの類型は、前述したように、トケビの棒を得てお金持ちになった兄旁包を羨んだ弟が真似をしたが失敗し、不幸になったという「旁包説話」が典故として指摘され、同じの構成を持ち、高橋亨『朝鮮の物語集』を始め、『朝鮮の奇談と伝説』『朝鮮童話集』『朝鮮伝来童話集』『朝鮮童話大集』『昔話選集』『韓国伝来童話読本』『朝鮮昔話百撰』など、「瘤取爺」と一緒に「トケビの棒」類話が収録されている。『韓国口碑』には、「瘤取爺」話型と同じく、類系分類634・9「トケビのおかげで得をした人、真似して失敗する」に分



類され、634・9に分類された事例総四八話の中、「トケビの棒」の類話は、二五話の事例がある。六の事例が収録される「瘤取爺」類型に比べても、はるかに多い数である。トケビの棒」の話を要約すると、次のようである。

①金持ちの兄と貧乏の弟がいた。

②ある日、弟が山へ柴刈りに行って、ドングリがあつたので親にあげようと拾う。

③帰りに日が暮れたので、空き家に泊まる。

④夜中になると、トケビが現れてトケビ棒を叩き、食べ物やお酒を飲みながら遊ぶ。

⑤弟は驚いて、口に入れていたどんぐりを噛んでしまう。

⑥その音を聞いたトケビたちは、驚きのあまりトケビ棒を忘れたまま逃げ出す。

⑦弟はトケビ棒を拾い、それを使って金持ちになる。

⑧欲張り兄は、自分もトケビ棒を得ようと真似するが、失敗する。

善良な人は拾ったトケビの棒を使って金持ちになるが、真似した欲深い人は失敗し、不幸になるというのがこの類型の主な結末である。『朝鮮の物語集』「鬼失金銀棒」の場合、真似した人は「いかにもひどく打たれたりけむ、身丈延びに延びてせいの高さ昨日の倍にも余り」とあり、「旁包説話」では、「鬼はその鼻をひっぱった。鼻は、象のようになって、帰ってきた」という結末である。また、「瘤取爺」類型の場合には、もう一つの瘤を付けられるなど、身体の一部に被害を受けている。『日本昔話事典』<sup>\*2</sup>には、日本昔話「打出の小槌」類型について、「朝鮮でも類似の如意宝の昔話が古くから知られ、『西陽雜俎』に見られる新羅国の昔話では、ほしのままに酒食を出す金椎子を手に入れてもどつて来る。日本の記録では中世から見られるが、元本来大陸にあつた話の伝播したものかも知れない」と述べて、島津久基氏は、「少なくとも種類の説話からの変形に、「打出の小槌」の形式を採る如意宝モチーフが含まれて来たものと推考せられる」と論じている。<sup>\*3</sup>

さらに、志田義秀氏は『朝鮮の物語集』「鬼失金銀棒」を取り上げ、「これは正に前の「瘤取」と同じ種類のもものと見られるが、確かその異なる点は、一方が瘤で一方が金銀棒であるという所」だと述べたうえに、相違点としては「朝鮮の物語の、打たれて身の丈が延びたといふに對して、金椎子の伝説が「抜<sup>レ</sup>其鼻<sup>一</sup>、鼻如<sup>レ</sup>象而帰<sup>一</sup>」である<sup>\*4</sup>」とところだと指摘している。

以上のことから、韓国昔話「瘤取爺」の類型の話は独自の説話ではなく、『西陽雜俎』の「願いを叶えてくれて、欲しいものまま出て来る

棒」を得るといふ説話の一種型として伝承された可能性が高いと推測できる<sup>\*5</sup>。現在の日本昔話「打出の小槌」はそこから変形、発達したものと位置づけられよう。『日本昔話事典』<sup>\*6</sup>によると、日本昔話『日本昔話集成』分類番号「四一三 打出の小槌」話型の比較対象として、韓国昔話分類「261 三つの珠」<sup>\*7</sup>「273 不思議な瓶」を取り上げて、崔仁鶴氏は、その二つの類型とともに、「475 金の斧・銀の斧」<sup>\*8</sup>を加えている。

さらに、韓国昔話「トケビの棒」話型の話を「460 金の砵・銀の砵」に分類し、比較対象となる日本昔話として、『集成』分類番号「一八四 地藏浄土」「二八五 鼠浄土」「四六二 犬頭絲」を取り上げた。「隣の爺」型のうちに、「鬼の楽土型」・「鼠の楽土型」・「地藏浄土型」という亜型を示した『通観』と通じるのである。

ここで、注目したのはトケビ説話の典故となる「旁包説話」始め、「トケビの棒」、「瘤取爺」の種類の善良な主人公は、みんなトケビ（またはトケビの棒）のおかげで裕福になるといふ結末である。第二章の【表2】によると、瘤を質として預けた話の事例は二つのみだが、瘤を売るか交換などによって金持ちになったという事例は一五話もある。【表2】の、⑰⑱番事例には、主人公は瘤を取られるほか、トケビの棒をもらうとあり、⑳番『朝鮮語読本』の場合、話の中には「トケビたちは、老人の瘤をあっという間取っては、去って帰りました。一人残った老人は瘤が付けてあったところを触りながら、トケビたちがいたところを見てみると、そこには、立派な金銀や宝がたくさんありました」と、トケビの棒をもらうという内容は見えないが、その後、老人が嬉しくて踊りながら歌う歌の中に、

「歌は良いもの、歌を歌え、

トケビまでも 踊るよ

歌は良いもの、歌を歌え、

銀の棒・金の棒は 瘤の代だよ」

とあることから、もらった宝の中にトケビの棒が入っていたことが推測できる。

日本昔話「瘤取爺」類話の場合、【表1】の19、20番事例に「金の棒を担った鬼」の登場はみえるが、金の棒をもらったという事例は、現在のところ見当たらない。

韓国のトケビと「トケビの棒」は切り離すことのできない関係である。昔話や説話に出て来るトケビは、叩くと何の願いも叶えてくれる「ト

ケビ棒」を持っていて、それを使って悪い人間に罰を与えたり、人の願いを叶えてくれたりする。

それで、韓国昔話や説話に登場するトケビとは、どのような存在なのだろうか。任哲宰氏は、韓国昔話や説話の中に登場するトケビについて、次のように述べている。

「我国の説話の中に出て来るトケビは、雨の日や夜中、または暗いところによく現れるもので、人間の力ではどうしようもできないこともやってくれる霊験な力を持つものと言われる。例えば、瘤を痛まないように取ったり、付けて、宝物を限りなく持って、願うものなら何でも出て来る（魔法の）棒を持っている。また、食べはお酒を飲んで楽しく遊ぶのが好きで、人間とは親しい関係だが、人によく騙される間抜けな面もある存在となっている。そして、裏切られたらお返しはするものの、その報復の手段や方法は、精巧・巧みでもなく、直截的でお愚かなにきわまりない。そのためか、トケビは超自然的な霊験の力を持っていて、人の願いを叶えてくれるものの、人はそれを崇め尊ぶのではなく、馬鹿にしてだまそうとした後、最後には忌み嫌う対象となっている。そして、心の中では、もしかしてトケビが自分に害を与えるのではないかと、心配するのである。ところが、トケビは悪逆無道なものではなく、悪意のない純粋な存在である。トケビを裏切ったり、被害を与えたり・または、損傷・不正など悪いことをしない限り、人間に悪いことはしない<sup>\*</sup>。このように、説話に登場するトケビは、「瘤取爺」採録事例から確認することができるように、遊ぶのが好きで、人間とは親しい関係だが、無邪気で間抜けな面があるため、人にだまされやすい存在として描かれている。

注

\*1 山崎源太郎「朝鮮の妖怪」『朝鮮の奇談と伝説』ウツボヤ書籍店、一九二〇年、二二八頁。

\*2 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦他『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年。

\*3 島津久基「瘤取」『国民伝説類聚』大岡山書店、一九三三年。

\*4 志田義秀「朝鮮の物語集」と日本の伝説童話」『日本の伝説と童話』大東出版社、一九四一年、二八一頁。

\*5 クオンヒヨミヨン「旁佻説話」モチーフの教科書収録様相の研究『語文学教育』第二九卷、韓国語文教育学会、二〇〇四年、一五一―二〇五頁。

「トケビに棒を得るために行つて、鼻の代わりに腕・脚など身体の一部が長くなるもするのは「旁佻説話」の、身体の一部が長くなる（もそくは、変化が起きる）というモチーフからである」

\*6 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦ほか『日本昔話事典』弘文堂、一九七七年。

\*7 韓国分類番号については、崔仁鶴『韓国昔話の研究』（弘文堂、一九七八年）による。

\*8 崔仁鶴氏は三つの類型に、各々の日本昔話比較対象として、次のように取り上げている。

「261 三つの珠」↓ 「二六八 生鞭死鞭」、「四一三 打出の小槌」 「二七八 a 二人の兄弟」、「二七八 b 二人の兄弟」

「273 不思議な瓶」↓ 「四一三 打出の小槌」

「475 金の斧・銀の斧」↓ 「二二六 a・b 黄金の斧」、「四一三 打出の小槌」

\*9 任哲宰「説話の中のトケビ」『国立博物館叢書1 韓国のトケビ』悦話堂、一九八一年、五二頁。

資料 第二章【表1】日本昔話「瘤取爺」の採録事例一覧表

話	伝承地域	主人公	異界の存在	宴	爺の動き	瘤	歌詞	(瘤取られ・付けられた)理由
1	青森県 三戸郡田子町	上瘤爺・下瘤爺	天狗	酒、踊り	見つけられて踊りに入る			神明様に(瘤が取れるようにと)祈る
2	青森県 三戸郡五戸町関	正直な爺・悪い爺	天狗	酒盛り	自ら踊り出る	質		上手・下手
3	岩手県 下閉伊郡岩泉町	右顔に瘤もつ爺・左顔瘤もつ爺	天狗	踊り、歌	合わせて歌う	質	○	上手・下手
4	岩手県 江刺市	爺・隣の婆	鬼		握り飯をやる・そば団子一つ		○	美味い握り飯・握り飯がない
5	岩手県 北上市	顔に瘤のある二人の爺	丈が六尺で、赤ら顔の鼻高い天狗、四・五人	踊り、歌(神楽)	陽気に歌って舞う・陰気	報い	○	上手(山奥の神様に祈る)・下手
6	岩手県 紫波郡矢巾町	尻に瘤のある爺二人	馬に乗った人		尻を鳴らす・糞			尻の鳴り音が良い・無礼者
7	岩手県 遠野市	顔に瘤のある爺・隣の爺	天狗	踊り、歌	歌い踊る		○	上手・鳴き声で歌う
8	岩手県 西磐井郡花泉町	額に瘤のある爺	大鬼、小鬼	踊り、歌	踊りの調子が面白くて鬼仲間に入る		○	上手(歌って踊る)・下手(歌のみ)
9	岩手県 二戸郡 203頁	爺・隣の爺	天狗	酒盛り	自ら踊り出る	質	○	
10	岩手県 花巻町	爺・隣の爺	天狗	踊り	踊りが面白くて鬼仲間に入る	質	○	上手・囃しを間違う
11	岩手県 東磐井郡大東町	爺・隣の爺	鬼八匹	踊り				
12	岩手県 和賀郡東和町	爺・隣の爺	狐	踊り				上手(楽師様に祈る)・泣き出す
13	岩手県 二戸市一町 79頁	正直なじさま・隣のじじ	天狗	踊り	金の斧銀の斧と混ざった型		○	上手・下手
14	岩手県	正直の欲の深くない爺さん・欲の深い爺さん	鬼	酒盛り	あまりにも面白くて一生懸命踊る	報い	○	上手(宝物も貰う)・下手
15	岩手県	右ほっぺた・左ほっぺたに瘤	青鬼・赤鬼	歌・踊り	元々踊りが好きな爺さん	質	○	
16	宮城県 登米郡中田町	いい爺・欲たかい爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	鬼に誘われて、鬼の囃しに合わせて踊る	質	○	上手・下手
17	宮城県 栗原郡金成町	爺・隣の爺	鬼	酒盛り、	鬼の歌や踊りが面白くて笑う。	報い		上手・下手
18	宮城県 柴田郡川崎町	踊り好きな爺・隣の爺	天狗四人	酒盛り	鬼に誘われる	報い	○	上手・囃しを間違う
19	宮城県 登米郡南方町	一太郎(こぶいち)・ふざけ者の若者	金棒を担いた鬼		神に祈る・わざと瘤を付けて鬼の所へ行く	叶う		神様の命令
20	宮城県 登米郡迫町新田	一太郎(こぶえず)・ふざけ者の若者	金棒を担いた鬼		神に祈る・わざと瘤を付けて鬼の所へ行く	叶う		神様の命令
21	秋田県 由利郡鳥海町猿倉	伝兵衛ジイ様・隣の爺	天狗	酒盛り		質	○	約束を守る(山王様に祈る)・忘れる
22	秋田県 仙北郡南外村	爺・隣の爺	鬼	踊り、歌	清水の観音様に祈る	報い	○	上手・怖くて踊れない

23	秋田県	ほっぺたに瘤持つ二人の爺	天狗	踊り		報い	○	上手（神に祈る）・下手
24	山形県 米沢市窪田	働き爺・意地悪い怠け爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	面白くなってきて仲間に入る	質		上手・下手
25	山形県 上山市櫛下	踊りうまい爺・欲深く意地悪い爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	元々踊り上手だったので楽しく踊る	質	○	上手・下手
26	山形県 新庄市	酒と踊りのすきな善平爺・隣の欲平爺	鼠	酒盛り	鬼仲間に入り踊る	報い		上手（大判小判）・猫の泣きまね（三つ四つの瘤付けられる）
27	山形県 新庄市	ほっぺたに瘤持つ正直なまめ爺・隣の爺	貉	酒盛り	あんまり面白そうに踊るから仲間に入る	質		上手・下手
28	山形県 新庄市	まめ爺・へやみ（怠け）爺	天狗	踊り	面白くなってきて仲間に入る	質	○	上手・下手
29	山形県 西田市広野字福岡	右頬に瘤・左頬に瘤持つ爺	天狗	酒盛り	元々歌の上手な爺	報い	○	上手（薬師様に祈る）・下手
30	山形県	よい爺さん・悪い爺さん	青鬼・赤鬼	酒盛り	踊りが好きで踊ってみたいと思って	質	○	上手・下手
31	山形県 新庄市小月野	小僧・えらがの小僧	むじな七匹	歌い踊る	仲間に入り踊る	質	○	上手（権現様に祈る）・調子悪くて歌詞間違い
32	山形県 新庄市蛇塚	爺・隣の爺	天狗	歌	一緒に踊らせる	質	○	上手（お不動に祈る）・下手
33	山形県 西置賜郡飯豊町大平	（踊り好きな）爺・隣の爺	狐	踊る	踊り好きで仲間に入る	質		上手（山の神様に祈る）・下手
34	山形県西置賜郡飯豊町中津川	爺・隣の爺	鬼	踊り	踊りにはまって仲間に入る	ほうび		上手・下手
35	山形県 西置賜郡小国町	正直な爺・欲ふかなじさ	天狗二人	酒盛り	踊り場が面白くて仲間に入る	質	○	
36	山形県西置賜郡小国町大石沢	右ほっぺた・左頬っぺたに瘤	鬼	酒盛り	元々踊りの好き	質		上手・下手
37	山形県 西置賜郡白鷹町折居	こぶのじいさん・隣の瘤じいさん	鬼	酒盛り	元々歌も踊りも好き	質		上手・下手
38	山形県西村山郡大江町市之沢	爺・隣の爺	鬼	ばくち	言われた通りに鶏の鳴き真似	報い		上手・下手
39	山形県東置賜郡高島町糠野目	正直な爺と婆・意地悪い爺と婆	赤鬼・青鬼		鬼に踊りを教える	質	○	上手・下手
40	山形県 東田川郡余目町栄	右頬に瘤ある良い爺・左頬に瘤ある悪い爺	化け物	歌・踊り	自ら仲間に入り踊る	報い	○	上手・下手
41	山形県 最上郡真屋川町	踊りすきで正直な爺・心の悪い爺	化け物	歌	自ら仲間に入り踊る	質	○	上手・下手
42	山形県 最上郡真屋川町及位	爺	鬼	踊り、歌	踊りに加わる			お礼参りする（裏山の地藏に祈る）
43	山形県最上郡最上町笹森関所	マメ爺・へやみ爺	天狗	踊り、歌	歌って踊り出る	質	○	上手・下手
44	山形県 米沢市塩井町	正直じいさん・欲ふかじいさん	猿	踊り	猿に見つけられて踊りに入る			上手・下手
45	福島県 大沼郡金山町大塩	よい爺・意地悪い爺	鬼	酒盛り・博打	鬼に見つけられて踊りに入る	質		上手・下手
46	福島県 岩瀬郡天栄村	爺・欲深い隣	鬼	酒盛り	自ら歌い始める	報い	○	上手（銭金も貰う）・尻が出てしまう
47	福島県 耶麻郡猪苗代町	正直な爺・意地悪い爺	天狗三人	酒盛り	舞い手揃いとして踊ってやる・舞い手揃いな のに入って踊る	お礼	○	上手（神に祈る）・下手

48	福島県 平田村小平真弓	正直な爺・欲深い爺	鬼	踊り	面白くなってきて仲間に入る	報い		上手・下手
49	福島県 いわき市	左の頬・右の頬に瘤もつ爺	鬼	酒盛り	自ら歌い始める	質		上手・下手
50	福島県 大沼郡金山町小栗山	よい爺・意地悪い爺	鬼		困っている鬼を助ける	恩返し		金も貰う・へまをして金も貰えない
51	福島県 郡山市湖南町三代	正直な爺・欲深い爺	鬼	酒盛り	自ら仲間に入り踊る	質		上手(金も貰う)・下手
52	福島県 郡山市湖南町三代	爺・隣の爺	鬼	酒盛り	自ら仲間に入り踊る	質		上手・下手
53	福島県 須賀川市猪森	爺・隣の爺	猪	踊り	自ら踊りに加わる	報い		上手・下手
54	福島県 田村郡舟引町春山	爺・隣の爺	鬼	踊り	見つけられて踊りに入る	ほうび		上手・下手
55	福島県 東白川郡川上	爺・隣の爺	鬼	踊り	踊り加わり上手に踊る	質		上手・下手
56	福島県南会津郡檜枝岐村居平	瘤八郎佐衛門	天狗三人	踊り、歌	舞い手揃いとして踊ってやる	お礼	○	上手(神様に祈る)・下手
57	福島県 耶麻郡山都町一ノ木	爺・隣の爺	鬼	踊り	踊りが下手な鬼に、上手な踊りを見せてやる	報い		上手・下手
58	福島県 山都町	頬っぺたに瘤・片っぽどこに瘤	鬼	酒盛り	踊りがとつても好きで仲間に入る	質		上手・下手
59	群馬県 利根郡新治村須川	歌と踊りすきな爺・隣の爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	歌と踊りが好き	質	○	上手・下手
60	群馬県 伊根郡片品村菅沼	正直な気持ちのいい爺・底意地の悪いような爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	踊りが好きで鬼の仲間飛び出して踊る	質		上手・下手
61	群馬県 利根郡新治村	木こりのお爺さん	天狗	酒盛り	もとより踊りの好きなおじいさん	質	○	上手・下手
62	群馬県 利根水上町藤原	よい爺・悪い爺	鬼	ばくち	鬼との博打に負けて瘤を取られる			(博打に)負ける・勝つ
63	千葉県 市川市北国分	踊りすきな爺・欲ばり爺	鬼	酒盛り	自ら仲間へ交じって踊り出す	土産に		上手・下手
64	埼玉県 入間郡越生町	よい爺・悪い爺	笠、古大根、唐傘、蓑	踊り・歌	笠、古大根、唐傘、蓑からの調子に合わせて踊る	報い	○	上手・下手
65	埼玉県 川越地方	左頬っぺたに瘤・悪いお爺さん	鬼	酒盛り	元々踊りが好き	質		上手・下手
66	埼玉県 比企郡小川町相生町	爺	天狗	踊り、歌	誘われて踊る	質	○	上手
67	埼玉県 深谷市石塚	爺・隣の爺	鬼	踊り	面白そうだから一緒に踊る	質		上手・下手
68	千葉県 安房郡三芳村上滝田	良い爺・悪い爺	鬼	踊り	自ら仲間に入り踊る	報い		上手・下手
69	千葉県 安房郡三芳村千代	爺さん・一人の爺	鬼	宴会	面白くなってきて仲間に入る	質		上手・下手
70	千葉県 安房郡三芳村三坂	爺さん・一人の爺	鬼	宴会	面白くなってきて仲間に入る	質		上手・下手
71	新潟県 北蒲原郡	右・左ほっぺたに瘤持つ爺	青鬼・赤鬼	酒盛り	元々踊り上手で、踊りたくて仲間に入る	質		上手・下手
72	新潟県 長岡市今井町	右・左ほっぺたに瘤持つ爺	鬼	酒盛り	元々踊りが好きで上手であった爺さん	質		上手・下手
73	新潟県	右ほっぺた・左ほっぺたに瘤持つ悪い爺	鬼	酒盛り	鬼から誘われる	質		上手・下手
74	富山県 小矢部市埴生	爺・隣の爺	天狗	踊り、歌	自ら仲間に入り踊る	報い	○	上手・下手

75	富山県射水郡小杉町黒河〈1〉	よく仕事する爺・隣の横着爺	山の者		山の者に瘤を取ってくれと頼む	叶う		取ってくれる・取ってくれない
76	富山県射水郡小杉町黒河〈2〉	よい爺・悪い爺	鬼	踊り	一緒に踊る	質		上手・踊らない
77	中野県 下伊郡郡清内路村	踊り好きで正直な爺・欲深い爺	天狗	踊り、歌	自ら仲間に入り踊る	質	○	上手・下手
78	長野県	顔に瘤持つ二人の爺	狐	踊り、歌	一緒に歌い踊る	報い	○	上手・下手
79	山梨県北巨摩郡白州町台ヶ原	よい爺・悪い爺	鬼	踊り	踊りを踊らせる			上手・下手
80	山梨県西八代郡市川大門新町	爺・隣の爺	鬼	踊り	鬼から誘われて踊る	報い		上手・下手
81	静岡県 浜名市芳川市	爺・意地悪い爺	鬼	酒盛り	自ら仲間に入り踊って見せる	質		上手・下手
82	岐阜県 郡上郡	踊り好きな小衛門さ	天狗	踊り	我を忘れて踊る	質	○	上手
83	静岡県 田方郡中伊豆町	爺・隣の爺	鬼	踊り	とつても踊りが好きなお爺さん	お礼		上手・下手
84	京都府 与謝郡岩滝町弓水	正直なええ爺・性の悪い爺さん	取り		鳥が教えた水を飲む		○	水を飲むと瘤が取れる・両方に瘤できる
85	京都府 中郡大宮町大野	爺・欲な爺	鬼	踊り	弁当を求める鬼に、代わりに踊りを見せる	報い		上手・下手
86	和歌山県伊都郡高野町杖ヶ藪	踊り好きな爺・隣の爺	鬼	踊り	自ら一緒になって踊り出す	質		上手・下手
87	兵庫県 美方郡美方町貫田	右頬に瘤もつ爺・左頬瘤もつ爺	鬼四、五人	酒盛り	元々踊りが好き	質		上手・下手
88	兵庫県 朝来郡和田山町寺内	踊り好きなよい爺・悪い爺	鬼	酒盛り	浮かれて一緒に踊る	質		上手・下手
89	兵庫県 津名郡五色町鮎原	ええ爺・悪い爺	鬼	酒盛り	願いを聞かれると、瘤を取ってくれと注文	土産に		上手・下手
90	兵庫県 養父郡大屋町	爺・隣の爺	天狗三人	踊り、歌	自ら入って踊る	質	○	上手・下手
91	鳥取県 東伯郡関金町明高	爺・欲張り爺	青・赤・黄ながら黒い鬼	酒盛り	見つけられて踊らせる(願いを聞かれると瘤を取って欲しいと言う)	褒美		上手・下手
92	鳥取県 岩美郡岩美町田後	爺・欲張り爺	鬼	酒盛り	見つけられて踊らせる	報い		上手(小判も貰う)・下手
93	鳥取県 日野郡日南町神福	踊り好きな爺・隣の爺	天狗	踊り	浮かれて踊り出す	質		上手・下手
94	鳥取県 東伯郡赤碓町籠津	爺・隣の爺	鼠	遊び	一緒に遊ぶ			鼠に弁当をやる・何もやらない
95	鳥取県 東伯郡東伯町	爺・隣の爺	鬼三人	踊り	自ら入って踊る	質		上手・下手
96	鳥取県 西伯郡伯耆町	左の頬つべた(心のいい爺)・右の頬つべたに瘤(意地悪い爺)	鬼	踊り・歌	歌も踊りも好きで上手	質		上手・下手
97	島根県仁多郡横田町大呂〈1〉	爺・隣の爺	天狗三人ほど	踊り、歌	自ら入って踊る	報い	○	上手・下手
98	島根県 大田市静間町垂水	よい爺・悪い爺	鬼	踊り	元々踊りが上手な爺さん	ほうび		上手・下手
99	島根県 大田市高山町下才坂	よい爺・悪い爺	鬼	踊り	自ら入って踊る	報い	○	上手・下手
100	島根県 大田市山口町山口	よい爺・隣の爺	鬼	踊り	自ら入って踊る	質		上手・下手
101	島根県 邑智郡大和村響谷	爺・隣の爺	鬼	踊り	面白くなって一緒に踊る	ほうび		上手・下手
102	島根県 邑智郡大和村都賀行	踊り好きな爺・隣の爺	鬼	踊り	元々踊りが好き	質		上手・下手



103	島根県 邑智郡大和村宮内	いい爺・悪い爺	鬼	酒盛り	思わず仲間に入って踊る	質		上手・下手
104	島根県 大原郡木次町東日登	踊りが上手でいい爺・悪い爺	鬼	酒盛り	浮かれて踊り出す			上手・下手
105	島根県 隠岐郡布施村飯美	右に瘤持つ爺・隣の爺	鬼	酒盛り	いい気持ちになって踊り出す	質		上手・下手
106	島根県 江津市	爺・隣の爺	鬼	酒盛り	面白くて踊り出す	質		上手・下手
107	島根県仁多郡横田町大呂(2)	爺・隣の爺	天狗	踊り、歌	面白くて踊り出す		○	上手・下手
108	島根県 美濃郡匹見町植地	いい爺・隣の爺	鬼	踊り	面白くて踊り出す	土産に		上手・下手
109	島根県 美濃郡匹見町白木谷	爺・隣の爺	殿様		祈る	叶う		殿様が取ってくれる・付けられる
110	島根県 美濃郡匹見町下道川	爺・隣の爺	神様	歌	仕事しながら歌う	報い		上手(神様に祈る)・下手
111	島根県 美濃郡匹見町山根上	正直な分の爺・欲の深い爺さん	鬼	踊り	舞を舞うことが一番得意だと見せてやる	お礼		上手・下手
112	島根県 美濃郡匹見町澄川	爺・隣の爺	鬼	踊り	踊りを見せてやる	お礼		上手・下手
113	島根県 波多	爺・隣の爺	赤鬼・青鬼・黒鬼	酒盛り	踊りも歌も好きな爺	質		上手・下手
114	島根県 波多	爺・隣の爺	ねずみ	踊り	踊ってみせると頼まれる	報い		上手・下手
115	岡山県 阿哲郡哲西町生木	正直な爺・意地悪い爺	鬼	酒盛り	歌と踊りが大好きだったので、一緒に踊りたいと声かける	報い		鬼の宝物を置いたままに帰る・持って帰る
116	岡山県 小田郡矢掛町牛角	爺・隣の爺	鬼	踊り	踊りを望まれて踊る	質		上手・下手
117	岡山県小田郡矢掛町美川寺原	いい爺・悪い爺	鬼	踊り	面白くて踊り出す	質		上手・下手
118	岡山県 川上郡備中町目尾	踊りと酒好きないい爺・悪い爺	天狗	宴会	自ら踊り出る	質		上手(宝の小箱も貰う)・下手
119	岡山県 苫田郡上斎原村赤和瀬	爺・隣の爺	鬼	踊る	自ら踊り出る			上手・下手
120	岡山県 備前市三石渡瀬	爺・隣の爺	小人	酒盛り	歌につられて一緒に踊る	質		上手・下手
121	岡山県 勝田郡奈義町滝本	爺・隣の爺	鬼	酒盛り	手を叩いて騒ぐ鬼を助ける	土産に		鬼を助ける・何もせずに土産を求める
122	岡山県 勝田郡阿波村大畑	爺・隣の爺	鬼	踊り	自ら踊り出る			上手・下手
123	広島県 神石郡神石町	神楽好きな爺・隣の爺	天狗	神楽、歌	自ら神楽を舞う	質	○	上手・下手
124	広島県 佐伯郡湯来町水内	頬っぺたに瘤持つよい爺・悪い爺	赤鬼、青鬼	酒盛り	一緒に踊り出す	質		上手・下手
125	広島県 東広島市高屋町	善い爺・悪い爺	鬼	酒盛り	いつの間にかやら一緒に踊り出す	褒美に		上手・下手
126	広島県 山県郡大朝町大朝	爺・よその爺	赤鬼、青鬼	相撲	「赤勝て、青勝て」と言い、夢中に見る	報い		度胸の良い爺と瘤を取ってやる・下手
127	広島県 山県郡千代田町	いい爺・悪い爺	赤鬼、青鬼	酒盛り	仕事しながら歌う	報い	○	上手・下手
128	愛媛県 八幡浜市日土町今出	踊りが好きで優しい爺・欲ばり爺	鬼	踊り	元々踊りが好きだったので、一緒に踊る	質	○	上手・下手
129	愛媛県 北宇和郡三間町戸鷹	踊りが好きな爺・隣の爺	鬼	酒盛り	恐ろしさも忘れて踊り出す	質		上手・下手
130	佐賀県 神埼郡東背振村辛上	爺・隣の爺	鬼	踊り	思わず知らずに踊り出す	質		上手・下手

131	大分県 宇佐市	爺・隣の爺	鬼	神楽	一緒に神楽を舞う	質		上手・下手
132	大分県 竹田市	爺・悪い爺	赤鬼、青鬼	酒盛り	下手な鬼の踊りに笑うと、踊らせる	褒美に		上手・下手
133	佐賀県 某地	爺・隣の爺	鬼	酒盛り	上手に踊って見せる	質		上手(宝物)・下手(酒の肴に食われる)
134	佐賀県 神埼郡神埼町	踊り好きな爺・隣の爺	鬼	踊り	元々踊り好き	質		上手・下手
135	佐賀県 神埼郡千代田町来島	爺・隣の爺	鬼	踊り	一緒に踊る	報い		上手・下手
136	佐賀県 佐賀郡川副町新町	爺・悪い爺	鬼	浮立打つ	爺も浮立打って出る			上手・昨日だまされたと瘤を付ける
137	大分県 臼杵市	爺・隣の爺	天狗	踊り、歌	返し歌を歌うと踊りに誘われる	質	○	上手・下手
138	熊本県 球磨地方	踊り好きな爺・隣の爺	三人天狗	踊り	気軽に踊り好きだったので飛び出して踊る	報い	○	上手・下手
139	熊本県 天草郡苓北町志岐上 津深江	頬にこぶをつけた二人の爺さま	恐ろしい風体をした者たち	酒盛り	下手な鬼の踊りに笑うと、踊らせる	質		手陽気で上手に踊る・陰気で歌も踊りもできない
140	熊本県 玉名郡菊水町浦野谷	右瘤爺・左瘤爺	三人の天狗	踊り、歌	面白くて飛び出して踊る	質	○	上手・下手
141	鹿児島県 県川辺郡大浦町永田	爺・もう一人の爺	赤鬼、青鬼	酒盛り	元々踊りが上手	報い		上手・下手
142	鹿児島県 県大島郡大和村大棚	漁師・後半なし	妖怪		瘤があると、魚がよく取れると嘘を言う			嘘がばれる
143	石川県 金沢市荒山	正直な爺・意地の悪い爺	鬼	踊り、歌	握り飯をやって踊る	質	○	上手・下手
144	愛知県 吉良町小山田	優しい爺・後半なし	鼻の長い天狗					天狗が気の毒だと瘤を取ってくれる
145	香川県 小豆郡土庄町長浜	ええお爺さん・悪いお爺さん	ねずみ	踊り	瘤を取ってくれと頼む	報い		上手・下手
146	香川県	二人の爺	鬼					
147	不明	顔に瘤のある正直な瘤八郎左エ門・めっくら長左エ門	天狗	踊る	天狗に瘤を取ってくれと頼む(人数揃いで一緒に楽しく襲る)	報い	○	上手(人数揃いで一緒に楽しく襲る)・下手(人数揃いなのに突いて邪魔する)

資料 第二章【表1】〔日本昔話「瘤取爺」類話一覧表〕の採録事例

1. 「10. 瘤取爺」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第2巻青森』同朋舎出版、一九八二年、三三二頁。
2. 「瘤取爺」能田多代子『日本の昔話7 手つきり姉さま―五戸の昔話』未来社、一九五八年、四六頁／「瘤取り爺さま」川合勇太郎『青森県の昔話』津軽書房、一九七二年、三〇五頁。
3. 「114. こぶ取り爺さんの岩泉がたり」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第3巻岩手』同朋舎出版、一九八五年、二二三頁。
4. 「瘤取り爺の話」佐々木喜善『江刺郡昔話』郷土研究社、一九二二年、二五頁。
5. 「六七番 瘤取り爺々(その一)」佐々木喜善『聴耳草紙』筑摩叢書28、筑摩書房、一九六四年、一一九頁／「瘤取り爺々の話」佐々木喜『農民俚譚』一誠社、一九三四年、五頁／「こぶとり爺さん」関敬吾『こぶとり爺さん・かちかち山』岩波書店、一九五六年、九〇頁／「こぶとり爺」稲田浩二・稲田和子『日本昔話100選』講談社、一九九六年、一三九頁。
6. 「114. こぶ取り爺(類話3)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第3巻岩手』同朋舎出版、一九八五年、二二四頁。
7. 「100番 瘤取爺」佐々木喜善『老嫗夜譚』郷土研究社第二叢書、郷土研究社、一九二七年、三二九頁。
8. 「六七番 瘤取り爺々(その二)」佐々木喜善『聴耳草紙』筑摩叢書28 筑摩書房、一九六四年、一二二頁。
9. 「45. こぶとり爺」丸山久子・佐藤良裕『昔話研究資料叢書9 陸奥二戸の昔話』三弥井書店、一九七三年、二〇八頁。
10. 「こぶとり爺」平野直『すねこ・たんぱこ』銀河社、一九七六年、一八七頁。
11. 「114. こぶ取り爺(類話8)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第3巻岩手』同朋舎出版、一九八五年、二二五頁。
12. 「114. こぶ取り爺(類話9)」同右、一二五頁。
13. 「4. こぶとり爺」丸山久子・佐藤良裕共編『昔話研究資料叢書9 陸奥二戸の昔話』三弥井書店、一九七三年、七九頁。
14. 「29. 瘤取爺」国学院大学民俗文学研究会『岩手県南昔話集』(『伝承文芸』第六号) 国学院大学民俗文学研究会、一九六八年、四六頁。
15. 「105. こぶ取り爺」佐々木徳夫『遠野の昔話―笹焼蕪四朗―』ぎょうせい、一九九〇年、二六〇頁。
16. 「73. こぶ取り爺」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第4巻宮城』同朋舎出版、一九八二年、一六一頁。

17. 「73. こぶ取り爺(類話1)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第4巻宮城』同朋舎出版、一九八二年、一六二頁。
18. 「五九. 瘤取り爺」佐々木徳夫『全国昔話資料集成29 陸前昔話集』岩崎美術社、一九七八年、一七四頁。
19. 「こぶとり爺さん」佐々木徳夫『日本の昔話13 むがすむがすあつとこぬ』未来社、一九六九年、一六一頁。
20. 「73. こぶ取り爺(類話4)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第4巻宮城』同朋舎出版、一九八二年、一六三頁。
21. 「23. こぶ取爺」秋田県立博物館編『民俗部門収蔵資料集第一集 秋田の昔話』秋田県立博物館、一九七七年、二六頁／「78. こぶ取り爺」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第5巻秋田』同朋舎出版、一九八二年、三九九頁。
22. 「五五. こぶとり爺さん」今村義孝・今村泰子『日本の昔話9 秋田むがしこ』未来社、一九五九年、一四〇頁。
23. 「瘤取り爺」野村純一・畠山忠男『話の三番叟 秋田の昔話』桜楓社、一九七七年、一五八頁。
24. 「70. こぶ取り爺さん」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第6巻山形』同朋舎出版、一九八六年、一四〇頁。
25. 「133. こぶとり」武田正『佐藤家の昔話』桜楓社、一九八二年、二二六頁。
26. 「70. こぶ取り(類話2)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第6巻山形』同朋舎出版、一九八六年、一四二頁。
27. 「76. 瘤取爺」野村純一・野村敬子『雀の仇討』東北出版企画、一九七六年、三三八頁。
28. 「77. 瘤取爺(八天狗)」野村純一・野村敬子『雀の仇討』東北出版企画、一九七六年、三四二頁。
29. 「74. 瘤取り爺」石川純一郎『酒田の昔話』鶴岡印刷社、一九七六年、一九六〜一九八頁。
30. 「瘤取り爺のむがし」野村敬子『資料昔話 真屋川の昔話―鮭の大助―』桜楓社、一九八三年、一五四頁。
31. 「17. シツペエ太郎」大友儀助採話集『新庄のむかしばなし』新庄市教育委員会、一九七一年、八五頁。
32. 「8. こぶとり爺様」同右、二二二頁。
33. 「52. こぶとり」武田正『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二七頁／「こぶ取り爺」武田正『日本の昔話4 羽前の昔話』日本放送出版協会、一九七三年、三六頁／「こぶとり」武田正『日本民話炉端で聞いた昔』講談社、一九七四年、一三四頁。
34. 「66. こぶとり」武田正『飯豊山麓中津川昔話集(下)』山形短期大学民話研究センター、二〇〇九年、五〇頁／「51. こぶとり(類話1)」武田正『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二六頁。

35. 「9. こぶとり」武田正『行けどんざん—小国昔話集—』山形短期大学民話研究センター、一九七六年、二六頁。
36. 「51. こぶとり」武田正『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二四頁／「29. こぶとり」武田正『お杉お玉小国町昔話集』山形短期大学民話研究センター、二〇〇八年、六五頁。
37. 「17. こぶとり」武田正『牛方と山姥—海老名ちやう昔話集—』海老名正三、一九七〇年、二二二頁／「51. こぶとり（類話3）」武田正『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二六頁。
38. 「70. こぶ取り（類話10）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第6巻山形』同朋舎出版、一九八六年、一四四頁。
39. 「こぶとり」武田正『日本の昔話4 羽前の昔話』日本放送出版協会、一九七三年、一五三頁／「51. こぶとり（類話2）」武田正『昔話研究資料叢書10 飯豊山麓の昔話』三弥井書店、一九七三年、二二七頁。
40. 「70. こぶ取り（類話13）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第6巻山形』同朋舎出版、一九八六年、一四四頁。
41. 「瘤取り」民間伝承の会編『昔話研究』第二巻四号、三元社、一九三六年、四二頁（『復刻版 昔話研究』第三巻、岩崎美術社、一九八〇年、七六二頁）。
42. 「70. こぶ取り（類話15）」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第6巻山形』同朋舎出版、一九八六年、一四五頁。
43. 「六四. コブ持ち爺」佐藤義則『全国昔話資料集成1 羽前小国昔話集』岩崎美術社、一九七四年、一三四頁。
44. 「13. こぶとり」武田正『米沢市塩井の昔話—付米沢市田沢の昔話と伝説—』山形短期大学民話研究センター、二〇〇六年、二二頁。
45. 「30. 地藏浄土—こぶ取り爺」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第7巻福島』同朋舎出版、一九八五年、八九頁。
46. 「30. 地藏浄土—こぶ取り爺（類話1）」同右、八九頁。
47. 「83. こぶとり爺さん」同右、二二七頁。
48. 「瘤取り爺」東洋大学民俗研究会『小平の民俗 福島県石川郡平田村旧小平村』昭和四九年度調査報告、東洋大学民俗研究会、一九七五年、二七〇頁。
49. 「四一. 瘤とり爺さん」岩崎敏夫・柳田国男『日本昔話記録3 福島県磐城地方昔話集』三省堂、一九七四年、（新）四八頁、（旧）五〇頁。
50. 「こぶ取り爺」京都女子大学説話文学研究会（日本昔話通観編集委員会編）『金山町の昔話』金山町教育委員会、一九八二年、五四頁。

51. 「こぶ取爺」東京女子大学度郷土調査団口承文芸班編『猪苗代湖南町三代の昔話』東京女子大学度郷土調査団、一九七〇年、二六頁。
52. 「こぶ取爺」東京女子大学史学科郷土調査団編『猪苗代湖南の民俗 福島県郡山市湖南町三代』昭和四四年団調査報告、東京女子大学文理学部史学科民俗調査団、一九七〇年、一二四頁。
53. 「こぶ取り爺」西郊民俗談話会編『大栗・狸森の民俗 福島県須賀川市大栗・狸森』西郊民俗談話会、一九七六年、二七二頁。
54. 「こぶ取爺」船引町教育委員会編『ふねひきのざつと昔』船引町教育委員会、一九八〇年、一二三頁。
55. 「こぶ取り爺」東京女子大学度郷土調査団口承文芸班編『奥州東白川の民俗―福島県東白川郡塙町大字川―上』東京女子大学史学科、一九七一年、三〇頁。
56. 「瘤取爺」石川純一郎『河童火やろう 福島昔話』桜楓社、一九七二年、一四七頁。
57. 「こぶ取爺」会津・山都の民話編集委員会編『民話叢書3 会津・山都の民話』民話と文学の会、一九七九年、七二頁。
58. 「88 瘤取爺」白田甚五郎監修『会津百話』国学院大学説話研究会編、桜楓社、一九七七年、一七二頁。
59. 「こぶとり」須藤澄子『おばあんの昔話―細川にきのむかしばなし(群馬県利根郡新治村須川郷)―』煥乎堂、一九八〇年、一四〇頁。
60. 「59. 瘤取爺」梶谷明『金の瓜―上州・利根の昔話―』桜楓社、一九七三年、一六五頁。
61. 「二四. 瘤取り」上野勇『全国昔話資料集成13 利根昔話集』岩崎美術社、一九七五年、六四頁。
62. 「81. こぶ取り爺(類話5)」稲田浩一・小澤俊夫『日本昔話通観第8巻 栃木・群馬』同朋舎出版、一九八六年、二〇六頁。
63. 「こぶとり爺」市川民話の会編『市川の伝承民話 第1集』市川市教育委員会、一九八〇年、六〇頁。
64. 「三三. 瘤取り話(3)」鈴木棠三『全国昔話資料集成20 武蔵川越昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一三三頁／「四〇. 瘤取り話(類話5)」鈴木棠三『日本民俗誌大系第8巻 関東川越地方昔話集』角川書店、一九七五年、二六五頁。
65. 「三三. 瘤取り話(2)」同右、一三〇頁／「四〇. 瘤取り話(類話2)」二六四頁。
66. 「三三. 瘤取り話(1)」同右、二八頁／「四〇. 瘤取り話」二六四頁。
67. 「こぶ取り爺さん」柳田国男・池上真理子『日本の昔話28 武蔵の昔話』日本放送出版協会、一九七九年、一三八頁。
68. 「221. 瘤取爺(類話1)」金森美代子『昔話研究資料叢書16 房総の昔話』三弥井書店、一九八〇年、二八〇頁。

- 69 . 「221. 瘤取爺」金森美代子『昔話研究資料叢書 16 房総の昔話』三弥井書店、一九八〇年、二七九頁。
- 70 . 「221. 瘤取爺(類話2)」同右、二八〇頁。
- 71 . 「(こぶとり) 羽田啓次『村の風土記5 とんと昔物語』村の風土記刊行会、一九七二年、四八頁。
- 72 . 「四八瘤取り爺さ」水沢謙一『全国昔話資料集成 22 越後宮内昔話集』岩崎美術社、一九七七年、一三六頁。
- 73 . 「32. 瘤取爺」野村純一『増補・改訂吹谷松兵衛昔話集』吹谷松兵衛昔話集刊行会、一九七五年、八一頁。
- 74 . 「127. (こぶとり爺) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第 11 卷富山・石川・福井』同朋舎出版、一九八一年、二五八頁。
- 75 . 「41 瘤取の話」伊藤曙覧『昔話研究資料叢書 6 越中射水の昔話』三弥井書店、一九七一年、一二二頁。
- 76 . 「41 瘤取の話(類話1)」同右、一二三頁。
- 77 . 「コブトリ爺」広川勝美『民間伝承集成 1 語り部の記録―民話・山峡の炉辺―』創世記、一九七八年、一五七頁。
- 78 . 「三五 瘤取爺」浅川欽一『全国昔話資料集成 40 奥信濃の昔話』岩崎美術社、一九八四年、一二三頁。
- 79 . 「(こぶ取り爺) 東洋大学民俗研究会『白州の民俗―山梨県北巨摩郡白州町旧菅原・鳳来村―』東洋大学民俗研究会、一九七八年、二九六頁。
- 80 . 「(こぶとり爺) 水沢俊夫・福原澄美子・森野郁子『日本の民話5 甲信越』ぎょうせい、一九七九年、一八〇頁。
- 81 . 「(こぶとりの話) 静岡県女子師範学校郷土研究会編『静岡県伝説昔話集』静岡谷島屋書店、一九三四年、四六二頁。
- 82 . 「(こぶ取り爺) 木島泉『郡上むかしむかし』郡上史談会、一九七五年、四〇頁。
- 83 . 「七九. 瘤取爺」鈴木暹『全国昔話資料集成 30 伊豆昔話集』岩崎美術社、一九七九年、一三二頁。
- 84 . 「(こぶ取り水) 柳田国男・岡節三・細見正三郎『日本の昔話 21 丹後の昔話』日本放送出版協会、一九七八年、四五頁。
- 85 . 「128. (こぶとり) 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第 14 卷 京都』同朋舎出版、一九七七年、二四五頁。
- 86 . 「113. 瘤取り爺」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第 15 卷 三重・滋賀・大阪・奈良・和歌山』同朋舎出版、一九七七年、一六六頁。
- 87 . 「(こぶとり爺) 京都女子大学説話文学研究会編『兵庫県美方群美方・村岡昔話集』京都女子大学説話文学研究会、一九七〇年、一九三頁。
- 88 . 「(こぶ取り爺) 立命館大学古代文学研究会『糸井の昔話』立命館大学古代文学研究会、一九七四年、四二頁。
- 89 . 「よい爺さんと悪い爺さん」柳田国男・柴口成浩共編『日本の昔話 12 東瀬戸内の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、五五頁。

90. 「こぶ取り爺」東京女子大学史学科民俗調査団編『東京女子大学民俗調査団調査報告昭和四六年度—奥但馬の民俗—』一九七二年、一七四頁。
91. 「瘤取り爺」稲田和子『鳥取県関金町の昔話』山陽学園短期大学昔話同好会、一九七二年、九二頁。
92. 「94. 瘤取り爺—爺と鬼型（類話1）」稲田浩一・小澤俊夫『日本昔話通観第17巻鳥取』同朋舎出版、一九七八年、二七五頁。
93. 「94. 瘤取り爺—爺と鬼型（類話2）」同右、二七六頁。
94. 「85. 瘤取爺」稲田浩一・福田晃『昔話研究資料叢書4 大山北麓の昔話』三弥井書店、一九七〇年、四二〇頁。
95. 「85. 瘤取爺（類話1）」同右、四二二頁。
96. 「44. 瘤取り爺」花園大学伝承文学研究会『伯耆溝口町昔話集』花園大学伝承文学研究会、一九八二年、七六頁。
97. 「こぶ取りじい」田中瑩一・酒井薫美『鼻きき甚兵衛出雲の昔話』桜楓社、一九七四年、一四九頁。
98. 「こぶとり爺」石見大田昔話集』島根大学教育学部国語研究室昔話研究会、一九七四年、八五頁。
99. 「こぶとり爺」『石見大田昔話集』同右、八五頁。
100. 「こぶとり爺」『石見大田昔話集』同右、八四頁。
101. 「こぶとり爺」島根大学昔話研究会編『島根県邑智郡大和村昔話集稿卷二 都賀・都賀行地区』島根大学教育学部、一九七五年、一〇八頁。
102. 「こぶとり爺」同右、一一〇頁。
103. 「こぶとり爺」島根女子短期大学昔話研究会編『島根県邑智郡大和村昔話集稿卷一 比敷・宮内・村之郷地区』島根女子短期大学昔話研究会、一九七五年、一一六頁。
104. 「63. こぶとり爺（類話7）」稲田浩一・小澤俊夫『日本昔話通観第18巻島根』同朋舎出版、一九七八年、一九八頁。
105. 「瘤取り爺さん」昔話研究懇話会『昔話—研究と資料』第四号、三弥井書店、一九七五年、一九二頁。
106. 「二九. 瘤取り爺」森脇太一『全国昔話資料集成36 石見昔話集』岩崎美術社、一九八四年、五六頁。
107. 「63. こぶとり爺（類話10）」稲田浩一・小澤俊夫『日本昔話通観第18巻島根』同朋舎出版、一九七八年、一九九頁。
108. 「こぶとり爺」島根大学昔話研究会『島根県美濃郡匹見町昔話集』島根大学昔話研究会、一九七六年、一三八頁。
109. 「こぶ取り爺」同右、一四二頁。



110. 「ハぶとり爺」 島根大学昔話研究会『島根県美濃郡匹見町昔話集』 島根大学昔話研究会、一九七六年、一四二頁。
111. 「ハぶとり爺」 同右、一四〇頁。
112. 「ハぶとり爺」 同右、一三九頁。
113. 「61・瘤取爺」 福田晃・三原幸久『昔話研究資料叢書13 因幡知頭の昔話』 三弥井書店、一九七九年、一三〇頁。
114. 「61・瘤取爺(類話1)」 同右、一三三頁。
115. 「71・瘤取爺」 稲田浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』 一九七三年、二七五頁。
116. 「102・ハぶとり爺(類話1)」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第19卷岡山』 同朋舎出版、一九七九年、二五一頁。
117. 「102・ハぶとり爺(類話2)」 同右、二五一頁。
118. 「71・瘤取爺(類話1)」 稲田浩二・立石憲利『昔話研究資料叢書8 奥備中の昔話』 一九七三年、二八〇頁。
119. 「102・ハぶとり爺(類話4)」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第19卷岡山』 同朋舎出版、一九七九年、二六二頁。
120. 「102・ハぶとり爺(類話5)」 同右、二六二頁。
121. 「ハぶ取爺」 立石憲利・前田東雄『日本の昔話9 美作の昔話』 日本放送出版協会、一九七四年、六六頁。
122. 「ハぶ取爺」 立石憲利編『岡山県阿波村の昔話』 立石憲利、一九七一年、四四頁。
123. 「ハぶとり爺」 稲田和子・立石憲利『日本の民話9 山陽』 ぎょうせい、一九七九年、一五五頁。
124. 「四一・ハぶとり爺」 村岡浅夫『全国昔話資料集成14 芸備昔話集』 岩崎美術社、一九七五年、一〇二頁。
125. 「二七・瘤取爺(其の一)」 磯貝勇『全国昔話資料集成5 安芸国昔話集』 岩崎美術社、一九七四、(新) 六八頁、(旧) 八四頁。
126. 「119・ハぶとり爺(類話3)」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第20卷 広島・山口』 同朋舎出版、一九七九年、三二〇頁。
127. 「二七・瘤取爺(其の二)」 磯貝勇『全国昔話資料集成5 安芸国昔話集』 岩崎美術社、一九七四年(新) 六九頁、(旧) 八五頁。
128. 「踊り好きな瘤取爺さん」 和田良誉『日本民話 伊予のとなと昔』 講談社、一九七五年、一三九頁。
129. 「131・ハぶとり爺(類話1)」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第22卷 愛媛・高知』 同朋舎出版、一九七九年、二五一頁。
130. 「80・ハぶとり爺さん」 稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第23卷福岡・佐賀・大分』 同朋舎出版、一九八〇年、一六五頁／「ハぶとり爺

さん」 「背振山麓の民俗 福岡県早良郡早良町内野・脇山地区昭和44年度調査報告書」 北九州大学民俗研究会編『日本民俗調査報告書集成 九州・沖縄の民俗』北九州大学民俗研究会、一九七〇年。

131. 「二五・瘤取り爺」阿部通良・鈴木清美・後藤貞夫『全国昔話資料集成17 大分昔話集』岩崎美術社、一九七五年、五九頁。
132. 「一二・瘤取り話」鈴木清美・柳田国男『日本昔話記録10 大分直入郡昔話集』三省堂、一九七三年、(新)三九頁、(旧)四一頁。
133. 「80・瘤取り爺(類話3)」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第23巻福岡・佐賀・大分』同朋舎出版、一九八〇年、一六六頁。
134. 「80・瘤取り爺(類話4)」同右、一六六頁。
135. 「80・瘤取り爺(類話5)」同右、一六七頁。
136. 「瘤取り爺」川副町誌編纂委員会編『川副の口承文芸』川副町誌編纂事務局、一九七八年、四八頁。
137. 「第一話 瘤取り爺」民間伝承の会編『昔話研究』第一巻三号、三元社、一九三五年、三九頁／「七六・瘤取り爺」阿部通良・鈴木清美・後藤貞夫『全国昔話資料集成17 大分昔話集』岩崎美術社、一九七五年、一五一頁。
138. 「136・瘤取り話」稲田浩二・小澤俊夫『日本昔話通観第24巻長崎・熊本・宮崎』同朋舎出版、一九八〇年、二六六頁。
139. 「いぶ取り爺さま」柳田国男・浜名志松共編『日本の昔話19 肥後の昔話』日本放送出版協会、一九七七年、一三九頁。
140. 「いぶ取り爺」同右、五六頁。
141. 「いぶ取り爺さん」鹿児島県立鹿児島東高等学校生徒会民俗研究部編『葛山民俗九号 大浦町の昔話』鹿児島県立鹿児島東高等学校生徒会民俗研究部、一九七四年、一五頁。
142. 「ケンムンのがぶとり」柳田国男・田畑英勝『日本の昔話7 奄美諸島の昔話』日本放送出版協会、一九七四年、二〇三頁。
143. 「瘤取り爺」柳田国男・加能昔話研究会『日本の昔話26 加賀の昔話』日本放送出版協会、一九七八年、一六一頁。
144. 「114・瘤取り爺さん」山本節・永田典子・山田八千代『昔話研究資料叢書18 西三河の昔話』三弥井書店、一九八一年、二五三頁。
145. 「いぶとりじい」稲田浩二『日本の民話10 四国』ぎょうせい、一九七九年、一三六頁。
146. 「一三七 瘤取り爺さん」武田明・谷原博信『全国昔話資料集成32 東讃岐昔話集』岩崎美術社、一九七九年、二一九頁。
147. 「瘤八郎左エ門とめつくら長左エ門」山村民俗の会編『あしな』七〇集(複核版、第四冊、一九八一年) 名著出版、一九六〇年、三八頁。

## 初出一覧

本論文各章のもととなった論文の初出は、次の通りである（ただし、いずれも改訂を施している）。

序章 書き下ろし

第一章 （原題）『宇治拾遺物語』「雀報恩事」考―韓国昔話との比較をめぐって―  
（『同志社国文学』第七四号、二〇一一年三月）

第二章 （原題）『宇治拾遺物語』第三話の特質―韓国昔話「瘤取爺」を対照させて読む―  
（『同志社国文学』第八六号、二〇一七年三月）

第三章 （原題）「韓国昔話「藁縄一本で長者になる」型の研究―日本昔話「藁しべ長者」型との比較をめぐって―」  
（『文化学年報』第六三号、二〇一四年三月）

第四章 （原題）『宇治拾遺物語』九二話「五色鹿事」考―日韓比較文学の視点から―  
（『文化学年報』第六五号、二〇一六年三月）

第五章 （原題）『宇治拾遺物語』「留志長者事」考―韓国古典『壅固執伝』との比較をめぐって―  
（廣田收編『新典社研究叢書 265 日本古典文学の方法』新典社、二〇一五年一月）

結章 書き下ろし